
私立ルミナス魔法学院

隣のラーメン屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立ルミナス魔法学院

【Nコード】

N1601M

【作者名】

隣のラーメン屋

【あらすじ】

魔法が当たり前に使える世界「エルローランド」が舞台。

世界最高峰の魔導士の名門・鳳家の宗家に生まれるが、魔術の才能が無く、10歳の時海外修行と言う名の追放を受けた少年、煉夜。魔法以外は非常に優秀で多くの才能に恵まれるも、魔法絶対主義の鳳家の人間たちに無能者扱いされ、虐げられてきた過去を持つ彼は、海外での様々な体験により、力を手にして帰ってくる。

*主人公最強系です。

プロローグ（修）（前書き）

少し修正しました。話の大筋はなんら変わりありません

プロローグ（修）

鳳家の本家の一室にて、僕は父さんの前で正座させられていた。

「10歳にもなつてまだ1系統も魔法が使えないだと…？」

父さんの冷たい声が僕の胸に突き刺さる。僕はただ視線を自分の膝に落とし震える。

「情けない…弟の雅也と宗主の娘姉妹は既に2系統の魔法を扱えると言つのにお前は……」

父さんは失望を隠そうともせず溜め息を吐く。

「何故俺と百合の子であるお前がこんなに無能なんだ？」

世界最高峰の術者である父と、魔法協議会の重鎮である母。

当初僕はとても期待されていた。当然だ。世界クラスで有名な父と母の間に生まれたのだから。

しかし、現実は厳しかった。いつまで経っても魔法一つ扱えない僕に、期待を掛けていた人達は掌を返したように、僕を蔑み始めた。宗主の娘である仲の良い咲姉さんや舞、そして弟である雅也はとも早い段階から魔法を使うようになり、僕の立場は更に悪くなった。貼られた「無能」のレッテル。

僕だって、無能に生まれたくて生まれた訳じゃない。僕だって、才気溢れる弟や咲姉さんや舞みたいに生まれたかった。

体術や勉強などは誰よりも優れていても、魔法の實力絶対主義のこの家では何の意味も為さない。それが現実。

「仕方がない…お前のためだ……」

その言葉に僕は顔を上げ、父さんに期待した。今まで父さんが僕のためなんて言葉を使ってくれたことがなかったからだ。胸に湧く希望。しかし、それは一瞬にして絶望へと叩き落とされた。

「煉夜…お前を外武錬に送り出す。」

「…え？」

外武錬。それは鳳の名に相応しく無い者が、鳳の名に相応しい実力を付けるため、外国へ武者修行をしにいくというモノ。

これだけ聞けば聞こえはいいが、その実態は力の無い恥曝しを海外へと捨てる、追放という意味のことだった。

「そ、そんな、父さん！僕もつと頑張るから、それだけは、それだけは――！」

僕は父さんの足にすがりつき必死に懇願する。しかし、父さんは僕を冷たい目で見ると、思い切り僕を蹴り飛ばす。どれだけの力を込めたのか、僕は壁にめり込むほどの勢いで叩きつけられる。

「見苦しいぞ…明日、お前を送り出す。わかったらさっさと準備しろ。逃げようとしても無駄だからな。」

そこまで言つと、父さんは壁際で痛みによりうずくまっている僕に一瞥もせずに部屋から出て行った。

「父、さん…！父さんっ！！とっさああああん！！」

僕の声は父さんはおろか、誰にも届くことなく、虚しく部屋にこだました……

そして次の日。僕は誰からも見送られることもなく、外国へと放り出された。

それから6年後

俺は鳳に捨てられ姓を失い、現在「白神 煉夜」と名乗っている。
俺は今日、この地に帰ってきた。と言っても、鳳に戻りにきたのではなく、ある依頼の為にわざわざ飛行機に乗ってやってきたわけだ。

「懐かしいが…感慨深いモノでもねえな……」

まあ、こちらでのいい思い出なんざ咲夜と舞、雅也と遊んだ時ぐらいしかねえからな…

俺はとりあえず持ってきた荷物を担ぐと、依頼主のいる場所へと向かうことにした。

*

久々に帰ってきていろいろと変わった故郷を眺めながら移動し、約束の場所である高級レストランに着く。

「俺スーツ持っていないが…大丈夫か？」

そんなことを悩みながら、レストランの前で立ち尽くしていると、俺の前に一台のリムジンが停まる。

「君が、白神 煉夜かね？」

運転席から出てきた黒服の男がリムジンの扉を開き、中から出てきたのは威厳溢れる老人だった。

その人物の名は高宮龍之介。世界的に有名な大企業の会長だ。まさかこんなビッグネームが俺に依頼してくるとはな…

「ああ、そうだが？」

「…君の二つ名と噂は聞いているが、まだ若いではないか。本当に信用なるのか…？」

「決めんのはあんだ。信用できないなら止めるんだな。」

高宮の爺さんは黙り込み、何やら品定めをするかのように俺の目を覗き込む。

男と見つめ合う趣味はないんだが…

「少年とは思えぬほどの深く強い目をしている…うむ、わかった。信用しよう。」

「随分簡単に信用するんだな。まあ、別にいいが…じゃあ早速仕事の話に入ろう…」

「まあ、待ちなさい。君はまだ若いからいいが、私は見ての通りの老いばれだ。立ち話はちとキツイ。その店の中で話をしよう。」

そう言うのと、俺の背後にある高級レストランを指す。

「俺、私服なんだが…？」

「構わんよ。ここは私が経営している店だからの。」

「ヒュウ いいねえ、お金持ち様は。なら折角だし奢ってくれよ。」

「ああ、構わんよ。」

おっし、寛大な依頼主様万歳！久々にがつつりと飯が食える。

俺は表情は変えないまま心の中でガッツポーズをする。

そのまま俺はレストランへと入り、高宮の爺さんは黒服の男と何やら話してから後に続いた。

*

「で、依頼ってのは？」

俺は運ばれてくる料理を一応マナーを守りながら口に運び、咀嚼しながら依頼内容を尋ねる。

高宮の爺さんはそれを咎めることなく話し始める。

器でかいねえ…小さいことは気にしないか…

「うむ、私には可愛い孫娘がいてな。その孫娘が最近ストーカー被害にあっているらしいのだ。」

「…おい、まさか俺の依頼つてのは……」

正直嫌な予感しかしねえ…

「うむ、私の孫娘をその輩から守って欲しいのだ！」

予感的中。料理で上がっていたテンションがた落ち。

おいおい、俺はそんな依頼の為にわざわざ嫌な思い出しかないこの地に戻ってきたのか…

「はあ、正直気が乗らねえ…」

「……断ると言っのかな？」

つい、溜め息と共に本音が出てしまい、高宮の爺さんが俺をジロリと睨んでくる。

おお、流石の威圧感だな、怖え怖え。

「ここまで来て断るかよ。謹んで御受けさせてもらいましょう」

断ったら何されるかわかんねえしな…という言葉は呑み込んでおくことにする。言ったらマジで何かされる可能性もあるからな。危ない橋は全力で突っ走るか無視をしろ。コレ俺のポリシーね。

「そうか、それは良かった。もしも君が断っていたら…さて詳しい

内容だが……」

うん、素直に断らなくてよかったと思う。

脅しは自分の専売特許だと思っていた俺の恐怖と不安をよそに、高宮の爺さんは話を進めていく。

「孫娘は現在私が理事長をしているルミナス魔法学院に通っている。」

「

「へえ、それはまた…あの数々のエリートを輩出している魔法の超名門校か。」

「うむ、しかし先程も言ったように最近ストーカーが頻繁に現れてな、孫娘は精神的に参ってしまっているのだ。」

「正直、俺みたいな得体の知れない奴に頼むより、アンタの権限で護衛とかを付けたりした方がいいと思うんだが…」

「無論それは既に試した。しかし、相手は相当な腕の魔導士らしくてな。全員返り討ちにされてしまったよ…」

「ほう…」

あの学院は確か魔力値が10000を超えていないと入学できない超エリート学校の筈だ。魔力値は一般人の平均が約100だからどれだけ入学が難しいのかわかるだろう。才能のある者にのみ入学を許される学校。それを教える教師陣の実力も相当なモノだ。それを返り討ちにする実力…面白そうじゃないか。

「ちょっとはやる気出てきたな。で、俺はどうすればいい？その孫

娘さんを付きつきりで護衛すればいいのか？それともストーカーよろしくずっと孫娘を影から見張っておこうか？昔資料で見たことがあるが、あそこ程度のセキユリティーなら楽に突破できるぞ。」

「その様なことをしたら社会的に殺すが、安心しなさい。私に考えがある。」

さり気なく俺を脅しながら高宮の爺さんは黒服の男に声を掛ける。
黒服の男はアタッシュケースを持ってきて俺に手渡す。
俺は首を傾げながら依頼主に尋ねる。

「…これは？」

「開けてみなさい。」

依頼主は微笑みながら俺に開けるよう促す。
俺はいろいろと勘ぐりながらも言われた通りアタッシュケースを開ける。

「これは…」

中から出てきたのは藍色をベースとした、高級感漂うブレザーと生徒手帳。

「それはルミナス魔法学院の制服だ。孫娘は特別扱いを嫌うのでな、護衛を付けたがらないのだ。だからと言って監視のような真似はしたくはない。よって君があんの学校に潜入して孫娘に気付かれぬよう護ってやってほしい。」

「護衛を付けたがらない？さっき護衛は返り討ちにあったとか言っ

てなかったか？」

「その護衛は教職員に変装させていたのだ。何故かストーカーにはバレたがの…」

教職員に変装させたにも関わらずバレた…相手は本来の教職員の顔と名前を全員覚えていたのか？

ま、考えるのは後だ。「ルミナス魔法学院か…楽しくなりそうだ。」

今はこれから起きるであろう状況を楽しませてもらう。

1話（前書き）

魔法の設定がまだ思いついてないので、次説明したいです。

1話

高宮の爺さんの依頼を引き受けてから数日。

俺は様々な手続きを終え、現在これから俺が通うことになる私立ルミナス魔法学院の校門前に立っていた。

「…無駄にでけえ」

とりあえず感想を呟いてみる。

まだ校門しか見ていないのだが、その校門がまず馬鹿デカイ。軽く10メートルはあるだろうか。

感心を通り越して呆れながら校門を潜ると、俺は更に度肝を抜かれる。

「…もはや城じゃん」

俺の眼前にある建物。恐らくは校舎なのだろうが、俺が知っているような校舎はそこには無く、豪華な装飾が目立つ巨大な城がそこにはあった。

「おっと、あの門は異世界への入り口だったのか？まさかの異世界トリップ物に移行？」

さて、俺は何を言っているのだろうか…

まあ、外国にいた頃潜入任務で城にはちよくちよく侵入していたからもう慣れたがな。

「…しかし俺が学生ねえ…向こうにいた頃に博士号とかは一応取っ

たが、学生やるなんてのは小学校以来か。」

妙な感傷に浸りながら、俺はとりあえず職員室に向かうことにした。

＊

「君が白神 煉夜君？話は聞いているよ。私は君の入るクラスの担任の村園真宮だ。」

「どーも。」

職員室に着き、とりあえず黒髪ボブカットの美人教師、村園女史に挨拶をする俺。

「君の噂はいろいろと聞いているよ。」

「大半が悪い噂だろうがな。」

俺は欠伸をしながら答えると、村園女史はクスクスと笑う。

「…何か？」

「いえ、ごめんなさい。この学院に入る人でこんなに余裕そうな人は初めてだから。普通はどんなに自信がある人でも少しは緊張するものなのよ？」

「ま、ここは超が付くほどの名門だからな。緊張しねえほうがおかしいわな。」

「だから君も今から入るんだってば。」

村園女史が呆れたように俺を見てくる。

これでも幾百幾千の修羅場を経験してきてるからな。こんなぬるま湯に浸かりきった場所で緊張なんてな…

「ま、それはいいとして時間は大丈夫なのか？そろそろチャイム鳴るぞ？」

俺は時計を見ながら記憶していたHRの時間と現在時刻を照らし合わせる。

3

2

1

キンコンカーンコン…

HRの開始を告げるチャイムが鳴り響く。

「あ、鳴っちゃったか。それじゃあちよつと遅れたけど、行きましょうか。」

「そうだな。」

俺は村園女史の言葉に頷くと、教室へ向かうべく職員室から出て行った。

*

「じゃあ、少し待っててね」と、言い残し教室の中に入っただ村園女史を見送り、俺は教室の扉：と言っには嫌に凝った装飾がされた扉の前に待機する。

「無駄に金掛けすぎだな…ん？」

手持ち無沙汰なので、何となく扉の装飾を見てみると、あることに気付く。

ああ、無駄に装飾されてると思ったら、装飾自体が魔法を無力化させる紋様になってるな。それも相当な高レベルの。ついでに辺りを見回してみると、所々に同じような装飾が施されているのがわかった。

安全面はある程度は保証されてるってことか。

予想以上に細かい配慮がされているこの学校に感心していると、扉の向こうから村園女史の呼び声が聞こえてくる。

「じゃあ白神、入ってこい。」

お呼びか。さて、正直そこまで目立ちたくないからな…無難に済ませるか。

俺は扉を開けながら、させられるであろう自己紹介の内容を決め、室内に入る。

「じゃあ自己紹介よろしく。」

そして予想通りの展開。

俺は村園女史に軽く返事をし、多くの視線を感じながら、頭の中で考えた平凡な自己紹介を披露する。

「お初にお目に掛かるな。俺の名前は白神 煉夜だ。以後、よろしく頼む。」

ん？何かちがくね？俺は「初めまして、僕の名前は白神 煉夜っていいです。皆さん、よろしくお願いします。」って感じに言おうとしたんだが、敬語が苦手なのが祟ったか…

しばらくすると、教室中から拍手が聞こえてくる。

まあ、そこそこの反応だし良しとしておくか。何か女子たちが顔を紅くしてこつちをジッと見てるのは気になるが…

「ハイ、みんな仲良くしてね。じゃあ白神の席は…高宮の隣が空いてるな。」

村園女史はそう言い、俺に席に着くよう促すと、何か教室（主に男子）がざわめく。

俺は皆の妙な視線（男子からの殺意）を受けながら席に向かい、俺に視線すら向けない警護対象に挨拶しておく。
外見は黒髪長髪の大和撫子といった感じだな。

「お隣さん、よろしくな。」

「……」

ふむ、返事すら無しか。釣れないねえ…

ま、俺の仕事は警護だけだから別に友好関係なんぞ築かなくていいんだがな。

さて、ストーカーってのはどんな奴かね。出てくるまで学校生活をぼちぼち楽しませて貰いますか。

2話（前書き）

魔法の説明とかその他諸々グダりましたが、ゆっくりしていったね！

2話

さあて、思ったんだが授業中って激しく暇じゃね？

などとペンを弄びながら思い、教卓で長々と何かを説明している教師を無視し、天井をぼんやりと眺める。

正直名門というから、俺でも多少苦戦するようなことを勉強しているのかと思ったら、予想に反してそれほど難しいモノではなかった。現在は一限の授業で、復習か何かは知らんが、魔法についての説明をしている。

魔法とは、人の誰しも大なり小なり持つている力、《魔力》をこの世界に充満している生命の源にして万物を構成する力の源である《マナ》を媒体にし、様々な現象を引き起こす力のことをいい、才能によって使える者と使えない者に大きく差がでる。と言っても、この世界の大半の人は魔力値が低く、ろくに魔法を使える人などほんの一握りだ。また、才能はあるのに魔力が無かったり、魔力はあるのに才能が無い人などのような人間も多くいるので、世界はよくできているとつくづく思う。

魔法の種類は現在確認されているので火、水、木、風、大地、雷、光、闇の8つあり、魔力の素質により使える属性の数は限られる。普通の奴なら一つ。凄い奴で二つ。天才と呼ばれる奴で三、四つ。それ以上は最早人の域を超えた化け物と言ってもいい。ちなみに俺の親父と、鳳家の宗主がこの化け物に属されるが…

つか、こんな内容この学園にいる奴全員知ってる筈だつての。ついでにいうなら俺の使える魔法はこの8系統のどれにも当てはまらない特異中の特異なのだが…まあ、それはまた今度におこう。つか本当に魔力重視で生徒を集めてんのな…などと周りの連中から感じる強い魔力を心地よく感じながら、この学園に少々呆れていると、不意に視線を感じる。それも近くから。

何気なくそちらの方に視線を移すと、俺の警護対象が探るような、

怪しむような目でこちらを見ている。大方俺をストーカーかどうか疑ってんだろぅが…まあ、いいや。

暇だし前に貰った資料と俺の主観的感想を照らし合わせてみるか。

名前、高宮 優奈

身長 155? (案外無いな。毅然とした態度のせいか、身長はもう少し高く見える。)

体重 〃〃(プライベートにより報告できません。)

スリーサイズ 83・57・81(こちらは報告しますw着痩せするタイプらしく、普段はもつとスレンダーに見えるな。俺の読みだとこいつ、美乳だな…)

容姿端麗、頭脳明晰、の才色兼備で、魔力値は158300と、世界を回っていた俺でも中々見れない程の数値を誇る。魔法属性は水光、風。補助魔法と防御魔法を得意とするが、攻撃魔法は苦手…と性格は明るく礼儀正しい。…俺に挨拶返さないし、さつきから不躰にこっち見てるこいつが?そっぴや高宮の爺さんが精神的に…とか言ってたな。まあ、どうでもいいが…

キンコンカーンコン。

などと思っていいたら授業が終わった。

それと同時に俺はクラスの連中に囲まれてしまう。

なんだコイツら?…ハッ!まさか、俺を締めに来たのか!?「ようよう、転校生さんよあ、お前最近生意気なんだよ!」的な感じでか!?!俺転校初日ッスよ?なんも生意気してないッスよ?

ま、やるってんなら殺ったんぞコラ!

「ヒッ!」

集団の先頭の男が、俺の妙な雰囲気を感じ取ったのか、悲鳴を上げる…冗談なのに普通に怯えられた…これは傷付く…

少々ブルーになるも、すぐさま気持ちを切り替え、雰囲気を和らげる。

俺の特殊技能のうちの一つ。「雰囲気操作」

まだ成人にもなっていない俺が、昔依頼で大人に紛れて、ある大物人物が開いたパーティーに潜入したことがあった。

普通なら体格や顔、声でバレるだろうが、そこで編み出したのが、この「雰囲気操作」だ。どんな人間にも雰囲気というものがある。

俺はそれを利用して、何気ない仕草や動作、口調、気配、感情などをコントロールし、雰囲気を未熟な子供から成熟仕切った大人のモノへと変化させる。

己という存在を完全に理解し、心身共に完璧にコントロールでき、尚且つ世界を周り、様々な人間を見てきた俺だからできる芸当。

今回もそれを使用し、俺の雰囲気を温和で優しいモノへと変化させ、周りの空気に溶け込む。

人間とは単純な生き物だ。表面上でしか物事を捉えられず、その裏に潜む本性を理解できない人間が大半だ。だからこそやりやすいのだがな…

「なあなあ、お前使用できる属性何だ？」

集団の中から浅黒い肌をした金髪の美形の男が出てきて質問してくる。

ああ、これはあれか。本とかでしか無いと思っていた質問タイムか。いきなり魔法について聞かれるとは思わなかったが…

「ああ、俺まだ使える属性無いんだわ。」

「え？お前魔法使えないのにこの学園来たのかよ！？」

「まあな。つつても、俺は異常なまでに魔力が高いらしいからな。それを買われて来たんだ。」

「へえ、どれぐらいなんだ？」

周りも少なからず興味がある面持ちだ。

言ってもいいモノか…いや、ここで言わないと無駄に怪しまれる可能性があるな…じゃあないか。

「…2000000。」

『に、2000000！？』

驚くギャラリィ。そりやそうだ。この世界全体で魔力1000000超えの人間は四桁程しかない。2000000となれば更に少ないだろう。隣の席で迷惑そうにしていた高宮のお嬢も驚いたような表情でこちらを見ている。にしても、ざわざわうるせえな、黙らすか。

「んな驚くなよ。確かにすげえ数値だろうけど、魔法使えなきや意味ないだろ？宝の持ち腐れなんだよ、俺は。」溜め息混じりに自虐気味に話す俺（演技）。その俺の姿を見たギャラリィは口をつぐむ（計画通り）そして、皆哀れむような目でこちらを見てくる。

…んな目でこつちみんなよ、多少罪悪感が出てくる。俺はこいつらに2つ程嘘を吐いたからな。

一つは無論、俺が魔法を使えないということ。

もう一つは…っと、高宮のお嬢がどっか行っちゃった。

一応追いかけてくか？でも面倒だし…

「気にすんなよ！俺も何かあれば協力してやるからさ！あ、俺は桜

木翼ってんだ。よろしくな！」

浅黒金髪…桜木がいきなり俺の肩を組んでくる。

そして、周りの連中もそれに便乗していろいろと気遣いの言葉や何やらいろいろ言ってくる。へえ、こんな名門校だとエリート意識が高い奴ばかりかと思っただが、そういう訳でもなさそうだな。それにしても…うん、こっちのが面倒そうだな…高宮のお嬢でも追ってみようか…

「じゃあさ、それ地毛か？」

「ん？ああ、これは一応地毛だ。元々は黒髪だったがな。」

桜木が俺の髪を物珍しそうに見ながら聞いてくる。今まで書き忘れていたが、俺の髪は白色です。昔の経験のストレスかどうかは知らんが、気がついたら白髪になっていた。ちなみに今の俺の姓である、「白神」の由来はこの髪からきている。

「へえ、じゃあなんで白髪に…」

「悪い、便所行ってくるわ。また今度な。」

この質問責めを面倒に感じてきた俺は、桜木の質問をぶったぎって、適当な理由を付けて席を立つ。

そして高宮のお嬢の後を追うべく教室から出ていった。

*

「さて、俺の警護対象は…と。」

俺は廊下を歩きながら高宮のお嬢を捜す。

正直こんな時間からストーカーが出ると思わないが、万が一ってこともあるし、何より対象の周辺状況を把握しておいた方が立ち回しやすいだろうと思つての行動だ。

まあ、中休み程度でできることなんざ限られているがな。

そんなことを考えながら歩いていると、警護対象の後ろ姿が見えた。その後ろ姿は教室にいた時よりも確実に明るい雰囲気を感じている。俺は対象の影で見えないが、もう一つ気配を感じる。

お、いたいた。っと、誰かと話しているのか？

俺は気配を消し、さり気なく対象に近づく。

これじゃあ、俺がストーカーみたいだな…などと自嘲しながら、対象の様子を見てみる。

対象は教室で見た冷たい印象とは真逆の明るい笑顔で、相手と談笑しているようだ。

友人：それもあの様子じゃあ相当な信頼関係の…親友ってやつか？
相手はどうやら女子のようで、黒髪をポニーテールで纏めているのが印象的な勝気そうな美少女だ。俺にとってそれはどうでもいい。

何より特筆すべきはその魔力の強大さ。

高宮のお嬢にも勝るとも劣らない程の魔力か…

その相手に多少の興味を持った俺はその相手の姿をしっかりと確認し、少々驚く。何故ならその相手は俺の昔の記憶の中にいる1人の少女と酷似していたからだ。というか、間違いないだろう。俺とあいつタメだし。

それはかつて、俺がまだ鳳の姓を名乗っていた頃、宗家なのに無能な為に蔑まれていた俺の数少ない味方の1人。俺の妹のような存在、鳳舞がそこにいた。

「そこにいるのは誰！？彼の者を焼き払え！！」『ファイアーボール』

「おっと。」

少しだけ思考していたら気付かれたらしく、飛来してくる火の玉を俺は避ける。火の玉は壁に施されている魔封じの紋様に直撃し、消失する。どうやら一瞬驚いた時には気配が乱れてしまい、気付かれづらい。

ふむ、俺もまだまだだな。それより気付かれたなら長居は無用だ。俺は再び気配を完全に消し、その場から素早く立ち去った。

まさか舞があそこにいるとはな…考えてみたら当たり前のことだな。ここいら、いや、世界中探したところでここ並に設備から何から何まで揃ってる学校つてのはまずないだろう。と、なると咲夜と雅也もいるのかね…まあ、別段問題でもないがな。

しかしいきなり魔法を使ってくるとは…お転婆で短気なところも相変わらずらしいな…

苦笑しながら、久々に見た妹分の姿に心が和んだ俺がいたのであった。

3 話（前書き）

自分の文才の無さに嫌気が差してきます…しかし！私は負けませ
ん！
つーわけでぶっぞー

3話

俺がこの学院に来てから早一週間。

俺は順調にクラスの連中と交友を深め、ワイワイガヤガヤと温くもなかなか楽しい毎日を過ごしています。まあ、それは寮のルームメイトとなった友人、桜木翼の助けもあってこそだが…

依頼については、前に俺が対象を監視していたのが舞に勘づかれてから、舞が常に対象の周りを警戒するようになり、前に気配を消して近付いてみたら、勘かどうか知らんが、気配を察知され魔法を大量に叩き込まれてしまった。無論全部避けたし正体バレてないから別にいいんだが…そんなわけで対象には迂闊に近付けない状態にある。

ま、俺の代わりに対象を警護してくれるのはありがたい。俺はこの温い学院生活を堪能…ではなく、ストーカー潰しに専念させてもらおう。

そんな俺は現在、魔法授業を行う為教室から演習場に向かっている途中だった。

「うつしやあ！魔法授業だぜ煉夜！燃えるぜえ！！」

「無駄に熱いぞ翼。そんなに女子にいい所を見せたいのか？」

「当たり前だろ！！魔法授業は2クラス合同だからな！隣のクラスの女子とお近づきになるチャンスなんだぜ！？」

さっきからこいつテンション高くて鬱陶しい…それにしても魔法授

業ねえ…

魔法授業。それは、この学院がもつとも力を入れている授業であり、この授業の成績により将来の職場が決まるといっても過言ではないらしい。

その授業内容は基本的には魔法を使用した実技で、毎回変わる出題される条件を魔法でクリアしろというものだ。例えば、瓶の中にあるボールを、瓶を破壊せずに魔法により取り出す。とか、目の前から大岩が転がってきた、これを魔法で対処しろ。など、繊細なモノから大雑把なモノまで幅広くある。これは柔軟な発想力と、魔法の応用力を鍛えるモノらしい。

それにしても隣のクラスか…確か舞がいたな。面倒な…

「まあそれはどうでもいいとして「どうでもいいだろ!？」…少し黙れ。魔法授業ねえ…俺からしちやあただダリイだけだがな…」

「そうか？女の子抜きにしても魔法授業は楽しい…って、そうか、煉夜は魔法使えないんだっただな。」

そう、俺は魔法を使えない設定になっているため、出題される条件をクリアするどころか、挑戦すらできないのだ。だから基本的にこの授業中は先生の手伝いなどをしているということだ。

「そういうことだ。だから最初の瞑想とか以外は基本雑用しかやることねえんだ…サボるか…」

「先生には俺から言っというてやるよ。」

「悪いな。そんじゃ…」

俺は話の分かる友人に軽く手を振りながら来た道を引き返そうとし

て…

「きゃっ」

「つと」

振り向いた先にいた女性とぶつかり、俺は反射的に転びそうになる女性の手を掴み受け止める。その女性とは俺の警護対象である、高宮優奈お嬢様であった。

警護役が警護対象を怪我させるとか洒落になんねえな…

ついわけで、本来なら無視するところを、親切な俺は彼女の安否を聞いてみることにする。

「あゝ…大丈夫か？」

「ッ離して!!」

…おもつくそ手を振り払われた。テンション一気に下がった。ああ…もうこのまま早退しよつかない…
などと軽く鬱気味に考えていると、突然何者かに胸倉を掴まれる。

「お前ッ！優奈に何をした!？」

その荒ぶる襲撃者は昔俺の妹分であった舞だった。

俺は襲撃者の首に叩き込もうとつくった手刀を元に戻す。

「あ？別に何もしちゃいねえよ。ただ振り返ったらぶつかった。それだけだ。」

「嘘を吐くな！本当のことを言え、このストーカー!!」

ええー…いきなりストーカー扱いかよ…相も変わらずの猪突猛進ぶりだな愚妹よ。

「…か、おい、翼。何故俺を変態を見るような目で見てやがる…俺は溜め息を吐き、とりあえず翼を後で締めると心に誓い、弁明することだ。」

「ストーカー？何のことだよ。俺はこの学院に転校してきたばかりだぞ？んなことするかよ。」

「嘘を吐くな！」

「…あの、舞。さっきは取り乱してしまっただけ、彼は違うと思います。」

「おお、予想外の所から助け舟が。これで勝つる！いや、何に勝つかは自分でも知らんが、まあ、ノリだノリ。」

「しかし、コイツは先程お前に…」

「尚も俺を疑う舞に俺は妙な疲れを感じる。」

「…はあ、他人としてコイツと接するのは何か疲れるな…まあ、いいや。とりあえず堂々とストーカー探しのできる口実でも作らせてもらうか。」

「…何のことかよくわからんが、そこまで言うんだったら証拠や根拠があるんだろうな？俺がそのストーカー？だっていう。」

「それは…」

さっきの勢いはどこへやら、俺の反論に口ごもる舞。

攻めるのは得意だが攻められるのは苦手なものも相も変わらず、と。

「舞は悪くありません。舞はただ、私のために一生懸命なだけで…」

「あ？一生懸命なら人を疑って犯人扱いしてもいいと？随分と傲慢な物言いするじゃねえの、高宮のお嬢様。」「そ、そういう意味じゃ…」

俺の言葉に狼狽し、二の句が出せないでいる高宮のお嬢に、俺を睨み付けるものの、先程の失態があつてか口出してこない舞。状況を理解していないのか、ポカンとしている翼

…話進まねえな……

とりあえず俺はさも何も知らないように振る舞いながら聞いてみる。

「…まあ、それはいいとして、とりあえずそのストーカーってのは何なんだ？」

「……」

「だんまりしてたらわかんねえぞ？」

「…あなたには関係ありません…」

「こっちはストーカー扱いされたつてのに、関係ないとか言わねえよな？」

小さく拒絶するように呟いた言葉をぶつたぎる。

そして、俺はさっさと話せや。という催促じみた視線で高宮のお嬢の目をじつと見つめる。

高宮のお嬢は目を逸らししばらく口ごもると、観念したのかストー

カー被害について話し始める。ストーカー被害はここにくる前に貰った資料と大体一緒の内容だった。

物が無くなったり、妙な魔力の流れや視線を感じたり、無言電話がきたり、誰もいない筈の場所を歩いていると背後から足音が聞こえてきたりと。

魔力以外はストーカーのテンプレだな…

俺は如何にも仕方なさそうな口調で呟く。

「ハア、しゃあねえな…疑われっぱなしつてのも癪だしな。俺がストーカーを見つけてやりゃあ俺への疑いが晴れるってことだよな？」

「そ、そんな、危険です！それに、貴方を巻き込む訳には…」

「おいおい、勘違いしてんなよ。俺は暇つぶしと俺の名誉の為にストーカーを捜すんだ。別にお前の為とかじゃねえ。」

いや、ツンデレとかじゃないからな？マジで。

すると、俺の言葉に舞は怪訝そうな目でこちらを見てくる。

「お前、何を企んでいる…？」

「別に、さっき言った通りで何も企んじやいねえよ。強いていうなら、よろつと教室ですつと探るような視線を受けるのに嫌気が差してきたってとこだな。」

「すみません…」何気なく言った嫌みに、申し訳なさそうに謝る高宮のお嬢様。

「謝るぐらいならさっさと止める。流石に不快になってくる。」

それに優しい言葉を掛けてやる程出来た人間じゃない俺。更に申し訳なさそうに縮こまる高宮のお嬢様。突き刺すように睨んでくる舞と高宮のお嬢様の様子を見て同様に睨んでくる通行人たち。おーおー、まるで俺が悪人みたいじゃねえの。心が痛いねえ… ってまてまてまで、何故急に魔力を練り始める通行人A!?

「よくわかんねえけど、俺も協力するぜ!」

そして空気を読まずに会話に参加してくるバカ。

ま、お陰で嫌な空気は払拭されたからいいか。舞も何か毒気抜かれたような感じだし。通行人Aは未だ俺を睨んでるが… うん、魔力を練るのは止めたっばいから無視しとこう。しかし通行人を暴徒に変えるとは… 恐るべし高宮のお嬢のカリスマ…

俺は若干安堵しながら、翼の肩にポンと手を置く。

「つーわけで、翼はいろいろと協力してくれるらしいから精々こき使ってやってくれ。」

「え、俺だけ!？」

「あ? お前さっき自分で宣言したばかりだろうが。」

「そりゃそうだが… 煉夜もだろ?」

「俺のは暇つぶしだ。協力するなんざ言った覚えはねえよ。」

「卑怯だ!! お前が協力する的な空気出してたから俺も親切心全開で便乗したんじゃないか!!」

「本当に親切心がある奴は便乗なんてしねえよ。下心の間違いだろ。」

「ーかよく考えてみるよ。俺がいなけりやお前両手に花だぜ？」

「よし煉夜。どこへなりとも消え失せろ。」

「…それは流石に酷くね？」

いきなり態度を変える翼に苦笑する。そんなバカなことをしている俺達を見て、高宮のお嬢はクスクスと笑っている。

ふむ、多少雰囲気が和らいだか…やはり多少交友を深めた方が動きやすいか？

「煉夜……？」

これからの方針を検討していると、不意に舞が俺の名を呟き、俺の顔をマジマジと見てくる。

「…ああ、自己紹介がまだだったな。俺は白神 煉夜。そして、こつちのが浅黒金髪…」

「ちゃんと紹介してくんない！？俺は桜井 翼ってんだ。よろしく！」

「白神…当たり前か…」

勘づかれる前に俺は自己紹介をしておく。便乗して翼も名乗り、手を差し出すが、舞は俺の名を聞くなり落胆したような声で呟くだけだ。

どうでもいいが、翼が手を差し出してるのにスルーしてやるなよ。なんか可哀想に見える。

「で、アンタは？」

「煉夜、知らないのか！？彼女は高等部一年の5本の指に入る美少女にして、彼の鳳家の宗家の人間である鳳 舞ちゃんだぞ！？」

俺が舞に名前を聞くと、スルーされて恥ずかしかったのか、翼が顔を赤くしながら大きめの声で舞の紹介をしてくる。うん、滑稽だな翼よ。

大声で美少女と紹介された舞は、そっぽを向きながらも満更でもなさそうに頬を朱色に染めている。

まあ、俺は舞が鳳の人間だって知らない設定だからな。一応リアクションしておくか。

「M A Z I D E ! ? あの鳳の、しかも宗家の人間かよ ! ? 」

うん、ワザとらしすぎた…みんなすっげえ引いてるし…

「それより、そろそろ授業が始まってしまっくんじゃ……」

それよりって…まあ、別にいいが…

俺の体内時計では後2分でチャイムが鳴るな。

「そうだな。優奈、行こう。」

「よっし、じゃあ急ごうぜ優奈ちゃん、舞ちゃん！遅刻だけは勘弁だからな。」

「うむ、頑張ってこい若人よ！」

早足で演習場へと向かう三人を俺は旅立つ弟子を見送る師のように

見送る。

「お前も来い！！」

「やん、大胆！って首！！首はマジでやめて！苦しいから！！マジでやめっ！！」

しかし真面目な舞にサボろうとしていたことを見抜かれ、首根っこを掴まれ、俺は引きずられながら演習場へと向かった。

それから2分後、俺達は鳴り響くチャイムと同時に演習場に辿り着くのだった。

4話（前書き）

主人公初戦闘！しかし、主人公は圧倒的に強い設定なので戦闘は短め

4話

「…ひどい目にあつた。」

「自業自得だろ。」

演習場にて俺は男子の隊列の中で、がつちりした体格の男性教師の無駄に長い説明を聞き流しながら、舞によってダメージを受けた首をさする。

「ったく。あんの馬鹿力が…名家の女ならもつとお淑やかになれってんだ。」

「何か随分と親しげな感じだな。舞ちゃんもお前の名前聞いて妙な表情してたし。実は知り合いだったりして？」

俺に近い場所並んでいる翼が質問してくる。
バカの癖に妙な所で鋭いな…

「別に。俺は基本的に初対面の相手にでも馴れ馴れしいからな。クラスの連中ん時もそうだったろ？ 鳳が妙な表情をしてたつてのは知らないが…」

「ふん。」

とりあえず適当に誤魔化しておくことにする。翼もそれ以上は聞いてこず、気付いたら教師の説明は終わり、瞑想の時間に入っていた。翼は周りの様子を見て慌てて目を瞑り、俺も静かに瞳を閉じる。

瞑想とは簡単に言えば運動前の準備運動のようなモノだ。精神を落

ち着かせ、へその少し上に位置する丹田に存在する魔力の泉を、全身に染み込ませるように広げる。

こうすることにより、魔力を全身に流す血管のような機能、魔力回路の流れを良くすることができ、魔法の使用をスムーズにし易くなる、魔法の基礎中の基礎だ。

「止めっ!!」

教師の掛け声で皆目を開ける。そして、次の指示を待つ。

「よし、今日は模擬戦をしたいと思います。」

教師の声に嬉しそうにする者と落胆したような者がいるのがわかる。嬉しそうにする者は、攻撃魔法などが得意な者で、落胆している者は攻撃魔法などが苦手な者。ちなみに近くで歓喜している翼は前者で、俺は後者だ。まあ、俺はどうせ雑用だな。

「今日は少し趣向を変え、生徒同士での模擬戦をする。」

「趣向を変える?」

「ああ、前までは先生相手の模擬戦だったんだ。やっぱ先生は強くてさ、戦り合った後立てた奴なんて数えるほどしかいなかったからな。」

俺が何となく疑問に思い呟いた所、翼が説明してくれる。

「へえ、お前はどつだったんだ?」

「いやあ、ボッコボコにやられてさあ、なんとか先生に一撃入れ

た所で力尽きちまった。」

俺は教師の方に目を向ける。上手く抑えられてはいるが、その身からは並々ならぬ魔力の波動と、歴戦の猛者の如き風格を感じる。確か翼は雷属性しか使えなかった筈だが…あの教師から一撃？やるねえ、翼。

俺は内心で翼を賞賛する。

そんなことを考えていると、周りの人間がゾロゾロと移動を始める。

「みんなどこ行くんのだ？」

「模擬戦の見学の為演習場の端に移動してるのよ。」

俺の問いに答えたのは翼ではなく女の声だった。振り返ってみると、そこには村園女史が立っていた。

「もう、先生の説明聞いてなきゃダメじゃない。」

「アンタか、あの教師の説明は無駄に長いんだよ。」

「それでもみんな聞いていたわよ？」

「俺は『不』良だからな。聞いていてもどうせ雑用ぐらいしかしねえからいいだろ。」

「ハア、本当に何も聞いてないのね…この模擬戦は全員参加よ？」

「……あ？」

全員参加？魔法が使えない設定の俺に天才達と混じって模擬戦をし

ると？

「…ああ、頭が腹痛なんで保健室に…」

「行かせないわよ？」

俺が退場しようとする、再び首根っこを掴まれる。

「そのまま一步でも踏み出してみなさい。その痛めている首が大変なことになるわよ？」

「…イエス、ユア、ハynes」

くそ、人の弱みに付け込むとは…これだから大人は…！

ズドン…！

俺と村園女史がそんなコントじみたことをしていると、突如爆音がきこえてくる。模擬戦が始まったようだ。ちなみに俺達は未だ避難していない。

それはつまり…

「おゝおゝ、俺らがまだいるのにようやるねえ。翼はさつさと逃げたらしいが…」

「ちょ、もう始まって！？って、何で君はそんなに悠長にしてるのよ！！キャツ、爆炎がこつちまで！！」

「障壁よろしく。アンタなら大丈夫だろ。か弱い生徒を守ってくれよ先生。」

「そんな凶太い精神してる子のどこが弱いんだよ！ああ、もう！」「清らかなる水よ、荒々しき邪悪を祓いて我らを包み込まん。アクアラビリンズ」！！」

村園女史が呪文を唱え魔法を発動すると、俺達を中心に半球形の水の結界が展開され、荒れ狂う炎を全て防ぎきる。

「やるねえ、あれだけの力をまだ余力を残して防ぐとは、こんな若え女でも一流を名乗るに相応しい程の力だ。」

「ま、どうでもいいか。」

俺は炎が収まると同時に演習場の端へと移動する。村園女史が何やら言っていたが、それは無視する方向で。

余談だがさっきの爆発は舞がしたものだそうだ。

*

「次、白神 煉夜と烏丸 茂！！」

しばらく翼とクラスの連中と談笑しながら模擬戦を観戦していると、教師に名前を呼ばれる。どうやら俺の順番が回ってきたようだ。

「ああ、白神ドンマイ。」

「あ？」

クラスメートの一人が俺を哀れむような視線で見ってくる。

「あの烏丸つてのは鳳の分家の人間で、なかなかの実力者なんだ。」

性格は最悪だけだな。と最後に吐き捨てるように付け加えるクラスメート。

ふむ、烏丸ねえ…そんなのいたようになかったような…まあ、いい。

俺は首を回したりしてストレッチをしながら歓声飛び交う中演習場の中央へと向かう。そこには教師とニヤニヤとこちらを見ながら笑っているチャライ男がいた。その顔を見て俺は苦々しい記憶と共に思い出す。

こいつが烏丸…ああ、昔俺を虐めてた連中のひとりにいたな、こんなの。

「来たか。もうわかっていているとは思うが一応ルールを説明する。勝負は相手が気絶したり負けを認めた時点で終了とする。では2人もこれを…」

教師が簡単にルールを説明すると、俺と烏丸にある紋様の入ったバツジを手渡す。

「これは一定以上の魔力を受けると魔除けの作用が出るバツジだ。これが発動した時点でその者の負けとする。それじゃあ両者準備を…」

そこまで説明すると、教師はその場から離れる。

俺はとりあえず念入りにストレッチをし、体をいつでも動けるようにしておく。

「へへへ」

「…何だ？」

何やら烏丸がこちらを見ながら笑っているの、なんとなく聞いてみる。

「いや、お前魔力はあるのに魔法は使えないんだってなあ？」

「ああ、その通りだが…それが？」

「いやなに、昔ウチの一族にもそんな奴がいたのを思い出してな。」

うん、俺だね、それ。

「…へえ、あの鳳家にも俺みたいな奴がいたんだな。軽い親近感持てるぜ。」

「いや、あいつは例外中の例外だ。なにせ、宗家の人間の癖に8属性の1つも使用できなかった無能だからな。ま、そいつは既に国外追放されちまったがなあ。ギャハハハハハ！」

「兄上を馬鹿にするな…！」

「ひっ…！」

烏丸が何かを思い出したかのように大笑いする。すると、会話が聞こえていたのか、舞の突如として放たれた怒りを具現化させたような魔力の奔流に、烏丸は短い悲鳴を上げ後ずさる。

そっぴやアイツ何気に俺に懷いて慕ってくれてたな…俺が褒めたり

頭撫でたりすると顔真っ赤にしてたのが何なのかわからなかったが…
などと感慨深く思い出を振り返っていると

「始め!!!」

教師の模擬戦開始を伝える声が聞こえてくる。

それと同時に気を取り直した烏丸が魔法の詠唱に入る。こちらを侮っているのか、その詠唱は嫌に遅く、長い。どうやら中級魔法を使用するようだ。

俺を練習台にでもするつもりか？ふむ、どうしようかねえ…目立ちたくないしワザと負けようか…いや、例えこんなままことの模擬戦であろうと、鳳に屈する訳にはいかないな。

俺は軽く息を吐き出し体を半身にし、構える。

そこで詠唱が終わったのか、烏丸が魔法を発動する。

「ハハハハ!!!喰らいやがれ無能者あ!『アースクエイク』!!!」

地面から巨大な土の槍が次々と現れ、こちらに向かってくる。

普通に考えるなら魔法の使えない俺にこれを避けることはできても、防ぐすべはない。そう、普通なら。

「こんなもんか。」

俺は足下から現れる巨大槍に鋭く蹴りを叩き込み破壊する。

『なっ!!!』

驚愕する烏丸。いや、周りの教師を含むギャラリーも驚いているようだ。

それはそうだろう。魔法での攻撃は下級魔法であっても、人が人を

攻撃する何倍もの威力を秘めている。中級ともなればその威力は例え未熟者が扱うと言っても、重火器とも比べても遜色はない程だ。それを生身で破壊したのだ。

ま、俺はちよいと特殊な体質のお陰なんだがな。それにしても…

「鳳って言っても所詮は分家か。」

俺は挑発するように肩をすくめ嘲笑する。

それを見た烏丸は顔を真っ赤にし、怒りを露わにする。

「マグレで調子に乗るなよ無能者がああああ！！」彼の者を焼き払

…！！」

「おせえよ。」

再び詠唱を唱えようとする烏丸に一気に距離を詰め、首筋に手刀を叩き込み意識を刈り取る。更にだめ押しとして地に沈む相手の頭を思い切り踏み抜く。

「…やりすぎたか？」

地面に血溜まりを作りながらピクリとも動かない烏丸を見て呟くと、次の瞬間大歓声が演習場を包み込む。

「あ？」

「すげえじゃねえか煉夜あ！！」

「うお！」

突然の大歓声に呆然としてみると、翼が俺にのしかかるように飛び

ついてくる。俺は前のめりに転びそうになるが、そこは鍛え抜かれた俺の足腰。危なげなく踏みとどまる。

「あの烏丸相手に圧勝かよ！なあ、烏丸をぶちのめしたあの技は何だ！？何か武術でもやってたのか！？なあなあなあ！？」

「だああ！！鬱陶しいわボケえ！！」

「ぐはあ！！」

俺は体にへばりついてくる翼の腹に肘を叩き込み振り払う。

そして、保険委員が何かに連れて行かれている烏丸を後目に演習場の端に移動することにする。少々頭を踏み抜くのはやりすぎたかと、念の為教師の方に目を向けると、こちらを見て黙って頷いていたから多分大丈夫だろう。

演習場の端に戻ってくると、クラスメートや知らない奴やらに囲まれ、先程の翼のようなノリで質問責めにあった。やはり無名の魔法が使えない人間が、分家とはいえ名家出身の魔導師に勝つのはやはり凄いいことらしい。俺からしたら全力を出す価値もない三流魔導師に勝ったところで何も感じないのだが…飛び交う火の粉…いや、小虫を振り払った。そんな感じのことではない。

とりあえず、周りの連中を適当にあしらいながら模擬戦の観戦をすることにする。

中央に見えるのは、眼鏡を掛けたひょろい男と、身に纏う雰囲気明らかに違う黒髪の美人さん。俺の警護対象である高宮のお嬢。…勝負にならねえなこりゃ。

などと思いつつ腕組みをしながら念の為辺りを警戒しておく。

「始め！！」

そして、高宮のお嬢の模擬戦が始まった。

5 話（前書き）

多少修正しました

5話

高宮のお嬢とひよる男（仮）の勝負は一方的なモノになっている。ひよる男は必死に魔法を唱えるが、高宮のお嬢はそれを風や水の障壁で軽々と防ぎきる。策を弄して高宮のお嬢に攻撃を届かせようとすると、それすらも意に返さず全て防ぐ。

その繰り返し

ひよる男は魔力がなくなってきたようで、疲れた顔をし、徐々に魔法の威力が落ちてきている。それに反して高宮のお嬢はまだまだ余裕そうな表情だ。

まあ、そらそうだな。高宮のお嬢は防御魔法についてはわからんが、魔力値に関してはこの学院内でもトップクラスだ。

そんな奴が守りに徹すれば相手は魔力と精神力を消耗していくだけだ。

見方によつてはえげつねえ戦法だな……

などと腕組みをしながら欠伸混じりに試合を観戦していると、ひよる男が火の玉を放つと同時に膝をつく。どうやら魔力切れのようだ。飛んでいった火の玉は高宮のお嬢の風の障壁により、容易く防がれる。

「止めっ！！」

防ぐと同時に教師の声が演習場に響く。勝者は…言わなくてもわかるだろう。

高宮のお嬢は軽く息を吐くと、風の障壁を解除する。

その瞬間、同じように観戦している人混みの中から、不意に僅か、並の奴なら気付かない程僅かだが、魔力の流れが一点に集中するのを感じる。魔法発動の前兆だ。

な…こんな人の大勢いる中で魔法を放つつもりか！？

迂闊だった。こんな目立つ場所で高宮のお嬢に実害を与えはしないだろうと、高をくくっていたのが仇になった。

高宮のお嬢は今障壁を完全に解除している。もう一度障壁を構成するにしても間に合いそうにない。

放たれる前に術者を潰すか？

ダメだ、人が多すぎて術者を特定できない。何より間に合いそうにない。

スベルインターセプト
詠唱妨害？ダメだ、魔力が微弱すぎて干渉できない。じゃあ、どうする？

「じゃあねえか…」

嘆息混じりに呟きながら、高宮のお嬢目掛け一気に駆け出す。

周りの連中が何か言っているが、気にしない。

標的と術者の大体の位置が分かってりゃ防ぐのは容易いんだよ！

俺が高宮のお嬢の位置と、術者の位置との直線上の位置に到達する瞬間、魔法が放たれる。

人混みの隙間から飛来してくるは雷撃の矢、下級雷魔法『ボルトアロー』

俺は雷撃の矢を迎え撃つように跳躍し、飛び蹴りを放つ。

「ッー!!」

タイミングはギリギリ。蹴りが雷撃の矢に当たった瞬間、全身を駆け抜ける痺れと、脚の皮膚を焼く痛みが俺を襲う。

ま、全然問題ねえがな。

俺は着地すると、すぐさま術者を捜すべく意識範囲を拡大させ、気配を探る。魔法を使用した者は使用した魔力の残滓をその身に纏う。

普通の奴なら気付けないその残滓を、ちよいと特殊な俺は察知することができる。

「……チツ、逃したか。」

もう既に先程の場所には魔力の残滓を感じられなかった。軽く舌打ちし、とりあえず再び演習場の端へと戻ることにする。なんかここにいたらめんどくさそうだし…

「待つてください!!」

歩き出した所で呼び止められる。

「あ?」

振り返ると、心配そうな顔をしている高宮のお嬢の姿が。

「白神：貴方、足が…!」

「足?…ああ。」

言われて視線を下に下げていくと、俺の足がパツと見大変なことになっていた。

エネルギーである雷を生身で防いだためか、制服のズボンの膝から下はボロボロになっており、脛のあたりは火傷を負い、ジユクジユクと焼け爛れている。

「…ああ、俺のズボンが…」

「気にするところはありません!!足が酷いことになって

いますよ!？」

「こんな酷いどころか怪我の内にも入んねえよ。それより酷いと思うのはこの学院のセキュリティだと思うがね。なあ、先生？」

「……」

チラリと教師を見ながら教師は惘然として黙っている。恐らく理解しているから反論も何もしてこないのだろう。

中級魔法でも傷つかなかった俺が下級魔法で傷ついた。それも誰も気付けない程の微量の魔力でだ。そんな魔力操作技術と意志力を持つ奴が生徒に危害を加えようとしたのだ。相手が外部の人間だろうが、内部の人間だろうが、もしも高宮のお嬢に危害が加わっていたら、この学院の教職員の責任問題となっていたところだろう。俺がいたから良かったモノを…

魔法の威力とは魔力と意志力の掛け算だ。さつき潰した、ええと…
…鳳の分家の奴が放った中級魔法は、意志力が弱いから俺にダメージ一つ与えられなかった。それでも中級魔法だ。下級魔法とは歴然とした差がある。しかし先程の襲撃者は意志の力によりその差を無くした。それ程の術者がこの学院には潜んでいる。

まあ、下級魔法で上級魔法に匹敵する程の意志力を持つ化物もいるぐらいだから別段驚きも臆しもしねえが…（親父、宗主、師匠）

「先程の輩は、俺達教職員が責任を持つて捕らえる。俺がいながら、すまなかった…」

教師が俺に頭を下げてる。こんな態度を取られても正直面倒なだけなので、手をヒラヒラと振りながら気にすんなどっておく。

高宮のお嬢も俺に何か言いたげだったが、突然舞を先頭にワツと生徒たちが高宮のお嬢の周りに群がる。彼女の身を案じてのことだろ

う。

やれやれ、人気者だねえ。さてと、俺はさっさと退散するかね。調べ事も見つけたしな。

俺は教師に保健室に行つてくるとだけ伝え、群がる人をスイスイと避けながら、人混みから抜け出し、演習場を出る。

*

「ああ、それじゃあこの学院で雷属性の魔法が使える教職員を絞つてくれ。後、替えの制服を届けて貰えると助かる。それじゃあ頼む。」
「ピッ」

携帯の通話終了ボタンを押し、携帯をポケットにしまう。

現在俺は保健室に向かうべく廊下を歩いていて。正直、報告と調査依頼を出す為、人気の付かない所に来たかったただけなのだが、保健室に行くと言った手前、足に何かしらの処置がされていない状態で戻ったら怪しまれると思ひ立ち、とりあえず火傷の手当てでもしてこようとしている訳だ。

「ふう…流石に危なかった……」

俺は高宮のお嬢を守れたことに軽く安堵しながら、先程の出来事を思い返す。

俺は俺が魔法を使えるということは、なるべく相手に知られたくはなかった。だからあえて俺は魔法を使わず生身で相手の魔法を防いだ。魔力量からして下級しか放てないことは予測できていたし。

しかし、まさか力を抑えていたとはいえ、俺の『纏い』を貫くとは思わなかった…

『纏い』それは俺が名付けた体質のようなもので、俺は無意識の内に常に体の内側から全身に魔力障壁を張っており、魔法に対する抵抗力が異常に強くなっている。言わば俺は魔力の鎧を常に身に纏っている状態なのだ。ちなみに魔力の密度により強度操作可能。

中級魔法程度なら防げると思ったが、見誤ったか。

まあ、貴重な情報は得られたから良しとするかね。

そう、相手は雷属性の魔法が使える。この情報だけで大分犯人を絞ることができる。今までの撃退された護衛やは、戦闘時の記憶を失っていたようでわからなかったらしい。それにしても資料や高宮のお嬢の証言によれば、今まで魔法による危害は加えてこなかった筈だが…何か目的があるのか？まさか俺を試したのか？それとも……

「待つてください！」

突如背後から聞こえてくる声に、思考をぶったぎられる。

振り返るとそこには心配そうな顔をした高宮のお嬢の姿が。あれ？既視感。

「あ？どうした。」

「先生に貴方が今保健室に向かっていると聞いて、追いかけてきました。」

「随分と物好きなこつて。」

「今治療を…」

高宮のお嬢の腕に魔力が集中し、淡い水色に光る。回復魔法でも使

おうとしているのだろう。
俺はそれを手で制す。

「いらねえよ。こんなもん、舐めときゃ治る。」

「…舐めるの…ですか…？」

高宮のお嬢は口に手を当てながら俺の火傷をした箇所を見て呟く。
その目は真剣そのものだ。

ああ…冗談の通じない人種ですか…面倒な。流石に俺は傷を舐めて怪我を治療しているとは思われたくないので、冗談だと言おうとしたら、突然高宮のお嬢が跪いて、その綺麗な顔を火傷に近付けてくる。

「…何してんの？」

俺は火傷をした足をヒョイと高く上げ、高宮のお嬢の奇行を阻止する。

「何って、貴方は傷を舐めて治療しているのでしょうか？その火傷は私が原因でできてしまったのだから、私が舐めて治療しよう…」

…ああ、マジで面倒くさい。

思わず口にしてしまいそうになった言葉を辛うじて飲み込み、代わりに溜め息を吐く。とりあえず誤解を解くべく、未だに跪いている高宮のお嬢の手を掴み立ち上がらせる。

「はあ、冗談だ、冗談。流石に舐めては治さねえよ。」

「冗談、ですか？」

不思議そうに首を傾げる高宮のお嬢に、再び溜め息を吐く。
いや、不思議そうにされてもリアクションに困るんだが…

「そ、冗談だ。さっきも言ったが、こんなもん怪我の内に入んねえよ。気にすんな。」

「しかし…!!」

「それに、俺は魔法が使えないからな…魔法にはあまり頼りたくねえんだ…」

自嘲気味にそれっぽいことを適当に言っておく。

本音は、俺の纏いは補助魔法や回復魔法に対する効果も阻害してしまふ。効果が薄いの見たら高宮のお嬢はまた俺を怪しむだろう。いや、中級魔法を生身で防いだ時点で怪しんでるかもだが、まあそんな面倒はごめんだからな。

「すみません、いらぬお節介を…」

高宮のお嬢が俺に頭を下げてくる。俺は手をヒラヒラと振りながら冗談混じりに言っておく。

「お嬢様が俺みたいないな一般市民にいちいち頭下げんな。あんたは、『あんな魔法も防げないなんて…この使えない愚民が!!』とか『あら、愚民でも盾代わりくらいにはなるのね。』くらい言っときゃいいんだよ。むしろ謝るくらいなら言え。」

「そ、それはちょっと…」

「じゃあ気にすんな。」

そう言つて、さつさと保健室に向かうことにする。舞が来たらまた面倒そうになるし…まあ、それはそれで面白そうだからいいが…

「フフフ」

どうでもいいことを考えていると、高宮のお嬢が笑う。

「…どうした？」

「いえ、優しいんですね、白神は。」

「は？」

突然何を言っているんだこのお嬢様は？

「どうした、藪から棒に。」

「いえ、ただそう思っただけです。」「…妙なこと言っねえ、高宮のお嬢は。」

「…その呼び方は何ですか？」

若干不機嫌そうな顔になる高宮のお嬢。…何故だ？

「ん？ああ、俺が勝手に使わせてもらってるアンタの呼称だ。」

「私は貴方と同じ学生です。そのような呼び方は止めて下さい。」

ああ、そっぴや高宮の爺さんが、特別扱いを嫌うゝ的なこと言ってたな。

「ふむ…なら何て呼ぼうか……」

高宮のお嬢がワクワクしたような目でこっちを見ている。期待に込えてやりたい所だが、さて…

6 話

「呼び名呼び名…もう面倒だからお嬢でいいか？呼びやすいし。つか決定な」

「お嬢、ですか…？」

「そそ、いわゆるあだ名ってやつだ」

まあ、あだ名なんて大層なモノでもない気がするでもないが、こういうのは気分が大切だ。

お嬢はどこか嬉しそうに呟く。

「あだ名…そういうので呼ばれるのは初めてです」

「…ま、そりゃそうだろうな」

外見良し、成績良し、性格良し、家柄良し。こんな完璧な存在を相手にすると、大抵の奴はどこか遠慮しちまう。それこそ舞のように対等な友人や、俺のように身の程をわきまえない奴でない限り。

「…折角ですので私もあだ名で呼んでいいですか？」

お嬢が何やら提案してくる。

あだ名？

「誰を？」

「白神を」

「…俺？」

コクつと頷くお嬢。

ふむ、つまり俺にあだ名を付けて呼びたい、と…

うん、まったくもって意味が分からん。どっいつ展開よこれ？

「俺にあだ名付けるぐらいなら、鳳に付けてやれよ」

「舞とは付き合いが長いので、今更呼び方を変えるのはどうかと…」

「ふむ、そりゃそうか。なら他の仲の良い奴に付けてやれよ」

「他の人は私の家柄のせいとか、どこか私を特別扱いしてます。舞のように対等に接してくれる人は貴方ぐらいしかいません。それに、私もあだ名というモノで人を呼んでみたいですし、それなら初めてあだ名をくれた白神がいいかなと…」

後半はどこか恥ずかしそうに喋るお嬢。

俺もある意味じゃあアンタを特別扱いしているんだが…などと内心で苦笑する。

しかしあだ名ねえ…まあ、それもまたこの学院生活での一興か…？俺は溜め息混じりに返事をする。

「はあ…わかったよ。好きに呼べ」

「いいのですか？」

「好きに呼べって言っても、流石に限度はあるがな。まあ、大概は了承してやる」

流石にレンレンとか呼ばれたら堪ったもんじゃないしな…昔ある奴にそう呼ばれていたが…

お嬢は顎に手を当てて、考える素振りをし始める。

「そうですね…それでは、煉、と呼ぶことにしましょう」

「煉、ね。まあいいだろう。」何気に普通の呼び名で安堵する。「煉」と聞いた瞬間、その後にもう一つ「煉」がつかねえよな？と、ガクブルしたが、杞憂だったらしい。

「それにしても、そちらもあだ名か。何だ、俺を信用してくれたってわけか？」

「ええ、貴方は私を身を挺して守ってくれました。もう、疑う理由がありません。」

あの程度のことで疑う理由がなくなった、か…ったく、高宮の爺さんというお嬢といい、人をすぐに信用しやがる…わかってんのかね、人の上に立つ人間ってのは人を簡単に信じてはいけないということを…

「…へえ、それはわからないぜ？もしかしたら、アンタに近付く為に犯人と共謀したのかもしれない。」俺はニヤリと酷薄に笑う。対してお嬢は柔らかな微笑みを浮かべるだけ。

「本当にそのような下心を持っていれば、口にはしないでしょ？」

「…さあ、どうだろうなあ。」

…調子狂うな…こういう、なんつーか、純粋な奴を相手にするのは。
「それに、私はこれでも人を見る目があると自負しています。貴方からは悪意が感じられません。」

「人を見る目？ハッ！教室で人を疑惑の視線で見てた奴がよく言う。
」

挑発するように鼻で笑う。しかし、お嬢の態度は変わらない。

「それは貴方が雰囲気を変えていたからです。そのように仮面をしている人を信用しろというのは無理な話でしょう？」

「…さて、何のことやら。」

「とぼけないでください。今の貴方は、そういった取り繕った感じがしません。今の貴方はとても大きく、穏やかな感じがします。だから私は煉を信用します。この呼び名は、私から貴方への信用の証です。」

お嬢の目を見る。その目は曇りなく真っ直ぐに俺の目を見据えている。まるで俺の心を見透かすかのように…

純粹故に見抜かれたか、それとも只のお人好しか…どちらにせよ、本っ当に調子が狂うねえ…高宮の爺さんといいこのお嬢といい…

「はあ、勝手にしろ…」

なんつーか、俺らしくねえなあ……まあ、たまにはいいか。
一つ溜め息を吐く。しかし、不快な感じはしなかった。

*

そんな会話をしながらしばらく歩き、ようやく保健室と書かれたプレート部屋の前に到着する。

「さて、さつさと治療するかね。」

俺は保健室の例によって、魔除けの紋様が施されている扉に手を掛け、開ける。

…保健室つーより、小型病院だな……

そう思ってしまう程、ここの保健室の設備は凄かった。

広さは一般的な体育館程の広さがあり、いくつものブースで区切られている、ベッドが並んでいる部屋や、レントゲン室、果ては手術室まである。

しかし、そんな広さの保健室には治療中の生徒はおるか、保険教諭すらいない。

…いや、1人いる。

気配を感じ、その方向に目を向ける。

「村園先生？」

お嬢が不思議そうに呟く。そこにいたのは現在演習場にいるはずの村園女史だった。

「っ！高宮…」

村園女史は驚いた様子でお嬢だけを見ている。

…この様子から見て俺はともかく、お嬢が来るのは予想外だったってことか…？

先程のリアクションを疑問に思いながら、とりあえず村園女史を観察することにする。村園女史はすぐに冷静になり、ニヤニヤとした笑みを浮かべながらお嬢と俺を見比べている。

「白神ったら、こんな時間から高宮を保健室に連れ込んで何しようとしてたのよ？」

「なっ、ち、違います！私と煉はそんな関係じゃありません！」

「煉？へえ…やるじゃない白神。鋼鉄の処女アイアンメイデンとも呼ばれる程ガードの堅い高宮を転校してきて僅か一週間で落とすなんて。でも少し性急過ぎかな？君達がそういう年頃だったのはわかるんだけど、すぐに行動に移すのは…せめてゴムは…」

「先生！」

顔を赤くしながら村園女史に反論するお嬢を見て、そういう知識はあるのか…

などと、どうでもいいことを思いながら、頭は別のことを考える。お嬢は俺の仮初めの雰囲気とその純粋さで見抜いたが、俺にはそれとは違う見極め方がある。世界を回り様々な場所で、数多の人間を見てきたことにより得た洞察眼。

故にわかる。村園女史が表情を偽っていることを。饒舌で口調が早くなっていることは、嘘を吐いたり、何かを誤魔化そうとしている奴によく見られる。そして、なにより目。目は嘘を吐かない、なんてよく言ったもんだな…いや、目でも嘘を吐ける奴はいるが…俺とかまあ、それはいいとして、俺は過去にこの目を幾度となく見てきた…とりあえず揺さぶりでもかけてみようかね。

俺は唇の端を吊り上げ、挑発するかのような笑み浮かべる。

「今日はいつにもまして随分と饒舌だな。何をそんなに慌ててるんだ？」

俺の言葉に一瞬顔が強張る村園女史。しかし、すぐに表情を直す。

「どうしたのいきなり？別に慌ててなんていないわよ。」

「いやあ、演習場にいたはずなのに、何でこんな場所にいるのかねえ、っっておもってな。何か妙なことでたり…いや、しょうじてたりしてな…」

「…私は君が怪我して保健室に向かってるって聞いたから、保健室に来たの。担任として当然の責務よ。そういえば君は魔法受けたんだよね？なのに怪我がそれだけっておかしくない？」

「俺は昔から頑丈だからな。それより俺にはお嬢がいるから問題ない。アンタはさっさと戻ったらどうだ？」

ギスギスギスギス

俺と村園女史は談笑しているかのように、腹の探り合いをする。

二人な間に空気が軋むような険悪な雰囲気が出る。

「村園先生、煉には私がついていきますので、演習場に戻ってくださいって大丈夫です。煉も、村園先生は貴方を心配して下さったのだから、邪険にははいけませんよ？」

しかし、流石はお嬢。この空気が読めていないのか、狙ってなのか、凜とした態度でこの険悪な空気をぶち壊す。

俺と村園女史は顔を見合わせる。どうやら向こうも俺と同じように、毒気が抜かれた様子だ。

「やれやれ…当たっちゃって悪かったな。魔法喰らってズボンボロボロになったから、多少苛ついててな…治療してくるわ。」

俺はそれっぽい形だけの謝罪を言い残し、足の治療すべく保健室の奥に2人を置いて歩いていく。…黒か？いや、まだわからないか…考えながら治療薬があるであろう小部屋に入り、置いてあった椅子に腰を下ろす。

俺の目的は別に犯人を捕まえることじゃない。ただ、犯人を見つけ、適当にボコって高宮の爺さんに渡せばいい。それが高宮の爺さんからの依頼だ。よって物的証拠などは別にいらない。いるのは犯行をした事実のみ…そう考えると非常に楽だな。俺から見て村園女史は非常に怪しい。発言や行動に妙な所が多いし、魔法の腕も高い。しかし…

そこまで考えた所でお嬢がやってくる。

「煉、先程はどうしたんですか？先生にあのような態度で…」

「ん？ああ、さっき言ったろ。ズボンボロボロにされたから多少苛ついててな。つい当たっちゃった」

「本当にそうなんですか？」

ジッと俺の目を見てくるお嬢。まるで俺の本心を探るかのよう。ふむ、何か疑われてるな…流石にあの揺さぶりは不自然だったか？面倒だから誤魔化すか。

「さてな…それより治療薬ないか？足がヒリヒリして痛えんだが…」

「え、ああ、ハイ、待っててください。」

誤魔化しは成功したようで、近くにあった薬品棚の中を探しだすお嬢。そして、火傷の治療薬らしき、焦げ茶色の半透明のビンを取り出す。

「ありました。『ヤケド激ナオシング』」

「うん、薬品名が凄い不安感をそそるな。」

薬品名に「激」とか付いてる時点でヤバそうなんだが…まあ、いいや。

俺は手を伸ばし、お嬢の手からヤケド激ナオシングを受け取ろうとする。しかし、避けられる。

「…オイ」

「私が塗ってあげます」

どうやら魔法で治療できなかった分、こういう所で貢献したいらしい。

責任感でも感じてんのか？何にせよ律儀だねえ…まあ、やってくれるんなら拒む理由はねえわな。

「んじゃ、頼むわ」

「ハイ」

俺は素直に火傷を負った足を出す。

お嬢はどこか嬉しげに返事をし、ビンの蓋を開ける。そしてビンの中からドロツとした紫色のジェルを掬う。紫色！？

「ちょっと待とうかお嬢さんや」

「どうかしました？」

俺は椅子に座ってる状態から後方にバク宙をし、お嬢もとい、怪しげな薬品から距離を取る。

「いやいや、どうしたじゃねえよ。何だよその明らかに毒っぽい色は。普通は白とか無色透明とか、少なくとも体に影響無さそうな色してんじゃねえのかよ？」

「毒っぽいとは失礼ですね。このルミナス魔法学院の設備は世界でもトップクラスです。この薬1つ取っても医療の最先端の薬品なんですよ？」

「たかが火傷の治療薬の分際で医療の最先端突っ走ってんじゃねえよ！！っーか効能を良くする前に色何とかしろや！！」

「大丈夫ですよ。この薬は高名な魔法医が作った魔法薬で、数々の全身火傷などの重傷者を救ってきた実績を持っていますから。」「予想以上に凄い物だった！？」

全身火傷を治療するとか…っーか何でそんな高価そうな物が学校の保健室にあんだよ…

ちなみに魔法医とは文字通り医療に魔法を使用する医者のことだ。

「わかったら早く座ってください。治療ができません。」

「…わかったよ。」

俺はしぶしぶ椅子に座り直し、足を出す。

お嬢はその足に紫色の薬を塗っていく。

「どうやら先程お嬢が言っていたことは本当らしく、火傷の痛みが無くなっているのがわかる。」

「…体に害もなさそうだしな……」

「…何故私を助けてくれたのですか？もしかしたら、こんな怪我では済まなかったかも知れないのに……」

火傷の箇所を見ながら内心安堵していると、お嬢がポツリと呟く。

顔を上げ、お嬢を見ると、その顔は悲しげな顔をしており、悲愴感を漂わせている。

「…さあな。強いて言うなら気まぐれ、かね。」

「気まぐれ？」

「そ、百回に一回起こるか起こらないかの気まぐれだ。」

俺はお嬢から視線を外しながら答える。

勿論、嘘だ。気まぐれで他人を庇うほど俺は出来た人間じゃない。

仕事じゃなかったらあんな場面無視しただろう。

俺がこの世で一番大切に信用しているのは俺自身だけだ。

他人の為に傷を負うなど馬鹿馬鹿しい。

今回は庇わなければ俺の仕事が失敗となるから庇っただけだ。お嬢の為ではない、俺の為に体を張った。それだけの話

「…例え気まぐれの行動であっても、私は貴方のお陰で怪我をせずに済みました。ありがとうございます」

頭を下げてくるお嬢。

「律儀だねえ。ま、別に礼なんざいらねえよ。俺が勝手に魔法に突っ込んで勝手に怪我しただけだ。礼を言われる程のことをした覚えはねえよ」

仕事だしな。と、心の中で付け足しておく。
一通り塗り終わったようなので、立ち上がり、保健室から出ることにする。

保健室から出ると、廊下には舞が立っていた。

「ん？お嬢のお迎えか。ご苦労なこった」

「え、あ、ああ…」

声をかけるも、舞は何やら歯切れが悪く、どこかそわそわとしている。

？…ああ、お嬢を守ると意気込んでいたのに、その役割を自分が果たせなかったことを悔いているって所かね。

と、舞の今の様子を予測してみる。

昔から責任感は一倍感強かったからな…

俺は舞に慈愛の微笑みを浮かべる。

「気にすんなよ」

「え？」

「確かにお前はお嬢を守ると意気込んでいた割には、肝心な所で動けず、あまつさえ疑っていた奴にその役目を奪われて、全くいいところ無しだが、あれは仕方ないことだ。気にすんな」

「そ、そのことは反省している！傷口を掘り返さないでくれ！！というか何だ、その悪意に満ちた言い方！！」

何か怒らせてしまった…ナイーブに言っただつてもりだつたんだが…

「まあ、何だつていい。チャイムには気付かなかったが、お前がここにいるってことは授業は終わったんろ？じゃあ教室に戻るとしようぜ」

そう言つて俺はさつさと歩き出す。

「待ってくれ！」

このボロボロになったズボンはどうしようか、半ば真剣に考えていた所、舞に呼び止められる。

「んだよ。お嬢には手え出してねえから安心しろ」

「あ、当たり前だ馬鹿者！！じゃなくてだな。あの、その…すまなかつた！！」

振り返ると、舞が勢い良く頭を下げる。

「あ？」

「お前をストーカーなどと疑つていしまつて本当にすまない…お前

は体を張って優奈を守ってくれたというのに…私はお前を見た目だけで判断してしまった…」

「見た目だけって…俺のような好青年のどこが犯罪者に見えるんだよ」

俺の言葉に舞はフツと口元を綻ばせる。

「それはなかなか面白い冗談だな。お前のような目つきの悪い悪人面のどこが好青年だと言っただ？」

え、俺って悪人面なの!?

お嬢の方に顔を向けると、お嬢は苦笑しながら申し訳なさそうに頷く。

衝撃の事実発覚！俺は悪人面だったのだあ!!…ってのは冗談で、俺の顔つきが悪いことなどとうの昔に自覚している。

「しかし何故だろう…お前を見ていると懐かしく、穏やかな気持ちになる…まるで兄上…」

俺の顔を見ながらそこまで呟くと、ハツとした顔になり、何かを振り払うように頭を左右に振る。

…大方現在の俺…『不』良生徒である「白神 煉夜」と、過去の俺…慕う兄貴分である「鳳 煉夜」を重ねてしまったのだろうか。

「話を戻すが、優奈を守ってくれて本当に感謝する。そして、疑ってすまなかった」

再び頭を下げようとする舞の頭を鷲掴みにする。

「なっ、何を…」

何やら非難めいた声が聞こえるが、あえて無視する。

「お前といい、お嬢といい…お前ら簡単に頭下げすぎなんだよ。さつき言っただろ。気にすんな。」

そう言ってわしゃわしゃと頭を撫でる。サラサラとした髪感触が心地良い。

「…兄上……」

やれやれ、間違っちゃいないが、勘違いされてるねえ…

舞は気持ち良さげに目を細めているが、すぐに我に返り、手を振り払らう。

「わ、私…今何を…」

「おいおい、俺はお前の兄貴じゃねえぞ？」

「…!! あうあう……」

慌てた様子の舞に苦笑しながら声をかけてやると、舞は一瞬で羞恥からか顔が真っ赤になる。

「あの、そろそろ行きませんか？」

そこで、今まで空気と化していた困った顔のお嬢の言葉で、俺達はやっと教室に戻ることにしたのであった。

7話（修）（前書き）

村園女史の位を付け加えました。

何か眠い時に書いたので、強引かつ支離滅裂な感じに仕上がってます…

主人公軽く鬼畜モードに入ります。

次回当たりに主人公の魔法が発動させようかと思っています。
感想どしどし送ってくださいね〜

7話（修）

結局ズボンはそのままの状態で、何事も起こることなく時間が進む。事情を知らない奴らが俺を見てクスクス笑っていたので、「次世代ファッションだ舐めんなよグラァ！」と豪語したら爆笑された。犯人め…この辱め、一生忘れんぞ…！

それはそれとして、基本、授業はとうの昔にやった内容なので、簡単すぎる。なので、ずっとペン回し12回転に挑戦してたり、寝てたりしていた。そんな俺を隣の席のお嬢や、教師が注意してきたが、暇つぶし代わりに教科書の内容を無駄を無くし、わかりやすくまとめた俺のノートの内容を見て絶句していた。

それでもどうでもいいとして、更に時間が流れ放課後。俺と翼は玄関に向かつて無駄に広い校舎内を歩いていて、ちなみにお嬢には舞が付きつきりであるので問題ないと判断し、ひとまず放置しておく。それにしても今日はガラになく気張っちまった。

「ああ…今日は無駄に疲れた…」

歩きながら伸びをする。背骨がいい感じにゴキゴキ鳴っている。

「ハハハ、お疲れさん。でも周りからの評価はうなぎ上りだぜ？名家の人間を無手で倒した無名の男。ってな」

「嬉しくもなんとねえよ…あの程度の奴、お前でも楽勝だろ」

「流石に無手はねえよ」

笑いながら俺の肩を殴ってくる翼。
痛えなバカ野郎。

「で、これからどうするよ?」

お返しとばかりに翼の肩関節を一瞬で外すと、腕をプラインプラインと力なく揺らしながらこれからの予定を聞いてくる。

ふむ、流石は俺。相手に気付かれず肩を外すとは…それはいいとして

「とりあえずズボン変えたい。よろつと視線がウザイ」

「さつきから笑われてるしな。」

既に完治した足が剥き出しになっている片足をプラプラと振りながら嘆息する。それを見て翼は呆れたような苦笑を浮かべる。

「しかし、魔法を蹴り砕くわ蹴り落とすわ…何者だよお前……」

「…まあ、魔法が使えなかった分、体術は重点的に鍛え上げたからな」

これは本当のことだ。鳳にいた頃も魔法が使えない分、体術などで名誉挽回してやろうと頑張ったし、魔法が使えるようになった今でも魔法のみに頼ることはなく、体術も極力使用するよう心掛けている。

強い力は人を惑わす。

強大な力を持ち得ながら、力に惑わされ、力に溺れていった者の末路を俺は数多く見てきた。

そのほぼ全てが醜悪で無様な最期を迎えていた。

あの人も……

「ああはなりたかねえからな…」

「煉夜？」

無意識に呟いていたようで、翼は不思議そうにこちらを見やる。

「なんでもね。とりあえず私服に着替えてえ」

「じゃあとりあえず寮に戻るか。」

そして少し歩き玄関に着き、靴を履き替えようと下駄箱を開ける。
すると、そこには一枚の紙が入っていた。

怪訝に思い慎重に手紙を手取る。そして、すぐに罨魔法が施され
ていないかチェックする。
トラップマジック

特に何もなさそうだな…

「なっ、煉夜貴様あ！！俺を差し置いてラブレターだとお！？てめ
え見せやがれ…」って、ああ！？なんか腕がブランブランしてる！？」

翼は俺の手元にある手紙を見て激昂し、掴みかかってこようとする
が、そこでようやく脱臼していることに気付いたようで、何やら騒
いでいる。

…バカは放っておいて、内容は何かね、と。

俺は開封し中身を確認する。そして、思わず笑みを浮かべる。

「翼、先行ってるわ。」

そっぴい残して俺は校舎を後にした。

「ちょ、それより腕が、ああ！！リア充爆発しろおおおお！！」

後ろでなにやら叫んでいるが、気にしたら負けかなって思っている。

＊

「おう、待てや白神。」

「あ？」

ひとまず寮に帰ってくると、入り口で男子寮寮長である三年生、羽柴 道利に声を掛けられる。

身長190オーバーの長身にスラッとしたいるが逞しい体。肩ぐらいで切りそろえられた茶髪に端整だがどこか野性味のある容姿で、性格は剛胆の一言。人当たりが良く、周りからは兄貴と呼ばれ慕われている人物だ。手には何かのファイルを持っている。

「んだ羽柴？」

「聞いたぞ。あの鳳の分家の人間を魔法使わないで潰して、更に女守って魔法蹴り落としたらしいな。とんでもねえことしてんなお前」
一年である俺が呼び捨てしたことも気にせず、豪快に笑う。このよ
うな人となりだから俺もこの人を気に入っている。

「三年にまで広まってんのかよ……」

「授業終わってすぐ桜木が教えに来てくれたぞ。それにしても魔法を使う相手を素手だけで倒すか…今度俺とも戦いあってみるか？」

拳を突き出してニヤリと笑う羽柴。

「パス、めんどい」

「ハハハ、釣れねえな」

手をヒラヒラと振りながら答えると、笑いながら拳を下ろす。断られるとわかっていて冗談で言ったのだらう。

「で、用件はそれだけか？」

「ああ、忘れてた。ほらよ。」

そう言って手に持ってたファイルを投げ渡してくる。

「お前宛てに送られてきた物だ。差出人は不明だがな。」

「ああ、悪いな。」

そう言っただけで受け取り、俺は自室へと戻ることにした。

*

流石名門とだけあってこ、この寮の部屋の設備も素晴らしい。バスルームにキッチン、リビングなどがあり、ホテルのような部屋だ。

自室に入ると、とりあえず制服から私服に着替え、ファイルを開けてみる。そこから出てきたのは数枚の紙だった。その内の一枚を手にとり見てみると、そこには多くの人の顔写真と人の様々な情報が書き記されていた。

「流石は高宮の爺さん。仕事が早い。」

それらの資料は、魔法授業の途中で抜け出した時に、携帯で高宮の爺さんに頼んでいた雷属性の魔法を使える教員を纏めた物だった。俺は自分のベッドに腰を下ろし、その一枚一枚を確認していく。

しばらく確認して、俺はある人物を見つけ、目を留める。

それは村園女史の情報だった。

「やはりいたか…」

村園 真宮

属性 雷 水 風

魔力値 94700

二つ名「雷水天女」

位、七位

備考

性格は、（中略）攻撃魔法、防御魔法ともに優秀で攻撃魔法は雷を、防御魔法は水を、補助魔法は風を中心に使用する。戦闘スタイルは遠距離から魔法で攻める典型的な魔導士タイプ。攻撃は雷属性を中心か…やはり今のところ一番怪しいんだよな…しかし…
そこまで思考した時、部屋のドアが開く。

「あれ、煉夜。何でお前ここにいるん？」

そこには脱臼から治った翼がいた。俺はさり気なく資料をファイルに戻し、布団の下に隠す。

「あ？何でって…」

「ラブレターの主の所へ行っただんじゃ…？」

「…ああ、そりゃお前の早とちりだろうが。あれはラブレターじゃねえよ」

「なんだよ、そうだったのかよ。いやあ、ビビったぜ。彼女いない仲間が1人減るかと思ったからよ」

どこか安心した様子の翼。こいつ顔はいいのだから、黙ってれば彼女の一人や二人ぐらいできるだろうに…

「ん？何だよ。その残念な奴を見るような目は」

「いや、別に。ただ残念な奴だな、と思ってな。」

「まんまだった！？」

などというやり取りをギャーギャーとしている内に夕食の時間になった。

*

「さて、晩飯だがお前はどつする？」

私服に着替えた翼が聞いてくる。

ここの寮は晩飯を学食で食べる奴と自炊する奴がいる。学食は作る手間もないし、安定しておいしい料理を食べれるが、金がかかる。自炊はやりようによっては金が掛からないが、手間が掛かる。ちなみに俺は本来なら自炊派だが、お嬢は学食派らしいので、警護の為学食派になっている。

「俺はちよいと用事があるから先行っててくれ」

「あいよ」

俺の言葉を怪しむわけでもなく、気の抜けた返事をしながら翼はさつさと部屋を出て行く。

よほど腹が減っていたのだろう。

翼が部屋から出て行ったのを確認すると、俺はポケットから手紙を取り出し、内容を再度確認する。

『午後七時に演習場へ一人で来い。お互いの探り合いはもう十分だ。』

手紙にはそう書かれていた。無論、ラブレターなどという甘ったるい物では断じてない。

「果たし状ってやつかね…」

直感的に感じてくる戦闘の気配に思わず笑みが浮かんでくる。別に戦闘狂という訳でもないが、やはり強い奴と殺り合うのはなかなか心躍るモノがある。

現在の時刻6時50分。

「行くか」

誰に言うでもなく呟き、手紙を放り捨て、部屋を出る。

*

演習場へ向かっている道中。俺はふと妙なことに気付く。

人の気配が全く無い…？

演習場は基本的に使用するのは自由で、夜中でも魔法の練習をする奴は少なくない。しかし、今は全く気配が感じられないのだ。まるでこの場所だけが世界から隔絶されているかのように。

人払いなんてチャチな結界魔法じゃねえな…もつと高度な…
そこまで考えた所で演習場に到着する。

演習場に明かりはついておらず、なにも見えないほどに暗い。
奇襲に注意しながらとりあえず演習場の中心に歩いていく。

人の気配は…無いな。

まさかブラフか？しかし、ブラフにこんな高度な結界魔法を使うとは思えないが…まあ、とりあえず

「…腹減ったし何もないなら帰るか」

腹が減っては戦はできぬということわざもあるし、などと言いつつ
ように考えながら戻ろうと足を一歩踏み出す。すると、突如気配が
現れる。

暗くて姿は見えないが、相手も俺の存在を確認している所を見ると、
手紙の差出人かね…？

とりあえず様子を見て待つことに。

さあ、どう出る？

次の瞬間。雷撃の矢が飛来してくる。

雷下級魔法『ボルトアロー』

その雷撃の矢は今日喰らった物より魔力の密度が高く、大きい。

下級ね…小手調べってか？

俺はそれを体を逸らして避ける。一瞬、雷の光により相手のシルエツトだけ確認できた。

相手は体つきから見て女か…

そこまで考えた所で今度は空中に魔力を感じる。降り注ぐは雷の雨。中級雷魔法『ライトニング・レイン』

闇雲に動き回ってもこの雷撃の雨からは逃れられない。更に落ちたところが小さなクレーターになっていく程の威力。一歩間違えれば大怪我じゃすまないだろう。だが、魔力に敏感な俺は空中に感じる魔力から落下地点を把握できる。最小限の動きでそれら全て避す。このことに相手は驚いているようで、動揺している気配を感じ取れる。

よろつと攻めるか。

俺は気配を完全に消しさり、音もなく女（仮）に近付き背後を取る。この暗闇、更に動揺している相手が俺の気配を察知できるはずもなく、俺は手早く相手の両肩を外し、頭を掴み地面に叩きつける。

すぐさま相手が何か唱えようとしてきたので、口に指を突っ込み、それを封じ、拘束する。まあ、軽い脳震盪を起こしてるだろうから、マトモに魔法が使えるとは思えないが念のためだ。

「詰みだな。」

「~~~~~!!」

うん、何言ってるかわかんねえ。とりあえず情報を得るか。資料通りなら間違い無くコイツはストーカーではない。

ストーカーは高宮の爺さんが雇った護衛を返り討ちにした。それらの実力はわからないが、あの高宮財閥のトップが半端な護衛を雇うとはおもえない。そいつらを返り討ちにした割には手応えが無さ過ぎる。

「今から俺の質問に答えてもらう。答えなければ関節を一つずつ外していく。抵抗すれば骨を一つずつ砕いていく。嘘を吐いたら内蔵を一つずつ潰していく。わかったら領け」

相手の背筋をゆっくりとなぞりながら威圧するように声のトーンを下げ、相手に囁く。

相手は壊れた玩具のように何度も頷く。

それを確認して相手の口から指を引き抜く。

「何故俺を狙った…？」

「あ、あなたが呼んだんじゃ…」

ミシィ

「あぐう!!」

「質問に答えろ」

俺は手で相手の脇腹、肋骨を圧迫すると、相手の骨が悲鳴を上げる。

「て、手紙にここに来るように書かれていたから…」

若干怯えつつ、しかし、気丈に相手は答える。

嘘を吐いてるようには見えない…そして聞き覚えのある声だ。だが気にしない。

相手は気付いてないみたいだし。

「その手紙にはなんて？」

「…午後七時に演習場に来い。決着をつけよう」

「…決着？お前と誰が？」

「私は、ある生徒に付きまといっている犯罪者だと思っていたけど…」

…まさか

「…ちなみに、お前の名前は？」

「…村園 真宮」

…なるほどね。そういうことか。俺は村園女史の両肩をはめ直し、拘束を解き、立ち上がらせる。

「手荒なことをして悪かった。村園女史」

「！？君は…」

俺固有の呼び名に俺が誰だか気付いたのだろう。

村園女史は勢いよく振り返る。そして、顔を確認すべく指先から魔法で小さな明かりを灯す。

「白、神…何で…？」

よほど驚いたのか、口をパクパクとしながらなんとか言葉にする。
俺は村園女史の頭から血が垂れているのに若干驚いた。恐らく頭を
地面に叩きつけた時だろう。

「まあ、簡単に言うと、俺は理事長に雇われた高宮のお嬢の護衛な
んだわ。」

「え、え？」

「まあ、簡単に言うと、俺は理事長に雇われた高宮のお嬢の護衛な
んだわ。」

「い、いや。二回言わなくても言葉は理解しているわ。ただ頭が追
い付いていないだけで…」

うん、多分それ多少は俺の責任でもあるわ。

村園女史の血だらけの頭を見ながら心の中で謝しておく。

ようやく冷静になり、俺のことを理解した村園女史と俺は、お互い
のことを話し合ってみた。

俺は村園女史を怪しいと思っていた。魔法授業の時、首の負傷をし
た現場にいなかった村園女史が、俺が冗談を言った時迷わず負傷し
た首をピンポイントで狙ってきて、何故か俺が首を痛めていること
を知っていた。まるで現場を見ていたかのように。俺がお嬢を庇つ
て怪我して、保健室にいった時。何故か村園女史がいて、お嬢を見
るなり慌てていた。当初首のことは、村園女史はお嬢を盗み見して
いたのではないかと疑った。保健室のことは、魔法を使ったことが
バレない為に逃げ込んだのかと考えた。もしくは俺がお嬢を庇った
ことで俺を新たな護衛だと断定し、俺を一目につかず始末しようと
したが、お嬢がいたので諦めたのかとも思った。

しかし、それら全て俺の思い違いだったらしい。

どうやら村園女史は前からお嬢がストーカー被害に遭っていることを知っていて、お嬢を心配して見守っていたりしていて、転入当初から俺を疑っていたらしい。俺をあえてお嬢の隣に座らせたのは、俺がお嬢に不審なことをしてボ口を出さないか監視する為。首のことは、お嬢ではなくお嬢に近付いた俺を監視していた為。保健室のことは、俺に共謀者（翼と読んでいたらしい）がいて、ワザと少し怪我をする程度に抑えられた魔法からお嬢から庇い、お嬢と近付いたではないかと危惧した。そこへ俺が保健室に向かったと連絡を受けたので、そこで化けの皮を剥がそうと待機していたとのこと。ちなみに出て行つたと見せかけて実は保健室前で待機していたが、舞が来たので退散したらしい。

見方によつては生徒想いのいい先生だが、俺からしたら…

「うん、どれだけ疑われてたんだよ俺…」

「し、仕方ないでしょう。妙な時期に転校してくるし、悪人面だし…」

「人を見かけで判断すんじゃないよ。ガチで悪の道に走るぞド畜生」
俺ってそんなに悪人面なのか…？

「まあ、それはそれとしてえ、ちょっとこっちきて白神君」

そう言つて妙に明るい声を出しながら、俺の腕を掴んで自分の近くに引き寄せる村園女史。

…嫌な予感が……

そう思つた瞬間、自分の下から殺気を感じる。

「レディの」

俺の顎に全身を使ったアッパーが叩き込まれる。

「顔に」

跳ね上がる俺の顔面を両手で掴み、一気に引き寄せられ、そこに膝を叩き込まれる。

「何してくれてんだ」

後方によるめく俺に更に一回転して勢いの付けた肘を鳩尾に叩き込まれる

「てめえはあああ！！！」

体を「く」の字に曲げる俺にトドメとばかりに鋭いハイキックを叩き込む村園女史。それをモロ側頭部に受けるが、倒れることなく踏みとどまる。

常人なら間違いなく重体入院コースまっしぐらであろう、全てに己の体重を乗せた攻撃のフルコース。堪能してしまいました…

「ふう、これでチャラにしてあげるわ」

「…左様ですか」

スッキリした様子の村園女史。多少理不尽に感じながらも実際は大して効いてないので黙っておくことにする。

「それにしても、あの手紙のせいでもうお腹ペコペコよ。早く戻り

ましょう。」

「そうだな。早く帰って夕食作ら…」

そこまで言いかけて嫌な予感が頭をよぎる。

「…一つ聞きたいんだがいいか？」

「何かしら？」

「アンタは俺が来る前もお嬢をストーカーの如く見守ってたんだよね？お嬢が危険な目にあわないように」

「言い方が気になるけど…そうね。鳳が傍にいないときは大体見守っていたわね」

「じゃあ、お嬢の親友の鳳は食堂派か自炊派かわかるか？」

「確か…自炊派ね。一つ上のお姉さんと一緒に食べてるらしいわ。どうかしたの？藪から棒に」

村園女史は不思議そうにこちらを見ているが、俺はあることで頭が一杯になっていた。

…これはヤバいかもしれない…

「じゃあ、最後に。アンタは食堂派か自炊派…」

「私は食堂派だけど…」

その答えを聞いた瞬間、俺は全力で走り出した。

「ちょ、どうしたのよいきなり!？」

背後で村園女史が何か言っているが、それどころではない。

俺は演習場の出口を通ろうとするが、目の前には何も無いのに何かぶつかる。再度通ろうとするが、まるでそこに見えない壁があるかのように…否、まるでそこから先が隔絶されているかのように通れない。

この結界魔法は…!？

「クソッ! やられた!!」

憎々しげに言葉を吐き捨て、目の前の通れない空間を思いつ切り殴る。

「どうしたのよ。いきなり走り出して。」

後ろから村園女史が追いついてきた。

「今は恐らく食事が終わるぐらいの時間。護衛役である俺とアンタはここにいて、お嬢は食堂で食事、鳳は寮で食事…お嬢にはまともな友達がいない。食堂から寮までは多少の距離がある…」

「何を言って…」

俺の言葉の意味することを理解していない村園女史に、俺は答えを突きつける。

「今現在、お嬢を守る存在がない…」

「!？」

村園女史から動揺の気配が伝わってくる。

「な…なら早く戻らないと!!」

慌てた様子で演習場から出ようとするが、俺と同じように見えない壁にぶつかっただかのように、弾かれる。

「な、何よこれ…!？」

「闇の上級魔法…『プリズン・アビス』」

プリズン・アビス
深淵の牢獄

属性、闇

結界魔法

結界を張った空間を一定時間世界から隔絶し、相手を暗闇の空間に封殺する絶対堅固の結界。外側からこちら側に干渉することはできず、空間の範囲調節も可能。しかし、浪費する魔力は大きく、有効時間は短いというデメリットを持ち、更に発動までの時間が長いため、戦闘中に使用するのは不向きな魔法。

…だが、相手を足止めするにはもってこいの魔法だ。しかも、人間は暗闇ですつと生きていられるようには造られていない。暗闇の閉

鎖的空間にしばらくいるだけで精神は衰弱する。そんな状態でたえ出れたとしても、マトモにストーカーと殺り合えるとは思えない…本来なら引つ掛からないであろう誘いを、お互いがお互いを疑っている為乗ってしまい、護衛役を二人とも足止め、あわよくば共倒れを狙う。俺の纏いもただの結界ならともかく、隔絶されては意味を為さない。そして、普通なら狙わないであろう食事時を狙うとは…やってくれたな…!!

「チィ！もつと早く結界の意味に気付いていれば…!!」

てつきり暗闇の中から俺をなぶり殺しにするのかと思っただけ…

「それよりどうするのよ!?このままじゃあ高宮は…」

焦りが徐々に積もっていく。このままじゃあ依頼が失敗に終わっちゃう。それも最悪な形で…

クソっ!!! 一体どうすれば…

……なんてな。

8話（前書き）

指摘があつたので早速修正しました。魔法説明は後書きに。少し戦闘入ります。戦闘中は三人称になりますが、気にしないでください。

途中までノリノリだったんですけど、終盤はやつつけ感が……感想や要望、指摘など、どしどし送ってください！

8話

さて、状況は非常に芳しくないな…まさかこの俺がこんなトラップに引っ掛かるなぞ…

「虚仮にしゃがて…絶対え愉快的オブジェにしてやる…」

「ブツブツ言っていないでどうするのよ!?このままじゃあ高宮が…」

先程から無駄だとわかりながらも、出口に魔法やら拳やらを叩き込んでいる村園女史が、慌てた様子で怒鳴ってくる。

ふむ、やはり闇の上級魔法相手じゃあ破るのは厳しいようだな。…しゃあねえな。こんな任務で使いたくはなかったが、背に腹は代えられないからな…その前に、と。

「村園女史。俺にいい案があるんだが。」

俺は村園女史に自信満々に提案する。

「いい案!?!」

予想通り食いついてくる

「ああ、その案はな…」

「もったいぶらなくていいから早く言いなさい!?!」

激昂しながらも、俺の案をしっかりと聞くために無防備に近付いて来る村園女史。

…どういつもこいつも警戒心薄いねえ。この国の連中はみんなそんなのかね？まあ、いいや。

胸中で呆れながら次の瞬間。俺は村園女史の首筋に手刀を叩き込み、意識を刈り取る。

「俺が魔法を使う」

意識を失い倒れ込む彼女を支えながら、聞こえてはいないだろうが、俺の案を囁く。

正直、こんな錯乱状態の彼女を連れて行っても大した戦力にもならない、むしろ足手纏いになるだろうと判断した結果の措置だ。

俺は彼女を壁際に適当に放り投げておく。別に俺フェミニストでもねえし。まあ、それはいいとして、さっさとやろうかね。

ストーリーカーの野郎に教えてやるよ…誰に喧嘩を売ったのかをな…

俺は薄い笑みを浮かべながら、まずは己に掛けていたリミッターを解除した。

*

「うちそうさまでした」

食堂にて、私は「ルミナスレディースセット」を食べ終え、両手を合わせて礼をする。舞は咲夜さんと夕食で、いつも一緒に食事をしている村園先生がいないので、久しぶりの一人での食事だ。舞に食事を誘われたが、流石に姉妹水入らずの場を邪魔したくはなかった。ので、遠慮させてもらった。

水を一口飲み、一息つく。何となく周りを見回してみると、皆が皆というわけでもないが、大半が友人やら恋人やらと食事や語らいを楽しんでいる。

羨ましいですね…私も友人と食事を楽しんでみたいです。

そこまで考えた所で、ふとある人物が脳裏に浮かんでくる。白髪で人を寄せ付けない、それでいて人を惹きつける雰囲気を持つ人。舞以外で私を「高宮龍之介の孫」ではなく「ただの優奈」として接してくれた人。

そうですね、せっかくなら煉と一緒に食べてみたいですね。彼は見た目こそ少々怖いですが、実際は優しく、いい人物です。あの難しい舞も認めていましたからね。どうせなら舞と煉と私の三人で食べるのも楽しそうですね。きつと楽しい食事になると思います。

そんなことを考えながら、無意識の内に彼の姿を探す。まだ彼を警戒していた頃に、彼がこの食堂を利用しているのは知っているので、今日もまた来ているだろうと思っていた。しかし、いくら探せども目当ての白髪は見当たらない。世界屈指の名門であるこの学院には、海外からの留学生も多く、様々な髪の色的人物がいる。しかし白髪は煉夜だけだ。故に探し出すのは簡単だとおもっていたが…

いませんね…もう帰ってしまったのでしょうか？
まさか、ストーカーに…！？

嫌な予感がし、視線を彷徨わせていると見覚えのある浅黒い肌をした金髪の男を見かける。いつも煉と一緒にいる男子だ。私は席を立ち、彼のことを聞くべく浅黒金髪さんへ近付く。

「すみません」

「ん、うおわ！高宮ちゃん！なになに、俺に何かよう？」

「れ…白神は？」

彼のテンションの高さに若干引きながらも、煉のことを聞く。
人前で彼をあだ名で呼ぶのは何故だか妙な気恥ずかしさがあるので、
前のように呼ぶことに。

「煉夜？煉夜ならなんか用事があるつつってどっか行ったけど。」

「用事、ですか？」

まさかストーカー関係…！？
嫌な予感が益々積もる

「ああ。俺の読みだと、あいつは手紙の子に会いにいったんじゃないかと睨んでいる。クッソゝあのリア充があ…！」

「…手紙の子とは？」

「今日煉夜の下駄箱の中にラブレターと思わしき手紙が入ってたんだ。本人は否定してたけど、あいつそれ見て珍しく嬉しそうに笑ってたからな。ありや絶対ラブレターだ！」

「…そうですか」

まだ浅黒金髪さんが何か喚んでいるが、私はそれを無視して他のことを考えていた。

せっかく人が心配しているのに、当の本人はラブレターを貰って喜んでいるのですか、そうですか…！

彼がラブレターを貰い、その差出人の女の子に会いに行ったと聞いて、何故か胸の中がモヤモヤとし、同時にイライラする。そこでハッとする。

どうしたんでしょうか、私は…本来なら彼に危害が無いことを喜ぶべきなんだろうが、この不快な感じはなんなんだろう？突然自分の内に湧き起こった感情。それに私は戸惑う。

「まあ、それはいいとして、煉夜に用事があるなら俺から言っておくけど？」

「あ、用事というまでのことでもありませんので…」

戸惑っていた所に突然尋ねられたので、表面上は冷静に、内心は慌てて答える。

「そうなんだ。…げっ！もうこんな時間かよ！？それじゃあ俺は見たいテレビがあるからこれで！」

そう言うのと浅黒金髪さんは慌てて食堂から出ていった。

…私も戻るとしましょう。

私は自分のテーブルまで戻り水を一口飲み、食堂を後にした。

*

外はすっかり暗くなっており、外灯の光もどこか心許ない感じがする。

食堂から女子寮までには少しばかり数分程度だが距離がある。

前までは村園先生と一緒に帰っていたから特に気にしなかったが、この暗闇の道は少々不気味に思う。

…少し急ぎましょう

少しだけ歩く速度を上げる。そこであることに気付く。

人がいない？

自分以外周りに人の気配がないのだ。普段はもつと食堂帰りの女子生徒がいるはずなのに。まるで人払いの魔法を使ったかのような…

「！」

そこまで考え、自分の思い過ごしを願いながら更に速度を上げる。嫌な予感が胸をよぎる

コツッ

不意に足音が聞こえてくる。

背筋に悪寒が走る。恐る恐る振り返ると、そこには仮面を被った全身黒づくめの男が立っていた。

「貴方は？」

「貴様が知ることなぞ何もない…」

恐怖心を胸にしまい込み、毅然とした態度で尋ねるが、相手は取り合わずこたりに近づいてくる。

私は腕を突き出し、魔力を込め威嚇する。

「それ以上近付いたら魔法を放ちます…！」

「抵抗せぬ方が身のためだ…」

しかし男は構わずこちらに近づき、手を振り上げる。そして、その手に魔力が収束していく。

やるしか、ないのですか…

優奈は覚悟を決め、両者呪文を唱える。

『罪深き者よ、己が業に呑み込まれよ…』

『翔よ雷、敵を貫け…』

そして魔法が完成する

『プリズム・ジャッジ』

『ライトニング・スピア』

男が手を鋭く振り下ろすと、槍の形をした雷が唸りを上げながら優奈に向かって直進する。対する優奈の目の前には巨大な光の鏡が出現する。雷の槍が鏡に直撃した瞬間、雷の槍は威力を増して進行方向を反転する。

「ぬう…！」

自分が放った筈の雷の槍が、己を貫かんと向かってくるのを見て男は呻きながら横に避ける。

雷の槍は男が先程までいた場所に突き刺さると、バチバチイ！と音を立て、辺りに電気を撒き散らしながら爆発する。男はその爆発に巻き込まれないように距離を取るが、不意に足が地面に沈

む。

「何!？」

男は地面を見てみると、土を踏みしめていた筈が、今は水に足を捕られていた。

「『ウォーター・フル』貴方が避ける方向は予想がついていたので、仕掛けておきました。私をあまり舐めないでください」

初めての危険が伴った実践の為か、態度は毅然としているが、声と体は恐怖により震えている。

男はそんな状態の彼女が、自分の行動を先読みし、罠を仕掛けていたことに仮面の内で驚嘆していた。だが、それを表には出さない。

「…足を封じた程度で俺に勝ったと思うなよ」

「思っていないません。だから追い討ちを掛けさせてもらいます」

男はなんとか水から出ようとしますが、ズルズルと足が更に沈んでいく。その間に優奈は呪文を唱える。

『水よ…その姿を変えよ……』

呪文の前口上。それは属性を変化させる為の言霊。

「派生魔法か…!」

『極寒の墓にて己が無力を知れ…フリーズ・グレイブ』

「ぐっ…!!」

瞬間、男の周りの空気中の水分が凍り、男は生み出された冰山の中に取り込まれる。

念の為冰山に近づき、様子を見てみる。男はピクリとも動かない。

「ハア、ハア、やり、ました…?」

確認し終わると、極度の緊張から解かれ、思い出したかのように冷や汗が吹き出て、荒い息を吐く。そして、同時に安堵する。

なんとかかなりましたか…とりあえず誰かに連絡を…そういえば携帯は使えるのでしょうか?

などと考えながら携帯を取り出し、いざという時の為に寮に向かって歩き出す。

「甘いな…」

「え…?」

突然背後から聞こえてくる声。その声が聞こえると同時に思考がフリーズする。

恐る恐る振り返ってみると、氷の中の男は笑っていた。仮面を付けて表情がわからない筈なのに、何故かそう感じた。次の瞬間、男の体からバチバチと音がして、電気エネルギーが解放される。

放たれた電気エネルギーにより冰山を容易く溶け、蒸発する。

「嘘……」

「一瞬意識が飛んだが、残念だったな。貴様が俺を封じ込んだ後、すぐに攻撃魔法でも放っていただければ俺が負けていただろう…」

呆然とする優奈に対し、男は悠然とした足取りで近付いてくる。

優奈は我に返ると慌てて男と距離を取り、再び手を突き出し魔力を込める。

その様を見て男はゆっくりと手を突き出しながら、仮面の下に笑みを浮かべる。

「どうやら俺はお前を侮っていたようだ。なるべく穏便に済ませようと思っていたが仕方ない…少し本気でいかせてもらおうでしょう」瞬間、男から強烈な殺気と威圧感が放たれる。

突如浴びせられた明確な殺意。それは今まで何不自由なく暮らしてきた少女に、かつてないほどの恐怖を与えるには十分だった。

足が竦む、背筋が粟立つ、呼吸が上手くできない。

「多少傷ついても文句は言うなよ…」

顔から血の気が引き、恐怖に体を震わす少女に向かって男は躊躇いなく魔法を放つ。

それを防衛本能が働いたのか、優奈も瞬時に魔法を展開する。

『罪深き者よ、己が業に呑み込まれよ…』

『翔よ雷、敵を貫け…』

放たれるは雷の槍。

迎えるは光の鏡

プリズム・ジャッジとライティング・スピアー。先程と同じ魔法同

士がぶつかる。しかし先程とは違い、雷の槍が光の鏡に直撃した瞬間、光の槍はいとも簡単に貫かれる。

しかし雷の槍はプリズム・ジャッジの反射能力の影響を受け、僅かに軌道がそれ、優奈には直撃しない

「ふむ、少しばかり弱かったか…」

「なん、で…？」

自分の魔法があっさり貫かれたのを見て優奈は愕然とする。

「その魔力、使用属性、技量。貴様が天才と呼べる程の逸材であることは認めよう。だが意志力までは備わってなかったようだな」

魔法の威力は魔力と意志力の掛け算だ。同じぐらいの魔力を込められた二つの魔法。『貫通』の意志を込めた男の雷の槍は、恐怖によりマトモな意志が込められていない光の鏡を容易く貫いた。これにより優劣がついてしまった。

男は再び魔力を手に収束する。優奈は後退りをし、そこで、自分が携帯を持っていることに気づき、何とか誰かに連絡できないか考える。

「助けを呼ぼうとしても無駄だ。厄介な2人は今頃潰し合っているだろうし、この空間は人払いよりも高度な魔法により隠蔽されている。そうそうバレることも侵入されることもないだろう。俺の魔力残量から考えて長くは保たないだろうが、何、それまでには済む…」

しかし思考を読まれ打つ手が無くなり、胸中は絶望に塗りつぶされていく。

男はそんな優奈の様子を見て勝利を確信し、腕を振り上げ魔力を溜

める。

「さて、残念ながら終わりだ。何、殺しはしないから安心するがい……少し気を失ってもらうだけだ……」

優奈はただ男の腕に集まっていく魔力を呆然と見ていることしかできない。恐怖により体はマトモに動かず、思考も上手くできない。まさに絶体絶命。その時突然脳裏に浮かんだのは、一度自分を守ってくれた白髪の男
そこで男は魔法を放つ。

「終わりだ！」

「……煉！！！！」

彼ならもしかしたらと淡い希望を乗せて、咄嗟に信頼の証を叫び、目を閉じる。

迫り来る魔法

駄目かと諦めかけた。

その瞬間

その願いは見事に叶う。

「呼んだか、お嬢？」

聞こえる筈のないのんびりとした声が自分の目の前から聞こえてきた。

8話（後書き）

魔法説明

プリズム・ジャッジ

属性、光

位、中級

防御魔法

目の前に光の鏡を出現させ、直撃した相手の攻撃を倍の威力にして跳ね返す

ウォーター・フル

属性、水

位、下級

罨魔法

相手の足を水を絡め沈める罨魔法。もがけばもがくほど足が沈んでいく。

フリーズ・グレイブ

属性、氷

位、中級

拘束魔法

空気中の水分を凍らせ、相手を封じ込める水の派生魔法。

9 話（前書き）

今回は視点がコロコロと変わります。戦闘は基本的に三人称にしようと考えているのですが、今回はキャラの心情を中心に書きたかったので、戦闘は激しく手抜きです。

よろっと（そろそろ）ストーリーカー編もクライマックスに突入です。無い頭と文才で頑張って書いたので、鼻で笑いながら読んでください

9 話

「煉……!!!!」

「呼んだか、お嬢？」

俺は空間から出ると、とりあえず飛来してきた雷の槍を拳で叩き落とし、お嬢に返事をする。

「……え……!!?」

お嬢は驚愕したように目を見開き、こちらを見る。

「……煉、ですよね……?」

「おいおい、呼んどいてそのリアクション何？」

「え、いや、だって、その、というかどうやって……?」

要領の得ない言葉を謔言のように呟くお嬢。どうやら突然の出来事に混乱しているようだ。

俺はため息を一つ吐き、お嬢を落ち着かせる為に、なんとなくお嬢の目の前で柏手……いわゆる猫騙しを試してみる。

パンッ!

「キャッ! え、え……!!?」

おお、なかなか可愛い反応するじゃないか。……軽くパニックに陥

つてる気がしないでもないが…

「ああ…めんどい」

何やらオロオロとしているお嬢の額に指を当て、目を真っ直ぐ見据える。そして、意志を込めた言葉を掛ける。

「落ち着け」

言霊と瞳力による軽い暗示。それにより、お嬢は落ち着きを取り戻す。

「煉…すみません。お見苦しい所を見せてしまいました…」

申し訳なさそうに頭を下げるお嬢。

「わかったからさっさと下がれ。邪魔だ」

無論、それに対して優しい言葉を掛けてやる俺ではない。半分以上俺の責任のような気がしないでもないが、それでも優しい言葉は掛けない。それが俺クオリティ

「な、貴方が戦うと言うのですか！？確かに二度も助けて貰ったことには感謝します。しかし、これは私の問題です。貴方を危険に曝すわけには…」

俺の言葉に反発するお嬢。それを聞いて俺は溜め息を吐く

「あんた、案外鈍いのな」

「え？」

訳が分からなそうな表示をするお嬢。　　ったく。ここまでくれば普通
わからないかね？

この状況なら正体を明かしても別段問題ないだろう。

「俺、あんたの護衛」

「…ハイ？」

ふむ、いきなりだと流石にすぐには理解できないか。　　なら噛み砕い
て説明しようか。

「俺はあんたの爺さん…高宮龍之介があんたを守るために雇った存
在。いわゆるボディーガードだ」

それを聞いて呆けた顔をするお嬢。

おお、普段凜としている分、こういった緩んだ顔はなかなかこそ
るモノが…

などと考えているとお嬢は頭を振り、心配そうに俺を見る。

「し、しかし、例えそうでも貴方は魔法が…」

その瞳は心配や不安などの様々な感情に揺れていた。　　本当なら言
いたいことは沢山あるんだろうが、状況が状況だけに自重してるの
だろう…

「ああ、アレ嘘」

「…嘘、ですか…？」

「当たり前だろ。どこにいるかもわからん相手に自分の手札見せる訳無いだろうが」

まあ、もう既に相手に情報提供しちまつてるがな。この場に魔法使つて来ちまつたし

「貴様…どうやって…」

そこに、何やら憎々しげな声が聞こえてきたので、そちらに顔を向ける。

そこには全身黒ずくめの仮面の男が立っていた。表情こそ仮面でわからないが、僅かだが動揺の気配を感じ取れ、覚えのある魔力残滓を感じる。

つまり

「ああ、お前が犯人ね…お嬢、下がってろ」

お嬢に一言告げるとゆっくりと男との距離を縮めていく。背後でお嬢が何やら言っているが、勿論無視。

さて、お手並み拝見だな

「いや、貴様がどうやってあの空間を出たかなどはどうでもいい。俺のすることは変わらない。姿を見られたなら邪魔者は排除し、高宮優奈を頂く」

そう言う男は後方に大きく跳躍し、詠唱を唱え始める。

「いけません！『風の…』」

「手え出すなお嬢」

恐らく男の魔法を妨害する為の魔法を放とうとしていたのだろうが、俺はそれを遮る。

だって相手がどんな出方をするか楽しみだし…

「しかし！」

「あんたとあいつじゃあ技量、意志力、そして覚悟が違う。無駄に手え出してもまず効かないだろうし、俺からしたら寧ろ邪魔なんだよ」

俺の辛辣な言葉にお嬢が少なからずショックを受けているのが背後から伝わってくる。

そこで俺はお嬢を安心させるように笑う。

「何、安心しろ。あんたは俺が守ってやる。だから後ろで高みの見物でも決め込んで。尤も、俺が信用できないなら好きにすればいいさ」

そう言ってチラリとお嬢に視線を移す。お嬢は顔を赤くして少し迷ったような仕草をした後、俺の目を見て静かに頷き、後ろに下がった。

信用してくれるのか。なら答えてやんねえとなあ。

俺は腕をダラリと下げ体を半身にし、構える。

そして男の魔法が完成する

『影よ目覚めよ、我が同志となれ…シャドーズ・ファミリア』

発動と同時に、男の周りの影が実体として沸き起こり、人の形を成す。その数6体

「闇系統の分身魔法か…」

「まだまだ『煌めく雷光、数多の敵を打ち砕け…スパーク・ランサー』

」

更に6本の雷の槍が男の目の前に出現し、その雷の槍を影の分身が1人1本ずつ装備する。

本来なら敵に射出する魔法を分身に装備させるか…なかなかの応用力だな

煉夜が内心で男の技量に感心していると、雷槍を携えた影が一斉に突進してくる。

前方から影の一人が雷槍を突き出してくるのを、煉夜は前にダツキングしながら踏み込むことで雷槍を避け、影の腹部に拳を叩き込む。影は後方に勢い良く吹き飛ぶが、すぐさま体勢を立て直し再び突進してくる。

一撃では消えないか…どれだけの意志をつぎ込んだのやら…

本来分身魔法の分身は一撃攻撃を入れれば消えるのだが、この影の

分身は恐らく強力な『存在』の意志により、消えにくくなっているのだろ。う。が、脅威とを感じる程でもねえな…

影が瞬時に煉夜を取り囲む。

「あらら、囲まれちゃった…これは少しヤバいかもねえ」

言葉とは裏腹に余裕そうな笑みを浮かべながら煉夜は左手の指を軽く曲げパキツと音を鳴らす

「まあいいか。精々、俺を楽しませてくれよ？」

薄く嗤いながらの言葉を皮切りに、影は一斉に煉夜に襲いかかった

*

「すごい…」

目の前で繰り広げられている光景に私は目を奪われる。

最初は真剣な眼差しで信用しろ、守ってやると言われ、思わず頷いてしまったことを少し後悔してしまった。確かに煉のことは信用しているし、それなりの実力があることは魔法授業で知っている。しかし、あの仮面の男は間違い無く私や舞以上の実力を誇るプロだ。いくら烏丸を楽に倒していたとしても、流石に敵わないのではないのか？もしかしたら私の短慮のせいで彼を死地にやってしまったのではないか？そう思っていた。しかし、その心配は全くの杞憂で終わってしまった。

彼は様々な方向からくる攻撃全てを時には避け、時には受け流し、時には利用する。6人の猛攻を緩やかに、流麗に、流れるように、一部の隙も無く攻撃を無効化するその様は、典雅な舞を思わせる。そして更には男が私に向かって放つ魔法もこういう原理かは知らないが、素手で全て叩き落としている。

彼は未だ影を1人も倒してはいないが、素人目に見てもわかるほどに、彼は6人、本体を入れて7人の攻撃を魔法も使わずに簡単にあしらっていた。

「こんなもんか…じゃ、攻勢に移るかね」

そう呟くと、彼の手が一瞬ブレ、背後から襲いかかってきた影の頭部が弾け飛ぶ。

更に左右から2人の影が雷槍を突き出してくるのを、彼は一步後ろに下がって避け、左右の影の腕を掴み、引き寄せる。左右の影は勢いあまり、お互いに突き出していた雷槍に貫かれ消滅する。

男が私に向かって再び雷の魔法を放つも、彼は無造作に向かつてきっていた影の1人の頭を鷲掴みにすると、空を翔る雷に向かって投げつける。放った影は寸分も狂わずに雷に直撃し、魔法と影は両方とも消滅する。

そこで男が何かを取り出し長い詠唱をしているのに気がつく。一瞬、妨害でもしようかと考えるも、不意に戦闘中の彼と目が合った。彼は優しく微笑むだけだった。

そして私は思い直す。そう、私は彼を信じると決めたのだから最後まで彼を信じよう。あの誰よりも頼りになる背中を…

何なんだあのイレギュラーは…！？

目の前で行われている戦闘を見ながら男は憎々しげに齒噛みする。

侮っていた訳ではない。

模擬戦の時僅かに見せた奴の体術や、魔法を生身で打ち砕く謎の術？を考慮した上で、物量で攻めようと分身魔法を使用した。更に確実に仕留める為に影に雷槍を装備させた。

今まで1人相手にこの魔法を使用し、破られたことは数えるぐらいにしか無かったから、経験から言っても余程のイレギュラーでない限りこれで充分だろうと思っていた。

その見通しは甘かった。

奴はその余程のイレギュラーであった。

影6人からの攻撃を奴は容易く凌いでいるのだ。それも余裕そうに隙を作るため、演習場の時と同じように高宮優奈に向かって魔法を放つも、奴の腕が一瞬ブレたかと思った瞬間に、魔法が叩き落とされていた。2つの魔法を維持した状態で魔法を放つのは容易ではないので、どうしても威力の低い下級魔法になってしまう。しかし、例えばどれだけ威力が低くても、影を6人相手しながら高宮優奈を守ることがどれだけ困難なことか…それを容易くやってのける奴がどれだけ異常か…

そして遂に奴が攻勢に出て、影が次々に消されていく。隙が出来たと、高宮優奈に魔法を放ってみるも、奴は影を魔法に投げつけ防ぐという荒技をやったのけた。

しかも、『分身を破壊した相手の動きを鈍らせる』というシャドー

ズ・ファミリアの追加効果も発動されている気配はない。これはマズい事態だ。このままでは高宮優奈を連れ去ることができない。そうなれば我らの計画に支障が出てしまう。

「…背に腹は代えられぬ、か……」

男はそう呟くと、懷から1つの蒼い宝石を取り出し、詠唱を始めた。

*

「ホイこれでラスト」

影の腹部を足で薙払い消滅させ、最後の1人の頭を鷲掴みにし、地面に叩きつけると、影は煙のように消えていった。

なかなか面白い戦闘だった。

分身に魔法を装備をさせる発想や、それらを維持したまま魔法を使うあの男の精神力の高さ。

これでもっと火力があれば流石に魔法を使わなければならない程に追い込まれていただろうが、それは最早才能の話になってくる。精神力や意志力は鍛えればなんとかなるが、火力…つまり魔力だけは鍛えて上がるものではない。あの男もそこそこ魔力は高いが、舞やお嬢とは比べ物にならないほど低いし、更に燃費の悪い上級魔法であるプリズン・アビス使用後ともあって、魔力が少なくなっていたのも原因の一つだろう。

尤も、あの男が全快状態だろうと負ける気は微塵もしないがな。それよりも戦闘中チラッと見たが、あの男、何やら面白そうなことをしているな…

「さて、何が出るのやら…」

そこで、ふとあの男が何かを持っていることに気がつく。

「…あゝ、ヤベエかも……」

それには強い魔力隠蔽が施されていて気がつかなかったが、強大な魔力が秘められている。そして、その宝石には見覚えがあった。

「召喚石……」

召喚石とは、魔物と契約を結び、儀式魔法によりその魔物を召喚する上位魔法。『召喚魔法』を擬似的に行う為の道具だ。

本来召喚魔法とは、魔物に己を認めさせ、直接契約を結んだ者にしか発動できないのだが、ある特殊な石に契約者の身体の一部（髪や爪、血など）を埋め込むことによりできるのが召喚石だ。

この召喚石を使用すれば対価を支払うことにより、一時的に契約者の召喚獣を使役できるようになる。

尤も、その召喚獣の位によっては理不尽とも言える程の対価を払わせられる危険性もあるので、使う奴はあまりいないが……

アレに何が潜んでいるかはわからんが、召喚石を使うことは相
当な覚悟をしていると見える…面白い!!

「お嬢、何か面白^{ヤバ}そうなのがくるからこの場から逃げるか思いつき
り離れるかどっちかしとけ!!」

口元に笑みを張り付けながら後方に声を飛ばす。
お嬢の気配が遠退いていくのを察知しながら、肌にビリビリと感じ

る強大な圧力。これは大物の予感がするねえ

『さあ、我らが盟主より授けられし眷属よ！我が身を喰らいてその身を顕現せよ！』

男が詠唱した瞬間、対価となったのだろう男の右腕が肩口から消失する。それと同時に宝石から眩い光が放たれ、宝石が砕け散る。

そして、姿を現す召喚獣。

全長は5メートル弱の巨体。雷の色を表したかのような眩い金色の翼と体躯。その存在の周りは強烈な電気により、空気がバチバチと帯電しており、薄暗いその空間とその身を煌びやかに照らしている。火が燃え滾っているかのような鋭い双眸に、抉れたような巨大な嘴、逆立った毛。そして額には裂かれたかのような大きな傷痕。

それは驚の姿をした、ある地域では神鳥とも謳われている霊鳥。

その名を雷鳥

『サンダーバード』

「キヤオオオオオオ！！」

天を衝く咆哮。空気がビリビリと震え、辺り一面が轟音と共に一斉に火花を散らしスパークする。

お嬢はその圧倒的存在感と威圧感に当てられ気絶し、召喚した男も消滅した右腕の肩口を押さえながら、その神々しい姿に魅入ったように呆然としている。

俺はその存在感にビビる訳でも、その姿に魅入る訳でもなく、ただ

ある一点を見ていた。

それはサンダーバードの額に付いているモノ

「あの傷は……」

その姿とその傷には見覚えがあつた。

*

『煉夜、煉夜！私、あの鳥召喚獣にしたい！』

『……また随分と面倒そうな……』

『私と貴方なら簡単なことでしょ』

『ええ、俺も参戦確定かよ……』

『いいでしょ、さつさとアレを屈服させてご飯でも食べに行きましょう？』

『まったく、言い出したら聞かねえんだから……んじゃ、俺はお前のサボートに回るからお前はさつさとあの鳥叩き墜としてこい。腹減ってるから迅速にな』

『ラジャー』

*

一瞬の追憶。そして完全に思い出す。

この鳥はかつて俺が世界を回っていた頃に、とある戦友が武をもつ

てして屈服させた存在。そして、額の傷はその証…

と、なると。コイツはアイツの召喚獣か…そしてあの男、さっき『我らが盟主より授けられし』とか言ってたな…

「そっぴやアイツ、昔何か組織作りたひとか言つてたような…つまり、そっぴうことか？」

…まあ、細かい話はコイツを殺つた後あの男から聞き出せばいいか。そっぴ自己完結すると、俺は額を指で叩きながら挑発するようになつた。く笑つ。

「…さあて、今度は俺がその額に傷を付けて屈服させてやるよ。覚悟しろよ？」

その挑発を理解したのか、サンダーバードは雷鳴を引き連れて空へと舞い上がり、俺を睨み付けてくる。

俺はその滾つた目を真つ向から受け止めながら、一気に魔力を練り上げた。

9 話（後書き）

魔法紹介

シャドーズ・ファミリア

属性、闇

位、上級

分身魔法

影に己の魔力と意志を注ぎ込み、影を使役して戦う魔法。分身魔法は属性により付属効果が異なり、闇属性の場合は「分身を消した相手の動きを鈍くする」
生み出した分身は術者の身体能力に能力が反映され、自動制御、遠隔操作、切り替え可能

スパーク・ランサー

属性、雷

位、中級

直進型射撃魔法

本来は無数の雷の槍を生み出し、相手に一斉射出する魔法なのだが、仮面さん（仮）はこれを装備魔法に使うという応用をしていた。

さて、一応補足説明ですが、今まで出していませんでしたが、この世界には魔獣が存在します。

元々の世界設定は現代とファンタジーを融合した感じです。FF？、？、？のどれかを想像すれば概ねイメージできるかと…

ストーリー編が終わったら詳しい設定を公開しようと思っています。

次回、遂に煉夜が本格的に魔法を使用！…する予定が無きにしも非

す。

10話（前書き）

戦闘のみを三人称にしようか…

話全てを三人称にしようか…

それとも全て一人称にしようか…

次で多分ストーリーカー編ラストです。

今回漸く主人公が魔法を使います。

魔法以外にも妙な技を使います。

後書きの魔法説明が長いです。

10話

「キヤオオオオオ！」

サンダーバードが空中から煉夜目掛けて突進してくる。それを煉夜は横に大きく跳ぶことで回避するが、サンダーバードが通過した直後、その周囲の空気が一瞬でスパークし、煉夜はその身を焼かれる。

「つと。纏いの密度上げてなければ死んでたかもな…」

しかし、陽炎のように煉夜の体から立ち上っている灰銀色の光により、彼の体には火傷どころか焼け跡一つない。

纏いは本来、体の内側から無意識に魔力障壁を張り、魔力抵抗力を高めるというモノなのだが、ある一定以上密度を上げると、魔力が体外にまで滲み出し、その魔力が更に煉夜を守る鎧となる。要するに防弾服の上から更に鎧を纏ったような状態になったのだ。

とはいったものの…突進の副産物にすぎない雷でこの威力…下手をすれば塵すら残らないかもしれないねえな…

サンダーバードが通過した後の地面は抉られたかのように消滅し、辺りの空気は未だにバチバチと帯電している。

突進の余波でこの威力だ。恐らく掠っただけでも纏いなぞ何の意味もなさずに消し炭となってしまうだろう。

一撃でも直撃すれば昇天か！ハッ！そんな戦闘は慣れているんだよ！

空中で旋回した後、再度突進してくるサンダーバードに対し回避行動を取りながら、張り詰めた緊張感と背筋の粟立つ感覚に笑みを深

める。

恐怖心は無論ある。だが、彼にとっての恐怖とは敵や敵の攻撃の脅威を表すバロメーター。そして、適度な緊張感を得るための促進剤でしかない。

故に怯む理由なぞどこにもない。

「キャラアアアアア！」

サンダーバードは空中に浮かび上がると翼を羽ばたかせ、強烈な風を起こす。

その風は敵を吹き飛ばす暴風ではなく、全てを切り刻む鋭い刃となり、更に空気に帯電した雷は槍と化し煉夜を襲う。

「チイツ！」

流石に広範囲に巻き起こる風を躲すことはできない為、両腕で急所を守りながら纏いの密度を上げるにより耐える。しかし、纏いにより致命傷こそ負わないが、風は肉を裂き雷は肌を焦がす。至る所に切り傷と火傷が生まれ、煉夜は徐々に傷だらけになっていく。纏いの密度を全力で上げてもぶち抜いてくるか…しかも、あの羽ばたきは確か攻撃行動じゃなかった筈…

サンダーバードの羽ばたきとは、巢にあるゴミを風で切り刻み、雷で焼き払うという習性。所謂掃除行動だ。

…あれ、つーことは何か？俺はゴミ扱いつてことか？ハッハア！そうかそうか…鳥の分際で舐めてんじゃねえぞ…！！！！

煉夜は強烈な殺気をサンダーバードに叩き付ける。

その殺気を浴びて煉夜が危険だと判断したのか、決定打が決まらな

いと悟ったのか、サンダーバードは羽ばたくのを止め、今度は翼を大きく広げる。

その翼に雷がどんどん収束されていき、次の瞬間、高密度に圧縮された雷を纏った羽が一斉射出される。

「オイオイ、洒落になんねえぞこれ…」

浮かべていた笑みが強張っているのを感じながら、飛んでくる金色の壁のように見える程の大量の羽を見据える。

羽の一つ一つが人を容易く消し去る程の威力を秘めており、もしも喰らえば纏いなど簡単に貫かれ消し炭となってしまうだろう。

「なら、全て躲すしかねえよなあ…」

諦観の念の込もった溜め息を一つ吐くと、腕をダラリと下げ体を半身にし、構える。

それらの羽は小さな標的を狙うような攻撃ではなく、辺り一帯へ絨毯爆撃するような攻撃だ。だが、狙いが定まっていない分、隙がある。

だが完全に躲しきることは不可能。ならば、纏いの密度を最大にまで高め、些細のダメージは度外視し、致命傷を負わない弱い隙の部分へ体を滑り込ませ、前へ前へと躲していく。

躲しきれなかった部分が纏いと一瞬だけ拮抗するも貫かれ、肉を削っていくが、気にかげずに次々と羽を舞うように躲す。躲す。躲す。躲す……

……しばらくしてようやく雷羽の吹雪が止む。どうやらサンダーバードは仕留めきれないと判断したようで、違う攻撃に移行すべく空へと上昇していく。

致命傷こそないが体の至る所を炭化させ、満身創痍となった煉夜は血の混じった唾を吐き捨てる。体の機能が低下しちまつてるな…炭化したお陰で血が流れないのは不幸中の幸いか…

体の状態を確認しながら少し荒くなった息を整え、空高くに上がっていくサンダーバードを見据える。

上昇したっつーか距離を取った感じだな…空にいられちゃ攻撃できないが、さて……

身構えながらどうやって攻撃を与えようか考える。すると、上昇していたサンダーバードは急に方向を転換し、雷を纏いながら猛スピードで突進してくる。

好機！

それに対して煉夜は回避行動を取ろうとせず、纏いの密度を更に高め、左足一点に凝縮する。

「さあて、今度は俺のターンだな」

そして、彼は突っ込んでくるサンダーバードを迎え撃つべく大きく跳躍し、迫り来るサンダーバードの巨大な嘴に、全身をバネとした灰銀色の霞を纏った左膝を横から叩き込む。

「ギャオオオオオオ！！」

「っ！！」

直進する物体は横からの衝撃に極端に弱い。サンダーバードは煉夜が放った横からの膝蹴りにより進行方向が横に逸れ、地面へと叩き落とされ、嘴にはビシツ！と、僅かだが亀裂が入る。突進の衝撃と雷を受けた左膝は、纏いによりダメージを軽減されたお陰で炭化はしたものの辛うじて機能している。

少しはダメージを与えられたか…？

煉夜は片膝を着きながら敵の動きを洞察する。サンダーバードはすぐに立ち上がるも、何が起こったか理解していないかのように頭を左右に振っており、身に纏っている雷は今だけは機能していないように、辺りは再び薄暗くなる。

多少怯んだか…周囲の雷も機能していないようだし、一気にいくか

煉夜は立ち上がり、特殊な呼吸法により丹田から『氣』を練り上げ、操り、身体能力を高める。更に体内に存在する魔力を『強化』の意志により、身体能力を強引に強化する。

『氣』と『魔力』

この2つの力は混じり合い相乗効果を生み出し、彼の身体能力を人外の其れにまで引き上げる。

それはかつて、彼がまだ充分に魔法を扱えなかった頃に編み出した対人外用戦闘体型。

名を『鬼殺し』

煉夜は鬼殺しによりサンダーバードとの距離を一瞬で詰めると、全長5メートルはあるサンダーバードよりも高く跳び上がり、右脚を天高く振り上げる。

「堕ちろ！」

そして、煉夜の脚が消失したかのように見える程の速度で振り下ろされ、鋼すらも容易く爆砕する一撃がサンダーバードの額に炸裂する。その一撃により顔面から地面に叩き付けられ、衝撃で地面が大きく陥没する。

「さて、これで決まってくれなきゃちとヤバいかもな…っ」と

地上に無事着地し、鬼殺しを解除する。それと同時に体中に激痛が走り、片膝を着く。

傷口からは血が止め処なく溢れ出て、地面に血溜まりを作っていく。鬼殺しの副作用だ。鬼殺しは一時的に人の限界を遥かに超えた身体能力を得ることができるが、その代償として使用後、普通の人間なら体が壊れてしまう程の大きな負担がかかる。

煉夜は訓練により、副作用の負担に耐えられる肉体を得ているが、現在は満身創痍。とても副作用に耐えられる状態じゃない。

「やれやれ、この苦痛も何時ぶりかね…」

「限界のようだな…」

自分の体の状態に苦笑しながら呟くと突如、姿を消したと思われた右腕を失った仮面の男が姿を表す。その失った右腕はどうやら治療魔法であろう黒い膜のようなモノで覆われている。

煉夜はその姿を既に興味の色を失った冷めた目で見える。

「ああ、まだいたのか…てっきり逃げ出したのかと思っていたが」

男はそんな煉夜の態度を気にする様子もなく答える。

「フン、そうしたいのもやまやまだったが、お前らは我らが組織にとって危険な存在だ。死ぬのをこの目で見ないと安心できないのである…」

「お前らってことはお目当てのお嬢も殺す気か？」

「高宮優奈を連れ去るのは何も絶対の目的ではない。今の俺では彼女を連れ去るのは不可能だからな…どこにいるかはわからんが、姿と力を見られた以上、彼女の財力と権力は我らが組織の妨げとなる。故にまとめて消させて貰う…！」

煉夜の呆れたような言葉に男は淡々と答え、左手を空に掲げる。

『翔よ雷、敵を貫け…』

「…舐めるなよ…この状態でもお前の魔法を防ぐことぐらい…お前を殺すことぐらいは容易にできるんだよ…」

魔法を放とうとする男に煉夜は殺気を放ち、纏いの密度を上げる。

「フツ、召喚獣相手に一步も退かぬ貴様なら虚勢でもなく本当にできそうだから恐ろしい…だから安全策を取らせて貰おう…」

男はその煉夜の殺気に強烈に恐怖を覚える。

しかし、男も数々の修羅場を経験してきた一流の戦士だ。煉夜と同じようにその殺気に恐怖はするものの、怯む様子はなく、左手を倒れているサンダーバードに向ける。

その意図に気付いた煉夜は憎々しげに舌打ちをする。

「チツ、やってくれる…」

『ライトニング・スピア』

男の左手から雷の槍が放たれ、サンダーバードに吸い込まれていく。その雷槍に込められた意志は『回復』

普通ならそんな意志を込めた所で何の意味も成さない。

しかし、その雷槍を受けた相手は雷の化身である雷鳥だ……故に

ズガアアアン！！！！

突如陥没した地面から激しい雷の柱が天を衝く。そして

「キヤオオオオオオオオオオ！！！」

復活したサンダーバードは体中の羽毛を逆立て荒々しい雷を纏い、高らかな咆哮を上げながら空中に舞い上がる。

その額にはxを描くように新たな大きな裂傷が出来ており、火のように滾る瞳は怒りと憎悪により禍々しく光っている。

「一つ、雑学を授けてやろう。サンダーバードは怒るとその黄金の毛を逆立て、ある行動を取る習性がある……その行動とは……」

男が歌うように言葉を紡いでいく。

その説明の途中、空から轟音が鳴り響き始め、高密度の魔力が収束されていくのが感知できる。それも一カ所や二カ所なんてモノではなく、空の至る所から感じられる。

「周辺を破壊し尽くす八つ当たりだ」

そう言い放った瞬間、男を半球体の闇が包み込む。

その闇は空間を世界から隔絶する絶対堅固の闇の結果…『プリズン・アビス』

恐らく煉夜とサンダーバードが戦闘している最中に仕込んでいたのだろう。

そして、薄暗い空が強烈な轟音と共に眩く輝き始める。その空から溢れかえる程の力は決壊寸前のダムを連想させる。

『エリア・クエスト
空間支配』

空を満たす光が最高潮に達し、雷が放たれようとした瞬間、煉夜が魔法名を呟いた。

そして放たれる雷。

幾つもの閃光が地上に降り注ぎ、全てを消し去る圧倒的エネルギーが辺り一面を蹂躪する。

轟音と衝撃波が周囲に撒き散らされ、ここから半径数100メートル以上の空間が消滅した……筈だった

しかし

「なん…だと…!？」

雷が降り止み、辺りの光景が見れるようになった男は驚愕の声を上げる。

全くの無傷なのだ。あれだけの雷による圧倒的エネルギーと衝撃波を受けている筈なのに、煉夜どころか周りの空間にも傷一つ付いていないのだ。

そして、気付く。辺り一帯の世界が灰銀色に染まっていることを……

「『エリア・クエスト空間支配』……これは俺が定めた空間で俺の我が儘を通すことのできる魔法でな……少しばかり我が儘を言わせて貰った。『俺が定めた空間で召喚獣の雷は無効になる』ってな。正直、コレは疲れるからあまり使いたくはなかったんだがな……」

驚愕に声すら出せずにいる男に気にせず、煉夜は自嘲するように言葉を紡ぐ。

「しかし、魔法無しでも倒せると思ったんだがなあ……流石に無理だったか……まあ、充分楽しませて貰ったから良しとしよう。その礼といっちゃなんだが、最期は俺の魔法（お気に入り）で逝かせてやるよ。遠慮はすんなよ？」

煉夜はそう言うのと、左腕をゆっくりと上げ、横に鋭く振るう。瞬間、先程まで何もなかった彼の周りの空間に優に100を超えるほどの剣や槍などの武器が出現する。それらの武器はある物は炎で、ある物は光で、ある物は風で、様々な属性で形成されており、その一つ一つが先程のサンダーバードの雷以上の膨大な魔力を秘めている。

「……なんだ、これは……！？無詠唱でこれだけの……それも全属性だと……！？お前はいいじゃない！？」

その圧倒的な光景に男は体を震わし、声を漏らす。そして今までの戦闘を思い出し、戦慄する。

今までの戦闘は、まるで本気では無かったというのか！？

煉夜はそんな愕然と絶望した表情をしている男を見て、酷薄な笑み

を浮かべる。

「『無辺の裁き』俺お気に入りの魔法の一つだ。んじゃ、逝ってみようか」

そう言い、煉夜は左手を振り上げる。

それは一人と一羽への死刑宣告。

そして、彼が左手を振り下ろした瞬間、圧倒的な力を宿した100を超える武器が、一人と一羽に殺到した。

「そうそう、雑学のお礼に一つ教えといてやる。知ってるかもしれないが俺の魔力値は200000なんだが、アレも実は嘘だな。本当は…」

目の前で轟音と共に巻き上がった大規模の砂煙を眺めながら、その中心にいるであろう男に煉夜は言い放つ。

「二億だ。」

つつても、もう聞こえてないか」

煉夜は悪戯の成功した子供のように無邪気に嗤った。

10話（後書き）

魔法説明

今回は煉夜の使用属性のネタバレが入ります。それが嫌な人は見ないで下さい

『鬼殺し』

属性、／

位、／

魔法ではない

一時的に人の限界を遥かに超えた身体能力を得ることができる、煉夜オリジナル技。

しかし、体内にある魔力と気を混ぜ、その全てを身体能力強化に注ぎ込む為、魔法はおろか纏いすら発動できなくなり、使用后、術者の肉体に大きな負担が掛かるデメリットがある。

名前の由来は文字通り、編み出した直後に鬼を殺したから

「補足説明」

サンダーバード戦で最初からコレを使用しなかったのは、纏いが使えない為、サンダーバードが身に纏う雷を突破できない為。

エリア・クエスト
空間支配

属性、空間×創造

位、？

空間掌握魔法

己の定めた空間に、己の意志を法則^{ルル}として創造し、顕現する煉夜オリジナル魔法。

ただし、魔力消費量が非常に大きく、法則^{ルル}は詳しく定めなければ魔力消費量が更に大きくなる。

煉夜の定めた意志^{ルル}を上回る意志を持ってして攻撃、行動すれば破れ

る。

無辺の裁き

属性、創造

位、？

殲滅魔法

様々な属性の武器を創造し、相手に一斉射出する煉夜オリジナル魔法。

武器の一つ一つに膨大な魔力を宿している為、魔力消費も膨大。

込める魔力量に比例して武器一つ一つの威力を上げることでも武器の量を増やすことも可能。

11話（前書き）

まずは皆様に謝罪の言葉を申し上げます。

前回の前書きにて、私は次でストーリーカー編ラスト的なことを書きましたが、終わりませんでした…本当に申し訳ありません…

とりあえず今回は試しに三人称で書いてみましたが、やっぱり戦闘以外は一人称の方が書きやすいし読みやすい気が…

11話

「やりすぎたか……」

目の前の光景を見ながら煉夜はポツリと呟く。

辺りには大小様々なクレーターができており、砂塵が大きく巻き上がっている。

煉夜はその砂塵に少し顔をしかめ、左手を払うように無造作に振るう。すると、灰銀色の風が疾り、砂塵が一瞬にして吹き飛ばされる。クリアになった惨事とも言える空間の中心地に、全身黒ずくめでロボ口の男と、巨体の至る所から血を流す金色の鳥が姿を現す。

二体とも倒れているが生きてはいるようで、不規則ながら胸が僅かに上下しているのが確認できる。

その一人と一羽の姿を確認し、煉夜は薄い笑みを浮かべる。

危ねえ、死んじゃいねえか…手加減はしたが、やっぱりノリで威力調節が面倒なあ魔法を使うもんじゃねえな

そんなことを考えながら、そちらに向かって歩き出そうとするが、傷により体の反応が鈍く、思うように動かない。

「ああ、面倒くせえ」

煉夜は溜め息混じりに呟くと、今度は腕を掲げ、パチン、と指を鳴らす。その瞬間、彼の体を灰銀色の光が包み込み、数秒後にその光が止むと、至る所が炭化し、血だらけの満身創痍だった筈の彼の体が治っていた…否、体を正常の状態に『創り直されて』いた。

これが白神煉夜が操る魔法属性の一つ。

『創造』

文字通り魔力を媒体とし、ありとあらゆるモノを創ることのできる、特異中の特異属性。

傷を『治す』じゃなくて『直す』だから体力と疲労、ダメージは回復しないし、魔力消費量が半端じゃないのがアレだが…

などと根が貧乏性(?)な彼は、己の絶大な魔力の数千分の一程度の魔力を消費したことを胸中で愚痴りながら、悠然とした足取りで俯せで倒れ伏している男の所へと歩を進める。

そして、男の傍まで近寄ると、男の腹部を容赦なく蹴り上げる。

「がつ!?!…はあっ!!…ああ…!!」

その一撃により、男は苦悶の声を上げ、呻きながら意識を取り戻す。

「おお、一撃で起きるあたりは流石とでも言っておこうか」

「グウツ、貴様…何故、殺さぬ…」

冷笑しながら見下す煉夜を見上げるように睨みながら男は問う。

男はダメージが大きいらしく体を全く動かせずにおり、仮面は既に破壊されており、その下から表れた顔は煉夜にとっては見覚えの無い顔だった。

しかし、煉夜はそのことを特に気にしてはいないようだ。

「慈悲で生かしたわけじゃねえから安心しろ。お前には聞きたいことがあるだけだ。用が済んだら高宮の爺さんの所に送って、然るべき処罰を受けてもらう」

それに、ペットが殺されたとなればアイツが黙ってないだろうしな。

と、煉夜は心の中で付け足し、チラリとサンダーバードに目を向けてみると、サンダーバードは体から淡い光を放ちながら徐々に輪郭が薄れていつている。死んだ訳ではなさそうなので、大方もといった場所に還るのだろう

なる程：召喚石で召喚された魔物は一定量以上のダメージを受ける
と還るのか：

などと考察をしていると、挑発するような声が聞こえてきた。

「俺が、簡単に口を割ると、思うか…？」

「残念、お前は割るよ。知ってるか？俺って我が儘なんだぜ」

煉夜は肩を竦めながら答える。その言葉の意味がわからず、男は訝しげな顔をする。しかし、ある事に気づき、その顔は焦りと苛立ちに彩られる。

「そしてこの空間は俺を溺愛していてなあ。故に俺の我が儘を聞いてくれる…」

そう、世界は未だに灰銀色に染まっていた。

エリア・クエスト
『空間支配』

染まった世界に己の望んだ法則ルールを創り出す魔法。

「き、貴様あ…！」

『白神煉夜の視界に入っている男は、必ず真実を話さなければなら
ない』

一瞬だけ灰銀色の輝きが増し、この空間に新たな法則が誕生する。

「ハイ、我が儘成就。んじゃ、まずは…そうさな、初恋の相手と好きだった理由を…」

「…馬鹿か貴様。何のつもりか知らんがそんな質問に答える訳が…俺の初恋の相手は今も昔も我らが盟主様だけだ。あれは何年前のことだったか…昔ある組織の幹部だった俺は、その組織の汚いやり方に嫌気が差して、ある日俺は任務中に同行していた幹部を殺して逃げ出したんだ。我慢の限界だった…己の欲の為に1だけを救い99を捨てる奴らのやり方に…無論組織はそんな俺を許す筈もなく俺を始末しに刺客を送ってきた。逃げても逃げてても…倒しても倒しても襲い掛かってくる刺客達…そして、俺はとうとう力尽き、刺客に殺されそうになった。もうダメだと思った。そこへ彼女は颯爽と現れた。その時の光景を今でもはつきりと覚えている。まるで女神のようなお姿だった。そしてとてもお強かった…俺が苦戦した刺客達を一瞬で蹴散らし、呆然としていた俺に微笑みかけてくれ、俺を必要だと言い手を差し伸べてくれた。そして悟った。俺が仕えるべき主はこの方だと…同時に俺は胸が高鳴るのを感じ、瞬時に理解した…これが恋なのだと殺せえええ！頼むから殺してくれえええ！！」

傷の痛みを感じていないかのように叫ぶ男に対し、煉夜はニヤニヤしながら携帯で先程の話を録音していた。

しかし煉夜は何も面白半分で…面白半分だけでこのような話をさせたわけではない。

この灰銀色の世界で最も重要なのは意志力の強さだ。

この男の盟主に対する忠誠心を見たところ、相当な覚悟と意志があると感じ、円滑に事が運ぶよう、意志力に関係のある精神力を削ることから始めたのだ。

意志力で世界クラスの化物共と張り合ってもそうそう負ける気はし

ないが、念には念を入れての行動だ。

決して、暇つぶしや体の痛みに対する八つ当たりの為ではない。

「ククク、そうかそうか。んじゃ、そろそろ本題に入るか。っと、その前に…」

どこか憔悴した男を見て笑いながら、煉夜はポケットに録音した携帯を入れると、手を虚空に突き出す。

すると、空間に大きな穴が開き、その穴に両手を突っ込む。

「え〜と、どこにやったかね…これでもねえし、これでも…お、いたいた。」

その奇妙な光景を見て啞然としている男を尻目に、煉夜が両手を引き抜くと、その両手には気絶している高宮優奈がいた。

実はサンダーバードとの戦闘が始まる前に、気絶した優奈を守りながら戦うのを面倒：危険と感じた煉夜は魔法により、自分が物置としてつかっている、何もない空間が無限に広がっているだけの空間…虚空空間に彼女を送っていたのだ。

しかし、空間そのものに穴を空けるといいう魔法は、上位魔法に似たようなモノはあるが、基本的に八属性には存在しない。

そんな得体の知れない魔法を短時間で数々見てきた男は、遂に疑問をぶちまける。

「な、なんなのだ貴様は！？先程の魔法といいこの空間といい、それにこの場所に来た時もそうだ！！明らかに普通の魔法じゃないぞ！？貴様はいつたい…！？」

半狂乱したように叫ぶ男に対し、煉夜は肩を竦めて飄々と答える

「ノーコメントだ。生憎と簡単に個人情報やるほど俺は安くはないんでな。まあ、強いて言うならシルヴィア…お前らの盟主殿の昔馴染って所か」

「何故盟主の名を…まさか貴様…『神域』か…!？」

「さてな…っと、起きたかお嬢」

顔では素知らぬ振りをしながら内心、何であんな情報でバレんの？などと首を捻っていると、優奈が少しだけ身じろぎをし、うつすらと目を開ける。

「んう…煉…？」

「よう、お目覚めは如何ですか、お嬢様？」

「え？あ、ハイ、大丈夫です…って、そういえばあの鳥は!？」

覚醒したのか、いきなり体を起こす優奈。
煉夜はそれを見て苦笑する。

「おいおい、あんま暴れんなよ。落としちまうぜ？」

「え？」

今の優奈の体勢は煉夜に背中と膝裏を持たれている…所謂お姫様だっこ状態だ。勿論そうなると距離も顔も近い訳で…

「れ、煉!？え、え？何で!？」

「おゝい、落ち着け」

自分の状態を理解して顔を真っ赤にしてあたふたする優奈。

「ふむ、もう少し眺めていたい程なかなかに愉快的光景だが、話が進まないのだから落ち着け」

前と同じように言霊と瞳力により暗示を掛ける。

それにより優奈は落ち着きを取り戻す。

「…すみません、取り乱してしまいました…あの、とりあえず降ろしてください」

「はいよ」

若干名残惜しそうな顔をしている優奈をゆっくりと降ろす。
そして彼女は地面に倒れ伏している人物に気付く。

「貴方は…」

「ストーカーとお嬢様の御対面だな。つーか知り合いか？」

「いえ…」

「あつそ。んじゃ、場が整ったから質問を再開しようか」

「あの、その前にいいですか？」

優奈がおずおずと少し戸惑ったような表情で煉夜に声をかける。普段毅然とした彼女にしては珍しい態度だ。

「ん、どした？」

「この空間は…？」

「ああ、俺の魔法」

「これが…ですか…？」

心底驚いたように優奈は灰銀色の世界を見回す。

まあ、どう見ても普通の魔法じゃねえしな…

「興味津々な所悪いが説明は後な。さっきこいつに説明したばかりだからまた説明すんのダルいんだわ」

彼はそう言うつと視線を男に向ける。男は忌々しげに此方を睨んでいた。

「あらら、待たせちまって拗ねちまったか？随分と可愛げあるじゃねえの」

「貴様：先ほど言った法則^{ルール}意外に何を創った」

煉夜の明らかに馬鹿にした態度を無視し、男はただ憎々しげに言葉を吐く。

「ん？ああ、死なれても処理が面倒だからな。『自殺できなく』させてもらった」

そう、男は組織の情報を渡し、主に迷惑を掛けたくないが為に、舌を噛み切り自害しようとしたのだ。しかし、煉夜はそれを見越して、先程法則を創った時にもう一つ法則を創っていたのだ。

「つまりお前は情報を黙秘できない訳だ。残念だったな」

「くっ！」

どうでもいいが、これらの会話を優奈が首を傾げながら聞いているがスルーしておく

「まずは、お嬢もお前を知らないようだが、お前はどやって周りにバレずにお嬢を探っていた？」

「…隠れることや隠すことは闇の領分だ。この学院程度のセキュリティを掻い潜ることぐらい訳はない」

「ふむ、ごもつともだな。次、お前は何故お嬢をストーキングしていた？」

「…高宮優奈を連れ去る機会を探るついでに、精神的に弱らせて抵抗力を下げる為だ…」

「…では次だ。何故お嬢を連れ去ろうとした。」

「…高宮財閥の権力、財力を利用する為だ…」

「…とりあえずお前が 革命の楽団 ヴァルゼクス の一員ってことはわかってい
る。だがな、アイツが財力や権力を他者を拉致ってまで得ようとするとは思えねえ。しかしお前がこんな行動をしているとなると…ア

「イツはそこまで堕ちたのか？」

失望感を隠そうともしない煉夜に、今までスラスラと質問に答えていた男は激昂する。

「違う！これは俺の独断だ！盟主は関係ない！」

「ま、だろうな」

しかし煉夜は先程の表情から一変、あっけらかんとした態度で笑う。アイツは己の力に人何倍もの自信を持っているからな…認めてない奴の力を利用してまで何かしようとするのはありえねえ…

「俺からは大体こんなもんかね。お嬢、聞きたいことあるなら聞いておけ。この空間内じゃあコイツ嘘つけねえから。俺は高宮の爺さんに連絡してる」

そう言うつと煉夜はポケットから携帯を取り出し、電話をし始める。勿論視線は男に向けられたままだ。

優奈は煉夜の言い回しに少し疑問を持ったが、特に気にせず、男と視線を合わせるように傍でしゃがみこむ。

「…では、私からは一つだけ…これは質問というよりはお願いです」
そこまで言って一呼吸分の間を空け、真っ直ぐな目で真摯に語りかける。

「もっと自分を大切にしてください。こんな怪我までして…貴方の大切な人はこんなことをして喜ぶとは思えません。」

男はその言葉を聞いて呆けたように啞然とする。

「…俺は貴様を襲ったんだぞ…！？それなのに何故…」

「関係ありませんし理由もいりません。私はただ、目の前で誰かが傷つくのは嫌なんです…」

これが優奈の持つ一つの信念。

元来争いの嫌いな彼女は過去の出来事により、人が傷つくのを極端に嫌うようになった。

だから彼女はどんな場面でも攻撃魔法を使おうとせず、守りに徹するようになったのだ。

誰も傷ついて欲しくないから…

「…理解できない……」

訳がわからないと頭を振る男に、連絡を終えた煉夜が薄く笑いながら話だす。

「ククク、わかんねえなら教えてやろうか？そいつは方向性こそ違うが、シルヴィアと同じ人種だからだ」

「盟主と……？」

「そう、良くも悪くも純粹で自分の信念を真っ直ぐ貫こうとする…俺にとっては苦手だが、嫌いじゃない人種だ」

俺もついさっき思ったことだがな、と付け足し笑う煉夜。
しかし、その言葉に思うところがあつたのだろう。

男は優奈の真っ直ぐな目を見て、納得したような諦めたような小さい苦笑を浮かべる。

その様子を見て優奈も優しく微笑む。その場に穏やかな空気が流れ、先程までの緊張感が緩む。

…ただ1人、優奈を見ながら怪しげな表情を浮かべている彼を除いて…

「さて、空気読まなくて悪いが、よろつと迎えが来るし…念には念を入れてもうちょい殺らせてもらっわ」

煉夜は不意にそう言うと、左手を横に振るう。

そして、突如創り出される無数の武器。

それら全ての矛先は男に向いている。

その言葉、その光景に空気が一瞬にして凍り付く。

その魔法に驚きながらも、彼の次の行動を予想した優奈は慌てて彼を止めに掛かる。

「な、どういっつもりですか！？止めなさい、煉！」

「悪いな。さっきいい感じに話がまとまったが、アイツが輸送中に逃げ出す可能性が無いわけじゃない。俺は臆病者なんでね。そう考えると、再起不能になる程度にまで痛めつけないと安心できねえんだわ」

依頼失敗は御免だしな。と、語尾に付け足し、煉夜は何を考えているかわからない仮面のような笑みを浮かべる。
勿論、人が傷付くのを嫌う優奈は激昂する。

「既にこんな傷付いている人を何故更に傷付けようとするのですか！？」

「これは一応依頼内容に入ってることなんでね。犯人を懲らしめろってな。ああ、安心しろ。喋れるぐらいには手加減する」

「そういうことではありません！！懲らしめるというならもう充分でしょう！？すぐにこの魔法を解除しなさい」

「…あんた、何か勘違いしてねえか？あんたは警護対象であって、依頼主じゃねえ。あんたが俺に命令する権利は無えんだよ。特別扱いの嫌いなお嬢様？」

「ッ！！」

煉夜は優奈の言葉を遮ると、冷たく皮肉を吐き捨て、冷やかな視線を彼女に送る。

「これは仕事だ。退いてろ。温室育ちの素人が」

ゾツとするような冷たく平淡な声と視線に、優奈は目の前の青年に恐怖心を覚えた。

その目はいつもの優しげな光を湛えてはおらず、まるで機械のように感情が込もっていない。

そして、目と同じく感情の込もっていない声には、有無を言わせぬ力が込められていた。
怖い。

煉が怖い。

でも、ここで逃げたらあの人が傷付いてしまう…それは嫌…！！
そして彼女は意を決すると、恐怖に震える体を叱咤し、駆け出す。

「…それなら、これでどうです」

優奈は煉夜の前に立ちふさがると、ストーカーを庇うように両手を広げる。

「…何の真似だ？」

「私は貴方の警護対象…それなら、こうすれば貴方は攻撃できない…」

「…おいおい、そいつはあんたを襲った敵だぞ？可能性を与えるべきじゃあない。もしも逃げ出したらまたあんたを襲ってくるかもしれないし、周りに被害がでるかもしれないそれでも庇うのか？」

いつも通りの声色で煉夜は呆れたような表情をした後、剣を一振り手に取り優奈の背後にいる男に向かって突き付ける。

その目に戦った男以上の殺気を感じ、彼女は彼が本気だと悟る…しかし

「…それでも…それでも私は、目の前で誰かが傷付くのは見たくはありません…」

「…退く気はないと？」

体や目は煉夜に対する恐怖に彩られながらも、優奈は静かに頷く。その姿には、怯えながらもいざとなったら男を守るという確か覚悟があった。

「…どうやら先程の言葉…信念は本物のようだな」

「え？」

煉夜はその姿を見て一瞬だけ、面白そうに、嬉しそうにニヤリと笑うと、周りに創り出した武器と灰銀色の世界全てを消し去る。そして、2人に背を向け歩き出す。

「どうやらお迎えが来たようだな。本来なら俺の敵っつーことで殺す理由には充分だったが、慈悲深きお嬢に感謝するんだな…さて、後は高宮の爺さんに任せるとしよう」

そう言うのと彼の目の前に突然灰銀色の門が現れ、彼はその中に入っていくと、そのまま姿を消した。

その直後に高宮龍之介が送ったのであろう特殊部隊が駆け付け、優奈は無事保護され、男は捕らえられた。

こうして、ひとまずはストーカー事件は解決したのであった。

12話（修）（前書き）

天壤之位の説明を修正しました。

ストーリー編完結！

遅くなつてすいません！

一週間に一つ更新するつもりだったんですが…

早く学院生活に戻したいが為にいろいろと詰め込みすぎ、話がグチャグチャになっている気がしないでもありませんが、楽しんで貰えたら幸いです。

今回の後書きは魔法がまったく登場しなかったなので、軽い裏話を掲載します。

12話（修）

あの後俺は寮の近くに『門』^{ゲート}を開き、そのまま部屋に戻った。

部屋に入るなり翼から何やらラブレターやら女の子やら訳の分からないことを聞かれたが、とりあえず煩かったので強めの手刀で気絶させておいた。明日の昼過ぎまで目は覚まさないだろう。

そして現在、俺は電話していた。

「…つーわけで、お前んとこの下っ端がやらかした訳だ。どうすんだ？ 革命の楽団^{ヴァルゼクス}の存在が公になると思うが？」

『最近見ないと思ったら彼そんなことしてたんだ。組織が公になるのは楽しくなりそうだから別にいいんだけど、やり方が気に食わないね。そんなやり方で組織大きくしてもつまんないのに…』

「相変わらずの楽観主義者だなあ、オイ。まあ、此方としては楽しめたから別にいいんだがな」

『キヤオちゃんを一人で倒したんだっけ？ 流っ石煉夜、やるやるやるっ』

「お前が気に入るだけあつて、Bランクにしちゃあなかなか強かったわ。」

尤も、初めから真面目にやってりゃあ魔法無しでも殺れただろうがな…つーか、キヤオちゃんて…」

『可愛いでしょ？ 煉夜は昔から敵の様子を見すぎなのよ。初めから攻めまくればいいのに。』

ま、なににせよやっぱSランク召喚獣契約者は違うわね。

Bランクって言ったら騎士団一個隊ぐらいの力があるのに」

「よく言う…お前もSランク召喚獣契約者だろうが」

『まあね、それより煉夜、いい加減私の組織に入る気にならない？
私はいつでも大歓迎よ？やっぱり貴方がいないとつまらないのよ』

「パス、絶対面倒。んじゃ、よろつと眠いから切るわ」

『あ、待つて！その前に連絡先…』

「おやすみ」ピッ

そう言つて俺は通話終了ボタンを押すと、使つていた使い捨て用の携帯を白銀色の波動で消し去る。

こうでもしないとアイツからずっと着信がきて非常にウザったいからだ。

ま、面倒そうではあるがアイツが作った組織つてのには興味あるな。この仕事が終わったら会いに行つてみるかね…

俺は一つ息を吐くと、充電器に携帯を差し込み、ベッドに寝転がる。

終わり、か…そうか、高宮の爺さんの下にあの男が無事送り届けられれば俺の仕事は終わりの訳か…

先程の自分の胸中の言葉を反芻しながら目を閉じ、追憶に想いを馳せる。

初めて高宮の爺さんと出会った時は、刺激の無さそうな仕事だと落胆した。

しかし、依頼内容を聞いて、少しは楽しめそうだと気を持ち直した。

まさか学生をすることになるとは思わなかったがな…

ククク、と笑いながら此処でのことを思い出していく。

6年振りに出会った妹分。

顔や動きなどでわかるが、しっかりと精進しているようで何よりだ。まだまだ甘いかな。

転校してきたばかりの俺にいろいろと協力してくれた現在床に転がっているバカ。

コイツには何気にいろいろと助けられた。コイツがいなければクラスにたった数日間で馴染めなかっただろう。

他にもいろいろとバカを言い合ったり、ふざけあったりした級友。そして、面白い程に真っ直ぐな目をしたお嬢様。

最初はただの警護対象でしかなかった。

しかし、少しばかり交流を持ってみればなかなかどうして…俺の仮面を見破っただけでなく、敵だろうと傷つけられない程甘く弱いかなと思えば、その敵を身を挺して守る程の覚悟と強さを俺に見せつけた。本っ当に俺の調子を狂わせてくれる、なんとも面白い女。

思い返せばたった一週間しかいなかったが、なかなか有意義な時間を過ごせた。

それだけでも負の思い出ばかりのこの地に来て良かったと多少は思える。

たまにはこういう生温い仕事も悪くはないかね。

眠気により徐々に鈍化していく思考でそんなことを考えながら、睡眠に身を委ねる。

…そっぴや村園女史放置しっぱなしだった気が…まあいいか……

そして、最後にどうしてもいいことを思い出し、俺の意識は闇に堕ちていった

*

次の日

AM 5 : 30

ピピピピ、ピピピピ

とまだ設定していない無機質な着信音が早朝の部屋に鳴り響く。
俺はその携帯の着信音で目が覚め、枕元に充電状態で置いておいた携帯を手取る。

ディスプレイを見てみるとその着信は高宮の爺さんからだった。

「五時半に電話してくるとか…老人の朝は早くていけねえ…」

などと愚痴りながらも頭はしっかりと覚醒している。

海外にいた頃よく寝込みを襲われていたので、俺は寝起きでも瞬時に覚醒できる体になっている。

二度寝し難いのがアレだな…

などと考えながら携帯を手の中で弄ぶ。

ここで通話してもいいのだが、俺はなんとなく『^{ゲート}門』を開き、誰もいなさそうな校舎の屋上に移動することにした。

＊

誰もいない早朝の屋上。

ここは何気に俺のサボリスポットの一つで、お気に入りの場所でもある。

屋上はでかい校舎に比例してとても広く辺りにはベンチやテーブルが置かれ、手入れの行き届いた花や木などの植物が植えられている。いわゆる屋上庭園という造りなのだろう。

俺は4メートルはあるであろうフェンスの上に飛び乗り、眼下に広がる故郷の景色を見下ろす。

此処からの景色も今日で見納めかね…

などと柄にもなく感傷に浸りつつ、青空と出たばかりの太陽を眺めながら通話ボタンを押す。

「よう、老人の朝は早えな」

『早朝に済まないね。しかし、そう言う割には随分とスッキリしたような口調だが？』

「寝起きは良い方なんでね。それより要件は…何て聞かなくてもいいか。依頼の件だろ？」

『ああ、そのことについて話がしたい。急で済まないが、この後6時に前と同じレストランに来てくれないか？今ぐらいいしか時間が取れないのだよ』

「大企業の会長殿は忙しそうだねえ…ま、別に構わんがな」

『そうか、それではすぐに迎えを寄越そう』

「いや、必要無え」

『そうかね？学院からあのレストランまで結構な距離があるが…いや、君が必要無いと言うのなら大丈夫なのだろう。それではまた後で…』

そう言い残して通話を切る高宮の爺さん。

現在の時刻5時40分

座標は特定できているから『^{ゲート}門』で移動は一瞬で済む。つまり時間まで後20分…仕事時は5分前行動を心掛ける俺には後15分の時間がある訳だが、さて…

「…とりあえずシャワーでも浴びるか」

昨日風呂に入り忘れてたのを思い出し、自室に戻りシャワーを浴びることにした。

*

「さて、そろそろ行こうかね」

シャワーを10分で済ませ、身支度を整えること3分。

俺は纏めておいた荷物を持ち、目の前に『^{ゲート}門』を開き、足を踏み入れる。

踏み入れた所で俺は振り返り、一週間使っていた部屋と友人に目を向ける。

「じゃあな、遅刻すんなよ」

聞こえてはいないだろうがそれだけ言い残し、俺は改めて『^{ゲート}門』を潜った。

『^{ゲート}門』を潜ると一瞬にして寮の自室から一週間程前に訪れた高級レストラン前へと場所が変わる。

「5時54分到着、と」

俺はレストランの扉に近付き、ドアノブを掴もうとする。しかし掴む前に扉が開き、中から何故かメイドが姿を現す。

「……………」

俺は一步後ろへ下がり、看板を見ている。
やはりメイド喫茶とは表示されていない。

…つかしいな、昨日の戦闘でさほど疲れは無かった筈だが…何かメイドの幻影が見える…欲求不満か俺？しかし俺にメイド属性は無え…

「白神様でございますね？会長とお嬢様が先にお待ちになっておら

れます」

半ば現実逃避していると不意に声を掛けられ、俺は我に返る。

「ん？ああ、悪いな。ところで俺今日も私服だけど大丈夫かね？」

「ええ、構わないそうです。お望みとあればすぐにでもスーツをご用意致しますが？」

「遠慮させてもらっわ。堅苦しいのは苦手だね」

「そうですか。お荷物をお持ちします」

「別に貴重品が入っている訳でもないが、よろしく」

差し出された手に持つてきた荷物を手渡す。

こういう時は遠慮した方が相手に失礼なのだ…まあ、元々遠慮なぞする気もなかったが…

「ハイ、それでは此方へ…」

俺から荷物を受け取ると侍女は踵を返し、案内の為に先を歩いていく。

俺もその後を続いた。少しばかり歩くと豪奢でシックなデザインの広いホールに着く。

そのホールの中央にある円卓に、高宮の爺さんとお嬢の姿が見える。2人の背後に付き従うように立っている黒服の男と侍女が何ともシユールな感じだ。

俺はその場へと進み、案内侍女が引いてくれた椅子に座る。

案内侍女は一礼し、そのままお嬢の背後へと下がる。

「おはようございます、煉」

「おはよう、白神君。こんな朝早くに申し訳ないね」

「おはようさん。ま、依頼主の呼びかけには流石に答えんな」

そう言っ出て出された水を一口飲む。

「で、俺に何か用か？」

「まあ待ちなさい。折角レストランに来てもらったんだ。少し食事を楽しもうじゃないか」

高宮の爺さんがそう言つと、ウェイターとメイドが料理を運んでくる。

…なんでメイド？

そんな疑問を抱かないでもないが、ツッコんだら負けと自分に言い聞かせ、俺は料理を食し始めた。

前にも来たことあるが、やはり高級レストランというだけあり料理はとても美味い。

俺達は適当な雑談をしながら食事を進め、皆が食べ終わったのを確認すると本題に入ることにする。

「さて、一通り食事は終わった訳だが、俺を呼んだってことは何か問題でもあったのか？」

「いや、問題は特に無かった。犯人は犯行を認めたしの」

「そうかい。そいつは良かったじゃねえの。これで俺はお役御免つて訳だな」

肩を竦め笑いながらの俺の言葉に、何故かお嬢の肩がビクッと跳ね上がり、その顔は悲しげに歪む。

「よくわからんが、なんつー顔してんのかね、このお嬢さんは…ま、今は仕事を優先させてもらうがね。」

「で、犯人のことじゃないってなら何のために俺は呼ばれたんだ？」

「うむ、話というのは男の所属していた組織のことについてだ。優奈から聞いたが君は何やらその組織を知っているらしいじゃないか」

「ああ…」

大切な孫が襲われたんだ。その襲った組織が気になるのは当たり前前か…

「確かに知っているな」

「そのことを教えてくれないかね？」

「…別に構わんが、依頼内容に情報提供は無かった筈だが？」

冗談混じりに薄く笑う。
そして感じる殺気の数々。

俺の言葉と態度を、主を馬鹿にしたモノと判断した黒服と侍女から放たれたモノだろう。

へえ、全員よく訓練されてやがる…殺気が心地いいねえ…

内心で彼らを賞賛するも、それらを素知らぬ顔で流しながら高宮の爺さんの目を見やる。

「ふむ、そうだったな。では情報料として報酬を上乗せしよう」

「まいど」

ふむ、反論せずに受け入れ、此方にもメリットがあることを提示するか…まあ、常套手段ではあるな。とりあえず報酬が増えてラッキー何やら周囲の視線が痛い、そこは気にしない方向で。

「んじゃ情報提供といきますか。尤も、俺は組織の頭と面識があるだけだから、内部についての情報はさっぱりだから、そこんこは、あしからず」

そう前置きをしてから俺は ヴァル 革命の楽団 ゼクス について話し始めた。

…

…

…

「…つーわけで、あの組織はもうお嬢を襲わないと思うぞ？アイツは金や権力より力を求める奴だからな」

俺の話を興味深そうに神妙に聞いている高宮の爺さんに目を向け、
一通り話終えた俺は水を一口飲む。
あゝ、長話の後の水分は美味だねえ」

「なるほど…しかし ヴァル 革命の楽団 ゼクス か…聞いたことのない組織だな
…」

「そりゃそうだろ。俺がアイツと別れたのが2年前だ。たった2年
で0からスタートした組織に何ができるよ」

それとも思い付きとノリで生きているような女だ。
組織を作ったのも半ば思い付きとノリなのだろう。
いや、一応目的はあるらしいが…

「ふむ…では盟主のシルヴィアとやらについては？」

「あいつに関しては説明事項が多すぎて面倒だから一言で済まさせ
てもらおう。あいつの位は てんじょうのさんい 天壤之三位だ」

『！！？』

俺の言葉に高宮の爺さんとお嬢だけでなく、背後の黒服と侍女達も
ざわつく。

「てんじょうのくわらい 天壤之位の魔導士…つまりは魔王の一人ということか…」

「そそ、端的に言うならば人の域を軽く超えた化物だな。つーわけ
で、あいつとはこと構えない方が得策だな…」

ま、それは俺もだがな。と、心の中で付け足し、水を一口飲む。

そして、何やら黙り込んでいる2人の様子を見て、席を立つ。

「さて、話は終わりか？終わったんなら俺は行くぞ…っと、その前に…」

俺は侍女の下へ歩み寄り、持ってきた荷物を受け取ると、その中から制服と一枚の封筒を取り出す。そして、それらを高宮の爺さんの目の前に差し出す。

高宮の爺さんは渋い顔をしながらそれらを受け取り、お嬢はそれらを見て驚愕する。

「制服と退学届けだ。一応形式だけでもちゃんとしておこうと思っ
てね。そんじゃ、サヨナラだな、お嬢」

「煉…行ってしまうのですか？」

お嬢は悲しげな顔をして俺を上目遣いで見上げてくる。

俺はその目を見返しながら肩を竦める。

「今回の依頼内容は『高宮優奈をストーカーから守り、ストーカーを捕らえるまでの間ルミナス魔法学院に潜入』…っ…もんだったかな。依頼が達成した今、俺があそこに通う理由は無えのさ」

「しかし…」

「何、別に今生の別れって訳でもあるまいよ。いずれまた会う機会もあるだろ」

そう言って手をヒラヒラと振りながら踵を返す。

「待ちなさい。どこに行くのかね？」

しかし、厳かな声に呼び止められ、俺は顔だけ高宮の爺さんに向ける。

「そうさな…また適当に世界をぶらつくさ。

風の向くまま気の向くまま、ってな」

「私はまだ君の退学を承諾していない」

「…あ？」

高宮の爺さんはそう言った後、俺にとっては重要な単語を口に出す。

「悪いが君の経歴を調べさせてもらったよ。鳳煉夜君」

「…え、鳳って…？」

「…やれやれ、前言撤回だ。大企業の会長も案外暇なんだねえ」

高宮の爺さんが言った単語に、お嬢は呆然と呟き、俺は高宮の爺さんに向き直り、苦笑を漏らす。

「おや、随分あっさりと認めるのだね。てっきり否定するかと思っただが…」

「何をほざきやがる狸爺が。

目え見りや何かしらの確信があるから言ってるってことぐらいわかるんだよ。

否定して余計なことを言われちゃたまんねえからな…」

わざとらしい程不思議そうに聞いてくる高宮の爺さんに、俺は悪態を吐きながら溜め息を吐く。

そこで、ふとお嬢が俯いているのに気付き、そちらに視線を向ける

「どういうことですか…？煉が鳳の…？では舞が慕っていると言っていた兄というのは…」

「…ああ、あいつが何と言っていたかは知らんが、6年前、確かに俺はあいつから兄と呼ばれていたな」

呟くように小さな問いに俺が淡々と答えた瞬間、お嬢は顔を上げ俺をキッと睨むと、激情を吐き出す。

他でもない親友の為に…

「…何故…何故舞に何も知らせずに家を出たのですか！？
何故舞に連絡の一つもしてあげなかったのですか！？」

「……………」

俺はお嬢の目を見返しながら、とりあえず黙っておく。

「舞とは中学校からの付き合いですが、よくあの子は貴方のことを話してくれました。楽しそうに、誇らしげに…しかし、決まって最後は寂しそうな、悲しそうな顔をするんです…貴方はあの子がどれだけ貴方を心配していたかわかりますか！？あの子がどれだけ貴方を慕っていたかわかりますか！？あの子が…」

「…優奈。少し落ち着きなさい」

「お祖父様…」

お嬢の勢いが増してきた所で、高宮の爺さんが宥めに入る。
周りの黒服、侍女連中は啞然としている。

恐らくは普段温厚な彼女が怒っている姿を初めて見たからであろうと、推測しておく。

「どうやらその舞君とやらは勘違いをしているらしい…彼は何も自分の意思で家を出たわけでもなく、ましてや修行に出たわけでもない」

「…どういことですか？」

「…おいコラ待てや」

何やら暴露話をされそうな予感がして咎めてみる。

「資料によれば彼は…6年前に鳳家から追放されているのだよ…無能を理由としてな…」

しかし、スルーされる。
人権って何なんだろう

「追、放…？しかし舞は海外に修行しに行っただけと言っていましたか…？」

「………」

それは恐らくあいつは外武錬をそのまんまの意味で捉えているからだろう。

俺は鳳の姓に相応しい力を付ける為に海外へ武者修行をしに行った、と…

その本当の意味を理解しないで…

そして尚も続く暴露話。

本当にどこから仕入れてきたと不思議に思う程、正確な情報で、俺は高宮の情報網の広さに戦慄を覚えていた。

「…ごめんなさい。貴方のことを何も理解しないで一方的に怒鳴り散らしてしまつて…」

俺の強制海外旅立ちの話を一通り聞き終えたお嬢は、先程の勢いはどこへやら、しゅんと気落ちしたした表情で謝ってくる。

こういう湿った空気が嫌いな俺は肩を竦ませながら答える。

「気にしてねえよ。結果的にあいつを悲しませたのは事実だ。

ま、それよりも、俺はあいつの為に全力で怒ってくれる奴を見て安心したがね。

どうやらあいつはいい友人を持ったようだな…これからもあいつを支えてやってくれや」

「…ハイ！」

俺の笑いながらの言葉にお嬢はしっかりと返事をした。

それを高宮の爺さんは微笑ましそうに眺めている。

「よし、話が纏まつた所で俺は行くわ。報酬は3日以内に俺の口座に入れといてくれ。さもなくば物理的にあんたの会社全て潰してやるから。んじゃ」

「だから待ちなさい」

そう言つて抜け出すチャンス到来！と、言わんばかりにそそくさと立ち去ろうとするが、案の定止められる。

うん、どうでもいいが、俺が帰ろうとするたびにお嬢が悲しげな顔をするのは正直止めて貰いたいね。

大分磨り減っている筈の良心にチクチクくる。

「話が十分逸れてしまったね。君の経歴を見ると、君は小学校、中学校共に出ていない。

高校ぐらい出ていた方が良く私は思うが？」

その言葉を聞いて先程まで悲しそうな顔をしていたお嬢の表情が少し明るくなる。

現金だな、オイ

「経歴なんぞ偽造でいくらでも誤魔化せる。それに一応博士号ぐらいは取得しているから問題無い」

しかし俺は高宮の爺さんの誘いを遠回しに拒否する。

学院なぞ今更行く必要性を感じないからだ。

「…君自身気付いていないかもしれないが、君はその歳不相応に達観しすぎている。甘えられない環境で生活し、更に過酷な環境で育ってきた為にそうなってしまったのだろうが、今の君は危うい…どこかで羽を休めないといつか壊れてしまう…」

「……………」

「老いばれの老婆心だと思って。一つ学生として、子供として生活するのも良いと私は思うが？」

爺さんの目と言葉には説得力があった。

正直ここまで気を遣ってくれる高宮の爺さんに有り難く思う…しかし

「ハア、その気持ちは素直にありがたいと思うが、経歴知ってんなら尚更止めとけよ。

俺あ足こそ付いちゃいねえが、出るとこ出りやあ立派な犯罪者だ。一応それは俺の『位』によって半ば許されてはいるが、それでもそんなのが学院にいることがバレたらパニックに陥ると思うが？」

俺は皮肉気に笑いながら返答する。

位とは二つ名を与えられた魔導士…いわば一流の魔導士の中で、更に魔導士としての力を格付けしたものだ。

位は十ゝ一位、その上に天壤之五ゝ一位があり、数が若い程位が高く、天壤之位の魔導士は魔王と呼ばれるようになり、様々な権限を与えられる。

位が高ければ高い程ある程度の規則はあるが、それを守れば大抵のことをやっても許される。

例えば位の高い者は、政府と魔法協議会が納得できる理由さえあれば人を虐殺しても、街を半壊させても罪にはならない…など。

まあ、流石に政府と魔法協議会連中も上位の連中を敵に回したくないため、規則は大分緩いかな。

俺は海外でいろいろ手を回したお陰で政府と協議会との繋がりがあり、尚且つ仕事のお得意様が政府と協議会のお偉いさん連中が大半

などの理由により、犯した罪は大体もみ消されている。

「大体そんな汚れた存在を健全な生徒達の中に紛れ込ませていいのかい。高宮龍之介理事長さん？

知ってるか？リンゴ箱の中に腐ったリンゴを入れると周りも腐るって話。

クツハハハハ！

誰が腐ったリンゴだグラア！？」

ううむ…キレが悪いな、セルフノリツツコミ…周りの連中ドン引きしとる…

「しかしだね…」

「少しいいですか、煉？」

尚も説得してこようとしてくる高宮の爺さんを遮り、お嬢が声を掛けてくる。

「何だ？」

「この一週間、楽しかったですね？」

「んあ？何だ藪から棒に」

「答えて下さい」

お嬢の質問の意図がわからず、内心首を傾げながら一応素直に答える

「？…まあ、刺激こそ無かったが、なかなか楽しめたな…それが

「？」

「そうですか。なら、私からの依頼です」

「依頼？」

真摯な目で此方を見ながらお嬢は俺に依頼内容を提示する。

「この学院に、卒業まで滞在してください」

「…あ？」

…いきなり何を言い出すかこのお嬢様は。

高宮の爺さんも同じ様な心境らしく、呆れたような目でお嬢を見ている。

「依頼なら、貴方は学院に留まらなければいけませんよね？」

「…まあ、確かにそうだが…一応聞いてやる。」

その俺を馬鹿にしているようなふざけた依頼の報酬は何だ？」

俺は声音を仕事時の冷たいモノへと切り替え、お嬢の目を冷たく見据える。

しかしお嬢はそれに臆する様子はない。

「報酬は…沢山の思い出です」

「……………はい？」

思わず間の抜けた声が漏れる。

それに構わずお嬢は言葉を紡ぐ。

「この学院には沢山の行事があります。その中には煉の言う刺激的なモノもある筈です。

それを私達と一緒に楽しみ、忘れられない思い出を作りましょう。それが報酬です」

それを聞いた俺は…

「ク、クク、クハハ、クハハハハハハハハハハ！ハァーッハハハハハハハ！…！」

勿論、爆笑した。

「な、なんですか？」

「ククク、いやいや、思い出ねえ。こんなふざけた依頼と報酬を提示してきた奴は初めてだ。それに、碌に友達もない奴の台詞じゃねえわな」

「なっ！」

俺の言葉に、心外な！みたいな感じでお嬢は仰け反るが、背後の黒服&侍女連中は頻りに頷いている。

「クッハハハハ！…しっかし、やっぱアンタは面白えわ。

こんな依頼が通るとマジで思っついていやがる…

…そんなアンタと一緒にいれば確かに退屈せずには済みそうだな…」

「え…それじゃあ…！」

笑いすぎて出てきた涙を拭いながら呟くと、それを聞いたお嬢が期待の込もった眼差しで俺を見る。

俺はそれに答えるようにハッキリと言葉を紡ぐ。

「つたく。柄にも無く想像しちまったじゃねえか…」

お嬢や舞や翼達との楽しい未来ってやつを…

「ああ、実にふざけていてどう考えても俺にメリットは無いが、それに乗るのもまた一興。ある程度条件付けさせてもらうが、それでいいなら受けてやる」

正直、ここで断ればそれはそれで面白いモノが見れそうと一瞬考えたが、そんなことをしたら背後の連中が黙ってなさそうだし、何より高宮の爺さんが何をやらすかわからなかったので、止めておいた。

「本当ですか!？」

そんなことを考えていた手前、お嬢の歡喜に満ち溢れた顔を直視できず、視線を高宮の爺さんに移しながら頷く。

まあ、俺もあそこでの生活は嫌いじゃないしな

「二言は無えよ。つーわけだ。いろいろと渋っていたが、お望み通り学院に滞在してやるよ」

俺はそう言って高宮の爺さんに手を差し出す。

「フツ、そうか。」

なら理事長として歓迎の言葉を授けよう。

ようこそ、ルミナス魔法学院へ。

ここで友や先達と共に沢山の忘れられない思い出を作ってくれたまえ」

「ま、しばらく世話になるわ」

高宮の爺さんは俺の手に先程渡した制服を持たせると、退学届けをビリビリと破り捨てた。

俺は制服の上だけを羽織り、出口へ向かって歩き出し、すれ違いざまにお嬢の頭に手をポンと乗せて、耳元で囁く。

「あんなふざけた内容の依頼をこの俺に出したんだ。精々俺を楽しませて、思い出とやらを沢山くれよ？ 優奈」

「勿論です…え、今名前で…？」

お嬢が何かを言っているが、俺は気にせず学院まで『^{ゲート}門』を開き、そのまま中へ入っていく。

学院生活、か。楽しませてもらいますか。

俺は知らず知らずのうちに笑みを浮かべながら、移動して目の前に現れた学院を見上げる。

「うん、とりあえず今日も絶好のサボり日和だな」

そう呟いて、俺は寮へと向かった。

ちなみにこの後俺は、昨日放置しっぱなしにしてしまった村園女史に捕まり、攻撃のフルコースを再び喰らうのだった。

オマケ

「行っちゃいました…」

謎の門に入ってしまった煉の姿を見送った後呟く。

いま考えてみると、私は大分図々しいことを頼んだ気がする。

あの時の私は、彼が私達の前からいなくなる…そのことを考えたら切なくなり、いてもたってもいられず、あのような依頼を出してしまったのだ。

正直断られたらどうしようドキドキしていたし、こんなに積極的になったのは初めてのことだった。

そして、彼が笑顔で承諾してくれたのを見て、胸の内が満たされた感じがした。

彼に名前を呼ばれた時は悲しみとは違う切なさがかみ上げてきて、胸が大きく高鳴った。

こんな感覚は生まれて初めての経験だ。

ふと、彼に手を置かれた頭を自分で無意識に撫でる。

とても大きく、暖かい手でしたね…

私は彼の温もりと、胸にの高鳴りの余韻に暫く浸ったのであった。温室で大事に育てられた少女はその感情の正体にまだ気付かない…しかし、近い未来にその感情を自覚することになるのだが…それはまた別のお話である

12話（修）（後書き）

門^{ゲート}

属性、空間

位、？

空間転移魔法

自分の現在地の座標と、目的地の座標の空間を繋ぐことにより、目的地へ瞬時に移動することのできる魔法。
例によって消費魔力量は大きい。

二つ名

一流と認められた魔導士に与えられる、己の本質を顕す名。

裏話

村園が優奈をとても気にかけていた理由。

去年、新人教師としてルミナス魔法学院に来た村園は、初めての教員生活に緊張しっぱなしで失敗ばかりしていた。

彼女はそんな自分を情けなく思い、深く落ち込んだ。

しかし、そんな彼女を優しく励まし、元気づけてくれた存在が優奈だった。

村園はそのお陰で自信を持て、仕事で失敗しなくなった。

だから優奈に恩義を感じている彼女は、彼女がストーカーに悩んでいることを知り、彼女を守り恩返ししようと考えたのだった。

結果は空回りだったが…

主人公設定：12話終了時（前書き）

インスピレーションの赴くままに煉夜のイメージを絵に書き、とりあえず載っけてみました。

人によっては煉夜のイメージが崩れてしまうかもしれませんが、絵が必要無いなら言ってください。

この主人公設定は、物語に進展があることに内容が付け加えられていきます。

もしかしたら他のキャラも書くかもしれませんが、今は煉夜だけです。あしからず

主人公設定：12話終了時

「白神 煉夜」

身長 178?

属性 創造 空間 ? ?

魔力値 二億

二つ名「神域」

位：?

容姿：目つきの悪い白髪銀眼の美形

性格：飄々

本名 鳳 煉夜。かつて魔導師の名門、鳳家の宗家に生まれるも、魔法の才能が全く無く、一族の大半から蔑まれ、海外追放された過去を持つ。

基本的にマイペースで面白い事を好み面倒事を嫌い、危ない橋は全力で突つ走るか無視をしる。をポリシーとしている
海外で多くの技能を身に付けているため大抵のことなら何でもこなせる。

魔法、体術の腕に関しては世界屈指の実力を誇り、超人的な身体能力と様々な特殊技能を持つ。

現在は高宮優奈の依頼：というよりお願いにより、ルミナス魔法学院高等部1年A組に在籍している。

> i 1 1 1 1 0 4 — 1 5 8 9 <

煉「…普通にチャラ男にしか見えないんだが…」

主人公設定：12話終了時（後書き）

次回

煉夜の弟、鳳 雅也

舞の姉、鳳 咲夜

登場！…予定

13話（前書き）

久々の学園パートだったので、テンションが上がり、長くなってしまいましたぜ…

今回はギャグ多めに書き、所々伏線っぽいモノもいれてみました。

新キャラも数人出てきます。

裏話：ストーリーカー編の犯人は、当初は翼にする予定だったのですが、翼が予想以上に扱いやすく、個人的に気に入ってしまったので、急遽犯人を変えてしまいました…

13話

一部の人間を騒がせたストーカー事件は無事に幕を下ろした。

そのことについて村園女史と、舞には高宮の爺さんが何とかしたと伝えた。

本当のことを伝えたら、二人はその現場にいなかったことを悔いるだろうし、何より俺の立場やらなんやらがややこしくなりそうで、俺はそれを嫌ったから伝えなかった。

舞はそのことに関して素直に喜んだが、村園女史は俺を訝しんでいた。

恐らく俺が何かしたと勘付いているのだろうが、特に何も言ってこなかったし、何も行動していないようなので、放置しておくことに。

そして俺が、お嬢のふざけているが、実は非常に面倒な依頼を受けてから2日の時が経った。

俺は楽しい学院生活をエンジョイするべく、まずはゆるりと交友の輪を広げることにした。

前までは依頼の為、必要以上に接しなかった奴らにさり気なく、だが確実に接する機会を増やしていき、翼の人脈のお陰もあり、2日で俺の交友の輪は一気に広がった。

こういう時本当にアイツの存在に感謝する。

とりあえずはそんな感じで、俺はのんびりと学院生活を満喫していた。

そして現在は昼休み。

俺と翼は昼飯を食いに、俺お気に入りスポットである屋上へ向かって歩いていた。

仲良くなった友人達は先に屋上に行っており、俺達は購買で買い物をしていた為、遅れて屋上へ向かっているのだ。

ちなみに俺の昼飯は、俺お手製の弁当と先程自販機で買った緑茶で、

翼は購買で買ったパン数個とコーヒー牛乳だ。

「いやあゝ、大量大量！」

ほくほく顔をした翼は機嫌良さに、戦利品であるパンが入った袋を掲げてみせる。

翼の体にはあちこち擦り傷や打撲の痕である痣が所々にあり、俺はそんなザマのコイツを見て呆れながら呟く。

「やれやれ、購買つてのはあんなに荒れているモンなのか……」

そして、先程の光景を思い出す。

この学院の購買部はとても飲食物の種類が充実している。しかし、人気商品には勿論限りがあり、競争率も高い。

今までお嬢の警護を兼ねて学食で飯を食べていた俺は、今日初めて見た光景に呆気にとられた。

「どけえ！」

「てめえがどけえ！黒豚カツサンドは渡さねえ！」

「フハハハハ！温い！温いぞ貴様らあ！」

「ちよつとあんた達邪魔よ！」

「ああ、もう！鬱陶しい！喰らいなさい！」

『彼の者を焼き払え！ファイアーボール！』

「ちよ！？魔法がこつちに……」

ギヤアアアアアアア！！？

…そこは購買ではなく戦場だったのだ…

先輩後輩男女問わず凄惨な人数の生徒達が購買に向かって全力で突っ込んでいき、その際に拳や足が飛び出るわ、魔法が飛び交うわ…その光景はまさに阿鼻叫喚の地獄絵図。そして、そんな暴徒を無駄なく淡々と捌く購買のおばちゃん…

俺はそんなシュールな光景を購買の近くにある自販機の側で呆れ半分、面白半分で眺めていた。

ちなみにその光景を見て、昔見たことがあった餌に群がるゴブリンの集団を思い出したのは内緒の話だ。

…話が逸れたな。その戦場で身体能力が高い翼は、先頭集団に何とか食らいついていき、傷つきながらも見事戦利品をもぎ取って帰還した…

と、まあそんなことがあったわけだ。

名門校のイメージが若干崩れたぞ、俺あ…

先程の醜い争いを思い出し、ややげんなりとする。

そっぴゃあ…

俺は暇つぶし程度の感覚でしかその光景を見ていなかったが、ふとその中に少しばかり印象深い光景があったのを思い出す。

それは、群がる生徒を獅子奮迅の如き勢いで蹴散らし、先頭を独走していた三年男子寮寮長、羽柴道利に付いていけていた長い銀髪ของ美しい女子がいたことだ。

羽柴は三年の中でも間違いなくトップクラスの実力者で、そんな奴の猛進に付いていけていたということは、あの銀髪の女も相当な実力者ということなのだろう。

あの羽柴の猛進に付いていける、か…：そっいや制服のリボンが赤色だったな。つーことはタメってことか…

その銀髪の女の制服からチラッと見えたりボンの色は赤色だった。この学院の制服は学年ごとに男子ならネクタイの、女子ならリボンの色が違う。

一年なら赤

二年なら青

三年なら緑といった風にだ。

ちなみに中等部は制服自体が高等部の制服と少し違うので、間違えることはない。

ふむ、…少しばかり興味が湧いてきたな。

暇な時にでも接触してみるかね。女子との交友はまだ少なえし

「煉」

「ん？」

歩きながらそんな思考していると、後方から声をかけられる。

振り返ってみると、周りの視線を釘付けにする2人の美少女が…お嬢と舞がそこにいた。

嫉妬と羨望の視線を受けながら、俺は2人に気軽に応える。

「ああ、お嬢に鳳か。どした？」

「いや、食堂に移動している途中でお前達を見かけたのでな」

「煉はもう昼食は食べましたか？」

「いんや、これからだ」

「ならご一緒に如何ですか？」

お嬢が微笑みながら朗らかに尋ねてくる。その笑顔は俺が入学した当初は想像できない程生き生きとしたもので、周囲の連中が見惚れる程に美しい。

やはりお嬢はストーカー騒ぎが無くなってから変わった…いや、これが本来のお嬢なのだろう。

それに伴って舞も以前までのピリピリとした空気が軟化し、最近優奈と一緒に笑顔でいることが多くなった…気がする。

ま、それはそれとしてお嬢よ。どうでもいいが、そういうことは翼にも聞いてやれ…横で寂しそうな顔してて気持ち悪いから。

横で何やら恨みがましくこちらを見ている翼を華麗にスルーし、俺はお嬢に返答する。

「悪いな、先客がいるんでね」

「そうですか。先客がいるならば仕方ありませんね」

そう言って少し寂しげに苦笑するお嬢。

「まあ、また今度誘ってくれや。

お嬢ほどの女に食事誘われるなんざ、男冥利に尽きるからな」

「フッフ、ありがとうございます、煉」

「さて、何故俺はお礼を言われてるのやら…」

「それは貴方が優しいからですよ」

そう言つて、顎に手を当てて考える振りをしている俺に、お嬢は柔らかに微笑む。

「…なあ、ちよつといいか？」

そこへ、先程まで空気だった翼が少し躊躇い気味に声をかけてくる。その翼の跡を継いで、舞が意を決したような表情で疑問を口にする。

「…2〜3日程前から気になっていたんだが…お前達のその呼び方は何だ？」

「呼び方？」

舞の問いに首を傾げるお嬢。

俺は大体察しがついたので、ここはお嬢に任せて傍観に徹することに。

「随分と親しげにお互いのことを呼び合っているじゃないか」

「おかしいことを言うのですね、舞は。」

親しげではなく、私達は既に親しい間柄なのですよ」

…そうなの？

と、思わず言いそうになるが、その言葉を辛うじて吞み込む。俺とて流石に空気ぐらいは読めるぞ。

「それはどういう…」

「てんめ、煉夜あ！！どういうことだゴルアア！？高宮ちゃんといつの間に、いつの間にそんな親密な仲にiiiiiiii!？」

若干不機嫌そうになった舞が更に質問しようとする、いきなり翼が俺の胸倉を掴み、叫びながらガックンガックンと揺さぶってくる。

うおー、視界があ、視界があー……

「さてな。ま、男と女の距離なんざ、ちょっとしたきっかけですぐに縮まるもんだぞ？」

例えば男が体を張って女を守ったりな。

あー、っーか酔う。よろっと酔う。マジで酔う……」

自分の顔が青ざめていつているのを感じながら、翼の腕をタップする。

それが通じたのか翼は揺するのを止めるが、今度は頭を抱え始める。

「ちくしょおおおお！！あの魔法授業の時か!？」

あの時、あの時煉夜より早く魔法に気付いていればあああああ!!」

そして雄叫びを上げるが如く、空に向かって悲痛な叫びを上げる

忙しいやつちやな…しかし、流石に騒ぎすぎたか…よろっと周囲の好奇心な視線もウザったいし…

逃げるか…

俺はとりあえず、未だに後ろで叫び声を上げている翼から他人の振りをしながら、さり気なく関係者に思われない程度の距離を取る。そしてそのまま逃げようとした所で、ふとあの銀髪の情報と同じ女子生徒であるお嬢…は期待してないからいいとして、舞なら持つて

いるのでは？と思い立ち、現在翼の奇行にドン引きしている2人に近付く。

「そっぴゃお二人さんよ。ちょいと聞きたいんだが、俺らとタメ…同じ学年で身体能力の高い銀髪の女知らねえか？」

タメの意味が通じなさそうだった為、言い直して二人に聞いてみる。

「銀髪？」

「……………」

俺の質問を聞いて、舞は顎に手を当てて思案顔になり、お嬢は何やら不機嫌そうな顔でこちらを見ている。

まあ、面倒そうなのでスルーさせてもらおう

「…その人に興味があるようですね、煉」

させてもらえなかった

お嬢はジト目でこちらを見ながら不満そうに唇を尖らせている。

気のせいかな、最近お嬢に思考パターンを読まれてる気がしないでもない

「多少な。ま、楽しい学院生活の為に交友は広げておこうと思ってね」

「楽しい学院生活、ですか…」

しかし俺の方針は変わらず、本音を適度に混ぜてあしらうことに。

楽しい学院生活の為と聞いて、お嬢は不満げではあったものの、それ以上は何も言ってこなかった。

そんなやりとりをしているうちに、思案顔をしていた舞が顎から手を離し、こちらに視線を移す。

「同じ年で銀髪で身体能力が高い…それは恐らくC組のフィリス・レインハーツのことだろう。

それがどうかしたのか？」

「レインハーツ…」

レインハーツ…たしか鳳程ではないが戦闘魔導士の名門だな。

そういや昔、依頼で共闘した騎士団の団長がレインハーツと名乗っていたな…っーことはあいつの親族ってことか？

騎士団というのは、二つ名持ちの魔導士によって編成されている、政府直属の国の警備部隊のことだ。主に魔物の討伐や魔導士による犯罪の取締りをしている、魔法を使う警察と軍隊を混ぜたような部隊といえわかりやすいだろうか？

おっと、話が逸れてしまったな。

「いや、さっき購買で見かけて面白そうな奴だと気になったんだ。実際どんな奴なんだ？」

「私はあまり交流が無いから詳しくはわからないが、いつも無口で大人しく、どこか周りを寄せ付けたがらないような雰囲気を持っている…そんな感じだ」

俺の質問に舞は言葉を選ぶようにして答える。

「へえ……なるほど。
情報提供感謝するぜ」

「ああ、
気にするな - ふえ!？」

そうやってつい舞の頭をわしゃわしゃと撫でてしまう。

…どうやら癖が再発したようだ…

俺達がまだ幼かった頃のある日、妹分である舞は俺の目の前で初めて魔法を成功させた。

その頃、まだ自分にも魔法が使えると思っていた俺は、先に魔法が使えた舞を羨みながらも、賞賛の意を込めて頭を撫でてやった。

舞はそれをえらく気に入ったらしく、以来、舞は何かいいことをする度に、褒美として毎回俺に頭を撫でることを要求してくるようになった。

それを繰り返しているうちに、俺は舞が何かする度に頭を撫でる癖が付いてしまったのだ。

舞は最初こそ戸惑っていたが、懐かしい感覚に襲われたのか次第に安心した表情になっていき、今はされるがままになっている。

俺はそんな舞の様子を見ながら

フッフ、これでも6年前までは毎日のように撫でていた頭だ。

こいつの好む撫で方など感覚的に覚えておるわ!!!

見よ、この安心しきった顔を！フハーツハツハツハ！！！！

などと調子に乗っていた……

が、
本音は

ノリと癖でやっちまったが、舞は俺の正体を知らないわけだから今

手を離したら十中八九照れ隠しと怒りによる高火力魔法を叩き込まれてしまう…!!

と、内心己の迂闊さを呪いながらガクブルしていた。

だって、コイツの火力普通にヤベェもん…

魔法使えない設定継続中の俺からしたら荷が重過ぎる…

そこへ舞い降りる救いの女神。

「舞、そろそろ行かないと席が取れなくなってしまいますよ?」

お嬢きた!お嬢きた!これで勝つる!

…前にもこんなネタしたような…

「……ハツ!!そ、そうだな、急がなければいけないな、それじゃあ私は先に行つて席をとっていることにしよう!では!」

「ぐふおう!!?」

舞は我に返り早口に捲くし立てると、凄い勢いで走り去っていった…さりげなく俺の鳩尾に肘を叩き込んで…

「ふ、流石は我が妹…先の一撃に一点の濁りもなかったわ…そのまま精進するがよい…」

俺は己を超えた弟子を、慈愛に満ちた目で見守る老い先短い師匠のような口調で呟くと、そのまま床に膝を着いた。

「ごまあwww」

どうやら翼が発狂状態から復活したようで、こちらを指差しながら笑っている。

：多少イラつときたので、先ほど何となくスっておいた、こいつの大好物である黒豚カツサンドとコーヒー牛乳を、後で容赦無く喰らっておくでしょう…

空腹状態で好物を食えない悔しさと、パンを水分無しに食うことにより襲い来る渴きに絶望するがいい！！

そんなささやかな反撃を胸中で考えていると、お嬢が手を差し伸べてくる。

「大丈夫ですか、煉？」

「ああ、問題ねえよ、このぐらい」

そう言つて、俺はお嬢の手を借りずにスクツと立ちあがる。

そのことに不満げな顔をするお嬢に、俺は手をヒラヒラ振りながら笑みを見せる。

「ほれ、あんたもさっさと行きな。遅くなるとあいつが心配するぞ？」

「ええ、そうします……………」

そう言つた後、お嬢何はやら迷っているかのように、視線を彷徨わせる。

俺は次に出る言葉を予想しながら、黙ってお嬢を見る。

「…あの、煉…」

「お嬢、わかつているとは思うが、舞に俺のことは話すなよ？」

そして、意を決したように口を開くお嬢を、俺は用意していた言葉で遮る。

このやり取りは、実は二日前からしている。

お嬢はやはり、俺が舞に正体を明かさないのを納得していないようで、俺と舞が接するたびに説得してくるのだ。

「…しかし、それでは舞が…」

「俺は風来坊な『不』良である白神煉夜で、あいつが求めてんのは優しいお兄様である鳳煉夜だ。

そのお兄様が中身外見が変わり、今の俺みたいな野郎になっているのを知ったら、失望して傷つくだろうよ。

それはそれで面白そう…冗談だからそう睨むな」

お嬢の言葉を遮り、俺はお嬢の睨みを受けながら自嘲するかのよう
に薄く笑う

お嬢はこれ以上何を言っても無駄だと判断したのか、諦めたような
ため息を吐く。

「…わかりました。私からは何も言いません…しかし、一ついいで
すか？」

「何だ？」

「あまり舞を甘く見ないでください。

あの子は貴方が思っているよりもずっと強く成長していますよ。

それに、最近の舞は貴方と話しているとき、本人は気付いていない
でしょうが、とても明るい顔をしています。

先程もそうです。

先程貴方が舞の頭を撫でられている時、舞があそこまで安心しきった顔を、私は見たことはありません。

私は舞の話でしか昔の貴方を知りませんが、あの子は今の貴方でもきつと受け入れてくれますよ。
それでは」

お嬢はそう言つて慈愛に満ちた微笑を浮かべ、その場を去つて行つた。

「今の俺を受け入れてくれる、ねえ……」

俺はその背中を見送りながら小さく呟き、誰からも見られないよう薄く、酷薄に嘲笑を浮かべる。

「なあ、高宮ちゃんと何話してたんだ？」

そこへ、翼が手を頭の後ろに組みながらのんびりと聞いてくる。
俺は笑みを消し去り、いつも通りの表情を創り、答える。

「んあ？なんでもねえよ。

それよりさつさと飯食いに行こうぜ？
腹減つてしょうがねえ……」

「だな、あいつらも待つているだろうし、最後の一個だった黒豚力ツサンドも俺を待っているしな！！
ああ〜早く食いてえ〜！！」

「…そうか」

そう言つて、ウキウキしたようにパンの入った袋を振り回す翼に、俺はポケットの中にある黒豚カツサンドを弄びながら、生温かい笑みを向けるのであった。

再び屋上に向かうべく談笑しながら歩いていると、廊下の先に人だかりが出来ているのに気付く。

「…んだありゃ？」

「ああ、大方生徒会の人間とその関係者だろ。
よろつと行事も近いし、昼休みもそのお仕事つて所かな」

「…生徒会？」

俺の呟きに翼が答え、この学院に入ってから初めて聞いた単語を聞き返す。

「あれ？お前見たことないのか？」

「生憎な。まあ、特に興味も無かつたし」

「ふうん。ま、お前は転校してきてまだ一週間ちよいぐらいだからな。

わからなくても不思議でもないか。

生徒会つてのは、簡単に説明するならこの学院を取り仕切る、顔、成績、魔法の実力、全てが優れている完璧超人の集まりつてとこだな。

生徒会長、副会長、書記の娘は見ておいて損は無いぞー！特に副会

長はな……」

「へえ、全てが優れている、ねえ……」

何やら横で熱弁し始めた翼を無視し、少々興味が湧いたので人だかりの中心で、顔を不機嫌そうにしかめながら何やら指示を飛ばしている男を遠目から観察してみることに。

身長は170後半ぐらい。

赤髪オールバックで、端正な容姿に黒縁メガネをかけており、知的な印象を受ける。

魔力は……100000ちよって所か。

身のこなしからして多少武術の経験はありって感じかね。

「ありゃあ、2年の男子副会長、沢白先輩だな……」

つい癖で観察から分析に移行していると、いつにまにか説明を止めていた翼が、つまらなそうな様子で呟く。

大方、女子の生徒会役員を期待していたのだろう。

「へえ、あれが副会長ね……ま、もうどうでもいいな。行くぞ、翼」

「ああ、そうだな。」

男の生徒会役員に興味なんて無いしな」

俺は沢白とやらに対する興味が失せたので、翼と噛み合わない会話をしながら人混みの横に空いている道を通ろうとする。すると、俺の肩が副会長にぶつかってしまう。

「あ、わり」

おざなりだが一応謝罪をし、特に気にせずそのまま去ろうとする。
しかし

「待て貴様、人にぶつかっておいて何だその態度は？嘗めているのか」

なんか絡まれた。

俺は足を止め、此方を睨んでいる赤髪眼鏡に視線を移す。

「一応謝罪はしたはずだが？」

「誠意が込もっていない。」

そんな形だけの謝罪で納得できているのか？」

その言葉と態度でなんとなく理解する。

どうやらこの男は仕事の忙しさ故か苛立っており、ちょうどぶつかってきた俺を、八つ当たりするための力モに選んだのだろう。

全く持つて迷惑極まりなく面倒くさい…

少しからかうか

「さて、この世に肩がぶつかった程度で、真に誠意を込めて謝罪できる人間が果たして何人いるのやら…」

そうは言って俺は大袈裟に肩を竦める

案の定苛立たし気に眉を吊り上げる赤髪眼鏡

「貴様：俺を馬鹿にしているのか？」

俺は先輩で生徒会副会長だぞ？

口の利き方には気をつける、一年」

視線を鋭くし、威圧の真似事をしてくる赤髪眼鏡。

俺は親善大使だ……いや、なんでもない。なんとなく思い浮かんだだけだ……

それにしても面倒だな……ちやちやと済みますか。

「ああ、副会長でしたか、これは失礼。

貴方如きを敬う気なぞさらさらありませんが、副会長殿が言うならばなら仕方ありませんね。

先程は副会長殿に私のような下賤な者がぶつかってしまい、誠に失礼致しました」

俺は嘲笑を浮かべながら床に片膝を着き、わざとらしい程恭しく頭を下げる。

この光景を、何も知らないギャラリーは怪訝そうに赤髪眼鏡に視線を向けている。

周囲からこの光景がどんな風に見られているか多少気になるところだ。

「くっ……！貴様ふざけやがって、そこに直れ！俺直々に指導してやる……！」

怒りに顔を髪の毛と同じ色に染め上げ、手を俺に突き出し魔力を溜め始める赤髪眼鏡。

周りはそれを見て、ざわめき慌てふためく。

そんな中俺はというと……

「嫌あ……、調教されるう……」

『！っ……』

ここまでくると逆に素晴らしいのではないかと思える程の棒読みで……且つ辺り全体に聞こえる声で俺は声を上げる。

予想通りその場は更に混乱し、赤髪眼鏡に至っては怒り、焦り、戸惑いにより相当テンパッている。

ちなみに、俺のこの迂闊な行動により、後に一部の女子から『白×沢』や『沢×白』などと騒がれることになるのだが……まあ、それは置いておこう。考えたくもない……

話がまた逸れたが、俺はこの混乱に乗じて逃げようとするが

「き、き、貴様……もう許さん……！！塵も残さず吹き飛んでしまえ……！！」

赤髪眼鏡に気付かれ、手を突き出される。

手に溜めた魔力は、明らかに周りにも被害がでる程に溜まっており、目が血走っているのがわかる。

からかいすぎたか……っ！か短気すぎだろ……

などと思いながらも、よろっと危険と判断し、赤髪眼鏡を気絶させるべく手刀をつくる。

そこへ

「どうされましたか、沢白さん？」

優しいげな、それでいて凜とした力のある声が聞こえてくる。

そのどこか聞き覚えのある、懐かしい声音に俺は立ち上がり、赤髪眼鏡を無視して振り向く。

儚げで透き通るような雪肌で、腰ほどにもあるまっすぐに艶やかな黒髪。モデルも裸足で逃げ出すような美貌に均整のとれた体。

そして、他を圧倒する程の強大な魔力と、全てを優しく包み込むような柔らかな雰囲気。

皆が彼女の登場に息を呑み静まり返る中、俺だけは、この人は変わらないな、と無意識にフツと笑みをこぼす。

そこには鳳家次期宗主にして、俺の姉貴分である美少女。

鳳咲夜が立っていた。

「あ、ああ、いや、そ、そのだなあ、鳳…」

我に返った副会長が、先程の俺に対する態度から一変。

顔を違う意味で真っ赤にしながら、しどろもどろになりながら説明し始める。

その様子を見て俺はニヤリと笑う。

ククク、なるほど。コイツは高嶺の花に心奪われた男ってところか
念の為咲夜から距離を取りたいが、今動けば確実に咲夜の意識は此方に向くだろうし、気配を消せば逃げれるだろうが、精神的に疲れるからやりたくない。

結果、赤髪眼鏡の弱みでも握っておくこと。

携帯でこのあたふたしている姿を写真に写すか、それとも上擦りま
つくている声を録音しようか迷うな…

そんなことを考えているうちに、話は進み、赤髪眼鏡は話を逸らす
うと話題を変えようとする。

「お、鳳はどうしたんだ？仕事は？」

「私は仕事がひと段落着いたので、これから昼食を…」

咲夜はそこまで言葉を紡ぐと、不意に此方に視線を向けて、固まる。

何やら呆然とこちらの顔を見ているようだ。

…気付かれたか？いや、それはないか。

自分で言うのも何だが、昔の俺は黒髪黒眼で、穏和で優しい顔をしていた。

しかし、今の俺は白髪銀眼で、はつきり言っただけの目つきの悪い悪人面だ。舞が気付かなかったのだから咲夜も…

「れ、れ、煉夜あ！！！」

「ぐほあっ！！！」

そこまで考えた所で、咲夜が俺に勢いよく抱きついてきた。

「ああ、会いとうございました、愛しき弟よ！！」

6年前、いきなり日向さんがあなたを外武錬に出したと言い出したのですから、姉は心配したのですよ！？しかし帰ってきてくれて私は本当に嬉しく思います！！」

先程までの毅然とした態度から一変。涙目で甘えるように俺の胸に頭をグリグリとこすりつける咲夜。

落ち着いた雰囲気と行動とのギャップがなんともまあ…

ちなみに日向とは俺の親父の名前だ。クソッ、思い出さなくてもない名前を思い出しちゃった。

それにしても、どうしようか…速攻でバレちゃった。

しかもご丁寧に姉弟発言までしゃがって…

この様子じゃあ、俺は別人ですって言っても聞かないだろうし、何より周囲の目が痛い。

「姉…弟…？」

「ああ、咲夜様があのような目つきの凶悪な暴漢に…」

「高宮さんだけじゃあ飽きたらず副会長とまで…」

「そついえば舞さんとも仲良かったよな…」

「リア充爆発しろ」

「いつそのこと俺の手で…」

「いや、俺が…」

「なら止めは私が…」

……

「退くぞ！翼！！」

「え、退くの！？つか、お前鳳先輩と…」

「説明は後だ！そして此処は戦場だ！！

背を見せたらワンショットキルされっぞ！？」

「ワンショットキル！？つか現在進行形で背中見せてんぞ！？」

ああもう！！お前マジで後で説明しろよ！？」

俺は翼とギャーギャーと口早に言い合いながら、咲夜の拘束からスルリと抜け出し、全力で逃走を開始する。

「あ、待つのです煉夜！廊下は走ってはいけません！！」

… 6年振りに再会した弟が逃走して言う言葉がそれかよ？

そつ心の中でツツコンでいると…

「逃げたぞ！！奴らを追ええええええええええ！！！！」

『うおおおおおおおお！！！！！！！！！！』

何故か沢白副会長を筆頭とした周りいたに生徒…否、暴徒達が俺達を追ってくる。

今此処に、リアル鬼ごっこが開始された。

『彼の者を焼き払え…ファイアーボール!!』

『風の精の気紛れな拳…ウィンディ・フィスト!!』

背後から俺達に向かって飛来してくる火の玉と風の礫。それらを俺は経験と感覚で、翼は勘で避ける。

「うおっ！今あいつら魔法使ってきたぞ!？」

「伊達に超名門じゃねえな…一撃一撃の魔力密度が…」

「てめえ冷静に分析してる場合か煉夜あ!?!どうすんだよこの状況!?!」

激しくなる暴徒の攻撃を器用に避けながら、頭を抱える翼。それでももしかりパンを守れているのは流石だと思う。チラッと背後を見る。

俺達クラスの身体能力の人間は向こうにいないようで、追いつかれではないが、此方は魔法を躲しながら走っているため走る速度が落ち、奴らを振り切れない。

このままじゃあジリ貧だな…さて…

そして、少し考えた所で不意に閃く。

「つーか俺関係無かったじゃん!あきらかにとばっちりじゃん!？」

「落ち着け翼、まだ慌てるような時間じゃない…
俺に策がある」

「全部お前のせいだな！
まあ、この際逃げられるならなんでもいい！
で、その策ってのは！？」

「よし、あそこに曲がり道があるだろ？そこでだな…」

俺は走りながら素直に話を聞く姿勢になる翼を見て一つ頷くと、前方にある曲がり角を指差す。

翼はその指の先にある曲がり道に意識が向く…その瞬間

「スケープゴート投入！！」

「なっ！！？」

俺は翼の足を払った。

意識が前に向いていた翼は、下からの強襲により転倒する。
これぞ我が策：『The 裏切り！！』

「言った筈だ、翼…此処は戦場だと…」

仲間がいつまでも仲間であるなんて限らないんだぜ…？」

「ちょ、煉夜てめえ！！いやあああああ！！！！」

俺は振り返ること無く前だけを見て走る。

そして背後から聞こえてくる爆音と怨嗟混じりの断末魔。
翼は犠牲になったのだ…

成仏しろよ、翼：骨は拾ってやらんこともないから…

心の中で翼に合掌し、道を曲がろうとしたところで、茶髪の中等部の少年とぶつかりそうになる。

普通の奴ならこのままぶつかるだろう。

しかし、俺は反射的に体を捻り回避行動を取る。

だが、相手も同じように避けようとしたらしく、避けた方向が一緒になる。

へえ、あのタイミングから避けるようとするか。…だが

ぶつかる直前、俺はそこから更に逆方向に体を捻り、相手を抜き去ろうとする。

しかし、目の前には相手の姿が。

あそこから更に避けるだと？やるねえ。

相手は俺が同じ様な行動をするとは思っていなかったらしく、驚いたように目を見開き、その後衝撃に備え目を瞑る。

ま、いい動きだったが、そこで目を瞑るようじゃあまだまだな。

俺は少年とぶつかる直前、体を捻った勢いを利用して跳躍し、空中で足を半円を描くように体勢変え、少年の頭を飛び越える。

これまでのやり取り、1秒弱。

俺は着地すると勢いを殺さぬまま再び走り始める。

そして去り際に、何が起きたか分からないような表情をしている少年に賞賛を送る。

「いい動きするじゃねえの、頑張れよ若人！！」

お兄さんは現在進行形で頑張ってるからあああ！！」

「え？あ、ちよつと待…」

「ちよ、てめえ待ちやがれ煉夜あ！！」

少年の言葉を遮りどうやら上手く逃げられたらしい、ボロボロになった翼が声を上げながら並走してくる。それでもしっかりパンを（ry

俺はそんな翼を見て、あからさまに溜め息を吐く。

「んあ？何だ、生きてたのか翼。

つたく、囧は囧らしく時間でも稼いでろや…」

「ハッハッハ！いいよね？キレていいよね？

今の俺ならカツとなって人を殺めた犯罪者の気持ちわかるぞ？」

「ハイハイ、ワロスワロス」

「殺おす！！てめえだけは今俺の手で殺おす！！」

「面白え、殺つてみろやグレアアアア！！？」

「カツとなつて殺りますうううう！！！！」

お互いに走りながら胸倉を？み、そして小競り合いをしながら更に速度を上げ、屋上まで一気に駆け上がる妙なテンションの俺達。

このとき俺は気付かなかった

「今のは、まさか…兄さん…？」

遠ざかる白髪を見つめる、先程ぶつかりそうになった『弟』がそう
呟いたことを…

13話（後書き）

となラー（隣のラーメン屋略）夏のキャラ祭り到来！
今回は名無しを含めて4人の新キャラが出て来ました。

もう少し出す予定ですが、一応翼も沢白もそれなりに設定があるので、設定のあるキャラを作るのは結構キツイです…

それに加え行事もかんがえなきゃいけないし…

ま、泣き言はこれまでにして、とりあえず新キャラ候補のイメージです

ヒロイン候補

天才型ダルデレ

素直クーデレ

飄々

天真爛漫

世話焼きお姉ちゃん

幽霊、ドラゴンなどの人外

従順

姉御肌

高飛車ツンデレお姫様

小動物系ロリ

*

男キャラ候補

高スペックナルシスト

堅物真面目いじられ

ノリの良い冷静馬鹿

万能イケメン

地味ツツコミ

ツンデレヤンキー

謎の多い飄々

渋い兄貴

と、こんな感じです。

案外多いな…

この作品は一応ハーレムを銘打ってますが、別に侍らすつもりもないので、とりあえず面白そうなら出してみようかと…

もし、出して欲しい属性があるなら感想に書いてドシドシ送ってください。

それではまたお会いできれば幸いです

14話（前書き）

まだまだ続く

となラー新キャラ祭り〜！

今回の話で三人新キャラプラスします。

設定にめちゃくちゃ悩んだせいで多少遅れましたが、楽しんでいってください。

今回も学園パート。

新キャラを加えて更にハチャメチャ！？ほのぼの！？
とりあえずギャグ！！

裏話「当初の咲夜の設定」

13話初登場時

咲「れ、れ、煉くう〜ん！！！！」

煉「ぐほあっ！！」

咲「会いたかったよお〜、煉くう〜ん！！

6年前、いきなり日向さんが君を外武錬に出したって言うてたから、お姉ちゃん心配したんだよ！？

でも、帰ってきてくれてよかったあ〜！！」

当初はお姉ちゃんキャラでした。

もう少し話が進んだら、別の小説として他作品ともクロスしてみたいですね。

ゼロ魔とかリリカルなのはとか：

14話

「ハア、ハア、ハア、撒いた、か…？」

「らしいな。」

「これで漸く飯が食える」

俺達はリアル鬼ごつこの鬼からなんとか逃げ切り、屋上の扉の前で一息吐いていた。

翼は息絶え絶えになりながら、床に座っており、俺は壁に背を預けながら翼の回復を待っている。

「ハア、ハア、つーか、何でお前は、あんな走って、ピンピン、してんだよ…？」

「俺はお前らみってに魔法が使えない分、身体能力のスペックは高いんだよ。」

「これだけなら羽柴にも負ける気はしねえな」

恨みがましくこちらを見上げる翼に、俺は手をヒラヒラと振りながら嘘混じりに答える。

それを聞いた翼はその場に寝転がり、悔しげに呟く。

「ああゝクツソ、体力には、自信、あつたんだがな…」

「まあ、あんだだけの距離全力で走れたんなら上出来だろ」

俺達は当初、屋上まで最短ルートで駆け上がるうとしたのだが、如何せん人数の差は大きく、俺達の行く手行く手を全て先回りされて

いたのだ。巧みな誘導によって…

指揮をしていたのは恐らくあの赤髪眼鏡だろう。

伊達に生徒会副会長ではないということか…

そのお陰で3キロ近く全力で走らされたからな…それも、階段上り下り含めて…

最終的には向こうの魔力が切れるか、此方のスタミナが切れるかの持久戦になり、俺達は迫り来る魔法の数々を凌ぎ、見事奴らに勝利したのだ。

ま、食前の運動くらいにはなったかね…

正直に言うならば、あの程度の連中を撒くのは容易い。

しかし、ここ2日間は人脈作りに精を出しすぎて、普段皆が寝静まった時間になっていた鍛錬を怠った感じがしていた為、あの場を利用して鍛錬代わりにさせて貰ったのだ。

「ま、鍛錬としては些か物足りなかったが…」

「何か、言ったか？」

「なんでもね。

それよりまだ休んでんのか。

昼休み終わんぞ？」

俺が自販機で買った緑茶と自分の弁当袋を弄びながら問うと、翼は一つ大きく息を吐き出し、ゆっくりと立ち上がる。

呼吸はもう整ったらしく、その表情は先程までとは違い、幾分かの余裕がある。

なかなかの回復力してるじゃねえか。伊達に浅黒い肌してねえな（？）

「ふうー、もう大丈夫だ。

よし、行こうか」

「あいよ」

俺は壁から背を放し、屋上への鉄製の扉に手を掛け、開く。
扉の先に出ると、雲一つ無い空から暖かく眩しい光が差し込んでくる。

正に快晴と呼ぶに相応しい天気だ。

「くあー、やべえいい天気だ…午後はここでサボるかな…」

その光に目を細めながら俺は軽く背伸びをする。

体の至る所が伸び、ほぐれていく感覚が心地よい。

穏やかに吹く風が庭園から花の香りを運んできて俺の心を落ち着かせる…うん、ガラじゃねえな。

「駄目に決まっているだろう」

そこへ、前方から声を掛けられる。

背伸びするのを止め、目を開いてみると、前方には茶髪で切れ長の目をした男が呆れた表情で立っていた。

この男の名は国重元春。くにしげもと はる

通称モト。

Dクラスの委員長をしており、翼とは昔馴染みで、翼曰わく親友。
モト曰わく腐れ縁らしい。

「まったく、来るのが遅いから様子を見に行くところだったぞ」

「悪い悪い。ちよいとハプニングに見舞われてな」

「…まあいい。それより早く食わないと昼休み終わっちゃうぞ?」

モトは一瞬怪訝そうな顔をするが、特に気にした様子も無く踵を返す。

「はいはい、っと、どうした翼?」

モトについていこうとしたところで、俺は翼がまだ屋上に入っていないことに気付き、そちらに目を向ける。

翼は何やら袋の中を覗いたまま膠着しているようだった。

「…れ…く……ンド…え」

「あ?」

少し様子を見てみると、翼が何か呟いているのがわかる。

しかし、声がか細すぎてうまく聞き取れない。

読唇術で読み取るうかと考えた所で…

「お、俺の…俺の黒豚カツサンドがねえんだよおおお!!?」

空へと悲痛な咆哮が放たれた。

翼はこの世の終わりのような顔をしており、吼えた後慌てた様子で袋を漁ったり、周囲を見回したりしている。

「何故だ！？確かにこの袋の中に入れていた筈だ！それなのに、それなのに……」

「逃げてる時にでも落としたんじゃないね？」

そんな状態の翼に、俺はポケットの中にある黒豚カツサンドを弄びながら、しれつと言う。

「さ、探してくる！」

お前らは先に食っててくれ！

チクシヨオオオオオ！！！！」

俺の言葉に反応したのか、翼は叫びながら物凄い勢いで階段を下りていった。

その後姿を俺達は呆れた様子で見送る。

「まったく、モグモグ、忙しい奴だな……モグモグ」

「同感だな。」

……で、お前が現在進行形で食っているソレは何だ？」

「黒豚カツサンド」

「……………」

「モグモグ……モグモグ……」

「よし、向こうで渚が腹を空かせて待っている。
いくぞ」

「ックン。」

あいよ。つーか、俺らが来るまで飯食わないでいたのか。
ハルハルやっさしい〜」

俺はK・カツサンドを飲み込むと、先を歩くモトをからかう。
そして期待通りの反応をするモト。

「なっ！？ち、違、これは渚が言い出したことで…！
というか、誰がハルハルだ！？誰が！？」

顔を真っ赤にしながら俺に詰め寄ってくるモト。
…お分かり戴けただろうが、一応説明しておこう。
彼はツンデレです。

俺は未だに否定の言葉を並べているモトの肩に手を置き、微笑する。

「ハイハイ、わかったから、行こうぜ？」

「なんだその『大丈夫、俺はちゃんと理解してるから…』みたいな
慈愛に満ちた視線は！？」

そんな感じで俺達はギャーギャー言い合いながら、もう一人の友人
の待つ場所へ移動した。

「白髪遅え…」

「ハッハッハ、悪い悪い。」

あれ？何かイントネーションおかしくね？」

備え付けられている円卓に突っ伏し、気怠そうに此方を見ってくる、
青く長い髪を後ろで括っている男の名は、ひいらぎなまき柊渚
E組に所属している、一応学年トップクラスの天才だ。

「もうね、ボクね、腹減りすぎてお腹と背中がファイナルフュージ
ョンしちまいそうなんですよ…
だから、その手に持った弁当袋の袋だけボクにください…」

…天才の筈だ

渚は顔を机に埋めながら何やら呟いている。

ツツコミどころ満載だなあ、オイ

…とりあえず……

「おいおい、やばいよこの子。

腹減りすぎていろいろ混乱しちまってるよ

早く何か食わせないと…」

「そう言いつつお前はお前で袋だけ渡すな！！」

俺は弁当袋の中身を取り出し、袋だけ渚に渡したところでモトに頭
を叩かれる。

ちなみに渚は、中等部時代に翼とモトと同じクラスになり、知り合
ったらしい。

「おや、そういえば桜木は？」

とりあえず席に座り、円卓に各々が昼飯を広げていると、渚は俺が
渡した袋を指を引っ掛けてクルクル回しながら聞いてくる。

「桜木？……ああ、翼か」

「お前今絶対翼の苗字忘れてただろ？」

「どうせ読者も忘れて……」

「ハイ、メタ発言禁止イイ！！」

モトはいきなり何を言っているのだろうか？
まあいい……

「翼なら、在りもしない幻想（K・カツサンド）を求めて飛び立ったのさ……翼だけにな……」

「うまくねーし、そげぶした張本人が何をほざきやがる。
……おい渚、何故肩を震わせている？」

冴えるモトのツツコミ

どうやらツボったらしく、机に突っ伏しながら肩を小刻みに震わせ
笑いを堪えている渚

そしてボケながらも淡々と飯を食う俺

そんな奇妙な空気を放つこの場に、更に浅黒い金髪の陰が……
……もう特定できたわ

「おう翼、見つかったか？」

フラフラと覚束ない足取りで此方に来る陰……翼に、気楽に声を掛ける。

モトがジト目でこちらを見ている気がしないでもないが、華麗にスルーしておこう

翼はそのまま席に座り、円卓に突っ伏す。

「はああああ………無かった……」

もう嫌だ。帰りたい……お腹痛いから帰る……」

「お前は嫌々学校に出てきた不登校児か……！」

「モト、その例え微妙にわかり難いわ」

俺は緑茶を飲みながら、ツツコむモトにのんびりとツツコむ。

すると、翼がいきなり鼻を動かしたかと思うと、不意に此方に視線を向ける

「ん！？気のせいかな煉夜から黒豚カツサンドの匂いが……」

「匂いわканの！？何か怖えええ！」

馬鹿な！俺は飯を食って更に緑茶まで飲んだのだぞ！？

それなのにK・カツサンドの匂いを特定するとは……

「ああ、桜木は好物の匂いに対しては犬並の嗅覚を発揮しますからね。」

その嗅覚により購買戦争で好物の位置を正確に捉えることから、彼は『購買の猟犬』という二つ名が……」

「呼吸をするかのように出鱈目を吐くのは止めような渚」

近くで何やら漫才をしている奴らがいるが、気にしない。

「まあ、それはいいとして、ほれ、コイツは俺自信作だから食ってみろ」

「んがっ！？」

俺はとりあえず本格的に怪しまれる前に、弁当からおかずを一品翼の口に叩き込み誤魔化すことにする。

「ムグムグ…こ、これは!？」

う・ま・い・ぞおおおおお!!!!」

俺の自信作を食った翼は席を立ち、波動砲を放たんばかりの勢いで叫ぶ。

その声で周りの生徒の肩がビクウツと跳ねたが、流石にフォローできないのでスルー

「なんなんだこれは…!? 甘く辛く、それでいて所々渋い苦味があり、味に深みがある…更に素材が強調し合っているというのに、調和してお互いがまるで喧嘩していない…!!」

…え? なんて?

翼のノリは料理漫画の意味不明な説明に首を傾げながらも、俺は話題が逸れたことにひとまず安堵する。

翼は俺の料理の美味さにヘヴン状態に陥っているからとりあえずは…

「フェヘヘアハハハハハ、ハア、ハア、ハア…」

…大丈夫だよな……?

目の前の惨状を見て、自分の料理の腕に初めて恐怖した今日この頃…

「ところでお前達はなんで遅れていたんですか? 何か下の方から凄いい音していましたか?」

今までのやり取りを興味無さ気に見ていた渚が、自前のパンを食べながら聞いてくる。

「んあ？別になんてこたあねえよ。

お嬢に飯誘われた後に雑談して、その後喧嘩売られて、暴徒とリアル鬼ごっこしてただけだ」

「どこがなんてことないか説明して貰いたいものだな…」

「随分と愉快的なハプニングに見舞われていたんですね、ボクも行っていればよかった」

モトは呆れ、渚は少し興味深そうに頬杖をつきながらフツ、と笑う。

「ところで、さっき出てきたお嬢つてのは誰なんです？呼び方からして親しい奴なんでしょうが…」

「ああ、お嬢つてのはアレだ、ウチのクラスの高宮優…」

「高宮さんだとう…！！」

貴様、白神い！どういうことだア！！？」

渚の質問に答えていると、途中で半狂乱状態になったモトが、俺に詰め寄り胸倉を掴んでガツクンガツクン揺さぶってくる。

視界があゝ、視界があゝゝ、何かデジャヴ…

「ああ？なにがだよ」

「お前がた、た、高宮さんに食事に誘われたということだ…！！」

何故お前が高宮さんと親しい!？」

「席が偶々隣つてのと、ちょっとしたきっかけが原因じゃね？
っくか酔う、マジで酔う、腹に飯入ってるから寧ろ吐く…腹の中で
飯がブレイクダンスを踊っている…」

顔が現在進行形で青くなっているだろう俺が、モトの腕をタップを
しながら答えると、それが通じたのかモトは揺するのを止め、今度
は頭を抱え始める。

「あれか!？高宮さんが危険な目にあったことで、少し噂になった
A、B組の魔法授業か!？
クソがアア!!!何故俺はC組なんだアア!!!？」

そして、空に向かって悲鳴のような咆哮を上げるモト。
まあ、彼はもうわかっていているとは思いますが、お嬢にベタ惚れです。
ハイ、どうでもいいですね。それよりも…

…またデジャヴが…っくか、流石は昔馴染み。
翼と行動パターンがまるで一緒だ。

そんなことを、翼からパクツたコーヒー牛乳を飲みながら考えてい
ると、モトの視線が此方に移る。

嫌な予感がしたので、持っていたコーヒー牛乳を渚に放る。
コーヒー牛乳を渚が無事にキャッチすると同時に、再びモトが詰め
寄ってくる。

「それで貴様は高宮さんの誘いを断ったというのか!？」

「断ったからここにいるんだろうが…少し冷静に…」

「馬鹿が！そこは誘いに乗って、その後俺を呼べばよかっただろうが！？」

宥める俺の言葉を遮りモトは俺の胸倉を掴み、至近距離から血走った目で睨んでくる。

…それは一応思い付いたが、翼からモトはお嬢に気があると聞いて、誘いに応じてても面白そうだったが、なんとなく、赤髪眼鏡と同じようなリアクションになりそうだったので断ってみたのだが、どうやら正解だったようだ。

これはこれで面白い。渚も肩小刻みに震わしてるし…

ま、断ってこんだけでかいリアクションだ。

応じてみたら案外もつと面白いリアクションに期待できるかもな…

そんなことを胸中で考えながら、とりあえず目の前の男をどうにかすることに…

「わかったから少し落ち着け。

次ぎ誘われたらお前も誘うから。

それでいいだろ？」

「本当だな！？約束だぞ！？」

嘔吐いたら針千本ガチで飲ませるからな！？」

「ペナルティー重っ…まあいいや。
わかったから離せ」

俺が適当に約束を了承すると、少しばかり冷静になったモトは一つ頷き、自分が座っていた席に戻る。

これで少しは空気が落ち着い…

「そうだ煉夜、お前鳳先輩に抱きつかれてたけどあれは…ぐふおう
！！？」

いつの間にかヘヴン状態から復帰していた翼は、パンを頬張りながら口を開く。

その翼の大声と内容で空気が一瞬凍り、周りの視線が集中しかけるが、俺は翼の腹部を円卓の下から蹴ることにより翼を黙らせ、生徒暴徒化の決定打を与えない。

翼は一瞬パンを吐き出しそうになるが、それを耐えたのは流石と言っ
ておこう…

まあ、それはどうでもいいとして、俺は渚とモトが此方を怪訝そう
に見ているがそれをスルーし、周りに聞こえるような声でフオー
する。

「ハッハッハ、寝言は寝て言おうか腐れガングロ金髪が。

鳳先輩が俺なんぞに抱き付く筈ないだろうが。

恥を知れ下郎が」

俺の言葉により周りの空気は軟化する。

罵倒で軟化する空気もどうかと思うが、どうやら冗談として判断さ
れたらしい。

俺はそれを確認すると、翼にだけ聴こえるように意志を込め、言霊
と化した言葉静かに呟く。

「大声で言っな阿呆が。

俺は二の舞を演じるつもりはねえぞ？」

未だに蹲っている翼は、俺の言葉を聞いて、意図を理解したのか頷
く。

翼も流石に食後リアル鬼ごっこは勘弁してほしいのだろう。

そんなことをしている間にチャイムが鳴り、そのまま昼休みは終了となった。

この後翼は慌ててパンを頬張るが、流し込むための水分が無いことに気付き、絶望することになるのだが、それは余談である。

「…確かに君は成績は異様に良いみたいだけど、それでもキチンと授業には出なさい。
わかった？」

「善処しよう」

「それは改善する気の無い人の常套句…ああ、もういい、君といると疲れる。
今日はもう帰っていいわ」

「職務怠慢か村園女史よ」

「誰のせいで居残っていると…大体君はねえ…」

「じゃな、村園」

「あ、ちよつと…」

少しばかり時間が経ち放課後。

何事も無く日程を屋上で消化した俺は、担任の村園女史に説教を受けた後、この後何をして暇を潰そうかと考えながら教室を出る。

ちなみに翼はHRが終わるなりさつさと何処かに行き。

お嬢はいつも通り舞と一緒に帰った。一緒に帰らないかとも誘われたが、その状態で咲夜と会おうリスクを考え、説教を逃げ道として使用して遠慮した。

そっぴゃ咲夜の対処について考えねえと…

少しばかり遅くなったせいかな通りの少ない廊下を歩き、少しばかり考える。

咲夜は生徒会副会長、それも行事とやらで忙しいらしいから、寮に帰っているという事はないだろう。

そして、確か舞は晩飯を咲夜と一緒に食ってるから、俺のことを言うとしたらその場になるのかね…？

なら、その前に口封じしておかねえと…最悪『戒』^{ギアス}でも使うか…

そこまで考えたところで

……止めだ面倒くさい。

俺は思考を放棄する。

面白くもなんとも無え面倒事を考えてる時点で、俺としては間違いないんだよ。

バレたらバレたらで、多少は面倒なことにはなるだろうが、面白い方向に事は運びそうだな。

よし、そうと決まれば……何をしようか…

方針を決定して思考は暇つぶしの方法に切り替わり、ふと、購買で見掛けたフィリスという銀髪女にでも接触を試みてみようか、と考

えたところで、前方から人の気配を感じる。

視線をその気配に向けてみると、緑のリボンを着けた、肩につくぐらいの長さの紫の髪をした女が此方にやってくる…明らかに意識を此方にむけて…

その女は、女にしては高めの身長で、どこか大人びた雰囲気纏っている。

そして特筆すべきは強い魔力…俺が紹介している女全員魔力が強いのは気のせいかな？まあいい。

俺は特に気にせずにそのまま直進することに。

すると、女は俺の道を塞ぐような形で立ち止まる。

「…へえ、君が咲夜の弟君か」

そう言っただけ目の前の女は、俺を品定めするかのようじろじろ見ている。

俺は女の口から聞き捨てならぬ言葉を聞いたので、女の出方を見ることができた。

「…うん、やっぱり咲夜の弟だけあって、いい男だねえ。

体も相当鍛えられてるみたいだし、何よりいい目してる」

女は一通り見終わると、一つ頷き、何故か嬉しそうに口元を綻ばせる。

俺は女のテンションに多少辟易しながら、当然の疑問を口にする。

「何を言ってるかは知らんが、どうも。

で、あんた誰だ？」

「おっと、自己紹介がまだだったね。

あたしは三年の、神無月有紗。かなづきありさ

一応この学院の生徒会長をやらせてもらってるよ。
よろしく」

有紗と名乗った女は、満面の笑顔を浮かべて右手を差し出す。

へえ、コイツが生徒会長か…

なるほど、確かにこの学院の頂点だけはあるな。

既に五位くらいの实力はありそうだ…

「こりゃご丁寧にどうも。

俺は白神煉夜。

魔法の使えねえ、しがない不良だ」

あたりまえのように嘘を吐きながら会長の右手を握り、握手する。

そしてその手をすぐ離し、会長の間合いの外までさり気なく距離を取る。

面倒事だと判断した瞬間逃げるためにだ。

しかし俺には既に、なんとなくだが面倒事の…厄介事の匂いがしてきた

14話（後書き）

ネタ説明

「そげぶ」Ⅱとある魔術のインなんかの主人公、上条当麻の決め台詞。

「『そ』のふざけた『げ』んそうを『ぶ』ち殺す」の略。

「う・ま・い・ぞおおおおお！！！！」Ⅱ『ミスター味っ子』という料理アニメで、味皇というキャラが料理を食べた時のリアクション。

美味さのあまり口から波動砲を放ちます。

ハイ、貴重なツツコミ役を入れてみました

これからの学園パートの煉夜は、基本的にあの男3人と行動します。生徒会長は、姉御系にしたいんですが、テンション高めにするか、知的な感じにするか迷っています…

様々なアイデアを頂いたので、新キャラ祭りは次の話あたりでそろそろ一区切りしようかと思っています。

話が一段落したら、またすると思いますので…

次は行事について考えなければ……

：ネタバレ：

新キャラのフィリス・レインハーツはクーデレ設定です。

15話（前書き）

今回は軽く短めです。

シリアルつて程ではありませんが、ギャグ少なめです。

まあ、前回前々回ではっちゃけすぎましたし…

この前久し振りにアクセス解析を見てみたら…

PV375000

ユニーク47000

！？

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

俺は久し振りにアクセス解析を見たらPV、ユニーク共に凄い数字
になっていた

な…何を言っているのか（ry

と、いうわけで、これだけの人にこの小説を読んでもいただき、作者
はとても驚き、嬉しく思っています。

読者の皆様、本当にありがとうございます。

PV500000ユニーク50000に達成したら、記念に何かし
ようかと思っています…が、何にしましょうか……
アンケートは後書きで！

15話

「で、その生徒会長様が俺なんぞに何の御用で？」

俺は会長に手をヒラヒラと降りながら、気怠げに問う。

言外に、用があるならさっさとしろ。という念を込めている。

会長はそんな俺の様子を見て苦笑を漏らす。

「そうあからさまに面倒って態度取らないの。」

いやね、話に聞いていた咲夜の弟が帰ってきたって咲夜本人が言っていてねえ。

あたしもその存在に興味を持っていたの。

それで、なんとなく一年教室に向かつてみれば、咲夜が言っていた外見と一致する一年がいたから声を掛けたって訳さ。

この学院に白髪なんていなかったしね」

「…随分と暇なこつて。」

「…か、生徒会は行事に向けていろいろ忙しいんじゃないのか？」

「ああ、そんなの下が優秀だからどうとでもなるさね。弟君」

カラカラと笑いながら返答してくる会長に、俺は呆れながら薄く苦笑する。

「…つてか弟君ってなんだよ…まあ、別にいいが…」

「……仮にも上に立つ人間の言葉じゃねえな…」

「下を信頼し信用しているからこそその言葉だよ」

会長は片目を瞑りながら、悪戯っぽく微笑む。

その顔は、俺をこばかにしたようなモノだったが、その奥には確かに誰かに対する信頼と信用が滲み出ていた。

その誰かというのは…言わずもなだろう。

俺は息を一つ吐くと廊下の壁に凭れ、天井を見上げながら呟く。

「…信頼と信用、ねえ…」

そういう考え方もアリなのかも知れねえな…

ま、今のあんたが言っても屁理屈にしか聞こえんがな」

顔はそのままに、視線だけを会長に向けると、会長は肩を竦めながら苦笑する。

「あらら、手厳しい」

「…で、話はそれだけか？

用が無いんだったら俺は帰らせてもらっぞ。

ちゃんと仕事しろよ」

俺は話は終わったと判断すると、長居は無用と壁から体を離し、会長の横を通り抜け玄関へと向かうことに…しかし

「待った」

突然腕を掴まれ、歩みを止められる。

俺は鬱陶し気に顔を顰めながら振り返ると、そこにはニマニマと口角を吊り上げる会長の顔が…

…面倒事の予感が…

「いきなりだけど…君、生徒会に入らないかい？」

「……はあ？」

突然の勧誘。

俺は何故いきなり勧誘されたか理解できず、思わず呆けた声を漏らす。

その後数拍間を置き、頭が理解すると同時に俺は薄い笑みを浮かべる

「初対面の相手…それも魔法を使えない『不』良たる俺を誘うか…生徒会長殿は余程酔狂な御仁と見れる」

そして、掴まれた手を軽く振り払い、皮肉な口調と共にクックククと喉の奥で笑う。

初めて会った実績も信用も信頼もできない相手を引き込もうとする会長をを嘲笑するかのよう。

しかし会長はそんな俺の態度を気にした様子も無く、ニンマリとした笑顔、しかし真剣な目で俺を見据える。

「あたしは仮にも生徒会長だ。そいつが使えるか使えないかぐらい見ればわかるよ。」

それに、道利が君のことを買っていたからね。アイツは普段大雑把だけど、人を見る目は確かだ。

アイツが認めたんなら、そいつはできる奴なんだろうよ。

丁度会計がいなかったところだし」

「…会計いねえのかよこの学院は……」

「いや、君が転入してくる前まではいたんだけど、そいつ学院の予算誤魔化して横領してたのがバレて退学になったんだ。だから、今は会計の席は空席なんだよ。」

呆れながら呟くと、会長はたははー、と頭を掻きながら恥ずかしげに苦笑する。

会計エ……

などと、前会計に対し訳のわからん電波的感想を抱きつつ、そろそろ面倒になってきたので、適当に理由をつけて誘いを断ることに

「やれやれ、何はともあれ買い被りすぎだな。
自分で言うのもなんだが、俺は使えねえ……」

そこまで言ったところで俺は会長が何か呟いている事に気づき、次の瞬間、氷の槍が俺の顔面を襲う。

俺はそれを受け、後方に弾け飛びそのまま床に倒れ伏すとそこから更に、倒れている俺の真上に巨大な氷柱が出現する。

その氷柱の魔力密度は、明らかに人を殺せる程の力が凝縮されており、このまま押し潰されたら並みの人間なら抵抗する暇もなく即死してしまうだろう。

流石にこれは危険と判断した俺は、すぐさま回避しようとして体を動かそうとする。しかし、動かない。

体を見下ろしてみると、両手両足と胴体に魔方陣から生えている木の蔓が絡まっており、俺を床に縫い付けていた。

この短時間に三連続で魔法を…これは高速詠唱と術式魔法か…

高速詠唱とは、魔法の詠唱を省略することにより、魔法の発動速度

を大幅に短縮することができる高等技術だ。

便利な技術だが、精神力を普通に魔法を使うより多く消耗し、尚且つ使用する魔法の意味、用途、効果を正確に理解していなければ使えない為、使える魔導士は少ない。

更に魔法を完全完璧に理解し、自分の中で『字を読み書きする』などと同程度ぐらいにまで当たり前の知識として昇華すれば、己の意志一つで魔法を発動できる詠唱破棄という超高等技術に繋がる訳だが…その話しはまた今度にしよう。

そしてもう一つ。術式魔法とは、呪文のように言霊によりマナを媒体とし、頭に思い浮かべた事象を魔力として世界に顕現するのではなく、魔力により魔方阵を構築し、その中に魔法の効果や用途を書き込むことにより、マナを媒体としてその設定した魔法を発動することのできる手法のことだ。

他にも様々な魔法の発動方があるのだが、それもまた今度に

それにしても、この国は詠唱魔法が一般的のはずだが…

そんなことを考えているうちに、氷柱は俺を押し潰さんと迫り、そのまま大質量が地面に激突する。

ズウウウン！と、大きな音を立てて墜落した氷柱は、激突した衝撃で辺りに破片を撒き散らす。

それらの破片は派手に辺りに飛び散っているが、直撃した所には傷一つできていない。

魔除けの紋様と、会長の技量によるものだろう。

「…少しやりすぎたかな…それとも、只単にあたしの買い被りか…」

会長は床に刻まれた魔除けの紋様によって、徐々に小さくなっていく氷柱とその欠片を見ながら、人を殺したかもしれないというのに悪びれもせずに、あまつさえ失望したかのような溜め息を吐いてい

る。

しかし、その落胆したような顔はすぐに剥がれ、薄い笑みに切り替わる。

「なんてね…出てきな。」

喰らってないのはわかってるから」

「…へえ、気付いてたのかい」

会長の呼びかけに俺は会長の後方…先程話をしていた場所から壁に凭れながら返事をする、会長は慌てた様子で此方に振り返る。その目はやはりと言うべきか驚愕に彩られている。

まあ、普通あの場面から背後を取られるとは思わねえわな…

先程の氷柱を鬼殺し無しで受けるのは流石にキツイと判断した俺は、纏いの密度を一瞬高め蔓の戒めを逃れた後、持ち前の身体能力で氷柱をギリギリ躲し、飛び散る氷の破片に紛れ気配を消して会長の背後に回ったのだ…ノリで

「驚いた…喰らってないのは分かってたけど、まさか背後を取られるなんて…」

「…驚いたのはこっちだ。いきなり魔法撃ちやがって…」

「よく言うよ。二発とも無傷で避けたくせに」

「…へえ、初撃も気付いていたか」

やれやれと首を振っている会長に、俺は賞賛の笑みを浮かべる。

実は最初に放たれた氷槍は俺に直撃していない。

あの魔法は俺を試す為のモノだと一目で見抜いた俺は、直撃する寸前に会長が視認できない速度の拳で氷槍打ち砕くと同時に、自ら吹き飛んで倒れることであたかも直撃したかのように見せたのだ。

それにより、あの程度の魔法も避けられない無能という印象を会長に付けたかったのだが…

なんの躊躇いもなく追い討ちを掛けてきたからな…この女

「あたしの『アイシクル』はちよいと工夫が施されていてね。

喰らった相手を氷漬けにする効果があるんだよ。

だけど君はどこも凍らずに吹き飛んだだけ…だからあたしは、君が『アイシクル』を防いでわざと吹き飛んだと考え…」

「試しに追い討ちを掛けた、と。

やれやれ、下手すりゃ死んでたぞ？」

「あははは、それはそれとして「おいコラ」これで自分は使えないなんて言い分は通用しなくなった訳だ。

結構本気で放ったあたしの魔法をあんな余裕そうに躲したから実力は十分。

先生方に聞いた話だと、学年トップクラスの頭脳の持ち主だから成績もクリア。

ついでに目つきは悪いけど顔はいい…こんな逸材そうそういないと思うんだよあたしは。

…で、どうかね？入る気は無いかい？生徒会役員にはそれなりの権限も付くけど…」

「面倒そう、断る」

「あらら、即答かい。釣れないねえ…」

口調は残念そうだが、その口には笑みが浮かんでいる。
恐らく引き込めるなら引き込んでおこう、とぐらいにしか思っていなかったのだろう。

「ま、それはいいとして…」

俺はニヤリと薄い笑みを浮かべながらゆっくりと壁から背を離すと、一瞬で会長との距離を詰め、不意打ちの意趣返しとして会長の形の良い額に……デコピンを一閃
力を集中し、その力を一点に向けて解放された中指は、見事に会長の額の真ん中を撃ち抜く。

「~~~~~!!?」

バツウン!と、デコピンとは思えない炸裂音がし、会長は額を押さえてその場に蹲る。

そして俺は、声にならない苦痛の声を上げている会長を見下し若干の優越感に浸る。

そんな俺に多少痛みが和らいたのであろう会長は、涙で潤んだ目で非難めいた視線を送ってくる。

その顔は元の素材が良い為非常に可愛らしくいじらしく、並の人間が見たなら心を奪われ、訳も無く罪悪感を抱いてしまうことだろう。

「不意打ちの件はこれでチャラにしてやる。
感謝しろ」

だが、そんな表情如きに屈する俺ではない。寧ろ胸を張って傲岸不遜に言つてのける。

我が信条、退かぬ、媚びぬ、省みぬ!!

……何い？昼休みに退いただろ、だとお？
聞こえんなあゝ！

などと胸を張ったまま電波的思考をしていると、予想通りと言うべきか、会長は不満気に唇を尖らせていた。

「明らかにこっちの被害の方が大きいような……冗談だから真顔でまた指構えんの止めて」

しかし、俺の無表情での威嚇行為に、会長は額を抑えながらしゃがんだ体勢のままジリジリと後退する。

このままでは話が進まないの、俺は指の構えを解き、会長に手を差し伸べる。

「ほれ、立ちな。」

学院の長がいつまでもみっともない姿でいるな」

「君が原因じゃ……いや、なんでもない」

こんな優しい俺に文句を吐こうとする会長に、再び制裁を加えようと指を構えるが、無限ループに陥りそうな予感がした為自重する。

会長は俺から敵意が無くなったことに若干安堵すると、素直に俺の手を取りスカートを軽く掃いながら立ち上がる。その際、礼を言うことを忘れていないことに多少好感が持てた。

そこでふと思い出したかのように会長はポケットから携帯を取り出し、時間を見る。

「ああゝ、もうこんな時間かゝ……」

それじゃ弟君、そろそろ迎えが来そうだからあたしは失礼させてもらうよ。

初対面なのに、君とは昔からの知り合いみたいな感覚で話せて楽しかったよ」

会長は少し残念そうな顔をした後、すぐに笑顔になり、俺に別れを告げ踵を返す。

そして、そのまま去ろうとしたところで、何かを思い出したかのように足を止め、此方を振り返る。

その目は先程までとは違い、真剣味を帯びていた。

「ああ、それと気をつけなね。恐らく君は君自身が思っているよりも目立って有名だからね。

君を気に入らないって奴も少なからずいると思うよ。

その中には、血の気の多い奴もいるだろうし、既に二つ名を得れる程の実力者もいる…

あたしはこの学院の生徒会長だけど一番強いってわけでもないから、さっきの魔法を避けれたぐらいで調子に乗らない方が身の為だよ」

「おおーおおー、そいつはおっかないねえ」

俺は会長の忠告に怖がっているかのように体を抱きながら、しかし、顔には不敵な笑みを張り付けおどけてみせる。そんなふざけた態度を取る俺に、会長は呆れたように一息を吐く。

「言葉と顔が一致していないよ…ま、頼もしい限りだねえ。
やっぱり生徒会に欲しいよ」

「クハハ、今度いい人材紹介してやるから勘弁しろ」

お嬢とか、モトとか、渚とか…

ちなみに、舞は理系の成績が芳しくないらしいので、候補に入れて

おかなかった。

翼に関してはいわずもがな…

「あたしは君がいいんだけど…まあ、期待させてもらうよ。それじゃ、また」

会長は笑みを浮かべながらそう言うと、今度こそ踵を返そうとする。そこへ、緩やかで清涼な風が吹いた…

『会長、こんな所におられたのですか』

その風は会長の周辺に留まったかと思えば、本日二度目となる聞き覚えのある声が聞こえてくる。

そして、その風は会長の目の前で緩やかに渦を巻きながら集っていき、徐々に人の形を成していく。

「貴方がいなくては会議が始められないじゃありませんか」

そして、風を纏いながらそこに現れたのは、予想通り鳳咲夜だった。

15話（後書き）

PV500000ユニーク500000記念は何をするか

？外伝的な何か…

？登場キャラへ質問コーナー

？その他

投票する場合必ず

？なら外伝の内容のリクエストを

？なら質問内容を

？やって欲しい内容を

書いて投稿してください。

誰も投票しなかった場合、作者が泣きながら無い頭を絞って何かします。

ネタ説明

「会計エ……」『NARUTOについて語るスレ『ナルトス』で生まれたネットスラングで「サスケエ……」という呼び方がネタ化し、最終的に「エ……」となった。

「退かぬ、媚びぬ、省みぬ」『北斗の拳の登場キャラ、聖帝サウザーの名台詞

「聞こえんなあゝ！」『北斗の拳の登場キャラ、KINGことシンの台詞。

悪役はたまに難聴になりますよね……

16話（前書き）

遅れて本当にすみませんでしたああ！！

楽しみにされていた方、本当に申し訳ありません。

言い訳させて貰うと、自分も学生の身なので、テストという厄介極まりないモノの策略を受けていたんですよ…

これから、再び週一投稿目指して頑張りたいです。

今回は新キャラ一人追加で少々シリアスがあります。そして、いろいろと滅茶苦茶です…

最近主人公のキャラが不安定と言いますが、自分の思い描いているモノと違うと言いますか…どこかで修正したいですね…

まあ、とりあえず、ゆっくりしていつてね！

また後書きにアンケートがあります。

16話

「あれ、咲夜？会議って今日だったかね？」

「何を言っているのですか…会議の日程を決めたのは貴方ではありませんか。」

皆生徒会室にて貴方を待っているのですよ？

貴方はもつと生徒達を率いる者としての自覚をですね…」

「ああ、わかった、わかったっての。」

はあ、やれやれ、君の姉は真面目すぎると思わないかい？」

顰め面で説教を始めた咲夜に会長は苦笑しながら、この場からどう逃げようか画策していた俺に視線を向けてくる。

咲夜は説教を続けている為か、俺の存在には気付いていないようだ…まあ、俺が魔力を感じて反射的に気配を薄めたつてもあるのだろうか…

それはいいとして、逃げる機会を失った俺は、会長の問いに気怠げに答える。

「知るか。ただ、今回の件は10：0であんたが悪いな」

「あらら、あたしへの擁護は無しかい。お姉ちゃん想いだねえ」

「俺は事実を述べただけだ。それと、俺は副会長の弟じゃねえ…」

「会長、聞いているのです…煉夜あ！」

会長との会話の途中で、俺の存在に気付いたのであろう咲夜は、瞬間、表情を顰め面から一変、嬉々とした表情で俺に抱きついてくる。

一瞬躲そうかと迷ったが、後が面倒そうなので素直に抱きつかれることに…

ふむ、ちゃんと成長しているようだな…どこがとは言わないが…

「弟…じゃないなら、今現在その咲夜に抱きつかれている君はなんなんだい？」

「さてね…俺が聞きたい」

折角なので、姉貴分の成長を身を持って確認していると、会長がニヤニヤしながら問うてきたので、適当に答える。ちなみに咲夜は俺に抱きつくのに夢中になっているらしく、聞こえていないようだ。

昔なら、はつきりと『弟』と答えられたのだろうか…

そんなことをふと考えて苦笑する。

しかし俺自身、鳳に戻る気はもう微塵も無い。

咲夜に俺の存在が完璧にバレていると、その情報が舞や雅也、鳳家に伝わり何かと面倒になりそうなので、他人の振りをすることに…

「役得だが…オイあんた、俺を誰かと勘違いしてねえか？」

俺はとりあえず咲夜の拘束をスルリと抜け出し、雰囲気を操り完全に他人の振りをする。

すると、咲夜は怒ったような鋭い視線をむけてくる。

「何を冗談を言っているのですか。お前は姉の顔を忘れたと言っているのですか？」

「忘れたも何も知らないっての。俺は確かに煉夜という名だが、あんたの弟の煉夜じゃねえ」

「成る程：つまりお前は不安なんですね？」

『外見が変わってしまった自分を何故弟だと判断できる。実は名前
で判断しているのではないか？』
と…」

うん、それは確かに凄い疑問だった。

しかし、気のせいかな話が凄い方向に解釈されてる気が…

「姉を見縊らないでください。どんなに姿形が変わろうとも愛しき
弟を間違えるはずがありません。

それが、姉というものです」

妹は俺を分からなかったがな…まあ、アイツは昔の俺に固執してる
節があるから、しょうがないっちゃあしょうがないんだがな。寧ろ
それが普通だ。

ちなみに俺の外見の変化具合を簡単に表すと、の 太君が6年後に、
世紀末な感じのモヒカン姿で「ヒヤッハー!!」と言いながらジ
ブを乗り回しているようなモノだ。

姉ってすげえ…

そんなことを頭の中で考えながら、俺は呆れ顔を創り、肩を竦める。

「やれやれ…何を根拠にそんな自信があるのやら…」

「根拠はありますが、お前に言っても理解できないとでしょう。な
ので、もっと簡単に証明します。

お前が鳳煉夜ならば右耳の裏側には、小さな縦一文字の傷があるは
ずです」

「何を馬鹿なことを…そんなのあるわけが「あった。この傷だね」なん…だと…？」

驚愕する俺に、会長はカシャ！と携帯のカメラで写真を撮り、見せてくる。

そこには、確かに傷がある俺の耳の裏が…

何故俺自身知らない箇所を傷を知っている！？

思わず驚愕の表情が表に出そうになるが、反射的に感情を押さえ込み、対処する。

「へえ、こんな偶然もあるんだな。名前も傷の位置も一緒なん…」

「他にも、左手首に切り傷、左手に刺し傷、首筋に切り傷…」

「お、本当だ。全部ある」

「！？」

「更に」

次々と挙げられていく、俺の身体中にある傷という名の身体的特徴。咲夜が言っていた箇所全てに、知っている傷や、俺自身知らなかった傷があった。

「…か、特徴の全てが傷ってどうよ…まあ、親父に毎日ボコらえていたから当然か…」

それにしても、何故に俺の身体中の傷知ってんの！？…と、思わなくも無かったが、何となく返答が怖いので、聞かないことにしておく…

「どうですか？これで証明になりましたね」

「…ハア、アンタには適わねえな…咲姉さんよ…」

俺は諦め、降参の意を込めて両手を力無く上げながら、敢えて昔の呼び名を呼ぶ。

呼んだ瞬間、咲夜は大きく目を見開くと、今度は嬉しそうに目を潤ませながら微笑む。

「…ようやく、名前を呼んでくれましたね…煉夜…」

そして、俺に駆け寄り、再び抱きついてくる。二度と何処にもやらないと言わんばかりに。
え、何この状況？

「おかえりなさい、煉夜…」

「……おう」

潤んだ目で此方を見上げながら咲夜は再び微笑む。

俺はこの展開に戸惑いながらも、目を逸らしながらもそれに答える。
しかし、決して『ただいま』とは言わない。

俺は鳳煉夜ではなく白神煉夜…故にこの地はもう俺の故郷ではないのだから…

「あゝ…あたし先に行つてた方がいいかい？」

そこに聞こえてきた気まずそうな声。

体を放しそちらに顔を向けると、会長が申し訳なさそうな顔で頬を掻いていた。

「すみません。私としたことが、つい…」

そんな会長に慌てることなく謝罪する咲夜。

俺はそんな中、これからどうしようか考えていると…

「…まあ、立ち話もなんだし、とりあえず生徒会室に行こうか」

「…いや、あんた等会議あるんじゃない…」

「それがいいですね。積もる話もあることですし」

「オイそれでいいのか副会長」

生徒会のトップ2人が職務怠慢に走ろうとしていた。

面倒事は御免だとか思い止まらせようとするも、お気楽会長と暴走中の副会長には通用しなかった。

「細かいことは気にしなさんな。それじゃ、行こうかい」

「そうですね。それに皆をこれ以上待たせるのは忍びありません。
行きますよ、煉夜」

「…ハア、やれやれだな」

グイグイと会長と咲夜に両手を引っ張られながら、俺は溜め息を吐いて諦めるのだった。

しばらく歩き、他の部屋とは造りの違う豪華な扉の前に辿り着く。
その扉の横に付けられているプレートに『生徒会室』と書かれてい

る。

「ここが生徒会室、ね…」

「なんだい？ここに来るのは初めてかい？」

「まあねえ…来る予定も来る気もなかったし…」

「二人とも、話はそこまでにして入りますよ」

扉をゆつくりと開く咲夜に促されるまま、俺は会長に引き摺られるように入室する。

生徒会室には既に2人の生徒が、指定されているのであろう席に着いていた。

まず、入ってすぐの『書記』と書かれた三角錐のネームプレートがある席には、制服に緑のリボンを付けた灰色のショートヘアに一筋だけ長く伸ばした後ろ髪が特徴的な、涼しげな中性的な顔立ちをした女生徒が、のんびりとした態度で小説を読んでいる。

そして、その向かいの『男子副会長』と書かれた、同じく三角錐ネームプレートがある席には、昼休みに会った赤髪オールバックで眼鏡を掛けた知的な雰囲気の方が、腕組をして瞑想しているかのよう

に瞳を閉じて座している。

へえ、これが生徒会か…

「やあ、随分と遅かったね有紗。今日はどうしたんだい？」

生徒会室と役員を見回していると、俺たちの入室に気付いた書記は、小説を閉じて此方に視線を向ける。

会長は苦笑しながら書記に答える。

「ちよいと野暮用でね。遅れたことは謝るよ」

「おや、そちらの一年君は？」

「ああ、彼は……」

「…何故貴様がここにいる…？ここは貴様のような輩が来るような場所ではない。早々に失せろ」

書記が俺の存在に気付き、会長が何か言おうとした所で、静かに、しかし敵意剥き出しに赤髪眼鏡は俺をギロリと睨み付ける。

俺とて、何故自分が現在此処にいるのかわからないので、文句を謂われても仕様が無いのだが…
ま、とりあえず……

「ほれ会長、この調教副「おい待て貴様！？」…赤髪眼鏡もこう言ってるし、俺はこれで…」

赤髪眼鏡にうまく便乗して脱出を試みることに

「駄目ですよ、煉夜」

しかし、さりげなく出口を塞いぐように立っている咲夜に阻まれる。
チィッ、流石は咲夜。抜け目は無いか…

それに対し、俺を引き止めたからか、俺を名前で呼んだからか知らんが、赤髪眼鏡が抗議の声を上げる。

「お、鳳！？何故そんな奴を引き止める！？」

昼休みの時もそうだったがそいつはお前のなんなん…」

「そんな奴…？」

不意に咲夜がピクツと反応し、次の瞬間、突如生徒会室の空気が凍ったかのように冷たくなる。

チラリと咲夜の方を見てみると、顔は無表情だが目は怒っている咲夜がそこにはいた。

「いくら沢白さんでも、私の大事な弟をそんな奴扱いするのは…許しませんよ？」

赤髪眼鏡を威圧するかのように、咲夜の体から吹き出る強い魔力の奔流。

その魔力は赤髪眼鏡だけでなく一瞬で生徒会室全体を支配し、その場の空気が物理的に重くなる錯覚を全員に見舞わす…

ふむ、予想より魔力が強いな…それもまだ底が感じられない…俺と同じくりミッターでもしてんのかね…

皆が青ざめたような表情をしている中、俺は魔導士としても成長している咲夜を洞察する。

俺はこの学院にいる間だけ、己にリミッターを掛けている。俺の魔力は異常な程にでかい為、今の咲夜のようにふとした拍子に洩れる魔力で、ある程度の実力者にその異常性がバレる危険性がある為だ。まあ、そんなミスを犯す程甘い魔力操作技術をしていないが、念のために、だ。

ま、威圧も兼ねてやってるんだろうが、感情に流され過ぎだな。リミッターが緩んでやがる。

まだまだ甘えなあ咲夜…

などと、6年前までは俺より遙か高みにいた咲夜を、無能が原因で家を追われた俺が批評していることに、少しばかり皮肉を感じて内心苦笑する。

「ああゝハイハイ、ストップ、ストップ。あんたが弟君を大切に思っているのは分かったから落ち着きな」

「…すみませんでした。少し取り乱してしまっただようで」

そんなことを考えているうちに、その場を会長が治めて一段落ついたようだ。

咲夜は表面上は落ち着いて見えるが、付き合いの長い俺から見たら、反省したような態度でシュンとしたように見える。

「そ、それより弟というのは、ど、どういうことだ…？」

動揺を押し隠そうとしているのだろう。赤髪眼鏡は、表情は冷静なまま中指で眼鏡の位置を直している。が、腕はプルプルと小刻みに振るえ、声はどもりまくっているため、微塵も隠れていない。

まあ、副会長の気持ちもわからんでも無い。

自分が惚れている人が、自分が嫌いな奴を擁護したのだ、内心穏やかじゃないだろう。しかも、その嫌いな奴が好きな人の弟だったのなら尚更だ。動揺の一つもするだろう

まあ、血の繋がりはないんだがな…：そういや、今は家の繋がりもねえな…：ん？つまり戸籍上は赤の他人ってことになってるのか？

…まあ、別にいいか

「ムッフ、聞きたいかい透？」

そんなことを思いながら咲夜と会長の背後で腕組みをしていると、会長がこちらを見ながらニヤニヤしていた。
ちなみに、透とは副会長の名前らしい。

「彼はねえ…鳳咲夜の弟分にして、あたしが見つけた空席の会計候補さー！」

「おいコラ待て」

さりげなく後半に付け加え、高らかに宣言した会長の頭をとりあえず驚掴みする。

ちなみに赤髪眼鏡は驚愕した表情で固まっており、書記は「へえ、この子が…」と呟きながら楽しげに俺を見ている。まあ、気にしないことにしよう。今はこちらの生徒会長が先だ。

「俺はついさっき断ったはずだが？」

「いやねえ、咲夜のプレッシャーに顔色一つ変えないで傍観していたからさ。

やっぱ凄い実力者なのかねえ、と思ったらまた欲しくなっちゃまってね」

「買い被りすぎだな…只単に顔に出てねえだけだ。
内心は現在進行形で恐怖に震えてるわ」

「煉夜？全身が凄い細かく振動してますが大丈夫ですか？」

「震えるのではなくて振動！？」

「たまらずツツコむ赤髪眼鏡。」

少し大袈裟に体を震えさせようとしたら、やりすぎて振動の域にまで達してしまつたらしい…流石は俺（？）

「まあ、冗談もそこまでにして、とりあえず…改めて自己紹介でもしようかい」

会長は手をパンパンと叩き、妙な空気になってきたその場を収める。ちなみに俺は会長の頭を鷲掴みにしたままなので、なんとも締まらない光景になっている。

「じゃあ私から…」

今まで事の成り行きを楽しげに傍観していた書記が、一筋だけ長い後ろ髪を翻しながら席を立ち、俺の傍までスウッと近寄ってくる。

「生徒会書記を務めさせて貰っている、3年の東郷薫とうけい かおるだよ。よろしく」

そして、妖艶な笑みを浮かべながら手を差し出す東郷書記。この身のこなし…この女、武道経験者が…

俺は分析しながら、会長を開放してその手を握ろうと手を差し出すと、突然彼女の手が鋭く動き俺の手首を取ろうとしてくる。しかし、俺は瞬時に反応し、その手を掴み強引に握手する。

「!?!」

「はいよ、よろしくさん」

「…へえ…面白いね、キミ」

「はて、何のことやら…」

東郷書記は一瞬驚愕の表情を見せた後、楽しげな笑みを俺に向けてくる。

どうやら会長に続き、また俺は試されたいらしい。

身のこなしと、不意打ちで俺の急所ではなく手首を狙ってきたことから、この女は何か柔術を習っていると推測。

もしも掴まれていたなら、極められていたか投げられていたのだろう。

どうでもいいが、会長といい東郷書記といい…人を試するのが流行ってんのかねえ…？

「…男子副会長の沢白透だ。言っておくが、例え貴様が鳳の弟だろうが、俺は貴様を認めた訳じゃあないからな…」

若干辟易としながら東郷書記と握手を済ませると、少し遠く的位置から、副会長が腕組をしながら此方をジロリと睨みつけてくる。
初対面がアレだった為、どうやら溝は深そうだ…

「認められなくて結構だが…ま、よろしく」

「フン…」

俺は一応手を差し出してみるが、赤髪眼鏡は自己紹介が済むと、もう話すことは無いと言わんばかりに腕組みをして瞳を閉じる。

そんな赤髪眼鏡の態度に俺は嘆息する。そして一つ軽い小芝居を…

「やれやれ…冷たい先輩だねえ、俺様泣いちゃうぞ？」

「……沢白さん……？」

「お、鳳！？ち、違、これは……貴様ああ！？」

わざと悲しげに笑ってみると、予想通り再び魔力により凍りつく生徒会室。

俺と3年二人は赤髪眼鏡の慌てる様を見て笑う。

一頻り笑った後、その場が落ち着いたのを確認し、俺も自己紹介をしておく

「さて、一応俺も名乗っておこうか……

俺は一年の白神煉夜。

ソコで現在進行形で暴走している鳳咲夜の弟分ってことになっている。

しがねえ不良にすぎないが、まあ、よろしく」

「しがない不良があたしの魔法を……まあいいわ。

自己紹介も済んだことだし、少し遅くなったけど生徒会会議を始めるよ」

会長は苦笑しながら自分の席に着くと、先程までとは打って変わって、真面目な雰囲気で宣言する。

すると、その宣言を聞いた役員達はその場の空気を一変させ、皆己の席に着いていく。

……流石は腐っても生徒会か。

見事、と言っしかないな……一瞬でこの空気を創り上げやがった……

今の空気は先程までの仄仄とした緩んだモノではなく、ピリツとした適度な緊張と、無意識にその場にいるものの背筋を伸ばしてしま

うような、締まった空気になっていた。

…まあ、それはいいとして…俺、蚊帳の外？

会長が議題を出している中放置されている俺は、場違いなのでさりげなく退室しようとするが、会長と咲夜、ついでに東郷書記にバレて何故か止められた。

じゃあ、俺にどうしろと？

なにやらやるせない想いが胸中に渦巻くが、流石に茶化す空気じゃないため、俺は会議が終わるまで入り口付近の壁に凭れて待つことにした。

*

「……と、いうわけで、行事に向けての準備も一段落ついたけど、皆気を抜くことなくしっかり乗り切るように。これにて生徒会会議を終了する。礼！」

小一時間程にも及んだ会議は終了を迎え。有紗の号令により皆頭を下げる。

そして、皆頭を上げると同時に、その場の空気が一気に緩む。

「ああ、疲れた…」

「さて、どうやら終わったようだな。じゃあ、俺はこれで…」

「ああ、それなら煉夜、一緒に帰りましょう」

煉夜は壁から背を放すと、帰るために出口へ向かう。咲夜はそれを止めるでもなく、後に続こうと席を立ち上がる。

そこへ、不意にコン、コンと扉からノックの音が聞こえてくる。

皆の視線が扉に集中する。それと同時に扉が開き、ダークスーツを纏い煙草を咥え、目に掛かるほどのダークグレーの髪をした長身の男が顔を出す。

「活動中に済まないが、鳳はいるか？」

「ハイ、此処に」

「頼んでおいた書類はできているか？」

「まだですが、提出日までには間に合うかと…それが何か？」

「いや、それがちよつと予定が狂ってしまったらしくてな。今日中に提出しなければいけなくなつたんだ。

だから悪いが、なんとか今日中に仕上げてくれないか？」

「今日中にですか…わかりました。もう大方の作業は終わっているので、すぐに仕上げましょう」

「そうか。それじゃあ、済まないが仕上がったら教務室にまで持ってきてくれ。ヨロシク」

咲夜の返事に男は満足気に頷くと、紫煙を燻らせ手をヒラヒラと振りながらその場を後にした。

そのやり取りを見ていた煉夜は、気怠るげに息を一つ吐くと、肩を軽く竦ませる。

「ふむ、災難だな。ま、邪魔しちやあ悪いだろっし、部外者はさっさと退散するでしょう」

そう言つて扉に手を掛ける煉夜。

沢白はこれで邪魔者がいなくなると内心喜びながら、咲夜と一緒にいるべく手伝いを申し出る。

「お、鳳、なら俺が手伝つて……っ」

しかし、そこまで言つてあることに気付く。

咲夜の表情が寂しさに彩られていることに……そして、その悲しげな視線が、帰ろうとした所で有紗と薫に捕まり、なにやら面倒そうに会話している煉夜に向けられていることに……

「……………」

そんな想い人の姿を見て沢白は、会話を切り上げて今度こそ帰ろうとしている姉不幸者を呼び止める。

「…待て貴様」

「…んあ？」

「…聞いた通り鳳はまだ仕事がある為、居残りして作業しなければならぬ。」

生徒会室に何の用も無く来たんだ。せめてそれぐらいは手伝つていけ」

「……………あ？」

沢白の言葉に一瞬呆けたような顔をする煉夜。

しかし、咲夜の方に視線を向けると、納得したような顔になる。

そして、何が面白いのか、クックックと喉の奥で笑う。

「…何がおかしい」

「いや何、案外いい男なのだなと思ってな…」

どうやら不器用なようだがな…と、語尾に付け足し、煉夜は踵を返す。

そして、沢白とすれ違い様にさりげなく耳打ちする。

「面倒だが、今回はアンタの咲夜に対する心遣いに乗ってやる…次からは自分でしろよ？」

「…フン、口の利き方には気をつける。生意気な一年坊が…」

そうして二人は軽口を叩き合った後、煉夜は机の上に書類を出し始めた咲夜の隣の席に腰を下ろす。

すると、咲夜は目に見えて嬉しそうな顔になる。

沢白はその顔を見て満足気に頷くと、三年二人を連れて生徒会室から出て行った…

*

生徒会室を出ると、有紗は会議の結果を報告しに職員室に向かい、沢白と薫は玄関へと向かっていた。

「どうしたのかな沢白くん？いつもなら自分が率先して手伝うというのに」

ニヤニヤと笑いながら薫は、先行する沢白の背中に問いかける。

その問いかけに、彼は振り返らずに答える。

「…俺とて流石に空気ぐらいは読めます」

「ふむ、確かにキミは咲夜クンにとってベストな選択をした。

しかし、君には咲夜クンの仕事を手伝い、落ち込んでいる彼女を慰めることで、咲夜クンとの距離を縮めるというベターな選択肢もあった筈だよ。

それでもキミは良かったのかい？」

「俺は彼女には笑っていて貰いたいだけです。
あんな顔の鳳を見ているのは辛いですから…」

薫の問いに彼は少しだけ振り返ると、僅かに口角を吊り上げ、苦笑しながら答える。

その答えを聞いて、彼女は心底楽しそうに笑う。

「フッフ、不器用な男だな、キミは」

「…フン、自覚はしています」

その笑みを自分を馬鹿にしていると見たのか、彼は若干不機嫌そうに鼻を鳴らし、再び前を向き歩く。

そんな彼の様子を見て、彼女は益々楽しげに笑うのであった。

*

三人が出て行った後、俺と咲夜は書類の制作に勤しんでいた。
尤も、先程咲夜が言っていた通り大方の作業は終わっており、後は書類内容に不備が無いかを確認し、整理して終わりなので、そんな

に時間は掛からなそうだ。

しかし、咲夜は俺との空白の6年を埋めるかのように、わざとゆっくりと作業している。

真面目すぎるこの人にしては珍しい。

しかし、それでも常人の数倍の速度で作業しているため、書類の制作はあっという間に終わった。

「さあ、書類を提出して帰りますよ煉夜。今日は舞と雅也も呼んで姉弟水入らずで夕飯にしましょう。腕に縊りをかけて料理しますので、楽しみにしていなさい。今晚はご馳走ですよ」

あいつ等と食事だと……？正直それは勘弁してもらいたい……

という訳で、その事態を回避するべく、俺は瞬時に断るための言い訳を382通り考え、その中で最も効果的な断り方を導き出す。

そして、即座に断ろうと口を開いた所で……

「ところで、姓が変わっているようですか、いつ姓を戻しに本家に戻るのですか？」

白神煉夜もいいと思いますが、やはり鳳煉夜が一番しっくりしていると私は思います」

口を止める。

咲夜からしたら何気なく口にした疑問なのだろう。

しかし、俺からしたら、これからの人生の分岐点になりうる質問。

自分の胸に問いかけてみる。

鳳に本当に未練が無いのか……

家族達と決別することに後悔は無いかを……

…ハッ、今更だな……

答えは勿論、未練も後悔も躊躇いも無い…

無意識に俺の雰囲気冷たく、重苦しく変化する。

「…何か勘違いしているようだな…咲夜」

突然俺の口調と雰囲気がガラリと変わったことに戸惑っている。しかし、言葉は止めない。

これはちゃんと口にしておかねばならないことだから…

「俺がこの地に帰ってきたのはあくまで野暮用で、鳳に戻るつもりで帰ってきた訳じゃない。それに…」

追放されてから6年…それまでの10年とは比べ物にならない程濃密な時を過ごした。

鳳を追放されてから俺は、多くの事を経験し、多くの大切なモノができ、多くの大切なモノを失い、多くの恨みを買い、多くの業を背負った。

それらは全て清濁問わず、鳳煉夜としてではなく、唯の煉夜として得た大切なモノ。

だからこそ、鳳に…強大な権力と影響力を持つ名門の庇護下に戻ることはなぞできない…逃げ道など必要ない。

だから此処に、そして己に、ありったけの意志を込めて宣言する。

「俺は二度と、鳳の姓を名乗るつもりは無い」

「……え……？」

決別の言葉は、驚くほどすんなりと口から出た

16話（後書き）

記念企画アンケートの結果は、外伝に決定しました！

そして、外伝のプロットを再びアンケート！

？過去話、シルヴァア&煉夜のドタバタ珍道中！

？日常、主要キャラの日常。

？対談、心優しき少年、鳳煉夜&変わってしまったお兄様、白神煉夜！

？とある購買の風景

？その他

できれば、？のその他で、読者の皆様にアイデアを出して貰いたいですね…そしてそのアイデアを作者の独断と偏見で選び、アレンジし、作品とする…面白そう（主に自分が）！
よろしく願いします！

外伝（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

ネタ不足、PC&携帯の不良、交通事故、などが一辺に起きたので

…ハイ言い訳ですぬすいません。

今回は一応過去話ですが…

・クオリティは低いくせに無駄に長い。

・いつも以上のご都合主義

・文才（笑）

・所々感じる手抜き感

などの問題点があります。

本編にはあまり関係無いので、読まなくても問題ないです。

結論、調子に乗って慣れないことはするべきではない

外伝

「シルヴィアさんとはどのような人なのですか？」

お嬢が優雅な動作で焼き魚の骨を処理しながら、味噌汁を啜っている俺に聞いてくる。

場所は夕飯時の食堂。

今日俺は、自室でいつも通り晩飯を作ろうとした所、部屋に備え付けられている冷蔵庫の中に食料が何もないことに気付き、仕方なく食堂に足を運んだのだ。

そしたら、そこでお嬢とバツタリ出くわし、一緒に飯を食べようと誘われ、現在に至る。

俺は味噌汁の入った茶碗から口を離し、味わって飲み込んだ後、口を開く。

「どうしたお嬢？んな藪から棒に」

「いえ、とくに理由はありませんが…強いて言うなら好奇心ですね。

前に言っていたでしょう？私とシルヴィアさんは同じ人種の人間だと…」

そのことをふと思い出しまして…」

「なんとなく気になった、と…まあ別に構わんがな。

さて、シルヴィアがどんな人間か、か…

俺は半年程しか共にいなかったが、とりあえず自由奔放な奴だったな」

味噌汁の茶碗をテーブルに置き、水の入ったコップを手に取りなが

ら、かつて旅を共にした友人に思考を馳せる。

100人中99人は見惚れる程の大人びた美貌の持ち主…しかし、陽気でノリが良く、何にでもすぐ興味を持つが飽きが早く、その上気分屋と、外見に反して中身は子供っぽい。

北国にフェンリルを殺りに行きたいと言ったかと思えば、その道中にやっぱり南国にトロピカルジュースを飲みに行きたいと言ったりと、いつも即断決行で気紛れに世界を渡り歩き、その地その地で大なり小なりの騒ぎを起こすトラブルメーカー。

ちなみに初対面は、戦場で敵として合間見えた時だった。

「それと、あいつは何より自分の力に絶対の自信と拘りを持っていた」

「拘り…ですか？」

「そそ、一種の哲学だな。」

どんな危機的状況下であろうと、相手がどんな強者であろうと、小細工無しに真っ正面から敵を叩き潰す。

正々堂々を体現した誇り高き魔王…それがシルヴィア・ヴァレンスだ」

正々堂々つてのは、強者の戯れと考えている俺には当初理解し難い拘りだった。

どんな手を使おうが勝てば何でもいい、という俺の信条とは真逆。だからそのことで口論になったこともあった。

そっぴや、口論から喧嘩に発展してお互い死にかけたっけか…いやああの頃の俺は若かった…

その時の喧嘩という名の死闘、もとい地獄絵図を思い出して苦笑す

る。

しかし、お互いに真っ正面からぶつかったからこそ、その拘りが多少なりとも理解できた。

俺の信条は今でも変わらんが、戯れ程度に正々堂々をするようにはなった。

「ま、お嬢と似ているってのはその点だな」

「？私は自分の力に拘りなんてありませんが…」

「そこじゃねえよ…」

あんたの信念は誰であろうと傷付けない。

あいつの信念は誰であろうと正々堂々。

信念こそ違えど、お互い自分の中にしっかりと確立した芯を持っている。

そこが似てるのさ」

そう、何があるうと己の芯を曲げず信念を貫き通す。

そういった確固とした覚悟を宿した目があいつとお嬢は似ている。

尤も、それらの信念は力あってこそのことだがな…今のお嬢の信念は戯れ言にすぎない。

まあ、覚悟は本物っぽかったから将来に期待している訳だが…

「ま、いろいろと滅茶苦茶な奴だが、どんな奴相手でも真っ正面からぶつかっていくから、あいつの周りには常に人が集まっていたな。今にして思えば、俺もその中の一人だったのかもしれない…」

あの頃の事を思い出し、つい俺は笑みを零す。

その笑みは、久方振りに洩らす自然な笑みだった。

そんな俺の様子を、お嬢は頬を朱く染めながらぼんやりと眺めていたと思つたら、突然何故か不機嫌そうな顔になる。
小声で「そんな笑顔、初めて見ました…」などと呟いているが、まあ、聞かなかつたことにしておこう。
未だにジト目で此方を見ているお嬢に苦笑を洩らしながら、今のお嬢に何を言つても面倒なことになる、と結論付けた俺は、未だ何かぶつぶつと言っているお嬢の視線が弱まるまで思考を追憶に馳せることにした。

＊

「やれやれ、あのじゃじゃ馬はどこに行つたのやら…」

それは二年前のこと…夕日が真つ赤に輝く時間帯。

知る人ぞ知る標高1500mのとある山「クルルマウンテン」

ここは木々はおいしげ清らかな小川が流れる自然豊かな山だが、その人の手が加えられていない環境の良さ故か、この山には多くの凶暴な魔物が住み着いていることで、有名な山である。

その山の山頂付近で、白い髪に鋭い銀色の眼をした少年、白神煉夜は獣道を彷徨っていた。

理由は、旅の連れである女性が原因である。

その女性は旅の道中にいきなり「山に行きたい！」と言い出し、なんでも、この山の頂上に珍しい鳥がいるとかどうとかで暇つぶしがてらにこの山にきたのだが、到着早々姿を消したからだ。

最初は、いつものことだと考え、連れを無視して自分も登山感覚で

楽しんでいた（この時の俺の格好は黒いワイシャツにジーパン…山
嘗めてるな…）のだが、山頂付近に到達しても連れの気配は無く、
登山も飽きてきたのでそろそろ捜そうかと考え始め、現在に至る。

「ああ、面倒くせえ…さっさと見つけるか…」

煉夜は気怠げに呟くと、瞳を閉じて魔力を薄く山全体へと漂わせる。
そして、漂わせた魔力を媒体として、己の知覚をその空間へと広げ
ていく。

空間魔法『把握』
グラスフ

この魔法により、この山は麓から山頂まで煉夜の知覚範囲となっ
た。

今この山の中で起こっている出来事は、全てリアルタイムで煉夜に
伝わる。

さて、どこにいるのやら…

彼は頭の中で、山の内部の情報を必要最低限なまでに削り、纏め、
処理する。

すると、展開している最中に背後から人の気配を感じ、作業を一時
中断する。

目を開きゆっくりと振り返ってみると、そこには造りの荒い着物の
ような装束を着た壮年の男が、槍を構えて立っていた。

『子供…？何故こんな所に…おいお前、何者だ？何故我々の縄張り
内にいる？』

「……あ？」

男は不思議そうに煉夜を見ながら尋ねるが、彼はその言語が理解できず首を傾げる。

煉夜はこれでも世界各国を渡り歩いてきただけあり、大抵の国語は習得している。

しかし、この男の言語は煉夜の知っている国語のどれにも当て嵌らない。

ここで煉夜は男の特徴から考察を立てる。

聞いたことの無い言語に、不自然な格好なのに周囲と一体化しているかのような佇まい…何よりこいつの体から漂う、深く根付いたような山の匂い…こいつ、この山に住んでんのか？どうやらここから少し離れた所に集落があるようだし、この独特な服装や言語から見るに、この山の民族って所か…

煉夜は考察しながら『把握』で周辺を調べ、億劫そうに溜め息を一つ吐くと、自分と男を包むように魔力を薄く展開し、また一つ魔法を行使する。

空間魔法『^{サーチ}探査』

これは魔力を展開した空間内の存在、物質、概念、現象などのあらゆる事項を、多少大雑把ながら理解することのできる魔法である。

これにより、煉夜は目の前の男と疎通できるようにした。

この範囲を狭めることにより効力を高めると『^{スキャン}解析』という魔法に変化するのだが…まあ今は必要無いだろう。

『おい、聞いているのか？まいったな…言葉が通じないのか？』

「ああ、悪い。ちゃんと通じてるよ。それで、何だっけ？」

『変わった言葉を話すな…まあいい。

何故子供がこんな所にいるのだ？この山は魔物が多く、そして強いから子供がこれる場所じゃない筈なんだが…』

男は『探査』により伝わる煉夜の言葉に疑問を持つが、意味は大体伝わるので気にしないことにする。

「旅の連れがこの山の中に迷い込んでな。

そいつを探して此処にいるわけだ。

あと、何故俺が此処まで来れたかと言うと…まあ、運が良かったとしか言いようがねえな」

煉夜は肩を竦めながら嘘を混ぜて答える。

本当は魔物にはちよくちよく出会ったのだが、その全てが煉夜と相対した瞬間、本能的に勝てないと悟り、一目散に逃げ出したのだ。

そのことを言わないのは、敵か味方かもわからない相手に自分の情報を少しでも渡さない為だ。

彼の返事を聞いて、男は一つ頷くと構えを解き、肩の力を抜く。

『そうか…いや、奴らの仲間ではなければ問題ないんだ。それにしても災難だったな。こんな山に迷うなんて』

「迷ってる訳ではないが、まったくだ。早く見つけてさっさとおさらばしたいね」

『ふむ…しかしもうすぐ日が沈む。子供一人では危険であろう。よければ我らの集落に来ないか？』

男の言うとおり真っ赤に輝いていた日は沈みかけ、辺りは薄暗くな

つてきている。

「あ？見ず知らずの奴相手に随分と親切だな」

『フツ、我らクルト族は下劣なマクル族と違い、義に厚き誇り高き一族だ。』

夜の危険な山に子供を放り出しておくほど薄情ではない！』

男は誇るように胸を張りながら二カツと笑い、答える。

煉夜はそんな男を呆れたような目で見た後、やれやれと言わんばかりに肩を竦める。

口振りからして、マクル族とやらと対立しているみたいだな…

このままついて行ったら面倒事に巻き込まれそうな予感が…まあいい、巻き込まれたら巻き込まれたで暇潰し程度にはなりそうだし、あのトラブルメーカーが厄介事に顔を出さない筈が無い。それに野宿も回避できる。メリットの方が多そうだな。

煉夜は一瞬で思考した後そう結論付け、男について行くことにした。

「へえ…んじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうか」

『そうか。よし、では早速行くでしょう。』

…っと、それよりお前の連れとやらは大丈夫なのか？

この山では、此处で生まれ育った我らですら命を落とすこともあるというのに…』

「ああ、問題無い問題無い。あいつ異常なほど強いから」

『む、しかしだな…』

「ま、それにあいつも馬鹿じゃない。

自分よりも強い相手がいたらちゃんと逃げるだろうし、日が沈んだら下手に動くことはないだろうよ。

何より、もう日が沈む。今から捜しに行ってもしょうがないだろうしな」

勿論、嘘だ。

彼女は自分より強い奴相手でもタダでは退かないだろうし、日が沈もうが何しようが自分の思ったまま行動する大きい子供なのだ。

普通ならそんな奴を放っておくことを心配するのだろうが、煉夜は何も心配していない。

何故なら、先程言ったとおり彼女は異常なまでに強いから。それこそ、やろうと思えば山の一つや二つを消し飛ばせる程に

しかし、男はそのことを知らないし、言ったとしても信じてもらえないだろうから、彼は男の心配を軽くするべく嘘を吐いたのだ。

今から捜しに行こうとか言われたら面倒だからな…

『むう、そうか、ならいいが…では今度こそ行こうか』

「あいよ」

渋々ながらも男は頷き、踵を返す。

煉夜もその後が続いていった。

*

一方その頃。

煉夜の旅に連れ…シルヴィア・ヴァレンスはというと…

「アッハハハハハ！もっともっと持ってきなさい！」

『お、良い飲みっぷりだねえ姉ちゃん。ほれ、もっと飲め飲め』

煉夜のいる地点の丁度反対側に位置するマルクル族の集落で、燃えるような真紅の髪に、均整のとれたスタイルをした、泣き黒子が特徴的な美しき女性：シルヴィアは何故かマクル族の人達と酒盛りをしていた。

彼女は意気揚々と山に入ってから適当に辺りを散策していた所、木々を基地拓いたような場所にあった、マクル族の集落に偶々訪れたのだ。勿論住民達は彼女を怪しがり警戒したが、彼女はいつもの如く、言葉は通じないものの真正面からノリと勢いで接した結果。すぐに打ち解けたられたのだ。

そして、気を良くした族長が少し前に、族長の大きな家：というようにテントで大勢のマルクル族の人間と宴を始めたのだのだが：現在、大半のマクル族の人たちは酔い潰れてダウンしている。

理由は簡単。

シルヴィアの美貌に言い寄ってきた男達と彼女は飲み比べをして、次々と潰していったからだ。

ちなみに彼女は大の酒好きだが、年齢は煉夜より2つ上の16歳：バリバリの未成年である。

『ガッハハハ！！しかも面白え姉ちゃんだな！！』

我らマルクル族の勇敢な戦士達が、まさか一人相手に飲み負けたあな！！』

そう言って楽しげに大笑いするのは、造りの荒い着物のような装束を着た、強面の髭面に屈強な肉体をした男。この民族の長であるマクル族の族長である。

族長は酔い潰れている男達に「情けねえぞてめえら！」と喝を入れた後、木製のコップに並々と注がれた酒を一息で飲み干す。

「ヒュウ あなたこそ良い飲みっぷりじゃない！」

『ぷつはあ！ガツハツハツハ！！あたりめえよ！俺っちからしたら酒なんざ水も同然よ！！』

「お、言うわねえ。ま、それは私も同じことだけどね」

そしてお互いに酒を注ぎ足し笑い合う、何故か言語は通じていない筈なのにノリで通じ合う^{うわばみ}蟒蛇二人。

『ガツハツハ！こんな気分良く酒を飲めるのは久し振りだぜ！』

「あら、貴方ならどこでも気分良くお酒を飲めそうだけど？」

シルヴィアの言葉に族長は突然笑い止めると、少し目を伏せ、低く重く答える。

『いや、まあそうなんだがな。今日は一段と気分がいいんだよ。

最近はここまで気分良く飲めねえからなあ…愚劣なクルト族や糞鳥のせいだな』

「クルト族？」

シルヴィアは族長を見据え酒を飲みながら、話を聞く態勢を静かにとる。

族長はまた酒を飲み干し、話を続ける。

『この山の反対側にいる連中で、俺っち達と昔から縄張り争いをしている仇敵さ。』

この山は元々我らマクル族のモノだったというのに、奴らは自分達のモノだと言い張っていやがる。

最近じゃあ俺達の領地を侵してきやがる始末だ…そのくせ自分達は誇り高いだの何だの言いやがる。

卑怯で下劣な侵略者の分際で何をほざくか…』

「…ならさつさと決着をつければいいじゃない」

『そうしてえのは山々だが、いつからだったかこの山の山頂にでっけえ鳥が住み着いちまってなあ…そいつは滅法強い上に気性が荒くて、迂闊に動けば獲物として目を付けられ喰われちまうんだ…どうもこいつもこの山を我が物面で占領しやがって』

族長は首を左右に振り、忌々しげに呟いた後、ギリリと奥歯を噛み締める。

『…姉ちゃんには関係無い話だったな。忘れてくれ…ああ、変な空気になっちまった。また飲み直そうや』

そこで多少冷静になったのか、族長は気まずげに頭を掻きながらシルヴィアと自分のコップに酒を注ぎ足す。

しかし、彼女はコップに手を付けず、先程までの人懐っこい目から一変、冷たい氷のような目で族長を見据える。

「…私には、あなた達が勇敢とは思えないわ…」

呟かれた言葉は、凍えるように冷たい声音だった。

族長は突如として目の前の少女から放たれる、静かだが強い気迫に

怯むも、一族の長として貶されたことに激昂する。

『…なん、だと…！？お前え！勇敢な我らを愚弄する気かあ…！！』

激情を露わにする族長に対して、シルヴィアはどこまでも冷ややかに、眉一つ動かさずに詰問するかのよう言葉返す。

「自らを勇敢と名乗るなら何故鳥如きに臆する？

何故陰口を叩くだけで行動しようとしなない？

何故打開策を考案しようとしなない？」

『そ、それは…』

「今の貴様達は遠くから吠えることしかしない負け犬…勇敢どころかただの臆病者だ」

『ぐっ………！！』

次々と紡がれる冷たい言葉と気迫に族長は口ごもる。

シルヴィアはそこから少し声に熱を入れ、更に言葉を続ける。

「本当に勇敢と名乗るならそこに言葉なんて必要ない…勇を見せ付けろ、困難を見事打ち破れ、雄雄しき姿により証明しろ。自分達は真に勇敢だと…」

そこまで言い切って彼女は酒を一気に呷る。

「っはあ！ま、これは私の持論だけどね。好き勝手言っちゃって悪いわね」

そして、飲み終わる頃にはいつもの穏やかな彼女に戻っていた。
先程の豹変振りから一変。カラカラと陽気に笑っている彼女に族長は脱力を覚えながらも、彼女に言い返す。

『…まったくだ。お前に何がわかる…と、言いたいところだが、悔しいがその通りだ…俺たち達は口だけで何も行動しようとしてなかった…』

そこまで言って族長は、シルヴィアと同じ様に酒を一気に呷る。

『…ぷはあ！！だがな、姉ちゃんの言葉で目が覚めたぜ！
礼を言う！危うく俺たち達は誇りである勇敢さを忘れるところだった！！』

飲み干した後の顔は、目に強い光を湛えた吹っ切れた表情をしていた。

そして族長はニヤリと無骨に笑うと、息を大きく吸い込んで狸寝入りを決め込んでいる同士達に声を掛ける

『思い立ったら吉日ってな…聞いていたか野郎ども！！？聞いていたんなら立ち上げれ！！我らが勇敢さを示すため、早速戦の準備だ！！』

うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

その族長の一声で先程まで酔い潰れて倒れていた筈の男達が立ち上がり、一斉に咆哮を上げる。

男達の目にも族長と同じ強い光を湛えていた。

その後族長は、酔った族長に絡まれないよう狸寝入りしていた男達に、罰として戦の準備をさせ、自分は再びシルヴィアと談笑しながら酒盛りをしていた。勿論戦が近いので、酒は控えめに飲んでいる。二人はせつせと働く男達を酒の肴に談笑していると、族長がふと気付いたかのようにシルヴィアに尋ねる。

『ところで姉ちゃんはよお、どうしてこんな所に来たんだい？俺たち達に手伝えることがあれば手伝うが…』

「ん？私はねえ…この山の頂上に生息している…」

シルヴィアは酒を飲みながら答えようとするが、そこであることを思い出す。

途中ではぐれてしまった連れの少年のことを…

「…ああっ！？そっといえば煉夜は！？」

『うおおっ！？れ、れんや？い、いきなりどうしたんだい姉ちゃん？』

突如辺りを見回しながら大声を出すシルヴィアに、驚きながらも尋ねる族長。しかし彼女は聞こえていないようで、返答せずに頭を抱える。

どうやら目的が近付いていることに浮かれて、煉夜がついてきていないことに気付いていなかったようだ。

「ああ、いつもの安心感が無いと思ったら…そっといえばさっき微弱な魔力を察知したけど気がしたけど…十中八九煉夜だったんだろ

うなあ……」

『ど、どうしたんだい、姉ちゃん？』

頭を抱えたまま、ブツブツと独り言を言うシルヴィアに、族長は若干オロオロしながら尋ねる。

しかし彼女は反応せず、しばらくそうしていた後、「よし！」と呟き、勢い良く立ち上がる。

「ごめん、私もう行くわ」

『え？あ、オイ！』

「お酒美味しかったわ。いつかまた一緒に飲みましょ。それじゃね」

そう言っ、て、シルヴィアは手を振りながらマルクル族の集落から走り去っていった。

『行っちゃったよ……たく、まだ碌に礼もできてないってのに……』

取り残された族長は頭を掻きながら呟く。

そこへ、皮鎧を着込んだ若い男が何かを持って駆け寄ってくる。

『長！戦の準備ができました！』

男の報告に族長は一つ頷くと静かに立ち上がり、男の持ってきた豪華な造りの皮鎧を身に着ける。

そして、壁に立てかけられている巨大な斧を取り、調子を確認めるかのようにグルンと振るい、肩に担ぐ。

『そうか…よし、夜明けと共に攻め込むぞ…我らが山を取り戻すために！』

『応！！』

そして族長と男は闘志を露にしながら戦士達の元へと向かっていった。

今、静かに、戦いの火蓋は切って落とされようとしていた。

*

一方その頃…

「さて、どうしたものか…」

場所はクルト族の集落にある、族長の住まいである大きなテントのような建物。

その中で現在、白神煉夜は困っていた。

何故なら、自分が気付いた頃に、何故かクルト族の人間達がせつせと戦の準備をしていたからだ。

それも闘争心に目を爛々と輝かせながら…

どうしてこうなった…？つかまたやらかしたのか、俺は？

煉夜は自分の座っている傍らにある、酒の入った木製のコップを恨めしげに見た後、溜め息を吐いた。
どうしてこうなったのかというと、時を少し遡る。

とりあえず煉夜と男が集落に着いたところで、どうやら煉夜が会った男はこの一族の族長だったことが判明。

そこで、煉夜は久し振りの客人としてクルトの人々から盛大に持て成された。

ここまではまだよかった。

煉夜は民族料理もマルクの人々

しかし、その場に酒が出て来たのがマズかった。

マクルの族長と同じくクルトの族長も大の酒好きらしく、煉夜に酒を飲ませようとしたのだ… 14歳の子供に…

当初は普通に酒が好きな煉夜は、自分が未成年だということを華麗にスルーしてのんびりと飲んでいた。しかし、途中から興が乗ってきた族長と何故か飲み比べに移行。

最初は断っていた煉夜だが、酔っているのかしつこく絡んでくる族長にうんざりしてきた為、最終的には承諾し、飲み比べをしたのだ。

それにより彼の悪癖が姿を現す。

それは飲み比べの最終局面でのこと… 酒がいい感じに回り、族長が飲みながら山頂の鳥のことや山の反対にいる仇敵マクル族について愚痴っていた所…

「口を慎め下郎。貴様の中身の無い話を聞いていては酒が不味くなるであろう」

それは姿を現した。

彼はシルヴィアの影響で彼女程ではないが酒には大分強い。しかし、

酔いがある一線を越えると、性格：否、人格がランダムで変化するという悪癖を持つのだ。

気弱になったり、陽気になったり、寡黙になったり、熱血になったりとその種は様々。

しかもそんな状態でも実力には微塵も影響がない：否、酔いにより自制を失っている場合もある為、普段よりも凶悪になっている場合もあるのでタチが悪い。

そして、今回はどうやらハズレが出たらしい。

今回の人格は『俺様』キャラ…その結果

「クッハハハハハハ！このような在り方で誇り高いとは片腹痛いわ」

「ああ、成る程。貴様等の誇りとやらは、鳥の脅威に震えながらひきこもり陰口を叩くということが。ククク、これはすまない。

ならば胸を張るがいい。貴様等は十二分に誇り高いと言えよう」

「慢心せずしてなにが魔王か！」

「鳥と愚族如きに何を躊躇う？」

この山が自分達の物だと言うならば、攻める奪え蹂躪しろ」

「悔しいか？屈辱か？腹立だしいか？ならばこの俺様に見せてみる。貴様らの誇りとやらを。

そして先程の俺様の言葉を訂正させてみるがいい！」

途中で何故か『我様』が入ったが、奇しくもシルヴィアと似たような内容で尊大に傲慢に彼らを煽りに煽りまくったのだ。

逆らうことすら許さぬ強烈な覇気、威厳、威圧感、気迫の全てを以

つてして。

その結果、現在に至る。

素面に戻った彼も、記憶に無いとはいえ流石にこの事態を少々マズいと思い

俺には関係ない事とはいえ、引き金を引いたのは俺だし、どうしたものか…

一瞬真面目に考え

まあ、成り行きに任せるか

一瞬でその思考を放棄した。

面白ければすべてよし、これぞ煉夜クオリティー…全く以って傍迷惑である。

『旅の者よ。内容こそ少々アレだったが、我らの目を覚ましてくれて感謝する』

「ん？ああ…」

そこへ、族長の男が煉夜に礼を言いながら歩み寄ってくる。

その手には槍が握られており、体には豪華な皮鎧に、ファーのような毛皮を纏っている。戦装束というやつであるう。

煉夜はそんな男に適当に相槌を打っておく。如何せん何を言ったのか記憶に無い為、礼を言われてもリアクションに困るだけなのだ。ちなみに、現在煉夜は『探査』を使っていない。

何故なら最初に使った『探査』と今までの僅かな会話をもとに、この言語を解読、理解、習得することができたからだ。流石にある一つの才能以外は優秀なだけはある。

『しかし済まないな、こんなバタバタしていて…本当は最後まで持て成してやりたかったが、お前の言葉を聞いて皆燃え上がってしまったな。悪いがこれ以上の持て成しは無理なようだ』

「何を言ってるのやら…俺はあんたらから十分すぎるほど世話になった。

俺があんたらに礼を言うことはあっても、あんたらが俺に謝ることなんざ何もねえんだよ」

申し訳なさそうに頭を下げようとする族長に、煉夜は気怠げに手をヒラヒラと振りながら答える。

その態度と雰囲気、族長は少しかり驚いたような顔をする。

「…どうした？」

『……いや、最初はただませているだけかと思っただが、今ではお前が全く少年に見えないんだが…』

「残念、俺は真正銘14歳のただのクソガキだよ…他より幾分生意気だな」

『そのクソガキ相手に我らは焚き付けられたのか。まったく、悪い冗談だな』

「クハハハハ」

肩を竦めながら苦笑する族長に、煉夜は焚き付けた記憶が無いので笑って誤魔化す。

『まあ、それはいいとして、我らはこれからマクル族に宣戦布告をして、夜明けと共に奴らへと攻め込む』

「ふむ、奇襲でもすればよかろうに…」

『我等は誇り高いのだ…真の意味でな』

「律儀…いや、難儀だねえ…」

誇らしげに胸を張る族長に、煉夜は呆れた様子で肩を竦める。

『確かに難儀であろうが、宣戦布告した上で我等が勝利したのなら、我等の誇りは完璧に証明される。そうだろう？』

「さてな…ま、そうなれば俺は消えさせて貰うぞ。流石に戦に巻き込まれるのは御免だからな。なにより面倒だし」

間違っても焚き付けた張本人が言うような台詞ではない。しかし族長はそれを気にした様子はなく、鷹揚に頷く。

『それがいいだろう。ここまで攻め込ませるつもりは毛頭ないが、万が一ということがある。それに、鳥という弊害もいるしな』

「鳥ね…」

煉夜は、そういえばアイツの目的はその鳥だったな。生息地は山頂…だったか？

などと考え、とりあえず次の目的地を決定する。

「さて、そろそろ俺はお暇させてもらおうでしょう。」

随分と世話になった、感謝する」

そして、煉夜はユラリと立ち上がり礼を言つと、そのまま立ち去ろうと歩き出す。

しかし族長は静かに、出入り口に手を掛けている彼を呼び止める。

『待て、最後に一ついいか？』

「ん？」

『…お前は何者なんだ？』

族長が真剣な顔で煉夜に問う。

族長も流石に気になったのだろう。彼の子供とは信じられない程の雰囲気、態度、思考、物腰。

そして何より、当初こそ気にしていなかったが、自分達の仲間ですら命を落とすこともあるこの危険な山で、武装もせずに散歩をするかのような軽装でいることが…

族長はさりげなく煉夜との距離を測りながら槍を持つ手に力を入れる。

もし彼が一族に…この山に仇なす存在だったら始末するために…

しかし煉夜はその族長の意図を理解しながらも態度を変えず、のんびりと首だけ振り返り

「神の域に足を踏み入れし者」

と、真顔で答えた。

『……は？』

「なんてな、じゃな」

予想外の回答に族長が一瞬呆けている隙に、彼は笑いながら、闇に溶けるかのように去っていった。

『……』

『族長、そろそろ出発の刻です』

『そうか、わかった…』

彼は煉夜と入れ替わるかのように入ってきた仲間に一つ頷くと、気持ち切り替え仲間の下へと向かった。決戦の時は近づいていく…

*

そして夜明けを迎えた「クルルマウンテン」

この山の中腹地点にある大きく広く拓けた場所で、両陣営の集団は対峙していた。

片や誇りと義を重んじるクルト族

片や武と勇を重んじるマクル族

長きに渡り争い続けてきた両一族が今ここに、雌雄を決しようとしていた。

その場は大勢の人間がいるにも関わらず静かで、しかし、そんな静寂とは裏腹にその場にいる人間全てに抑えきれな闘争心が宿っており、じつと戦いの時を今か今かと待ち続けている。

それはまるで少しの衝撃で爆ぜる爆弾のようで、もしも誰かが、少しでも抑えこんでいる敵意を相手に向けたら、その瞬間戦闘になる……そんな緊迫した空気が漂っていた。

その危うい雰囲気の中、両陣営に動きがあった。

集団の先頭に立っていた同じような豪華な皮鎧を着こんだ男が前に出てくる。

その二人こそ対立する二つの一族、マクルとクルトの頂点……如いては、この山の頂点に成りうる二人でもある。

二人はお互いの獲物がギリギリ届かない位置まで歩み寄る。

『どちらがこの山、クルルに相応しいか……長きに渡る争いに決着をつけよう』

『フン、元よりそのつもり……山を去る準備はしてきたか？軟弱なクルトの一族よ』

『ぬかせ、それはこちらの台詞だ。鳥の前にお前達を蹴散らしてくれる』

『ハッ！それこそ俺っちの台詞よ。お前え達はその鳥の前座なんだよ』

両者は舌戦とも呼べぬような拙いな言い争いをした後しばし睨み合

い、踵を返し再び自陣営へと戻る。
そして、勢い良く振り返り両手を大きく広げ、己が誇る戦士達を鼓舞する

『共に行こう！誇り高きクルトの戦士たちよ！！あの誇りなき蛮族を見事打ち倒そうぞ！』

『俺っちに遅れんじゃねえぞ！？勇敢なるマクルの戦士達よ！我らが力にてあの軟弱者共を蹴散らそうぞ！！』

戦士達はその声に応えるように雄たけびを上げ、闘争心を最大にまで引き上げる。
その気迫により、その場周辺にいる魔物は逃げ出し、木々は脈動するかのようにざわめく。

『『全員、突撃……』』

そして今正に、決戦の火蓋が切って落とされようとした瞬間。

『あ、あの鳥は！？』

突然戦士の慌てたような声が戦場に響き渡る。
そしてその一拍後に

『ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！』

地を揺るがす程の咆哮が空から降ってきた。
皆が上空を仰ぎ見てみると、そこには出たばかりの日をバックに、翼を大きく広げた姿の、深緑の巨大な鷹……
ある神話では「死者を呑み込む者」という意味の名を持つ存在……

凶鳥『フレスベルグ』が戦士達を見下ろしていた。

*

「あらら、予想外の展開になったな…」

突然のフレスベルグの登場に、先程までの闘志は何処へやら慌てふためく戦士達。

その様子を煉夜は木の上から眺めながら呟く。彼は族長にはああ言ったものの、シルヴィアの行方が知らない今、無駄に動かずトラブルメーカーである彼女が来そうなトラブルの場であるこの場に足を運んだのだ

…というのは建前で、本当は珍しいもの見たさに来ただけなのだが…

「しかし、パニくりすぎだなあ、オイ。

戦士を名乗るなら不測の事態でも対処してもらいたい所だが…」

などと批評しながらも動く気配の無い煉夜。どうやら本格参戦するつもりはないらしい。

ま、一飯の恩もあるし、ピンチになったら手伝おうかね

彼がそんなことを考えているうちに、フレスベルグが両陣営の丁度中間に降り立ち、暴れ始める。

それにより戦士達は爪で切り裂かれ、翼が起こす風により吹き飛ばされ、少しずつその数を減らしていつている。

しかし、自分達を狙う敵が目の前にいるにも関わらず、誰も動こうとしない。否、動けない。

フレスベルグから放たれる威圧感が、殺気が、何より迫りくる死の

恐怖が、皆の足を地に縫い付けて離さないのだ。

おいおい、もうかよ…

煉夜はその様子を見てつまらなそうに溜め息を吐くと、魔力を練り上げる。

だがそこへ、力強い声が響き渡る。

「争っている場合？目の前にあなた達の仇敵がいる。ならあなた達のすべきことは？

慌てること？怯えること？逃げ出すこと？

違うわよね。

あなた達は勇敢にして誇り高き戦士…じゃあすべきことは一つの筈よ」

その声は決して大きな声ではないが、スルリと耳に入ってくる。

挑発するような、それでいて鼓舞するような言葉。

その言霊に込められし意志は、困難に負けない勇敢さと、決して挫けない誇り高さ

それは戦士達に浸透するかのよう響き渡り、彼らの瞳に力を取り戻させるには十分だった。

『ハア、また忘れる所だったぜ…』

『ああ、昨晚思い出したばかりだったのに…』

『そつだ、俺達はまだ何もしていないじゃないか』

『このまま喰われてたまるかよ』

一人が闘志を取り戻し、己を鼓舞するかのようひびくと、それは伝染するように広がっていき、大きなざわめきとなる。

更にそのざわめきは徐々に雄叫びへと変化していき、最終的にはそ

の場全ての戦士に力が甦った。

そこから彼らの快進撃が始まった。剣で斬り、槍で穿ち、鎚で叩き、斧で裂き、弓で射抜く。

いくら吹き飛ばされようとも、いくら傷つこうとも、彼らは決して臆することも退くこともせず立ち向かう。

誇り高く勇敢に…

その戦士達の怒涛の攻めにより、徐々に傷付いていくフレスベルグは、翼を大きく広げる。

そして、その翼を羽ばたかせ、逃げるかのように空へと飛んでいく。

『見ろよ！逃げていくぞ！』

『やった、追いついてやったぞ！』

『ざまあみる！！』

飛んでいくフレスベルグを見て歓喜する一同。

しかし、喜ぶ戦士達を尻目に、族長二人には嫌な予感を感じていた。それは長年この山で魔物達と戦ってきた経験と勘が告げる警報。

「グルルルル…！」

『！？』

そして二人は見た。

フレスベルグの瞳には、未だに闘志が微塵も失せていないことを

『マズイッ！！すぐに弓を番えろ！！』

『奴を空へと逃がすな！』

何でもいい、奴を撃ち落とせえ！！』

フレスベルグは空を急旋回し、戦士達の方へと向き直ると口を大きく開く。

族長の怒号に戦士達は慌てて弓を番えるが、気付いた頃にはもう遅く、フレスベルグは既に矢の射程範囲外まで飛んでおり、その大きく開いた口に、膨大な風の力が収束されていく。

どうやらフレスベルグは、戦士達を捕食の対象ではなく殲滅すべき敵と認めたらしい。

『おい…なんだよアレ……』

『風…か？』

『あんなの放たれたら……』

『クソッ！どうすれば……！』

その力は優にこの山の一部を吹き飛ばす程の威力を秘めており、それを本能的に悟った戦士達はその荒れ狂う力の奔流の前に死の覚悟をした。

その時だった。

「堕ちろ阿呆鳥」

何処からとも無く聞こえてきた呟きと共に、世界が何者かに支配されたかのように灰銀色に染め上げられる。それと同時に、収束されていた風の力は消え失せ、空に留まっていたいたフレスベルグは、羽ばたいているにも関わらずその体は急速に落下し、地面に勢い良く叩きつけられる。

更に、落下したフレスベルグに向かって幾十もの武器が上空から降り注ぎ、フレスベルグの翼を正確に貫いていく。

「ギャオオオオオオオオ！！？」

フレスベルグは悲痛な叫びを上げる。

その翼は数多の武器の襲撃を受けて傷つき貫かれ、見るも無残なま
でにボロボロになっている。これではもう飛ぶことはできないだろ
う。

戦士達は突然の事態に皆が呆然としており、クルトの族長にだけ
ある声が聞こえてくる。

「これで一飯の恩は返したぞ。
後は自分達で片付けろ」

それは、自分達の目を覚ましてくれた、不思議な雰囲気をした少年
の声だった。

「…今起こったことについては何も言うまい…ただ、感謝するぞ少
年」

族長はその声に口の中でそう礼を言つと、すぐさまフレスベルグに
向かつて駆けながら戦士達に号令をかける

『何を呆けてやがるお前達！！今が好機だ！クルトの誇りを見せ付
けてやれ！！』

『マクルもだ！てめえらクルトに先越されやがったら承知しねえぞ
！！？』

二人の族長の声に我に返った戦士達は、雄叫びを上げながら再びフ
レスベルグへと特攻していく。

一つの一族は決して退かず、勇ましく誇り高く

一つの一族は決して臆せず、雄雄しく勇敢に

そして二つの一族は一丸なり、自分達の山に仇す存在を追い込んで
いき

ハアアアアアアアアアア！！！！

マクルとクルト。二つの族長が高く飛び上がり、フレスベルグの額に己の獲物を同時に叩きつけた。

「ギャオオオオオオオオオオ……」

その一撃によりフレスベルグは甲高い咆哮を上げ、それを最後にそのまま息絶えた。

「ハア、ハア、やった…のか…？」

「ああ、やっただ……！」

「俺達の勝ちだあああああああ！」

うおおおお おおおおお！！！！

フレスベルグの死を確認すると、戦士達は一斉に勝ち鬨を上げる。そこに最早対立しあっていた二つの一族などは無く、皆が喜びを分かち合い、お互いを讃え合うその光景は、一つの家族のようにも見えた。

「けっ、見ろよあいつらをよ。いがみ合つてたのを忘れて喜び合つてやがる」

『それは俺達とて同じことだろう』

「あ、そうだな」

族長二人は、今にも宴会騒ぎになりそうな程騒いでいる仲間達を少し遠くから眺める。

『ああゝあ、折角覚悟まで決めて来たつてのに、今のあいっすら見てたらいがみ合つてたのが馬鹿みたいに思えてきちゃった』

『奇遇だな。俺も丁度そう思っていた所だ』

『…おい、クルトの』

『何だ、マクルの…』

『お前え達中々やるじゃねえか。ちつとばかり見直したぜ』

『…ふつ、お前たちもな』

そして二人は顔を見合わせ笑い合った。

その様子を近くの茂みから眺める影が二つ

一人は微笑ましそうに手を取り合っている族長二人の様子を眺め、もう一人は木に気怠げに凭れ掛かり眠そうに欠伸をかみ殺している。その二人とは言わずもがな、つい先程合流を果たしたシルヴィアと煉夜であつた。

「うんうん、仲良きことは美しきかな…」

「…喧嘩後の高校生みたいなノリだな。

ま、何はともあれ、あるべき形に戻った…って所か？」

「あるべき形？」

煉夜の言葉に視線を彼の方に向け、首を傾げるシルヴィア。

「疑問に思わなかったか？違う民族であるあいづらが何故普通に会話できてるとか…」

「あ、そういえばそうね。世界回ってきたけどあんな言語初めて聞くし…」

「その初めて聞く言語をノリで理解できるお前はなんなんだろうか…まあ、それはいいとして、あくまでこれは俺の推論だが、恐らくあの二つの民族は元々一つの民族だったんじゃないか？」

彼らは言語、格好、集落、戦闘力、戦闘法、ついでに族長が酒好き…それら全ての点が酷似している。

それらの点と、その他様々な要素を用いた彼の推論は、概ね的を射てていた。

シルヴィアも思うところがあつたのか、頷いている。

「なるほどねえ…つまり、マクルとクルトで『マクルト族』って感じ？」

「知るか。言つたろ？これは推論にすぎない」

もう興味が無いといった素振りで、彼は手をヒラヒラと振り、視線をチラリとシルヴィアに向ける

「ま、それはいいとして…随分面倒な仕組みをしたものだな。いつもの気まぐれか？」

「ん、それもあるけど、今回はちょっとしたお節介かな。

マクルの族長さんが『クルトと鳥のせいで気分良くお酒が飲めない』
って言ってたのよ。やっぱりお酒は楽しんで飲んで欲しいからね。」

そう、戦が始まる直前にフレスベルグをあの場に誘き寄せ、更に戦士達を煽り、団結させたのはシルヴィアの差し金だったのだ。

煉夜からしてみれば、無駄な干渉をするな、めんどくさい…と、言いたいところなのだが、記憶に無いとはいえ彼もまたクルトを睨けて干渉してしまった為に、あまり強くは言えない。

「また妙な理由だな…なら目的であるあの鳥をさつさと殺つて、あの二つを搗ち合わせればよかったものを…」

「それでも良かったんだけどねえ、あのままあの二つの一族が争っていたら、どちらが勝つたとしてもやっぱり気分良くはならないと思つたのよ。

やっぱりお酒好きがお酒を飲むなら、気分良く飲まないと嘘だしね。」

「結局酒かよ…ま、要するに、共通の強大な敵を出現させることで奴らを団結。あわよくば和解させようとした、と…やれやれ、いろいろと穴だらけな計画だが、よく成功したもんだ…」

少なくともフレスベルグは、一流の魔導士でもそこそこ苦戦するよ
うなCランク魔獣だ。

魔法が使えない生身の人間が束になつても勝てるような相手ではない。
い。

それこそ体術や『氣』での戦闘を生業とする武導士でもない限り。
それなのに彼らは、多少の介入こそあったものの、あの鳥を見事下
したのだ。

そのことに煉夜は密かに驚いていたりする。

「何言ってるのよ。私と貴方がいるのよ？失敗するはずないじゃない」

満面の笑みを浮かべながら断言するシルヴィアに、どんな理屈だ…と、呆れながら思う煉夜。

だが、彼女はできないことは絶対に言わないし、何より彼女に理屈は通用しないのを理解しているため、口には出さず、苦笑を返すだけに止める。

「ハア…まあ別にいいがな。
それで？よかったのか？」

「ん？何が？」

「あの鳥が今回の目的だったんじゃないのか？」

「ああ、それなら大丈夫よ。目的はこれから達成するから」

「あ？どういうこと ああ、成る程ね」

二人はここから少し離れた上空から、強い気配の大群が迫ってきているのを感じる。

その気配を感じて煉夜は納得の声を上げると、その正体を確認するため、瞳を閉じ『把握』を発動、襲撃者達が迫り来る空まで展開する。そして、その気配の正体は、彼の予想通りのモノであった。

「あの鳥の大群か…どうやら最後の咆哮は仲間を呼ぶ為のモノだったらしいな」

その気配の正体とは、先程二つの一族が倒したフレスベルグが、死

の間際に呼び寄せた仲間の大群だった。

煉夜は『把握』を解き目を開けると、シルヴィアに「どうすんだ？」と気怠げに尋ねる。

「決まっている。真正面から打ち滅ぼす」

投げやりな問いの応えは、冷たい声で返された。

その返答に違和感を感じた煉夜は、視線をシルヴィアに向けてみると、そこにいたのは一人の魔王だった。

眼光は冷たく鋭利に細められ、身に秘めた莫大な魔力は彼女を中心に渦を巻くかのような解き放たれる。

更に全身には燃えるように荒々しい闘気と覇気を纏い、その雄雄しく勇ましい姿はまさに威風堂々。

それは、普段穏やかで陽気な彼女の謂わば臨戦態勢。

これぞ魔道の最高峰に君臨せし天壤之三位、魔王シルヴィア・ヴァレンスの真の姿。

それを見た煉夜は、僅かに驚いた顔をした後、珍しい物を見たといった風にニヤリと笑う。

「へえ、随分と珍しいな。」

あの程度の連中にお前がマジになるなんざ」

「何、彼らの勝利に水を差そうとする輩を潰そうと思ってな…」

「へえ…ま、こんなことしてる間にも敵さん迫って来てるし、とりあえず戦場へと移動するでしょうか」

煉夜がそう言うと、二人の目の前に灰銀色の『門』が出現する。

それは敵が迫ってきているであろう空へと繋っている。

シルヴィアは一つ頷き『門』を潜ると、煉夜もその後につき『門』

を潜った。

二人はクルルマウンテンの遙か上空に位置する場所に繋げた『門』から空へと出る。

高度は4000m以上。日が出たばかりの空はどこまでも青く美しく、眼下には雲で霞んで見えるが、クルルマウンテンは勿論、その近くに位置する森や、遙か先にある町までの壮観な景色を一望することができる。

しかし彼らはそれらには全くの興味を向けず、煉夜はすぐさま『創造』により半透明の灰銀色の足場を創り、その上に着地する。そこから更に、彼は『空間』を操作し、自分達の周辺の気圧や温度などを地上と同じにする。

高度4000m。

この場所は、少し運動しただけでも酸欠になるほど空気が薄く、気温は優に氷点下を超えている。決して人がマトモに戦闘できるような環境ではない。しかし彼は、そのマイナス要素を魔法により払拭したのだ。

「…相変わらずの特異な魔法だな」

「我が事ながら同感だ。

さて、舞台は整えたぞ。サポートは必要か？」

「貴方が出るまでも無い…私だけで十分だ」

「そうか、なら久々のお前の本気を傍観させてもらおうとしよう」

そう言う彼は、自分の役目は終わったと言わんばかりにシルヴィ

アの後ろへと下がる。

彼女はそんな彼に礼をすると、前方を見据える。

そこには、風を纏い猛スピードで接近してくる緑の見える。

それこそ標的であるフレスベルグの大群である。

彼女はそれらを確認すると足元から魔方阵を出現させ、手を大きく天に掲げる。そして、獰猛な笑みと共に呪文を唱える。

「これは、私から戦士達へ送る祝砲だ。

『我が手に来たれ、九つの堅牢に封じられし災厄よ！

今こそ終焉の刻！^{とき}」

其は悲哀、絶望、破滅を振り撒きし煉獄の業火！！」

高らかに唱えられた呪文により、彼女の強大な魔力がマナを媒体とし、圧倒的な力となつて渦を巻くように彼女の手に集っていく。禍々しいほど紅く、神々しいまでの光を放ちながら…

「いきなり全力か…こりやすぐに終わるな…」

その力の余波で衣服と髪を靡かせながら、煉夜は予想ではなく確信を以て呟く。

今から始まるのは正々堂々とした戦闘ではない。

正々堂々とした真正面からの蹂躞。

それから10分後、フレスベルグの大群は圧倒的な力の下殲滅された。

＊

「やれやれ、こいつの全力を見誤った俺が馬鹿だった…」

クルルマウンテンから遠く離れた道路にて、のんびりと歩きながら煉夜は気怠げに呟く。

その原因は先程の殲滅戦にある。

彼はシルヴィアが魔法を放つ前に、その光景が地上の人目に付かないように、空間隠蔽の結界を張ったのだが、彼女の代名詞とも呼べる広範囲殲滅魔法の威力が煉夜の予想を上回り、フレスベルグの大群ごと結界を破壊してしまったのだ。

その結果、空で起こった一種の災害の如き光景を偶々見ていた一般人が、慌てて騎士団にこのことを連絡してしまい、要請を受けた騎士団と鬼ごっこをするハメに……尤も、鬼ごっこと言っても、途中から逃げるのが面倒になり、逃げる側が追ってきた鬼を全員伸すという、逆鬼ごっこになってしまったが…

それにしても、やっぱりこういう事態に備えて政府が協議会にコネでも作っておいた方がいいのかね…？

「煉夜、煉夜！」

煉夜が半ば真剣にこれからのことを考えていると、先を歩いていたシルヴィアは燃えるような真紅の髪を靡かせ、満面の笑みを浮かべながら此方に振り返る。

その誰もが見惚れるような笑顔に、煉夜は嫌な予感を感じられずにはいられない。

この笑顔をしている時の彼女は、大抵碌なことを考えていないからだ。

「海に行きたい!!」

予感的中。

いつもの如く放たれるシルヴィアの思いつき発言に、煉夜は辟易しながら眉間に皺を寄せ、こめかみを指で叩く。この二人旅は、元は彼女が自分に付いて来る形で始まった。筈なのだが、何故今は彼女が主導権を握っているのだろうか？

毎回そう思わずにはられない。

しかし、彼女に抗議をした所で、口論になり、全力で駄々を捏ねられ、最終的に面倒になり承諾する。という流れが容易に想像できるので、半ば諦観している。

行く宛ても目的も無いし、基本的に面白いからべつにいいんだがな

まあ、本人はハプニングとトラブルに塗れた現状を気に入っているようなので、問題無いのだろう

ハプニングとトラブルは人生を彩る香辛料。それが彼の持論らしい

しかし山の次は海か。本当に突拍子無えな。まあこの思いつき発言も最近慣れてきたが。

「やれやれ、今度は何だ？」

「リヴァイアサンを見てみたい！」

前言撤回

多少慣れたつもりだったが、この突拍子の無さはそうそう慣れられ

るモノではなかったらしい。

「よりもよってSランク魔獣…それも海神の一角かよ…下手すりや死ぬぞ？」

「大丈夫よ。私と煉夜ならねっ」

呆れ果てている煉夜に対し、シルヴィアは楽しげに笑いながら手を差し伸べる。

その真っ直ぐな笑顔を見て眩しげに煉夜は目を細める。

「ハイハイ。仰せのままに、『煉獄^{れんごく}姫』様」

そして、彼はそんな彼女に苦笑を浮かべながら、わざとらしい程恭しくその手を取る。

「うんうん、くるしゅうないぞ、『神域』君」

その煉夜の態度に楽しそうに益々笑みを深めるシルヴィア。

二人は出会ってからまだ数ヶ月しか共にいない。

しかし、この二人の間には確かな絆があった。

それは何で繋がっているのかはわからない。

だが、例え敵同士になろうとも、この絆はそう簡単には切れないと、二人は自覚こそ無いが感覚的に感じていた。

「で？どこの海に行くかは決まってるのか？」

「えっ？」

「えっ？」

『…………』

尤も彼らにとつては、そんな絆云々なんてことはどうでもいいことなのかもしれない。

ただ一緒にいれば楽しそう。

それだけで共にいるに足る理由になるのだから。

「　　ん　　のか？　　れん　　煉！聞いているのですか
！？」

「んあ？」

いきなり耳元からの大音量。それにより俺は我に返る。

その音源に目を向けてみると、お嬢が心配そうに此方を見ていた。

「…なんだ？」

「なんだ？ではありません！さっきから話しかけているのにずっと上の空で…どうかしたのですか？」

「ん？ああ、今日何か面白い番組はあったかね、と考えていただけだ」

俺は片手をヒラヒラと振りながら適当に誤魔化し、もう片方の手で味噌汁を飲む。

その味噌汁はすっかり温くなっており、味も風味も幾分か落ちていた。

どうやら俺は、思ったより長く追憶に耽っていたらしい。

「番組ですか？今日は確か、『グルルン滞在記』がありましたね」

「ああ、あの妙に間延びしたナレーションの」

俺のあからさまな誤魔化しの言葉に、律儀に考え返答してくれるお嬢に内心苦笑する。

素直だねえ。

アイツがいい女ってなら、お嬢はいい娘って感じだな

そんなどうでもいいことを考えんながら、俺はお嬢と適当に談笑しながら冷めた料理を胃に収める。

元々上品に飯を食べるお嬢は食事速度が大分遅いが、俺は少々長いこと物思いに耽っていた為、食事が終わるのは同じぐらいだった。俺達は食い終わった後水を一杯飲むと席を立つ。

「さて、飯も食い終わったことだし、帰るか」

「ハイ、そうですね」

歩き出す俺の少し後ろから付いて来るお嬢。

そして食堂から出ると、外はすっかり暗くなっており、空には三日月が輝いていた。

そこでふと俺は過去を思い返していたせいか、ある知人の教えを思い出す。

「ああ、そっぴや女の夜道は危険らしいからな。必要なら送ってくが？」

「え？い、いえ！そ、そんな煉の手を煩わせるなんて！…で、でも確かにこの前のようなこともありますし、お、送ってくれるというならばそれに越したことはないですけど…しかし…」

お嬢は顔を赤くしながらどもりまくと、俺の顔をチラチラと見る。そして、もじもじと、恐る恐る聞いてくる

「…お、送り狼に、なりません、よね…？」

その問いと態度に俺は腹の内で爆笑しながら、表面上は歪み一つない微笑を浮かべ、肩を竦める。

「生憎、そこまで女に餓えてもいないんでね」

「え！？ど、どういうことですか！？」

「さてねえ…」

詰め寄ってくるお嬢を適当にはぐらかしながら、お嬢を送るべく女子寮付近まで歩いて行く。

「ま、待ちなさい煉！説明しなさい！」

その俺の後ろを顔を真っ赤にしたお嬢が追っかけてくる。

あの頃の刺激的でスリリングな毎日も楽しかったが、どうやら俺はこんな生温い生活も楽しいと感じてきてしまっているようだ。

それが俺にとって幸か不幸かはわからないが、まあいつも通り、愉快に生きさせてもらおうという。

空に浮かぶ三日月は、そんな二人を微笑ましげに見るかのように、

優しく辺りを照らし出していた。

「おまけ」

「ふう…こんなもんかね」

時刻は夜中の10時。

一通り生徒の夕飯を作り終えた食堂のおばちゃんは、誰もいない食堂の掃除を終えると、カウンター奥にある休憩用の椅子に腰掛け、備え付けられているテレビ（おばちゃん専用）に電源を点ける。

おばちゃんが面白い番組は無いかとリモコンでチャンネルを変えていると、食堂の入り口の扉が開き、恐らく鍛錬服なのであるう、ライダースーツと軽鎧を混ぜたような服（？）を着た銀髪の少女が入ってくる。

その少女はカウンターの横に置かれてある券売機に硬貨を投入し、出てきた券を取ると、カウンターの奥でテレビを見ているおばちゃんに声を掛ける。

「すみません、日替わり定食セットをお願いします」

「あら、いらつしゃいフィリスちゃん。今日もこんな時間まで鍛錬かい？」

こんな時間に来た少女…フィリスに、おばちゃんは顔色一つ変えずに笑顔で対応する。

どうやら彼女はこの時間帯によく食堂を利用しているようだ。

尤も、既に食堂の利用時間は過ぎているため、何かしらの理由がありそうだが…

「ええ、私はまだまだ未熟ですので…」

「偉いねえ。毎日毎日こんな時間まで…よし！そんな頑張り屋なあんたには腕によりをかけて作って上げるよ！いっぱい食べるんだよ」

「ありがとうございます」

おばちゃんはフィリスから食券を受け取ると腕まくりをし、気合い十分に厨房に入っていく。

フィリスは席に着くと、ふとカウンターの奥で点けっぱなしになっているテレビに目を向ける。
そこには…

『人気アイドルの姫川葵が…、義と勇を重んじる…、』
『マルクル族』に…出会った…』

番組のOPで、今人気絶頂のアイドルと、紅白の鉢巻をした族長二人が酒を片手に肩を組んでる姿が映っていた。
今日も世界は平和です

外伝（後書き）

ハイ、外伝が無事（？）書き終わりホッとしているとなラーです。
途中まではノリノリだったんですが、これは所々省略しないと収まらないと気付き、いろいろ削りました…ハイ、言い訳です。

しかし、このクルルマウンテン編は何話にも分けて書きたかった…
不完全燃焼です…

まあ、また機会があれば今度はちゃんとした企画を立てたいですね。
次からは普通に本編を再開します！

17話（前書き）

前半シリ阿斯後半ほのぼのといった風に仕上げてみました。
途中何かおかしなノリになりましたが、

川、ー、ゝ、）b<何、気にすることはない。

どうでもいいことですが、自分は主人公である「白神煉夜」を鳥海
浩輔さんで脳内再生しながら執筆作業に勤しんでいます。

やっぱイメージは大事だと思うので…

皆さんは煉夜はどんな声が合っていると思いますか？

17話

「鳳には、戻らない…?」

咲夜が慄きながら譫言のように呟く。

その普段は滅多に崩れることの無い表情は、今は目を見開き呆然としており、動揺のためか目が揺らいでいる。

対する俺はというと冷静…所か自分でも分からないほどおかしなテンションになっていた。

何故かは知らんが目に見えて狼狽している親愛なる姉貴分を見て、俺は悪戯が成功したガキのような心境になっているのだから。

恐らく今の俺の顔は、随分と愉快気に歪んでいることだろう。

そして改めて自覚する。

俺は…『白神煉夜』は壊れているのだと

「どういことですか…お前は外武錬での修行が終わって帰ってきたのでは…」

咲夜は声を震わせながら、小さな、今にも消え入りそうな声で俺に聞いてくる。

いや、聞いてくるといふよりは、無意識に口から出た、といった方が正しそうだ。

俺は見当ハズレなことを言っている姉貴分に聞こえないように、溜め息混じりに呟く。

「修行、ねえ…一応そいう事になってたんだっただか」

この咲夜の様子を見るに、予想通り舞と同じく外武錬をそのままの意味で理解し、その本質までは理解していないようだ。

まあ、当然と言えば当然か…才能ある奴には何ら関係の無い話だからな…

外武錬とは、未熟者が鳳の姓に相応しい実力を得るために海外修行に行く…という事で通っているが、その実は鳳の名を汚す無能者を戸籍から抹消し海外へ捨てる…要するに、態の良い追放という意味。本来、鳳宗家の人間には縁の無い話なのだが、俺はこのことを昔から知っていた。親父…日向や俺を虐めていた連中、俺を蔑んでいた大人達から口々に言われたからだ。

この話を聞かされてから、俺は一層努力した。下手をすれば明日は我が身なのだから…結局無駄な足掻きではあったが…

「あ、ああ、そういうことですか。まだ修行が終えていないから、まだ戻らないということなんですね…？」

昔のことをしみじみと思い返していると、どこか縋るような、彼女らしくない声音で、咲夜は俺に問いかける。

その瞳には、一杯の不安と一抹の期待が込められていた。

「曲解するな現実を受け止めるよ、あんたらしくもない。言っただけだ。二度と名乗るつもりはないと」

しかし、俺はそれを冷たく一蹴する。

彼女の端正な顔が一層悲しげに歪む。

この反応や今までの反応を見ると、俺がどれだけ想われていたかがわかる。

それは素直に有り難く思う。

だが、俺の心は微塵も揺るがない。

もう決めたことだから。

白神煉夜として得て、背負ったモノを棄てるわけにはいかないから。

「…そんな…何故なのですか…！？私や舞、雅也がどれだけ貴方が帰ってくるのを心待ちにしていたことか…」

「……………」

咲夜はキツと俺を睨み付けると、哀切と激情を静かに吐き出す。

その哀しみは彼女自身のモノだが、その怒りは妹や弟分の為に怒っているかのように見えた。いや、実際あの二人の為に怒っているのだろう。彼女は自分の為ではなく、他の人の為に怒る人だから…

「…教えてください…何か、理由があるのでしょ…う？」

俺が黙ったまましていると、冷静さを取り戻したのであるう咲夜が、どこか氣遣うように声を和らげて聞いてくる。

しかし、声に反してその眼光の強さは変わらない。寧ろ強くなっている。

その目は、納得いかない理由だったら説教しますよ？と、言外に語っているようだった。

咲夜の説教はとにかく長い。更に疲れる、精神的に。

強い魔力を垂れ流しにしながら長時間の説教。それも少しでも気を抜いた瞬間、強烈な殺氣が飛んでくるオプション付き。

いやあ、思い出すと鬱ってくるねえ。ま、今なら耐え切れる自信がある…いや無理ですねハイ。

それにしても、こんな状況下でもこのお気楽さ…我ながら常識ねえな…

俺も随分と図太くなったものだ…と内心苦笑し、本当の理由を話す

気はないので、それっぽいことを言っておく。

「理由か、そうだな…いろいろとあるが、とりあえずは俺が鳳に相応しい人間じゃねえからだ」

「それは努力すれば…」

「実力の問題じゃない。本質の問題だ」

「本質…？」

俺の言葉に咲夜は怪訝そうに眉を顰め、首を傾げる。

俺はそんな咲夜からの視線をスルーし、物思いに耽るように天井を仰ぎ見る。

先程の言葉、適当に言ってみたことだがあながち嘘でもない。

捨てられてから6年間…見知らぬ地に身一つだけで放り出された俺は、孤独に耐えながら日々を生き残るために歪み、ある事件により全てを失い狂い、力を得る為の師匠の鍛錬により壊れてしまっている。

現在こそ少し前までの俺に比べれば丸くなっているが、『白神』となつてから今まで、ある目的の為に数多の人間を利用し、裏切り、この手に掛けてきた。そして、そのことに感慨を抱いたことは無い。まさに外道と呼べる生を歩んできた俺は、本来なら日の下でこんな平和な生活をしていい人間ではないのだ。

「まあ、なんだ。つまりだな…」

未だに怪訝そうな顔をしている咲夜に手っ取り早く現実を見せるべく、学生としての俺ではなく『神域』としての俺でもない…嘗て咲夜達と遊んでいた頃のような、何も着飾らない『ただの煉夜』として答える。

「…昔の俺とは、違うということだ」

「ッ!？」

すると、咲夜は目を見開き、怯えるように後ずさる。その拍子に手に持っていた書類を落としてしまい、紙片が床にバサバサツとばら撒かれてしまう。しかし彼女はその事には全く目がいつていない様子で、俺を見るその顔には、驚愕と恐怖と困惑が混ぜたような、不可思議な感情が浮かんでいる。

昔の俺とは存在自体が変わったかのように違うからな…戸惑うのも無理は無い、か……

俺はそんなドン引きしている咲夜の姿に少しばかりの虚しさを覚え、そんなことを無意識に感じている自分に自嘲する。

俺自身、自分がどんな雰囲気醸し出しているのかわからない。

だが、師匠と初めて出逢った時に「こんな根から歪みきった少年は初めて見る」と言われたのだから、碌なモノではないのだろう。

俺はそこまで思考し、溜め息を吐くと、雰囲気をいつも通りに戻す。

「ま、そういうわけだ。」

その様子を見るに、理解したようだし話はこれで終わり、っと」

そう言つて俺は、未だに此方を恐々と見つめる咲夜を気にせず落ちた書類を手早く集め、彼女に手渡そう…と考えるが、今俺が渡そうとしても応じてくれなさそうなので、適当に机の上に置いておく。

「さて、もう用もねえから俺は帰らせてもらおうか。
じゃあな、副会長」

そして、手をヒラヒラと振りながら、さっさと帰路に付くことにした。

残された彼女は、俺を追うことも声を掛けることもせず、ただ果然と立ち尽くしているだけだった。

……あ、口止めしとくの忘れてた。

…まあ、いいか。それより明日辺り、俺は赤髪眼鏡に殺されるのではないのだろうか…？

ふとシャレにならないことを考えてしまい、俺は背筋に寒気を感じた。

*

静寂……

誰もいなくなった生徒会室は、先程までの楽しく暖かい空間が嘘のように冷たくなっており、耳に痛いほどに静まり返っている。

その中で私は一人、何をするでもなく唯呆然と立ち尽くしていた。

煉夜がこの部屋から出て行ってから、大分時間が経つ。

それなのに先程の出来事が尾を引いていて行動できない。

これで鳳の時期宗主なのだから情けない。と、少し自嘲する。

しかし私にとっては、それ程までに衝撃的な出来事だったのだ。

凜々しく、遅しくなって帰ってきた可愛い弟分の煉夜。

昔に比べ外見、口調、雰囲気が大きく変わっていたが、一目でわかった。姉ですから。

煉夜が鳳に戻ってくる。また昔のように共にいられる。そのことを考えるだけで私の胸は躍った。

しかし、その弟から予想だにしてなかった決別の言葉。

最初は何を言っているのか分からなかった。

絶対に戻ってくると、その為に帰ってきたのだと思っていたから……私は怒った。私達に何も言わずに出て行ったのに、今度は戻らないとぬかす弟に。私達の心配をなんとも思っていないような弟に、私は怒りをぶつけた。

彼は表情一つ変えずに黙っているだけだった。

表面上では何も気にしていないかのような、余裕の表情

しかし、私にはそれが痛みに耐えているかのように見えた。

考えてみれば彼は昔から、辛いことを一人で抱え込むような子だったから。

それを見て冷静になった私は、理由を聞いてみた。

彼は自分は鳳に相応しくないからと言った。

本質が昔の自分とは違うと……

そして、そのとき一瞬見せたあの表情……

意識的にやったのか、無意識にやっていたのかはわからないが、彼は無邪気に微笑んでいた。

昔、一緒に遊んでいた時のように何も着飾らない素の表情で。

しかしそれは、私が知っている温かく柔和な笑みではなかった。

様々な負の感情を詰め込みすぎて、表情では表現しきれず歪んでしまったかのような笑み。

焦点の合っていない、壊れたような透明で虚ろな瞳。

その銀の瞳の奥に微かに見えた、呑み込まれそうになる程どす黒い狂気の光。

そして、身に纏う冷たく禍々しく、それでいて儚げな雰囲気。

最早そこにはあの頃の面影が微塵も感じられなかった。

私はその時、煉夜に恐怖した。

弟が全くの別人…それも狂人になってしまったかのように思って…
もう私の大事な弟分であった煉夜はいなくなってしまったと思って…
目の前の男は弟ではないと思ってしまうて…

しかしその後に見せた彼の顔…

結果はわかつているのに期待して、でも結局期待通りにならなくて、
わかつていたのに…馬鹿馬鹿しい…と、期待した自分を自虐するかの
ような、諦観した笑み。

それを見て私は己を強く恥じた。

何が家族だ。

何が姉だ。何が愛しき弟を間違えるはずがないだ。
いくら煉夜の言うとおり本質が変わっていようと、彼が私の弟分
で、家族であることには変わりなかった筈なのに…

あの表情と雰囲気を見るに、煉夜が海外で何かあったことは間違いない筈だ。

きっと辛いことがあったのだろう
きっと哀しいことがあったのだろう
きっと深く傷ついたのだろう

それらを優しく受け止め、分かち合い、労わってやる。それが姉として…家族として私がやれることではなかったのか？
それなのに私は……

「…明日、煉夜に謝りましょう…そして、外武錬で何があったのか聞かせて貰いましょう…」

後悔していても始まらない。なにより、このまま煉夜と疎遠になっ
てしまうなど考えられない。

私は胸に手を当てギュツと拳を握り、そう決心すると、明日の段取りを考えながらとりあえず書類を届けにいくことにした

*

…シンプルに肉じゃがにしようか…？いや、作り置きのできるカレーも…いやいや、今俺の口は和を求めているからやはり…

夕焼けが辺りを優しく照らす帰り道。

俺は校舎から寮に向かって学院の敷地内を、今晚の飯は何にしようか…と、考えながらのんびり歩いていた。

「煉！」

「ん？」

そこへ、どこからか今や聞き慣れた俺の愛称が呼ばれる。

声のした方向に視線を向けると、少し離れたところから、純白のワンピースの上からカーディガンを着た私服姿のお嬢が、此方に向かって小走りで近寄ってくる。

俺は足を止め、お嬢を和食で表すなら…などと、アホなことを考えながらお嬢を待つことに。

「奇遇ですね。制服姿ということは、まだ帰っていなかったのですか？」

「……桜餅」

「え？」

「いや、なんでもね。（桜餅は和菓子だな…）ま、いろいろあつてな。そういうアンタはなにしてんだ？」

「私は夕食まで時間があるので散歩を。舞は雅也君に呼ばれたらしく、何処かへいきました」

「へえ、そうかい」

雅也か…そういうえば此方に来てから一度も会っていないな。どれくらい成長しているのやら…

「ところで煉、どうかしたのですか…？」

弟がどれほど成長しているかを予想していると、お嬢が心配そうに聞いてくる。

「ん？なにがだ？」

「いえ、なんとなく貴方が暗い気がしたので…」

「…気のせいだろ」

お嬢の言葉に一瞬ギクツとするが、表情は微塵も揺るがせずに答える。

お嬢は嘘を見抜くことはできないのに、偽りの雰囲気などを見抜くことには長けている。

なんともないと思っていたが、どうやら予想以上に、先程の出来事が後を引いていたらしい。

やれやれ、自分では未練が無いと思っていたのだがな、情けねえ…

「そうですか？まあ、煉がそう言うなら大丈夫なんでしょう。ただ、何かあったら言うてくださいね？微力ながら力になりますから」

「…まあ、そんなときやよろしく」

絶対にありえないと思うがな。

「ところで煉は、夕食はどうするのですか？よろしかったら、私と一緒に食べませんか？」

「お誘いは嬉しいが…残念ながら、俺は自炊派だ」

現在進行形で献立考えてるしな。

しかしお嬢は俺が自炊派なのが意外だったのか、驚愕を露にしている。

「ええ！？自炊派だったんですか！？だって前までは食堂で…とい
うか煉、料理できたんですか？」

「あの時はあなたの警護役だったからな。俺は本来自炊を好む。ち
なみに料理の腕は和洋中なんでもござれだ」

「そう、ですか…」

目に見えて肩を落とすお嬢。

「何だ、俺と一緒に食いたかったのか？」

「ハイ…折角できた舞以外の友人ですから…」

ああ、そういうえばマトモな友人が舞しかいなかったんだっただ、こ
の子…

それを断るのもなんか可哀想な気が…

「へえ、なら一緒に食うか？俺の部屋で」

「え、いいんですk……」

「ま、無論冗談だがな。野郎の部屋に学院のアイドルの一人を連れ
込むなんざ、後が怖くてできるかよ。んじゃ、俺は飯作んなくちゃ
いけねえから行くわ」

する訳が無えよ。俺はそんなに同情するほど高尚な精神の持ち主
でもないんでな。

そう言っただけ俺は笑いながらさっさと寮に向かって歩き始める。

何かを建ててクラッシュしちゃった気がするが…まあ、気のせいだ

ろっ。

だから背後から強い悲しみの念を感じるのもきつと気のせいなのだろう。

ああ、明日辺り舞も襲撃してきそうだな

などと気怠げに考えながら、俺は今度こそ帰路に着いたのだった。

17話（後書き）

やっとそれらしいフラグクラッシュができました…

次こそ絶対ギャグ中心に書きたいです。

サブキャラの見せ場も書きたいですし、雅也も早く登場させたいですね。

18話（前書き）

遅くなりました。

最近寒くなってきましたね。皆さんも風邪にはお気をつけ下さい。

さて今回は微妙にギャグ…なのでしょうか？まあ、クオリティは相変わらず低いので、それでも構わないという方はどうぞ

18話

「で？昼休みは有耶無耶になったが聞かせてもらおうか。お前と鳳先輩の関係を……」

「ガキの頃世話になった幼なじみのお姉さんだ」

「え、それなんてエロゲ？」

以上、夕食後の自室でのやり取り。

翌日の朝。いつも通り翼と談笑しながら登校し、階段を上り一年教室前廊下に出ると、妙な雰囲気が出てきているのに気付く。

何やら俺達のクラス……1年A組前に人混みができており、辺りにはどうにも浮ついたような空気が漂っている。

「何だ、朝っぱらからこの人混みは？」

「さてな……とりあえず言えることは、これじゃあ教室には入れないってことだ」

「だな。何かあったのかもしれないし、少し様子を見ようぜ」

耳障りなざわめきに顔を顰めながら、俺達はとりあえず様子を見ることに。

聞こえてくるは、女子の黄色い声に男子の興奮したかのような荒い声。

どうやら誰か有名な人物がA組にいるらしく、この人混みはその人

物を一目見ようと、生徒が集まったモノのようだ。
例えるなら差し詰め、アイドルの出待ち、といった所か。全く持つて鬱陶しい。

「だああ！人が多すぎて誰が来ているのか全く見えん！」

翼はそう言うと、人混みを掻き分けて前へと進んでいく。俺もその後をついていくことにするが、何故かな……先程から妙に嫌な予感がする……

なんというか、蟻地獄に知らず知らずの内に足を踏み入れてしまっているかのような……

そして、俺のこういう予感が高確率であたる……

昔よく経験した感覚に辟易しながら、人混みをスルスルと躲かし歩いていくと、ふと周りからの声が耳に入ってくる。

「よっしゃ、朝から鳳副会長見れた！今日はいいいことありそうだ！」

「やっぱり綺麗よね〜鳳先輩」

「ああ、咲夜様……素敵……」

「でも何で一年教室にいるんだろ……」

何？咲夜が此処にいるだと……？この嫌な予感はまさか……！

足を止め一度そこまで考えるが、頭を振り冷静に考え直す。

……いやいや待て待て落ち着こうか。

例え咲夜がいたとしても、何も俺に用事があるとは限らんだろう。昨日あれほど突き放し、一片とはいえ俺の本質を見せたのだ。しばらくは自分から俺と関わりを持つとはしない筈だ。ならば恐らく、舞関係の話でお嬢に用事があるといった所か。うん、妥当な線だ。なら驚く必要はない、俺は堂々としていればいいのだ。

そう結論付け、再び人混みの中を進もうとしたところで、更に色々

な声が耳に入ってくる。入ってきてしまう。

「なんでも煉夜って生徒に用事があるらしいぞ」

「煉夜って……あの白髪悪人面の不良？」

「そう、その白髪の白神よ。目付きが悪くて遅刻、サボリの常習犯。転校してきて一週間ちよつとしか経ってないけど、いろいろな噂のある人よ」

「なんでも、高宮さんと鳳さんを誑かして、それだけじゃ飽きたらず鳳副会長にまで手を出したとんでもない誑らしいよ」

「何それ、最低えー」

「いや、俺が聞いた話だとそれはフェイクで、実は桜木にD組の国重、E組の柊に沢白副会長まで喰っちまった男色だと……」

「何？BL？BL？キヤーーー！」

……

「この俺も哀しみを背負うことができたわ……」

「な、何い！実体を空に消し去っただとう！？」

「これはまさか……無 転生……！」

一瞬で人混みの最後尾まで移動した俺に驚愕する翼と生徒A。ありがとう、ノッてくれて。

「つか何あの俺の評価……目付き悪いのと不良ってのは否定せんが、誑して男色は酷すぎるだろ……流石の俺も泣くぞ……」

「俺は至ってノーマルだッ!!」

「……………うるさい」

「すみません!!」

歩いてた長い銀髪の女子生徒に、すれ違いざまに怒られちゃった……どうでもいいが、学生時の俺はテンションがおかしい気が……

「おやおや、何の騒ぎですかコレは」

そこへ、思考している俺の隣へ括った長い青髪を揺らしながらやってきたのは、E組が誇る天才児、柊渚。何が天才なのかは付き合っている短い俺にはわからんが……まあいいとりあえず軽く手を上げ挨拶する。

「よう」

「やあ、白髪。おはようございます」

向こうも微笑みながら挨拶を返してくる。相変わらずイントネーションがおかしい気がするが何、もう気にするまい。

「ところでこの騒ぎはいつたい？」

「ああ、鳳副会長が来ているみたいだな」

「ああ、なるほど……それでこんな人がウジャウジャいやがるんですか。相変わらずの人気ですねえ」

そう呟いてやれやれと肩を竦める渚。

こいつは相変わらず口調が丁寧なのか汚いのかわからん。

「それで、お前は何をしていたんですか？」

「ああ、それはだな……」

何と説明すればよいものか……まあ、適当に答えておこうか。
そう考え、口を開こうとした瞬間。

「煉夜！鳳先輩が呼んでるみたいだぞ！」

手をこつちにブンブンと振りながら、いつの間にか最前列にいる翼バカの
声が廊下に響き渡る。

それと同時に一斉に此方に向く数多の視線。

「…………ハア」

「あらら」

俺はこの面倒事になりそうな事態に、眉間を押さえながら溜め息を吐き、渚は口元に手を当て微笑んでいる。

絶対こいつ楽しんでるだろ……

「どうやらボクはお邪魔みたいなので失礼しますね、白髪」

そう言つて颯爽と身を翻す渚。

正直そんなエアリーディングは不要だったが、あいつがここにいる
かもしれないので、手を気怠げにヒラヒラと振って見送る。

そんなことをしていると、突如人垣が左右に割れる。

その中央にできた道の奥から姿を現したのは、予想通りというか情報通りというか……昨日突き放した我が姉貴分……咲夜だった。

「煉夜……」

「……これはこれは副会長。俺のようなしがない不良にいったいどのような御用で？」

遠すぎず、それでいて近すぎない距離まで歩み寄ってくる咲夜。それに対し俺は、先日の昼休みに赤髪眼鏡にしたように、わざとらしいほど恭しい態度で対応する。

その馬鹿にしたような態度に、周りのギャラリーがムツとするが無視。なにも俺とて馬鹿にするつもりでこのような態度を取ったわけではない。

これは謂わば意思表示。

俺とあんたはもう無関係だということを、遠回しに咲夜に示しているのだ。

「少し、時間をくれませんか？」

「何故？」

「話があります」

しかし咲夜はそんな俺の態度を無視し、目を真っ直ぐ見据えながら話を進めてくる。そこには昨日のような弱々しさは感じられない。寧ろ、今度は絶対に退かないという強い意志が、目を通じて俺に伝わってくる。

少し甘く見ていたか……

胸中で面倒なことになりそうだと舌打ちをしながら独りごちり、俺は態度を改め答える。

「だが断r……」

「却下です」

見事なまでの即答。ネタの一つも満足に言わせてくれんのか……俺は溜め息を一つ吐くと少しばかり気を引き締め、口元にはいつも通りの微笑を貼り付け答える。

「つつてもねえ、もうすぐホームルーム始まる時間だが？」

「今日の放課後にでも話し合う約束をしてもらえれば十分です」

「最近忙しいんじゃないかねのかよ副会長」

「仕事はひと段落付いたので、それぐらいの時間ぐらいは作れます」

「だったらその時間を休養だか何だかに使った方が有意義だと思っがね。そうだな、赤髪眼鏡でも誘って遊びに行ったらどうだ？」

「そんなことより私には此方の方が重要です」

そんなことって……道は随分と困難なようだぞ、赤髪眼鏡よ……

バツサリと提案を斬り捨てる咲夜に、苦笑を隠しきれない俺。

しかし、向こうは退く気無えみたいだな。さてどうしようか……

いや、俺が応じればさつさと済む話なんだろうが……ただ、恐らく
するであろう昨日と同じ内容の話を連日でしたくねえし、何よりこ
の人、舞と雅也を連れてきそうだからおっかねえ。

ああ、面倒になってきた。

ならどうするか？決まっている

「戦略的撤退！」

「逃がすとお思いですか？」

どうやら思考を読まれていたらしく、身を翻し駆けだした俺の背後
の道が、突如現れた閉じられた豪奢な門により塞がれる。

詠唱破棄だと……！？流石は鳳次期宗主といった所か、味な真似を

……

毒づきながら目の前に現れた門を見据える。意表を突かれたが、こ
の程度の魔力密度なら、多少纏いの密度を上げた蹴りで破壊可能だ
ろう。

そう判断し、足を振り上げ門を蹴破ろうとするが……

「ッ！」

ザワリ、と背筋に悪寒が走る。

あれを破ったらマズいと、瞬時に本能と今までの経験で悟り、俺は
後方に跳び退く。

そして思い出す。この魔法の正体を。

「『識別の門』か……」

「よくわかりましたね」

「……ま、伊達に世界回っちゃいないってことよ」

『識別の門』

光の中級魔法で、元々は籠城戦などに使用されていた魔法。使用者が味方と判断した者はこの門を通れるが、それ以外の存在がこの門を通ったり破壊しようとした瞬間、門から光が放たれ、敵を一掃する……だったか。

門の魔力密度の薄さはフェイクで、油断して通った、または壊した敵の力量を自動で把握し、その敵に見合った力を使用者から直接供給して敵に放つ、防壁魔法に見せかけた迎撃罠魔法。

確か中級の中でも上位に食い込む魔法の筈だが、それを詠唱破棄か……すげえな

「つーかこんな物騒なモン使っなよ……」

「お前が逃げるからでしょう。さて、これで逃げ場はもうありませんよ？」

「逃げ場は無い？それはどうかな！」

そう言つと、俺は瞬時に周囲を見回す。

前方、咲夜 with 野次馬諸君

後方、識別の門

右方、壁

左方、窓（四階）

……

「……どうやらここまでのようだ…」

呟きながらゆつくりと窓際へと移動する。

「早えよ!？」というツツコミが聞こえた気がするが気のせいだろう。

「なら話合いの約束を……」

「だが!俺はお前の魔法では捕まらん……!」

俺は少し嬉しそうな、それでいて油断無くこちらに近付いてくる咲夜の言葉を遮り、指をビシッと指すと、俺は廊下の窓を全開にする。そして

「サラバダー!!」

窓の外へと身を踊らせた。

『!?!』

背後で野次馬連中が驚愕の声や悲鳴を上げているのが聞こえてくる。まあ、四階から魔法が使えない奴が飛び降りたんだ。当然っちゃ当然の反応だな。

「煉夜!」

急速に迫ってくる地面を見ながら浮遊感を楽しんでいると、咲夜が恐らくは保護魔法だか何だかの穏やかな風を放ってくる。

しかし俺は、纏いの密度を上げそれを跳ね除ける。いらぬ気遣いだ。地面が更に近づき、野次馬連中の悲鳴が一層強くなる。それを気にせず俺は空中で体を捻り体勢を直すと、そのまま地面に軽々と着地

する。

足に少しの衝撃が走るが、全く問題無い。つか、気や魔力を使わなくても50メートル程の高さなら普通に着地できるので、この程度はまだまだ楽勝の範囲だ。

先程まで騒いでいた野次馬共は静まり返っている。

その事に少しだけ気分を良くすると、俺はそのままどうせなら授業をサボろうかと考えながら、着地した中庭から悠々と歩きだす。

多少目立ってしまったが、今からこの場を離れば問題ないだろう。しかし、不意に緩やかで清涼な風を肌に感じ、足を止める。

その風が普通の風なら特に気にしなかっただろう。

しかし、その風は微かだが魔力を帯びていた。

この風は……

この風の感覚に覚えがあった俺は、思い出そうと一瞬思考する。

その間に風は、緩やかに渦を巻きながら集っていき、徐々に人の輪郭を形成していく。

そして、俺が思い出すと同時に風は凜ぎ、その場には咲夜が現れていた。

『ゼピュロスの風』

魔力で自分の意識と風を同調させ、その風で広範囲に詮索、移動することのできる風属性上級魔法。ただ、使用して詮索中は無防備になるという欠点も存在する。

そっぴや昨日使っていたな、忘れてた。

「何故逃げるのですか、煉夜？」

ノリで……なんて言える訳ねえよな……

微笑みながら問う咲夜。その笑みは花が咲くように可憐で、見惚れ

るほどに美しい。

……しかし俺にはわかる。

その微笑が引き攣っていることを……

感情を抑え切れてねえな、大分御怒りのご様子で……

「何故あんたは追いかけてくる、副会長？」

だが極めて冷静に質問を返す。

これ以上の恐ろしい笑顔を見てきた俺にとってこの程度、恐るるに足らんわ！！

「お前が逃げるからです」

小首を傾げながらにこやかに応える。

しかし、身に纏う空気は冷ややかだ。

美少女が小首を傾げる動作ってのは可愛いらしいモノじゃなかったのか？薄ら寒い何かを感じるんだが……

ドラゴンがブチ切れ一歩手前の時のような寒気を感じながら、俺は溜め息混じりに言う。

「……あのなあ、あんた自分の人望とか容姿とか理解してんのかよ？」

俺の問いに今度は素で首を傾げる咲夜。

あら可愛い……じゃなくて、やっぱり自覚無えのかよ……

咲夜の表情に、深い溜め息を一つ落とす。

思い出すは昨日のリアル鬼ごっこ。赤髪眼鏡を筆頭に俺＋を殺りにきた暴徒の集団。

お嬢が見ず知らずの人間を悲しげな表情一つで暴徒に変えたように、咲夜もそのようなカリスマを持つらしい。

抱きついてきてアレだ。下手をしたらどうなるか想像も付かないや、それはそれで面白そう……
おっと、また悪い癖が出るところだった

「まあ、なんだっていいがな」

勝手に自己完結し、また溜め息を一つ。

……どうでもいいが窓からこっちを見てる野次馬共の視線が鬱陶しいな……

まあ、いきなり4階から飛び降りる阿呆と、みんなの副会長様が一緒にいてこんな空気漂わせてれば嫌でも目立つか……

「煉夜、お前は誤解しているようですが、私は戻って来いなどと説得するつもりはありません」

周囲の視線に多少嫌気を差していると、咲夜が先程とは打って変わって真顔で語り掛けてくる。

「ただ今一度、私と話し合いの機会を設けてください。お願いします」

そう言つて真摯に頭を下げる咲夜。

その態度、言動、目から、彼女がどこまでも真剣なのだと理解できる。

だがその瞬間、周囲からの視線全てが槍の如き鋭い殺気を帯びる。その視線からは、「てめえ如きが副会長に何させてんだよ、ああ！？」みたいなどす黒い感情を感じる。

ふむ、このままだと俺は、間違い無く連中に吊されるのではなからうか？主に赤髪眼鏡とか舞とか赤髪眼鏡とか赤髪眼鏡とかに……
そんな心配をしていると、ふと、ビシリッ、と何かに亀裂の入るよ

うな音が聞こえてくる。

何気なくそちらに視線を向けてみると、三階から笑顔で俺を射殺すかのように睨むという荒技をこなしている赤髪眼鏡の姿が……
手を添えられた窓には蜘蛛の巣状の罫が入っており、どうやら先程の音はこれが原因らしい。

……この学院の窓って強化ガラスじゃなかったっけか？

本格的に感じてきた身の危険に冷や汗が背中を伝う。

「煉夜……」

顔を挙げ、尚も俺に語り掛けようとする咲夜。

そこへ

キンコンカンコン

予鈴のチャイムが鳴り響いた。

「お、予鈴のチャイムだな。それじゃあな、副会長さん」

それを逃げ口に、俺は咲夜の横を素通りする。

野次馬達もそのチャイムを聞いて、名残惜しそうだが窓際から教室へゾロゾロと戻っていった。

流石は名門。案外真面目な奴が多い。

しかし、背後の人影は動く気配は無い。

暗い空気がその場に漂い始める。

……はあ、しゃあねえなあ

「……放課後に屋上」

「え？」

「暇潰し程度には付き合ってやる」

振り返らずに気怠げに、傲慢に言う。

捻くれ者の俺にはこんな言い方しかできないが許してもらいたい。

「ハイ！では放課後に屋上で」

すると、物悲しい雰囲気が払拭され、周りの空気が明るくなったように感じる。

そして、彼女は嬉しそうな、それでいて何か覚悟を決めたような雰囲気のまま、魔法でその場を去っていった。

よく考えてみりゃあ、あの人には昔から恩義があつたからな……流石にそれを仇では返したくない。

などと内心で言い訳のようなことを考え、一人苦笑する。
それにしても、説得じゃなく、話し合いねえ……

「さて、どうなることやら」

そう一人ごちて、俺はサボリ場所を求めてその場から去った。

18話（後書き）

今回は…北斗の拳ネタが多いですね。作者が北斗の拳が好きなのだからしょうがないのですが……

19話（前書き）

さて、クリスマスも終わり大晦日。皆さんは如何お過ごしでしょうか？

作者は野郎だらけのパーティーと洒落込んでおります。徹夜30年耐久桃鉄は地獄のように思えますが、頑張っていけます。

さて、今回もややシリアスっぽいのが多数あります。

そして今回、満を持して鳳雅也の登場回です！

書き終わってから気付いたんですが……

雅也の外見と名前が合っていないません……orz

幼い頃から仲の良い友人の名前を勝手に拝借したモノが『雅也』なのですが、それが仇となりました……

下手をすれば弟を『雅也』から『雅』という名前に修正するかもしれないませんが、そこはどうしましょうかね……まあ、とにかく本編をどうぞ

後書きはおまけ話です。

19話

時は少しばかり流れて、現在は鍛錬場にて魔法授業の真っ最中。今回の内容は500kgにも及ぶ大岩をどれだけ高く持ち上げられるか、といったモノだ。

これは魔法の火力の底上げ、魔力操作技術と応用力の強化を狙った内容らしい。

勿論、魔法が使えない設定の俺は雑用に回っている。

とは言っても、そんな大岩を鬼殺し未使用の俺じゃあどうすることもできないので、基本的に教師連中が大概のことをやってしまっている。

なので、皆が実技に勤しんでいる様を、少し遠くから胡座をかいで見学している。

当初は、大岩を純粋な火力で持ち上げたり、多量の水を火で瞬間的に気化させ、水蒸気爆発を起こして大岩を飛ばしたり、土を操って植物を急激に成長させ持ち上げたりと、催し物を見ているようでなかなか楽しかったのだが、二番煎じが多くなってきたのでマンネリしている。

端的に言うとお飽きた。

しかし、フケる訳にもいかないので、欠伸を噛み殺しながら見学を続けている訳だ。

さて、朝サボる気満々だった俺が何故こんな面倒且つ退屈な場所にいるかという、それは学生の悲しい宿命だとも言っておこう。俺は普通の授業なら、内容を粗方理解している為サボっても問題無い。

少し前にあった国語、物理、数学の小テスト全て90点超えだったしな。

しかし魔法授業だけは違う。俺は魔法が使えないことになっているため、サボってしまえば成績が取り返しがなくなる。

それだけなら別段問題無い。だが、知つての通りこの学院はこの教科に力を入れている。

他の教科がどれだけ優秀でも、この教科で酷い成績の者は留年する可能性があると言われている程だ。

伊達に魔法の超名門校で通っているだけのことはある。

校則や規則は緩いのに、こと魔法に関しては非常に厳しい。

昨日寮に戻った際に三年の羽柴から聞いた話だと、中等部、高等部一年で基礎を付けておかないと、二年から一気にキツくなるのと。

高中等部内で一番退学者が多い学年は高等部二年生らしいから、相当なモノなのだろう。

数日前も魔法授業をサボろうとしたが、その場に舞がいて本当によかったです。

……俺、来年以降大丈夫なのかねえ……

まあ、いざという時は高宮の爺さんに何とかして貰うでしょう。

そんな他力本願全開の思考をしていると、誰かが俺に意識を向けているのに気付く。

その方向に首だけ動かし目を向けてみると、少し遠くから神妙な顔をしてこちらを見ている舞と目が合った。

舞は俺と目が合ったことに気付くと、何か迷った風に視線をさまよわせる。

何だあいつ？

怪訝に思いながら様子を見てみると、少ししてから舞は意を決したように再び俺を見据えると、黒のポニーテールを揺らしながら此方に歩を進めてきた。

「白神……」

「何か用か？随分と熱い視線で俺を見ていたようだが……」

いい退屈凌ぎが来たと口元に笑みを浮かべながら、傍まで歩み寄ってきた舞に冗談混じりに尋ねる。

しかし、舞の表情は固いまま。

ん？普段なら顔を紅くして怒鳴る、殴るぐらいはしてくる筈なのだが……

「少しいいか？」

「何だ？」

「……ここじゃ難だから向こうで」

少し歯切れ悪くそう言うと、舞は鍛錬場の隅にある少し錆び付いた非常用扉を指差す。

「あ？今授業中だぞ」

自分で言っておいて難だが、説得力が微塵も無えな……

「構わない」

「構わないって、優等生の台詞じゃねえな……」

堅物の舞が堂々と授業放棄とも取れる台詞を吐いたことに若干驚きながら、俺は呆れたように苦笑する。

しかし口では軽口を叩いているものの、俺とて理解している。舞の様子が明らかにおかしいことを……

予想としては咲夜辺りから俺のことを聞かされたか……

今朝の咲夜の様子についてか……

それともその他か……

一瞬の思考。

しかし、すぐにそれを放棄する。

考えても答えが出る訳じゃない。

それに、俺には関係の無いことだ。

ただ退屈を凌げるならそれでいい。

そう結論付け、俺はゆらりと立ち上がり返答する。

「まあ、退屈だったから別にいいがな」

「そうか。なら此方に来てくれ」

素っ気なくそう言つて、舞はさつさと先を歩いていく。

「はてさて、どうなることやら……」

せめて面倒事じゃなければいいが……

俺は誰に言うでもなくそう呟くと、舞の背中を追った。

*

「で、こんな所に呼び出して何だつてんだ？ 雰囲気からして告白なんつー甘々な展開ではなさそうだが……」

ポケットに手をつ込みながら、気怠げに舞に尋ねる。

しかし、舞は何も答えない。

俺に背を向けたまま微動だにもせず、ただじっと佇んでいる。

その今朝といい現在といい、ツツコミどころかりアクションも無い舞に流石に怪訝に思った俺は、再び声を掛けようと口を開く。

その瞬間だった。

舞が突如凄い勢いで振り返り、スカートを翻しながら鋭い上段回し蹴りを放ってくる。

ちなみに下にはちゃんと短パンを履いている。

貴様ア！何故スパッツじゃない！？

別にスパッツ好きというわけでもないが、何となくそんな憤りを覚えながら、俺は体を反らし鼻先数センチという所で蹴りを躲す。蹴りが起こした風で、前髪がふわりと舞い上がる。

体術も怠ってなかったようだな。いい蹴りだ……じゃなくて

「随分と熱い返答だなあ、おい」

「手合わせ願う」

俺はポケットに手を入れたまま、薄く笑いながら距離を取る。

しかし舞はお構いなしに懷に潜り込んでくる。

「だが断」……」

「フツ！」

舞は俺の返答を無視して舞は拳を打ち出す。

姉に引き続きお前もか！

心の中でツツコミながら、腰の入った鋭い上段突きを、流れるように流麗な足運びで躲す。

しかし、躲されることはわかっていたのだろう。

俺が躲すと同時に、もう片方の手から顔面目掛けて拳が繰り出される。

しかし、その一撃は確かに鋭いが、ある不純物が混じっている。

それを感じ取った俺はポケットからスルリと手を抜き、その拳を掴み取る。

「ッ！」

「……何だ、この雑念に塗れた拳は？」

まさか止められるとは思っていなかったのか、驚愕に目を見開く舞に、俺は少しばかり責めるような口調で問う。

しかし、舞は俯き押し黙るだけで何も答えない。

「こんな迷いだらけの拳で手合わせ、ねえ……随分と嘗められたものだな」

そう、先ほどの拳に混じっていた不純物とは『迷い』のことだ。

コイツは何やらそれなりに大きな迷いを持っている。

その迷いが、先程の一撃を錆び付かせたのだろう。

でなければポケットから手を出すという無駄な造作をした後から拳が掴めるものか……いや、できるかもだが……

「……すまない」

力なく俺の手から拳を引き抜くと、顔を俯かせながら謝罪してくる。

俺としては謝罪よりその理由を聞きたいので、特に気にすることもなく続ける

「……まあ、それはいい。

で、何をそんなに迷っているんだ？

俺を呼んだということは、俺に何かしら関係していることなのだろうが……」

「……………」

「だんまりか……時間の無駄だったな」

そう気怠げに呟き、俺はさっさと踵を返す。

結局暇つぶしにもならなかったか……

「ま、待ってくれ！」

肩透かしを喰らって胸中で若干苛立っていると、背後から少々切羽詰まった声で呼び止められる。

それに俺は振り返らずに足を止める。

「お前に、聞きたいことがある……」

「何だ？」

感情の込まらない声で聞き返すと、舞は躊躇するように舞は口籠る。その煮え切らない態度に軽く呆れてきた俺は、無言で戻ろうと足を踏み出す。

それに気付いた舞は、慌ててその勢いそのまま聞いてくる。

「お前は！……兄上、なのか？」

後半は尻すばみながら紡がれた問い。
その言葉に俺は再度足を止める。

……やはり咲夜から聞かされていたか。

内心で溜め息を吐きながら、俺はどう答えたものかと思案する。
しかしその後、舞の口から予想だにしていなかった名が出てくる。

「昨日雅也から話を聞いた。お前が兄上だと……」

出てきた名前に俺は思考を一時停止させる。

雅也だと……？

あいつとはまだ会っていない筈だが……

そこでふと脳裏に過ぎる光景。

先日の昼休み、リアル鬼ごっこの最中にぶつかりそうになった中等部の少年。

顔はよく見えなかったが、途中まで俺と同じ動きをしていた……

まさかあいつが……？

「それに先程の足捌き……日向さんと兄上が使っていた『舞闘の型』と同じだった」

俺の思考をぶった切つての更なる言及。

徐々に勢いついてきた舞に内心で舌打ちをする。

チツ、よく見てやがる。これは俺のミスだな……

『舞闘の型』

それは流麗で舞うような動きで攻撃を躲し、その流れのまま必殺の一撃を叩き込む、俺が愛用する戦闘の型の一つ。

ダンスや舞踊、能楽などの重心移動や足運び、体捌きなどの技能は、美を追求した結果なのだろうが、無駄な動きが少なく隙が無い。

それに目を付けた親父……日向は、独自にそれらの技を研究し、己の扱う武術と組み合わせることで編み出したのが、この舞闘の型だ。尤も、俺は日向からこの型の基礎を徹底的に叩き込まれたが、それからすぐに追放された為、この型の本筋を知らない。

その為、俺は実践でこの型を独自に磨き上げ、多少オリジナル要素が強い似て非なるモノへと昇華させたのだが……

やっぱり基本的な足捌きは本家と一緒にだからな、流石に気付かれるか

……

つかコイツ、それを調べる為に手合わせを願ったのか？

なら俺は見事思惑にハマったという訳だな……情けねえ

「答えてくれ白神。お前は本当に兄上……鳳煉夜なのか？」

自分の浅慮さに内心で頭を抱えていると、舞は真相に足を踏み入れんと切実に問ってくる。

それに俺は……

「さてね……お前はと思う？」

肯定も否定も示さない。

軽い気持ちで聞いてきたならば否定してやっただろうが、どうやら

本気の様子なのであえて選択肢を与えてやる。

俺を鳳煉夜だと受け入れるか。

俺を他人だと拒むか

恐らくコイツは、もう俺が鳳煉夜だと気付いている。

僅かだが、俺を見る目が6年前と同じなってきたのが見て取れる。

だが、それを頭と心では理解しようとしていないのだろう。

外見、性格、口調、雰囲気、あの頃と全てが違う俺を、鳳煉夜とは認めたくない……

しかし、自分のどこかで俺が兄だと訴えている……
だから迷っている。

『兄貴分』としては拒んで貰いたいと思う。

今の俺という存在を直視して傷ついて欲しくないから……

だが、『俺』としては、どちらに転んでも面白そうだからどうでもいい。

兄として俺を受け入れるなら、変わり果てた兄の本質を見せてやる。
う。

他人として俺を拒むなら、俺も他人として扱ったやろう。

さて、今の舞の瞳には俺がどう映っているかな？

そんな思考をしながら俺はただ答えを待つ。

しかし、答えが出ないのか黙り込んだまま動く気配の無い舞に、この分だと時間の無駄だと判断し、

「何をそんなに迷っているのかは知らんが、他者が何と言おうと、結局は自分で見て自分が感じたことが全てだろうよ」

それだけ告げて、再び歩き出す。

背後の気配は未だに動く様子を見せない。

「悩め悩め。悩み抜いて自分が納得できる答えを出せばいい。

答えは自分の中にしかないんだからな」

その気配に助言代わりにと、呟きを風に流す。

さて、あいつはどんな答えを出すのかねえ。

俺を受け入れるか、それとも俺を拒むか……少しばかり楽しみだ

知らず知らずのうちに笑みを浮かべながら、俺は一人鍛錬場の中へと戻っていった。

ちなみにこの後、外に出ていたことがバレて、俺だけ村園女史から説教を受けたのは言うまでもない。

これが優等生と不良の扱いの違いか……

*

更に時が流れて昼休み。

お嬢の舞の様子に対する詰問から逃れ、バカ、真面目、天才トリオと昼飯を食おうと屋上へ向かっている時のことだった。

俺はトイレに寄った為、先に行った三人より遅れて遅れて廊下を歩いていると……

「おい待てやコラ」

「あ？」

背後からドスの利いた声が向けられる。
振り返ってみると、そこには柄の悪い生徒が3人立っていた。
緑色のリボンを見るに、3年生だろう。

「何か用か？」

「てめえだな？最近調子に乗っている白髪ってのは」

オイ待てイントネーションがおかしいぞ

「随分とでかい顔しているらしいな」

「魔法も使えねえ落ちこぼれの分際で」

……ああ、これはアレか。

会長が言ってた俺を気に食わない奴らか。
ダリイなあ、オイ。

まあ、スルーしてもいろいろと煩そうだし、
適当に相手して適当に撒くか。

「おゝ、怖え怖え……それで？」

「ああ！？」

「もう一度言うが、何の用だ？」

口元には相変わらずの笑みを、しかし声は若干トーンダウンさせ威
圧するように尋ねる。

別に殺気を出した訳でもないのだが、やはり前回の模擬戦の噂が耳
に入っているであろう。

男達は臆したように後退る。

しかし、人数の差に気付いたのだろう。
今度はニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら近づいてくる。

「いいのかよそんな態度とって」

「お前自分の置かれてる状況わかってんのかよ」

「落ちこぼれが俺達にかなうと思ってんのかよ」

……激しくめんどくさいな、コイツら。

選択ミスったか？スルーしときゃよかった……
さてどうしようか。

まともに相手しても面倒なだけだし、適当にあしらうか。

「あーハイハイ、おたくらが有利な状況にいるのはわかったから、
用件をさっさとええ。」

こちらら腹へっつてしようがねえんだよ」

「その減らず口、いつまで叩けるかな」

「俺達が先輩としてお前を躰けてやるよ」

そう言っつて魔力を練り上げる3バカ。

それによりギャラリーがにわかになつて始める。

しかし、恐々としながらも誰も動こうとしない。

怖くて動けないのか、それとも何やかんや言っても好奇心に勝てないのか……恐らく後者だな。

使えないギャラリーに溜め息を吐き、とりあえず目の前の3バカを
対処することに

「別に構わねえがやるんなら覚悟しろよ？」

戦り合ったら俺の負けは確定だろうが、腕の一本は貰っていくぜ？」

そう言つて笑みを深め、脅すように片手をパキリと鳴らす。

いや、こいつらレベルなら片手一本でも軽くあしらえるが、そんなことをしたら流石に目立つので、謙虚になっておく。

これで退いてくれるなら僥倖。本当に来るってんなら、まあそれでもいいさ。

袋にされてやる代わりに宣言通り腕の一本はへし折つてやろう……

まさに一触即発。

しかし、その空気は突如として破られる。

「兄、さん……？」

柄の悪い野郎同士で睨み合っているこの場に、明らかに不似合いな綺麗なボーイソプラノが響く。

その声のした方に顔を向けてみると、呆然とした様子で俺を見ている少年の姿が。

髪は明るい茶髪で肩口ぐらいで切りそろえられ、顔はぱっちり二重で人形のように整っており、最早女顔とかそういうレベルじゃなくて完全な美少女。それもお嬢や舞クラスの。

体軀は少しばかり小柄で160後半といった所か。

制服は中等部の男物を着ているが、それでも美少女にしか見えない不思議。

これなら会長が実は男でしたー、なんて言われた方が納得できる。

まあ、そこはどうでもいい。

問題はあの少年は何故俺を見ながら兄さんと言ったのか……

そんなのは愚問か。

流石に流れて理解できる。

アイツは……

そこまで思考すると、少年が男達を無視して俺の目の前まで駆け寄ってくる。

「お久しぶりです、兄さん……」

そして俺の実弟、鳳雅也は少し涙ぐみながら俺に挨拶してくる。

まずは挨拶から、か。相変わらず礼儀正しいねえ。

もっと少年らしくはっちゃけてもいいと思うが……それより、何故咲夜といいコイツといい何故俺を俺だと認識できるのだろうか……

そんな疑問を抱きながら、とりあえず否定から入る。

「H A H A H A H A、何を言ってるのかな少年？俺は君の兄さんでは……」

「この匂いは兄さんのモノで間違いありません！」

おおっと、匂いときたかあ……流石に予想の斜め上をいかれたぜ。

つーか犬か貴様は。

イメージは犬耳を生やして、尻尾をパタパタさせながらじゃれついてくる雅也。目線は涙目で上目使い。

うん、これなら世の中のお姉さん……いや、外見が外見だからお兄さんも大量虐殺できるな。

そんなどうでもいいことを考えながら、これ以上否定しても無駄だと咲夜からの経験で悟り、とりあえず再開の言葉を弟に掛ける。

「いろいろと言いたいことはあるが、まあいい。」

見抜かれたんならしょうがねえ。

久しぶりだなあ、弟よ。すっかり成長しているようで兄は嬉しく思うぞ」

そう言って今の俺には似合わんが、優しく微笑みながら頭を撫でやる。

たった一人の兄弟だ。久々に会えたならそれなりに嬉しいさ。

俺がゆっくりと頭を撫でていると、堪えきれなくなったのだろう、俺の胸に飛び込んでくる。

それを柔らかく受け止め、胸で泣く雅也を慰めるように頭を撫で続ける。

開き直ったせいか妙に昔のような行動ができる。

……だが

「ハイ、優しいお兄様タイム終了」

そう言って、俺は雅也を突き放すように遠ざける。

やはり俺を昔の俺のままだと勘違いされちまったら悪いからな。とりあえず一線を引いておこう。

そうすればいずれ見ることになるであろう、俺の歪んだ本質を見ても、必要以上に傷つかなくて済む。

「兄さん……？」

涙目のまま困惑したような、少し悲しそうな表情をして此方を見る雅也に、思わず苦笑が漏れる。

涙目で身長の関係により上目使い。これに犬耳と尻尾を生やしたら、先程の俺の妄想通りではないか。

実際、周りを見てみれば野次馬の連中が、男女問わず鼻血を流しな

がら膝を付いている。

まあ、そんな変態どもは華麗にスルーして、俺はさっさと歩き出す。そして、未だ困惑した様子の雅也とすれ違い様に

「俺を、昔のような感覚で接していたら痛い目見るぞ？」

と、忠告を残してそのまま立ち去ろうとする。
しかし

「待てやコラア！！」

先程までずっと空気だった3バカの一人に、背後から肩を掴まれる。つーかずっと待っててくれたのか？兄弟の再会に水を差さないでくれて有難うよ。

そう心の中で感謝をし、俺は振り向き様にその感謝の心を手刀に込めて、男の首筋に鋭く叩き込んだ。

男は狙い通り糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちる。

「おい、どうした！？」

「しっかりしろ！！」

他2人がそれを見て慌てる。

その隙に俺はさっさと屋上へと向うことにした。

さて、図らずも今日一日で、この学院内の鳳一族主要人物全員と、いろいろイベントがあったわけだが……どうするかねえ……

廊下をのんびり歩きながら、今朝、魔法授業、つい先程を思い出して思わず溜め息が出る。

まあ、とりあえずの問題は放課後だし、それまでのんびりさせても

らうとしよう。

そう楽観的に方針を決めると、俺は廊下を曲がり屋上へと続く階段を上りはじめた。

ちなみに、昼休みの光景を見ていた一部女子により、『煉×雅』などと騒がれ俺の男色疑惑は強まったのだが、これはどうでもいい余談だろう。

考えたくもない。

19話（後書き）

昼食時の会話

『議論』

翼「だーかーらー！巨乳こそが最強なんだって！！

あの大きな双丘は男の夢とロマンが詰まった禁断の果实なんだって！
何故それをお前は理解しない！」

渚「まったく、それは此方の台詞ですよ。

胸というのは大きければいいというものではありませんよ。

未熟な果实を連想させる、手に収まる程度の慎ましいサイズ。そして芸術品の如き美しさと儚さ……

貧乳こそが至高です」

374

元「お前らは食事中に何て会話してんだ……

大体胸なんてのは中間ぐらいが丁度いいんだよ。そう、高宮さんぐ
らいが丁度……」

ピロリロリ〜ン

煉「よし、録音完了」

元「！？」

渚「まあ、あんなむつつり野郎は放っておいて、お前はどつなので
すか、白髪？さっきから傍観を決め込んでますが」

翼「煉夜は勿論巨乳派だよな！」

煉「はあ、お前らまるでわかつちやいねえな……
まず大きさ云々なんてのは二の次三の次なんだよ」

渚「ほう、その心は？」

煉「まずは感度、次に張り、形、最後に大きさだろうが」

全員「……………」

渚「なんでしよう、一気に俗っぽくなりましたがこの説得力は……
ですが貧乳は譲れません」

翼「何か深えなあゝ、革命つつーのか？ こういうの……でも巨乳が
最強なのは変わりないがな！」

煉「ま、楽しめれば何でもいいんだがな、俺は」

元「一人の意見だけなんか浮いてるぞ！ つーかそんなことより白神
！その携帯をこっちにY O K O S E ! !」

……昼休みは騒がしく過ぎていく。

20話（前書き）

大分遅くなりました。

しかもクオリティは低く、短めです。

誠に申し訳在りません

今回はシリアスシーンなのですが、作者はシリアスシーンが苦手且つ夜遅く眠い状態で書いたモノなので、いろいろとおかしな点があると思いますが、どうぞ。

20話

昼休みが終わり、例の如く午後の授業をサボり放課後。

村園女史の説教を受けた後、俺はのんびりと玄関ではなく、屋上へと向かっていた。咲夜との約束を果たす為だ。

正直、面倒な上に俺にメリットは何もないので行く必要性はないのだが、あの人には過去に大分世話になっているので、これぐらいの約束は守らなくてはならないだろう。

ということで、屋上までやって来たのだが……

「申し訳ありませんでした、煉夜」

「……あ？」

俺は現在、咲夜に土下座されている。

何故かって？知るか。俺が聞きたいわ

「私は昨日お前を拒絶してしまいました……」

ああ、そういうこと。

いや、でもあんなに見せられれば誰でも拒絶すると思うが……

例えば友人が次の日には殺人鬼になってたら誰だってドン引きするだろ？

そんな感じのことなのだから気にしなくてもいいのだが……
わざわざ土下座してまで謝る咲夜の律儀さに俺は苦笑する。

「ハイハイ顔上げて。別に俺は怒ってないし、悲しんでもないし、ましてや傷ついてもない」

「しかし……」

「それに、そんな形のいい頭を足下に置かれたら……」

つい、踏み潰したくなる。

俺の少しばかり危ない思考を察知したのか、咲夜はいそいそと優雅に立ち上がる。

それに満足して一つ頷く。

「それでよし。で、話があるんじゃないかったのか？」

話を促すと空気が引き締まり、咲夜は真剣そのものの顔で口を開く。

「教えてください煉夜……外武錬で何があったのかを……」

予想通りといったところか……まあ、当たり障りなくいこうか。

「ふむ、まずそこから違う。俺は外武錬なんてのをしに海外に行った訳じゃない」

「外武錬をしに行つてない……？では何をしに……」

俺の答えに咲夜は怪訝な顔をする。

勘違いしていそうなので、俺は少し訂正を加える

「いや、この言い方じゃ語弊があるな。

確かに俺は外武錬つてのはされた……あんたらが知っているのと意味合いが違うがな」

「……どういう意味ですか？」

眉を顰めて首を傾げる咲夜に、真実を伝えようか一瞬迷うが

「それは宗主にでも聞け。

俺が言っても現実味が無さそうだからな」

面倒ごとは宗主に丸投げすることにした。

俺の存在が鳳にバレるだろうが、宗主ならきつと俺の考えを汲み取ってくれるはずだ。

俺が自分から出向くまで静観を貫いてくれるだろう。

「お父様に……？わかりました。

お前がそう言うなら、今度聞いてみます」

「……」

いや、疑問ぐらい持とうぜ？

高宮の爺さんといいお嬢といい……簡単に人を信じすぎでしょ……少しばかり呆れたが、咲夜は俺を過剰信頼している節が昔からあったので、スルーしておく。

「では、お前は何故そこまで歪……変わってしまったのですか？」

わざわざ言い直す咲夜の律儀さに苦笑が浮かぶ。

まあ、折角言い直してくれたのを訂正するのもアレなので、気にしないことに

「そうさな……失って得た結果、とでも言っておこうか」

「失って得た……？」

「ま、いろいろあったってことさ」

そう言つて俺は視線を夕陽に向ける。

瞳に流れ込む朱い光に少しだけ目を細める。

そしてふと脳裏にフラッシュバックされるは、その朱と似て非なる紅。

俺の大切なモノを奪つていった蹂躪の色。

今でもしっかりと思い出せる。

壊れ逝く日常を、消えていく生命達の灯火を、そして、あの人の最期の瞬間を……

あの日俺は、己の無力さに嘆き、哀しみ、怒り、絶望し……なににより憎悪した。

だから力を求めた。

狂つてもいい。

壊れてもいい。

俺の大切なモノを奪つた奴を蹂躪し、破壊するだけの力を……ただ求めた……

そして、願いが通じたのか、俺は己の力を覚醒させた。

ある対価を支払つて……

その時の情景が脳裏に鮮明に映し出され、歪みそうになる顔に笑みを貼り付ける。

しかし、口内では奥歯を噛み砕かんばかりに食いしばり、拳をキツく握り締める。

そうでもないとか何か溢れ出そうだったから。

憎悪でも憤怒でも悲哀でもない何か……

握り締めた掌に爪が突き刺さり、血が溢れ出て床に赤い斑点を残し

ていく。

それを体を影にして隠しながら、咲夜に悟られぬよう瞬時に頭を切り替え、視線を戻す。

咲夜は心配そうな表情で此方を見ていた。

やはり10年もの付き合いは侮れないらしく、俺の僅かな表情の変化を読み取ったらしい。

「ああ、この外見も失って得た結果だな。染めた訳じゃないぞ？」

だから極めて明るく言葉を紡ぐ。陽気に朗々と、先ほどの揺らぎを感じさせぬよう。

「その様子ですと、詳しくは話してくれないようですね……」

咲夜も特には言及してこず、会話を進めてくれる。ありがたい俺は胸中で咲夜の心遣いに感謝しながら、感情を鎮め言葉を紡ぐ。

「そりゃあねえ。俺の……白神煉夜の核となる事だからな。おいそれとは教えられんよ」

「家族にも……ですか？」

「家族にも、だ……」

俺の本質を見てまだ家族と呼んでくれるか。その優しさに妙に心がざわつくのを感じる。

「ま、俺の過去なんて気にしなさんな。

過去に何があるうと、今俺がここにいてことが全てだ」

それに、と語尾に付け加え、言葉を続ける。

「あんたには、何ら関係の無いことだからな」

拒絶。

俺の言葉に咲夜の顔が哀しげに歪む。

そして生まれる沈黙。

しばらく待っても咲夜は話す気配が無いので、痺れを切らした俺は

「さて、話というのは以上か？ だったら俺は帰るが……」

そう言つて、踵を返そうとする。

「……舞と雅也に会いましたか？」

しかし、多少慌てたようだが冷静に俺を引き止める咲夜。

話を続行するならもう少し付き合つてやろう。

珍しくサービス精神豊富な俺は視線を咲夜に向け、答える。

「会つたぞ。雅也にはあんた同様一目でバレた。だが、舞は気付きながらも理解しようとしてなかったな」

「あの娘はまだ過去のお前を……それで、どうするのですか？」

「別にどうもしねえさ。アイツが俺を受け入れようが拒もうがな」

多少対応は変えさせて貰うが……

「……それでは舞があまりに不憫では？ あの娘は私達の中で一番、お前の帰りを心待ちにしていたのですよ？」

「だとしても、だ。事実を突き付けても、理解し納得しなけりゃ、それは本人の中では嘘になる」

そしてあいつは、俺が嘗ての兄だということを嘘と思い込もうとしている。

お年頃って奴なのかねえ……絶対違うと思うが……
ま、それはともかく

「現実と向き合って俺を受け入れようとするか、現実から逃避して過去の俺を待ち続けるか……それはあいつ次第のことだからな。俺は何も口出ししねえさ」

「そう、ですか……」

少しばかり不服そうだが納得する咲夜。

「そついや俺も少しばかり気になることがある」

そこで少しばかり趣向を変え、俺からも質問してみる。

「あんたは、今の俺を見てどう思う？弟云々ってのは無しで」

口元には笑みを。

しかし、瞳の感情の色を消し去り咲夜に問う。

この問い事態に意味は無い。

強いて言うなれば暇潰し。

先程まで輝きを放っていた夕日はその輝きを弱め、闇の帳へと沈みかけている。

晩飯にはまだ早い。しかし、何かをするには短い時間。

だからこそその暇潰し。

咲夜は考え込むように、迷うかのように顔を俯かせる。

「私は……」

「ん？」

「私は正直……お前という存在を恐ろしく感じます」

「ほう……」

「お前が私の弟というのは確かに感じられます。
しかし……それだけなのです。」

それ以外は昔のお前とはまったく別で……今だってそうです。

昔のお前ならそんな無機質な眼はしなかった。

昔のお前ならそんな笑みを浮かべなかった。

だから無意識に探してしまうのです。

昔のお前の表情を、仕草を、癖を、口調を……」

搾り出すかのような声で心情を吐露していき

「私も、舞のことをいえないのかもしれませんがね」

最後に自嘲するように咲夜は呟く。

それまで黙っていた俺は、そうか、と呟き空を仰ぐ。

夕日はもう半分以上が沈んでおり、日光の恩恵を失い空気が冷え始める。

そんな暗くなってきた空を見ながら、今日は星が綺麗に見えそうだと、どうでもいいことを考え始める。

「しかし」

咲夜は一拍間を空けると更に言葉を紡ぐ。

「私は、今のお前を受け入れていこうと思います。

あの時の表情を見るに、お前はとても苦労したのでしょうか……
ならば、それを労わるのは家族の役目です」

その芯の通った声に、俺は自然と視線を咲夜に移す。

「もう一度言います。私はお前を……白神煉夜を受け入れます」

そう言つて柔らかに微笑む咲夜。

その目には、確固とした覚悟と全てを包み込むような慈愛の光が宿つていた。

「止めといたほうがいいと思うが？」

「覚悟はできています」

「後悔すると思うぞ？」

「知らずに後悔するより、知って後悔したほうがマシです」

折れる様子は無し、か。

「なら、勝手にすればいい」

言いながら俺はゆっくりと扉に向かって歩き出す。

「ちなみに、海外で俺の全てを受け入れられた奴は、決まって狂人か聖人のような奴しかいなかった」

それ以外の奴は皆俺を恐れるか、気味悪がつて離れていった。

俺を友だと言った奴も、仲間だと言った奴も、家族だと言った奴も、全て……

それ程までに俺の狂気は、常人には受け入れがたい代物なのだ。

夕日は完全に沈み、闇の帳が世界を包み込む。日光の恩恵を失い肌寒くなった空気を感じながら、俺は扉の前で立ち止まり、顔だけを咲夜に向ける。

「あんたはどうなるのか、少しばかり期待させて貰うぞ？」

そして、挑発するような、嘲笑するかのような、薄い笑みを作る。

「煉夜……」

「おっと、そろそろいい時間だな。

じゃ、俺は帰るわ」

何か言おうとした咲夜の言葉をわざとらしくぶったぎり、俺は鉄の扉に手を掛ける。

言葉を聞かなくても、顔を見て気概は十分伝わってきた。なら、もう話す事も何も無い。

俺は一度空を見てからゆっくりと鉄の扉を開き、音もなく屋上を去った。

今日は予想通り、星が綺麗だった……

20話（後書き）

次は少し煉夜のイメージダウンを計ろうと思います。
あと、新キャラとちょっとした伏線も混じえたいな、とも思っています。

21話（前書き）

1ヶ月以上待たせてしまつて申し訳ありません！バイトやら何やらでリアルが忙しくて……言い訳乙。

さて、今回はテイストを変えてしまいましたが、とりあえず注意点。

- ・質より量だぜ！
- ・後半のグダリ方www
- ・何気に初めての主人公無双
- ・意味の分からない説明

……ここまで……ここまで長くするつもりはなかったんだ……ただ、興が乗りすぎて結局纏めきれなくて、グダグダになつてしまつただ……

まあ、これらの注意点を許容できる心の広いお方はどうぞ

伏線とも言えない伏線を仕込んだオマケがあります！

21話

それは星が綺麗な夜の出来事であった。

ある国の国境ギリギリに存在する山の奥深くにその館はあった。

まるで城かと思えるほどの大きな館だが、山奥に存在するというのに全く浮いていなかった。寧ろ周りの空気に溶け込んでいるかのように、自然に聳え立っていた。

これは魔法による効果で、外部からの目を遮断しているのである。

館の中庭らしき広い庭園には、全身を武装した人たちが巡回しており、屋敷内や、屋敷外にも似たような人たちが数多く存在している。その数はおよそ400。これだけの数の人が入り切るのだから、この館がどれぐらい広いかは、聡明なる読者諸君なら大体理解できるだろう。そして、その広い館を約400人ものが警備しているということは、この館には余程大事な何かがあると推測できる。

それは人か、物か、それとも両方か……

なににせよ、ここまで厳重な警備体制なのだ。普通なら鼠一匹忍び込もうとはしないだろう。

そう、普通なら……

次の瞬間、広大な館を包み込むように、辺り一面が灰銀色に支配された。

突然の出来事にざわめく兵士達。

そこへ独りの来訪者……否、襲撃者が現れた。

その襲撃者は、門番の人間を魔力で創り出した剣や槍などの武器により刺殺し、固く閉ざされた特殊合金でできた巨大な扉を、無造作に蹴破った。

上級魔導士の魔法すら耐え得る扉はいとも簡単に吹き飛ばされ、警備を巻き込みながら館の壁に突き刺さる。

「な、なんだ!？」

「敵襲か!？」

「敵の人数、戦力、共に不明。しかし、門番及び門を突破した力は危険と判断。これより応戦体系に入る。速やかに持ち場に着け!」

司令官らしき男がどこかに連絡しながらも指揮を取る。突然の襲撃に兵士達は慌てていたが、その指示を聞いて我に返り、すぐさま迅速に動き始める。この辺りの動きは流石と言えよう。

兵士達は素早く陣形を組み、門から現れるであろう襲撃者を警戒しながら待つ。

全員が魔力を極限まで練り上げ、詠唱を呟きながらいつでも魔法が放てるよう全員が備える。

姿を現した瞬間一斉射撃を仕掛け殲滅するという魂胆なのだろう。

兵士達は未だ姿を見せぬ襲撃者の動きを見逃さぬよう、じっと門を見ながら唯待ち続ける。

瞬間、空が瞬いた。

それを視界の端に捉えた兵士達は、無意識に空を仰ぐ。

すると、星が一斉に落ちてくるかのように、数多の刀剣が地上へ降り注いだ。

「な、なんだこ、グアアッ!?!？」

「ふ、ふざけるギャアアッ!?!」

「落ちて着け!すぐに防御魔法、グファッ!?!」

舞う鮮血が、星々が瞬く夜空を妖しくも美しく彩る。

串刺しになる人々。

地を染める血煙。

沸き起こる怒号、阿鼻叫喚。

そんな中、襲撃者はようやく門の敷居を跨ぎ、悠然と敷地内への侵入を果たす。

襲撃者は、鋭い銀色の目に返り血を浴びた紅白斑模様の髪をした、

16〜18ぐらいの少年だった。

その出で立ちは些か異常で、高級感溢れる紺色のブレザーを着崩した形で着用した格好は、この空間には場違い以外のなんでもない。頭の斑模様が無かったら、どう見ても学校帰りの不良学生にしか思えないような姿である。

だが、その身から放たれる強大な殺気と威圧感。そして、纏う高密度の灰銀色の魔力は、明らかに常人の其れではない。

強すぎる殺気と威圧感は物理法則を超え、空気は軋み、地面に輝が入り、風が凜ぐ。

身に纏う魔力は空間を呑み込み、この場を少年の独壇場とする。

「目障りだな……」

月明かりに照らされた少年……白神煉夜はどこまでも無表情で無感情に呟く。いや、僅かにだが陰りを孕んでいる。しかし、その陰りは多くの命を奪った罪悪感などの感情ではなく、ただこれだけの人数を相手取るのが面倒だ、といったような怠惰な感情だった。

煉夜が緩い動作で腕を振るう。それだけの動作で、空中に数多の刀剣が創りだされ、雨霰の如く空を舞い、次々と命の灯を無情に吹き散らしていく。

地に伏せる骸の数は既に三桁を超え、その光景は死々累々と呼ぶに相応しい。

煉夜は着々と増え続ける骸を視界の端に収めながら、広大な庭園らしき場所の奥にあるこれまた広大な、城と見違える程の洋館を見据える。

「あの館のどこかに神剣が……」

そう無感情にボソリと呟くと、彼は骸を踏みつけながら館へと歩き出す。

最早その場に、煉夜を遮るモノは何も無い。
体の所々に返り血を浴び、灰銀色の強大な魔力を纏う少年の姿は、まさに魔王と呼ぶに相応しい姿であった……

さて、前話と大分テイストが違うが、これは別に主人公である煉夜の過去話、というわけでも何でもない。ちゃんと前話からの続きの話である。

何故前話まで学院にいた彼が、このような場所で虐殺紛いの事をしているのかというと、事の発端は鳳咲夜と対話の後の出来事にあつた。

鳳咲夜との対話後、彼は晩飯に何を作ろうかと考えながら、無駄にでかい校舎を出て寮へと向かっている途中、突如ポケットの携帯から設定していない為に無機質な着信音が鳴り響いた。現在所持している携帯は使い捨て用なので、基本的に自分から掛ける時にしか使わない為、鳴ることはまずない筈なのだが……その携帯に着信音が鳴ったので、彼は一瞬怪訝そうな顔をする。

しかし、心当たりを見つけたのか、すぐに得心がいったような顔になる。

十中八九アイツだろうな……俺この携帯の番号誰にも教えてねえし……

煉夜は軽く息を吐き、若干げんなりしながらも、携帯を取り出し、通話ボタンを押して耳に当てる。

『やあやあ久し振りだねえ、神域』

聞こえてきた声は、男にも女にも、大人にも子供にも聞こえる不思議な声。

それに煉夜は予想通り、と内心で呟きながら応じる。

「ああ、久し振りだな。あんたが俺に高宮龍之介からの依頼をくれた時依頼だったか？」

『うん、だから一週間と三日17時間31分以来だね』

「……『情報屋』殿は相も変わらずのようで……」

煉夜が辟易しながら呟くと、情報屋と呼ばれた人物は、ヌフフフフと奇妙な含み笑い洩らす。

この声の主は、本名容姿年齢性別出身一切不明の謎の人物。通称『情報屋』

裏の世界では知らぬ者はいないとされている程有名な存在で、通称の通り情報を売る仕事を生業としている。

対価を払えば文字通りどんな情報でも正確且つ最新のモノを提供しており、魔導士かどうかもわからないのに『全知』^{ぜんち}という二つ名があるほどだ。

実際にその情報力は凄まじく、煉夜は彼(?)がある組織に売った情報により罠に嵌められ、死にかけたことが多々ある。その為、彼の敵に回したくない相手ランキングTOP3に見事ランクインしていたりする。ちなみに残り二人は、揃って天壤之位の魔王なので、そんな化物二人と同列に扱われる彼も、やはりある意味では化物なのだろう。

「それで、何のようだ？まさか雑談するためだけに俺の所に連絡してきた訳じゃあねえよなあ？」

『まあ、アタシは雑談でもいいんですけどねえ。お察しの通り仕事の依頼だよ……』と言っても、君からしたら随分と温い依頼かもしれ

ないけどね』

仕事と聞いて煉夜は、少しだけ気持ちを引き締め、仕事時の表情に切り替える。

「内容は？」

『某国の国宝である神剣『アルカナム』の奪還。加えてそれを奪ったテロリスト達の皆殺し』

「ほお……」

以来内容を聞いて、煉夜は興味深そうに目を細める。

神剣『アルカナム』

それは神より与えられたとされる、振るった対象の事象を否定する能力を持つ神剣……もとい魔剣。噂程度にしか知らなかったが、それがどれほど危険な物かは理解できる。

振るうだけでありとあらゆる事象、現象を否定し、無かったことにできるのだ。

持ち主次第でなら、一国を消し去る可能性すら否定しきれない。そこまで考えた所で、ふと煉夜はあることに気付く。

「つーかそういうのを取り返す仕事は、その国の騎士団の管轄の筈じゃあ……」

『公にしたくないんでしょうよ。テロリスト如きに国宝である神器を奪われたなんて知られたら、国の面目丸潰れですからねえ』

情報屋からの返答を聞いて、煉夜は呆れた様子で息を吐く。

「神剣を取り返すためなら、その程度の恥は安いものだと思うがな。で？期日は？」

「明日の朝までに」

「……そらまた随分急な……」

無茶とも取れる要求を受けて、煉夜は苦笑する。
そんな彼を無視して情報屋は説明する。

『神剣は今日奪われて、明日テロリスト達が世界に向けて、電波ジャックするという情報を得たんだよ。』

随分と前から準備していたんだろうね。神剣を奪ってから電波ジャックを準備するまでの動きが迅速だし、どうやら騎士団と軍隊の一部も絡んでいるようだ。

あの国は政治は腐りきってるし、アルカナムは神から与えられし剣だからねえ。それでアルカナム片手に国に反逆しようとか言われようモノなら、間違いなく多くの宗教家の人間達や民衆はクーデターを起こすだろうね』

「お前なら電波ジャックぐらい阻止できるだろ」

『アタシは情報屋。受け持つ仕事は情報の提供と、お得意さんへの仕事依頼だけだよ』

「……そうだったな。ま、何にせよそれを阻止する為に、俺に話しが回ってきたって訳ね……クハハ、なら差し詰め俺は、正義を邪魔する悪役って訳だ」

『じゃあアタシは参謀役って所でしょかね？』

軽口を言い合ってお互いに笑う。話の内容は決して笑えるものではないのだが……

一通り笑いあった所で情報屋は場所などの連絡をし、そのまま連絡を切った。

煉夜は通話の切れた携帯をしばらく見つめた後握りつぶし、適当に放り投げる。そして、首をゴキゴキと鳴らし、空を見上げる

「さて、久方振りの真面目な仕事だ……しっかりとこなそうか」

星に語りかけるようにそう呟き、煉夜は氷のような冷たい微笑を浮かべると、闇に溶けるようにその場から姿を消した。

そして、ある特殊な方法により海外へと移動し、現在に至る。

神剣の奪還さえなければ一瞬で塵に還えしてやるのだが……面倒だ

億劫そうに煉夜は息を吐く。

そう、彼は真面目にやっているが本気ではやっていない。

何故なら本気でやってしまえば、この山程度跡形も無く消し飛ばしてしまうからだ。

単純な皆殺しの依頼であれば、日頃のストレスを込めてそれぐらいやつても良かったのだろうが、今回の依頼は奪還も含まれている。神剣とまでいうのだからそう易々と壊れやしないだろうが、そんな憶測で本気で館ごと破壊し、アルカナムも壊してしまった、なんてことになったら目も当てられない。

だからこのようにチマチマと兵士たちを潰しているのだ。

鬱陶しそうに息を吐き、次々と湧いて出てくるように現れる兵士を一方的に蹂躪しながら進んでいくと、ある時を境に突然兵士が現れなくなる。

それに煉夜は内心首を傾げる。

情報屋の情報では、この館には427人の人間が存在するらしいのだが、庭園に現れた兵士の数はどう見てもその人数を下回っているからだ。

情報屋の情報に間違いは無い。ならば逃げたか？

そこまで考えるが、内心首を振り己の考えを否定する。いや、空間クエスト支配で創られた法則の一つである『空間内の人間は空間外に出ることも連絡を取ることもできない』は破られていない。と、なると……

「罨か……」

ぼそりと呟く。

恐らくは扉や窓などの、館への進入経路に罨を張っているのだろうと予測する。

だが彼は確信に近い予想をしながらも、堂々と入り口である館の扉の前まで歩み寄ると、小細工は無用と言わんばかりに鬼殺しによって強化した脚で蹴り破った。

そして、派手な音を立てながら吹き飛んだ扉に続くように、館内のもっとも広いエントランスに足を踏み入れる。それと同時に、彼目掛けて殺到する色取り取りの猛威。彼の予想通り、庭園にいた兵士からの連絡を受けた兵士達が待ち構えていたのだ。

その圧倒的なエネルギーの塊は、着弾した瞬間に力を撒き散らし、出入り口を壁ごと木っ端微塵に破壊する。

外の兵士達が殺られた段階で、館の被害などを度外視し、確実に殺す選択を取ったらしい。力の余波により立ち上った煙が破壊された玄関口を隠し、襲撃者の生死が判別できない。

兵士達は警戒しながらも煙が晴れるのを黙って見守る。
だが

「……やったか？」

沈黙に耐えかねたのか、兵士の一人が呟く。

それを聞いた兵士達は動揺する。

何故ならその台詞は、『やれていない』フラグなのだから。

そして、建てられたばかりのフラグを回収するかの如く煙が晴れ、そこから無傷の煉夜の姿が現れる。

「クソッ！化け物め！！」

兵士達は先程のフラグのお陰（？）か、襲撃者が無傷で現れたことに対して、特に驚きもせず再び魔法を放とうと魔力を練り上げる。しかし、煉夜が軽く目を細めカツと見開くと、見えない力の波動が兵士達を襲い、兵士達はまるで大型トラックに衝突したかのように弾け飛ぶ。

『拒絶の衝動』

魔力を波動に創り変え、無属性の衝撃波を広範囲に放つ広域攻撃魔法。

『無辺の裁き』に比べると殺傷能力は低いが、出の速さと範囲は上回る。

その一撃により、エントランスにいた兵士の大半が吹き飛ばされる。しかし、兵士達は国相手に国宝たる神剣を奪い取った集団ならではのあり、先程の一撃を躲した猛者も存在する。

「固まるな一網打尽にされるぞ！散らばって全方位からの魔法によって殲滅する！」

『了解！』

階段や違う部屋から次々と増援が現れ、リーダー格らしき男の指示を受けると、生き残った戦士達は蜘蛛の子を散らすように展開する。その動きは一見バラバラに見えるが、その実しつかりと連携されており、隙の無い陣形となっている。

唯のテロリストにこのような動きは到底不可能。ならばこの兵士達は、情報屋が言っていた一部の騎士団なのだろう。そう煉夜は予想を付け、再び『拒絶の衝動』により殲滅しに掛かる。

だが、発動を察すると同時に、兵士達はすぐ傍の兵士と2人1組ないし3人1組になると、防壁魔法を発動し、衝撃波を防ぐ。

兵士達は大きく吹き飛ばされるものの、衝撃波を五体満足で防ぎきった。

それに煉夜は内心で感心する。

館全てを破壊せぬよう威力を大分抑えてはいるものの、彼らは複数人とはいえ天壤之位たる魔王の一撃を防いだのだ。それだけで彼らが相当な訓練を受けた猛者だと言うことを見受けられる。

ならばと、煉夜は殺傷能力の高い『無辺の裁き』を発動させ、空間に槍や剣、刀などの武器を創り出す。

だが、リーダー格の男が発射させてなるものと、煉夜目掛けて猛スピードで特攻する。

その思い切りの良さと、特攻の速度に煉夜は虚を突かれ、男に射程距離内への侵入を許してしまう。

このチャンスを利用してなるものと、男はその手に持った魔法剣にありつたけの魔力を注ぎ込み、振りかぶる。

「その首、貰ったア！！」

魔法により灼熱の炎を纏った剣が、視認できないほどの速度で振られる。

絶対に回避できないタイミング。それも全身全霊の一撃。

男は勿論、周りの兵士達も勝利を確信する。

だが、今まさに切り伏せられようとしている煉夜の瞳には、動揺も焦燥も恐怖も映っていない。

あるのは、自分の間合いに入ってきた男に対する賞賛。

そして、瞳の奥から僅かに顔を覗かせたどす黒い狂気。

それを見た瞬間男は、背中を突き抜ける強烈な悪寒に襲われ、本能的に限界を超えるほどの力を剣に注ぐ。

だが、その刃は突如現れた半透明な壁に阻まれてしまう。

全力の力と魔力を注ぎ込んだにも関わらず、ビクともしないほど強靱な防壁。

それに男は驚愕し、すぐさま体勢を立て直すべく距離を取ろうと下ろうとする。

が、背後にも壁があるようで、つつかかる。

そこで男は気付く、それは壁ではないことに。

「な、なんだこれは!？」

そのリーダー格の男は、突如出現した半径2メートル程の、謎の文字らしきものが多量に書き込まれた半透明な球体に捕らわれていた。魔法剣で破ろうとするも、振るえるほどのスペースが無い為、本来の威力が出せない。そして、煉夜が無造作に指を鳴らすと同時に、その球体はジワジワと小さくなっていく。

無論、男は小さくならない。

徐々に狭くなっていく空間に、男の胸中に焦りと迷いが生まれる。魔法を放とうにも、こんな狭い空間で魔法を放ったら、その威力で自分が消し飛びかねない。

例え賭けに出て魔法を放ったとしても、この球体は自身の全力の一撃を容易く防いだのだ。そう簡単には壊れはしないだろう。

男が迷っている内に球体は無情にもどんどんと小さくなっていき、

男の体は嫌な音を立てながら徐々にひしゃげていく。

響き渡る脳髓を直接揺さぶるような叫び。

目の前で繰り広げられるスプラッターな光景。そして、その様を最早興味すら示さない冷たい目で見つめる白髪銀眼の悪魔。

煉夜は空間に恐怖が満ちたことを感覚的に察すると、再び指をパチンと鳴らす。

はピンポン球サイズにまで圧縮される。その球は、灰銀色から濁った不純物だらけの赤色へと色が変わっていた。

赤濁の球体は力無くコロコロと転がっていき、煉夜の足にぶつかって止まった。

先程までの強度が嘘のように球体は容易に潰れ、ブヂュツと不快な音と共に、足の間から明らかに球体の体積を無視した夥しい量の赤い液体が流れ出る。

ある者はリーダーが殺されたことに怒り、ある者は先程の光景に恐怖を抱き、ある者はその圧倒的力の前に絶望する。

その場合は混迷を極め始める。しかし、少年の力はその混迷すらも呑み込む。

創り出しておいた武器の数々を射出し、逃げ出そうとしていた者や、向かってくる者達を刺殺、或いは足止めすると、今度は先程とは規模が違う巨大なドーム状の反球体の空間内に、兵士達全員を捕える。

「最初からこうすればよかったか……」

空間内から聞こえてくる喧騒を無視して、煉夜は無感情にそう呟くと、瞳を閉じて『把握^{グラス}』を展開。館の構造と、潜んでいる人間。そして、アルカナムの在り処を探る。

「……見つけた」

しばらくした後煉夜は目を開けると、目の前に『門^{ゲート}』を創りだす。そして、目的地に向かうべく足を踏み入れ、その際に無造作に指をパチンと鳴らした。

煉夜が去った後のエントランスには、不気味な赤濁色をしたピンポン球サイズの球体だけが残った。

*

広い部屋に一人の男がベッドに腰掛け、静かに目を閉じていた。

金色の髪を短く刈り上げ、彫りの深いハンサムと言う単語が似合う容姿。一目でブランド物だと分かるグレーの上質なスーツを着用し、そのスーツの上からでもわかる逞しい肉体。そして腰には、普通の人ならまず常備していないであろう、黒鞘に金と銀の装飾が施された西洋剣が差されてある。この男の名はウィルズ・カレイン。国宝である神剣を国から奪ったテロリストの筆頭である。

だ彼はテロという反逆を起こしているが、別に悪人と言うわけではない。寧ろ彼のことを知る人に問えば、全員が彼のことを善人と答えるだろう。

そんな彼が何故テロを起こしたのかというと、それは彼の正義心からの行動だろう。

貧困に喘ぐ民衆。育ち盛りなのに働く、もしくは盗みを行う子供達。そして、そんな民衆の苦労を無駄にする国の重鎮達。彼はそんな国の現状に酷く悲しみ、彼は国を変えようと決意した。

寝る時間を削って仕事をし、私物を民に恵み、国を内側から改革しようとは死で努力をした。

だが、彼は内側からいくら頑張ろうと、国はまったく変わらなかった……否、悪政が更に悪化していった。

その現実には彼は絶望した。どれだけ努力しようと所詮は個人ではない。国という巨大な組織を変えるには至らなかったのだ。

それからしばらく彼は悩んだ。どうすれば国は良くなるか、どうすれば腐った国を直せるのか。

悩みに悩みに悩んだ末、彼はクーデターを起こす決意をした。内から直せないのなら、外から直すしかないと考えたのだ。

そこで目に留まったのが、神剣『アルカナム』だった。

神から授けられたとされる聖なる剣。それは宣伝には丁度良い代物だと彼は考えた。

そこから彼は密かに動き始めた。

仲間を集め、緻密に計画を立てることから始まり、長い月日を掛け、誰にも悟られぬようゆっくりと、だが着実に計画を進めてきた。

騎士団の人間に接触したり、情報を集めたり、比較的マトモな国の重鎮を取り込んだりと、彼は計画の為に動き回った。

そして遂に昨日、油断しきった国の守りを崩し、象徴たる神剣『アルカナム』を手に入れたのだ。

明日クーデターにより革命が成され、あの国は生まれ変わる。

そんな希望と期待と確信が彼の胸中に湧き起こった。

だが、あと少しで手が届きそう、という所に突如現れた謎の刺客。自分達の計画を阻止せんと立ちあがる破壊者。

十中八九国に雇われた傭兵か何かだろう。

あの国はくだらない見栄とちっぽけな誇りを矜持とする国だから、騎士団の出動はまず無いことはわかっていた。そんなことをすれば、騎士団本部に情報が知れ渡り、国宝を奪われたという恥が知れ渡ってしまうからだ。

だからこそ彼は、奪ってからすぐにクーデターを起こせるよう計画していたのだが……

「クソッ……！ 後一步の所だというのに……」

予想を遥かに超える国の対応の早さに、拳をキツく握り締め苦々しく呟く。

本来ならアルカナムを持って逃げるなり救援を呼んだりすべきなのだろうが、この灰銀色の空間のせいか、外と連絡が取れない上に脱出もできない。加えて、刺客は未だに館内で猛威を振るっており、迂闊に行動することもできない

腰に差さっている西洋剣……神剣アルカナムをこの灰銀色の空間に試してみたが、激しい眩暈と頭痛に襲われ、何も起きなかった。どうやら何かを対価に払い、その対価に見合った物しか否定できないらしい。

退路は絶たれ、現状を言葉にするならば、まさに八方塞がり。何をするにしても高いリスクが付き纏ってしまう。

尤も、彼は元より逃げ出す気などサラサラない。

この計画に自分の身がどれほど重要なモノかは理解しているが、自分の想いに共感してくれた同志を残し、一人だけ逃げるなど彼には到底できる筈がなかった。

それに、昨日犯行を実行したにも関わらず、どういうことが既に此方の居場所がバレてしまっているのだ。今から逃げ出しても手遅れだろう。

「どうすれば……」

頭を抱え、ウィルズは涙を流す。

自分がこうしている間にも、同志は次々と屠られていつている。それなのに自分は何もできない自分の無力さに哀しくなる。

本音を言うならば今すぐにでも加勢したい。同志がむざむざ殺されるくらいなら、自分も共に立ち向かいたい。彼はそう心の中で絶叫する。だが、それはできない。

謂わばウィルズは最後の砦なのだ。

例えこの館にいる427人が死んだとしても、自分とアルカナムが残っていれば、まだ反逆できる余地はある。しかし、自分が殺されアルカナムを奪われたら、その時点でゲームオーバー。

国は変えられず、此処から更に数百年は悪政が敷かれ続けることになってしまっだろう。

そうならない為にも、彼らはウィルズを全身全霊で守り、戦っているのだ。危険な真似などできようはずもない。

「すまない……同志達よ」

苛立ち、焦燥、悲哀、不安を涙と共に体外に出し、心の中で懺悔しながら冷静さを取り戻そうと努める。

しばらくそうしていて、その甲斐あってか彼は大分冷静さを取り戻した。否、負の感情に強引に蓋をして、感情を誤魔化したのだ。

そこで、多少冷静になったウィルズはある不可解なことに気付く。

此処にいる同志の殆どは騎士団や軍隊出身者で、少なくとも皆自分より遥かに強い。

そんな彼らがたった一人に一方的に蹂躪されているのだ。400人以上いるにも関わらず、だ。

俄かに信じがたいことだが、逐一報告されてくる情報全てに敵は一人と言われているので、信じざる得ないだろう。

だが、そんな芸当が人にできるのであるだろうか？

400人以上いる訓練を受けた人間を正面から一方的に蹂躪するのだ。魔導士の一位の人間ならばできなくもないであろうが、それでも一方的に蹂躪、というのは不可能だろう。それは明らかに人外の所業である。

「まさか……」

そこでウィルズはふと嫌な噂を思い出す。

それは、各国を渡り歩き気紛れに依頼を請けて活動している、フリーの魔導士がいるという噂だ。

それだけなら別に何ともない噂だろう。そもそも、その程度のことなら噂にすらならないような内容だ。

だが、この噂が広まっている大きな理由が一つある。

それは、その魔導士が天壤之位だということだ。

何せん目撃情報が少なく、しかもその情報も曖昧な為信憑性は薄い。が、もしもあの国がその天壤之位を雇ったとしたら？もしもその天壤之位がこの館にきていたとしたら？

そう考えれば辻褄が合う。合ってしまう。

そうなれば対抗手段が無い。

相手は一人で国を滅ぼせる力を持つと謂われている超常の存在。

400人少々の人数で勝てる筈も無い。

「パパア……」

ウィルズが思い悩んでいると、隣の部屋の扉がゆっくりと開き、幼い金髪の少女が目をクシクシと擦りながら歩いてきた。

少女の名はメリル。彼の娘にして、今亡き妻の忘れ形見だ。

この少女は本来ならこのような場所にいていい存在ではないのだが、違う場所に置いておいた時、もしも人質に取られた時の危惧を考え、連れてきたのだ。

「……どうしたんだいメリル？怖い夢でも見たのかい？」

ウィルズは己の感情を押し殺し、先程までとは打って変わって優しい笑みでメリルに尋ねる。

彼はどんな時でも娘の前では優しいパパなのだ。

「うん……」

「どんな夢だったんだい？」

「皆がいなくなっちゃう夢……」

娘の言葉を聞いて彼は一瞬最悪なビジョンが脳裏に浮かぶ。しかし、不安をかき消すように頭を左右に振ると、彼はメリルを抱きしめながら、優しく頭を撫でる。

「大丈夫だよ、メリル。私はいなくならないから……私はお前のそばから離れないから……」

そう言つて額にキスを落として、メリルを寝室に戻すことに。

娘をベッドに寝かしつけて、眠ったのを確認すると、彼は一息吐く。そして、娘の寝顔を見て微笑み、今度は頬にキスを落とす。

「安心しなさい。私の命に代えても、お前だけでも逃がしてやるからな……」

ウィルズはそう心に誓い、子供部屋の扉を開けて自室に戻ろうとする。

……だが

「国家反逆者、ウィルズ・カレインだな？」

「ッ！？」

子供部屋から自分の寝室に戻ってみると、そこには血が混じった斑模様の、白髪に鋭い銀色の眼をしたブレザー姿の男が立っていた。

「貴様、何者だ……」

神剣『アルカナム』の柄に手を当て、警戒しながらウィルズは男に問う。

問いながらもウィルズは理解していた。この男こそ、国からの刺客であると。

「知る必要があるのか？」

男……煉夜はウィルズの問いを一蹴し、身に纏う魔力の密度を上げる。

それに反応し、ウィルズは腰から神剣アルカナムを抜き、子供部屋の扉を守るように構える。煉夜はその男の反応に僅かに目を細めるも、特に気にする様子も無く、腕をダラリと下げ体を半身にし構える。

緊迫した空気が2人を包み込む。

2人は動かない。

片や絶対的な實力差のために迂闊に動けず、片や何を考えているのか分からない無表情で、相対している存在を観察している。

「何故我々の前に立ちふさがる！」

その張り詰めた空気を破ったのはウィルスだった。

「貴様とてわかっているだろう……あの国の腐敗した政治を……上の連中は民衆から税を搾り取り私腹を肥やす。民衆は重すぎる税に貧困に喘ぎ、今日を生きるのにも精一杯。奴らは民衆を家畜か何かかと思っている！そんな奴らから国を救うことが私の使命なのだ！」

「……」

「邪魔をするなよ少年！！」

散っていった同志達の為にも、私はやらねばならぬのだ！！
貴様に人の心があるというならば退いてくれ！！
私の……我らの悲願を妨げるな！！」

剣を突きつけ吼えるウィルズ。

それに煉夜は一言で答えた。

「どうでもいい」

「何！？」

「俺からしてみれば、そんなことなど所詮他人事。お前の国の事情など知ったことではない」

「ならば何故国の肩入れをする！？」

「答える必要があるのか？」

「貴様ア！！！！」

再び問いを一蹴。

その答えにウィルズは激昂し、煉夜目がけて切りかかる。

先程戦ったリーダー格の男に比べると、速度は遅く動きも雑だ。しかし、得物が凶悪な性能の為、煉夜は防ごうとはせずに、斬撃を躲す。躲す。躲す。

いくらこの寝室が広いとはいえ、所詮は個人部屋。戦闘をするにはあまりにも狭い。

にも関わらず、煉夜はその狭い空間の中をまるで舞踊のように立ち回り、一撃必殺の斬撃を全て舞うように躲していた。

攻撃が全く当たらず、焦りを見せ始めるウィルズ。

それを見逃す煉夜ではない。

『無辺の裁き』を発動し、創り出された十数本の刀剣が空を舞う。

ウィルズは瞬時に躲しきれないと判断し、アルカナムを振り回し、致命傷になり得る剣を否定する。しかし、その際に頭痛と眩暈が彼を襲い、防ぎきれなかった五本の刀剣がウィルズの両腕と右肩、腹部、右足を貫き壁に縫い付ける。

「ゴフオツ!!」

ゴポツと血を吐き出し、ウィルズは力なくアルカナムを取り落とす。明らかに致命傷。放っておいても5分もしないうちに絶命するだろう。

煉夜はウィルズには目もくれずに取り落とされたアルカナムを拾い上げ、その剣身をしげしげと見つめる。

そして、一通り見た後に剣身を指先でなぞると、灰銀色の帯がアルカナム全体を包み込む。

空間魔法『スキャン解析』

その名の通り対象の性能や機能、構造、概念などを詳しく解析する『^{サーチ}探査』の上位互換魔法。

それにより本物が否か剣の解析を進める。

そして、しばらくした後解析を終えると同時に帯は溶けるように消えた。

「どうやら本物のようだな……なら、後はお前を消すだけだが……」

そう呟き視線をアルカナムからウィルズに移すと、まるで処刑の介錯人のように、アルカナム片手に煉夜は張り付けにされているウィルズに近づく。

ウィルズは血が足りないのか、虚ろな視線で煉夜を見る。

「パパア……？」

そこへ騒ぎを聞いて起きたのだろう、メリルが再び顔を出してきた。

「なるほど、何かを守るように立ち回っていると思ったが、そういうことが……」

煉夜は僅かに納得がいったような顔を見ると、進路をウィルズからメリルに変更する。

「丁度いい。試し斬りでもさせてもらおうか……」

それに気付いたウィルズは完全に覚醒し、痛みを無視して叫ぶ。

「待ってくれ！私はどうなってもいい！だからその子だけは！その子だけは！」

「パ、パ……？」

しかし、煉夜の表情は微塵も揺るがない。
無情に、非情に宣言する。

「この子供の生を……存在を全てを、否定する……」

その宣言に呼応するように、アルカナムは神々しい白き光を放ち始める。

煉夜は一瞬その光を感慨深そうに見つめた後、まるでウエディングケーキを切るかのような緩やかな動作で、アルカナムを振り下ろす。

「やめろおおおおおおお！！！！」

部屋にいつそう強い光が剣身から溢れ、その光が収まる頃には、その場に何も残っていなかった。

「ア、アア……」

「ほう、予想以上に使い勝手は良いようだ。
精神力が大きく削られるのがネックなようだが……」

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

獣のような慟哭。

館全体を震わせる悲鳴。

愛する我が子を消されたことによりタガが外れたのだろう。
ウィルズは体に刺さった剣を強引に引き抜くと、煉夜目がけて獣のように突進する。

それに気付いた煉夜は、興味深そうな目をしたまま動こうとしない。

どうやら剣の戒めを破った男の行動に興味を持ったらしい。
そして射程距離。

ウィルズはアルカナムに向かって手を伸ばす。

「フン……」

その行動を見た煉夜は先程の態度を一変し、期待外れだと言わんばかりにアルカナムを無造作に放った。

ウィルズはそれを掴むと、煉夜に向けて憎悪と殺意に塗れた視線を向ける。

「貴様の全てを否定する！！」

宣言してアルカナムを大上段に構え、激情のままに振り下ろす。アルカナムは白い光の軌跡を描きながら、煉夜の頭目掛けて突き進んでいく。

防御や魔法は無効にする一撃。

喰らえば天壤之位と言えどただではすまない……しかし

「……その否定を、消去する」

そう静かに呟き、煉夜はアルカナムの剣身を片手で受け止める。

白銀の波動を纏った手で……

「な、に……！？」

その目の前で起きた事態に、男は有り得ないモノを見た、といった風に目を剥く。

当たり前だ。

絶大な威力を持つ……否、振るえば無敵に近い力を誇る神剣アルカ

ナムが、止められたのだ。それも素手で。

「選択をミスしたな……」

驚愕に慄く男を無視して、煉夜は疲れた様子で溜め息を吐く。

煉夜の体から白銀色の光が溢れる。その光はアルカナムが放つ光と類似しているが、神々しいアルカナムの光とはまるで違う。その光に宿るモノは絶対的な虚無感。

それを身に纏う煉夜の姿は、ウィルズには死神に見えた。

「いくら天壤之位の魔王が化物じみた力を持つていようと、所詮は人間。頭を割られれば死ぬ、心臓を貫かれても死ぬ、病でも死ぬ。その所は他と何も変わらない」

淡々と言葉を紡いでいく。男を責めるかのように

「故にお前は剣から抜け出した瞬間、俺を殺りに来れば良かったのだ。その方がまだ勝機があつたものを……」

ウィルズは絶望したような表情のまま動かない。

どうやら悟つたらしい。

もう詰んでいることに……

「しかしお前は俺を殺すことよりも、その剣を優先した。俺の喉元に手が届いたにも関わらずに、だ……」

ウィルズは大きな間違いをしていた。

いくら神剣を手にしようとも、相手は魔道の最高峰に君臨する存在。殺れるチャンスがあるならなりふり構わず殺りにかかるのが最良の選択なのだ。しかし、男は神剣の性能を過信し、固執すぎた。

だが、神具を持っている程度で天壤之位と対等になれるのであれば、彼らは世界中からここまで畏怖されはしないだろう。

人がどれほど神具に頼ろうと、どんな策を練ろうと、己が力を貫く絶対強者……それが天壤之位。

人の領域を超えし超越者……それが魔王。

その超越者たる魔王は、この時初めて明確に表情を変える。それは笑み。

口の端を裂けたように吊り上げた、邪悪な笑顔。

その笑みに呼応するかのように、纏う白銀の波動が静かに鳴動し、彼と男を中心に周辺の物が消滅していく。

「滑稽だな。お前はあれほどの激情を見せておきながら、娘の仇よりもその剣を選んだというのだから……」

嘲笑しながら煉夜はアルカナムから手を離し、男の額に指を突き付ける。

「さて、俺も朝には学院に向かわねばならぬのでな。早々に終わらせるとしよう……」

笑みはそのままに煉夜は静かに呟く。すると、身に纏っていた白銀の波動が、渦を巻きながら突き付けた指に収束していく。

「お前の存在を……その魂の一片までも消去する」

そして、死刑宣告を告げると同時に、白銀の波動が男を包み込む。次の瞬間その場には、アルカナムだけが残った。

＊

「ああ、疲れた」

軽くストレッチをしながら俺は『門』^{ゲート}から学院の敷地内に足を踏み入れる。

現在の時刻は午前3時。当たり前だが生徒達は寝静まっている時間帯の為、辺りは静まり返っている。任務は勿論成功に終わった。

久々の真面目な依頼だったが、無事に終了して何よりだ。内心で軽く安堵し、流石に返り血を浴びたままの訳にはいかないの

で、空間魔法により体中の汚れをなくす。本当はシャワーでも浴びたい所なのだが今は何よりも眠いので、自分にリミッターを掛けるとさっさと寮に向かって歩きだす。

そこで、なにやら人の気配と魔力を察知した。

こんな時間に誰がいるのか？

普段の俺ならスルーしたであろう。

しかし、久々の依頼で多少気持ちが昂ぶっていたのか、なんとなく気になってしまった俺は、その気配のした方向に足を進める。

すこし歩いて行くと、敷地の比較的隅にある庭園に辿り着いた。目立たない場所にあるため、この場所には初めてくる。

いいサボリ場になりそうだな……

そんなことを考えながら周囲を見回すが、気配の人物は見当たらない。

咲き誇る草花を無視して更に歩を進めていくと、茂みの奥から気配

を感じた。

その茂みの奥を見てみると、草木に囲まれたなにやら広い空間があった。

こんな場所があったのか、と感心しながら除いてみると、そこには月光に輝く美しい銀色の髪を靡かせ、槍を使って舞う女がいた。

格好はライダースーツと軽鎧を混ぜたような機能性重視の服(?)を着ており、その手には淡い青色の槍が振るわれている。

恐らくは魔法で出した槍だろう。

この光景に少しばかり興味を持った俺は、気配を消してしばらく眺める。

……なかなかの錬度だな。体術だけなら間違いなく舞より上だ。

しばらく観察して、その槍捌きに感心する。

だが、俺は感心と関心以上の感情を銀髪に抱いていた。

それは上手く言い表すことはできないが、あえて言うならば共鳴感シンパシー。何故そんな感情を銀髪に抱いたのかは自分でもわからない。

そんな感情を抱いてしまったからだろうか。俺は半ばノリで銀髪へと歩を進めていた。

その拍子にカサカサ、と足下の草が音を立てる。

その瞬間銀髪は素早く音源から距離を取り、槍を構える。

「誰だ」

「泥棒で……うおっ!？」

問いに応えるように茂みから某大泥棒三世よろしく登場したら、いきなり槍を突き出されたので、それを体を反らして避ける。

……どうでもいいが、某大泥棒三世って何だろうか……電波か？

「危ねえな。一步間違えれば串刺しだぞ？」

「黙れ不審者……」

「不審者で……俺は一応此処の生徒なんだがね……ほれ、制服着てるし」

着崩した紺色のブレザーの襟を引っ張りアピールする。

しかし、女は揺らぐことなく槍を構えたまま俺を見据えている。

「おいおい、まだ警戒してんのか？こんな一介の男子生徒に」

「一介の男子生徒は、そんな濃密な血の匂いはしない……」

その言葉に反応して、片眉が僅かだがピクリと動く。

この女、血の匂いがわかるのか……一応匂いは消した筈なんだがな

内心で驚きながら女を観察する。

美しく長い銀髪に整った容姿。すらりとした長身。引き締まっ
ているが出る所は出て、引っ込んでいる所は引っ込んでいる芸術品
のようなプロポーション。

そこまで見た所で、あることを思い出す。

……ああ、購買で羽柴とタメ張ってた、騎士団長ロイ・レインハ
ッの妹か。いずれ接触しようとは思っていたが、まさかこんな形で
接触するとは……

「お前、何者だ？」

妙な巡り合わせに軽く感心していると、銀髪は問いながら体を少しばかり沈め、魔力を練り上げる。

答えなければ穿つ、という態度がありありと見える。さて、どうするか……素性明かしたら面倒なことになりそうだし、はぐらかせる雰囲気でもない

じゃあどうするか？

そこで、一瞬思考を深め

……伸すか

考えるのも面倒になってきたので、強攻策を取ることに。

「そう殺気立つなよ。

名乗ればいいんだろ？」

笑みを浮かべながらそう言うと、俺はゆっくりさり気なく、足取りを気取られぬよう静かに銀髪との距離を縮める。

そして、ある程度距離が縮まった所で、殺気を一気に解放する。

「ッ！？」

銀髪はそれに反応して後方に大きく跳び退く。

だが、次の瞬間に俺は殺気も気配も消し去り、銀髪の背後に音も無く回り込む。

いきなり膨れ上がった殺気が気配諸共消えたことにより、銀髪は俺の姿を見失ったようで慌てて俺を捜すが、その姿は最早隙だらけ。がら空きの後頭部に手刀を叩き込む。

銀髪は声も無く糸の切れた人形のように崩れ落ち、それと同時に槍も粉々に砕け散る。予想通り魔法で創られた槍だったらしい。

やはり錬度はそれなりでも実践経験には乏しいようだな……あの程度で冷静さを欠くなんてな……

銀髪を見下ろしながら、一つ息を吐き出す。

しかし、このまま放置しても気が付いた時面倒そうになるので、今後の為に念を入れておくことに。

眠ったように気を失っている銀髪の近くに屈み、頭を鷲掴みにする。そして、ゆっくりと魔力を注ぎ込み、魔法を展開する。

ギアス
『戒』

簡易版の『エリア・クエスト空間支配』のようなモノで使い方はいろいろとある。

俺は主に、殺してはならない対象に対する口封じの手段として用いたりしている。

今回は対象の優先順位の、最優先事項を書き換える能力をしようすることに。

『5分前の記憶を忘れることを優先する』

この能力は対象の持つ優先順位の最優先に位置している事柄の、優先度の強さによりその効力を変える。例えば対象が確固とした意志で『勉強する』ことを優先させていたのなら、この魔法で『遊ぶ』ことを最優先に書き換えることにより、対象は確固とした意志で『遊ぶ』ことを最優先してしまう、といった感じだ。

デメリットは相手が精神的に弱っている状態か、無防備な状態でないと思えないということだが、気絶しているから問題無い。

銀髪は随分と熱心に鍛錬をしていたから、優先順位と優先度は高い

と見てもいいだろう。

しかし、それはあくまでも予測でしかないので、俺はちゃんと確認
すべく起きるまで待つことに。

シチュエーションは深夜の散歩に来た俺は、たまたま倒れている銀
髪的女子を発見し、介抱した……ってな感じにしようか

などと、成功していた場合に怪しまれないような設定を考えながら
星空を見上げ座して待つ。

その際に体から血の匂いを完全に消し去る。

……まあ、失敗していた場合は……最悪記憶が飛ぶまで殴りと、
起きたか。

少々危ない思考に突入しかけた所で、女は呻きながらゆっくりと瞼
を開ける。

予想以上に早い覚醒。

さて、どうなっているか……

「ここは……」

「お、やっと起きたかい」

しかし、手はいつでも放てるようにしながら、体を影にして銀髪の
視界から隠しておく。また襲われたら素早く無効化するためだ。
銀髪はしばらくボウとした様子で辺りを見回し、その後ハッと我
に返り俺から素早く距離を取る。

「貴方、誰……？」

よし、呼び方がお前から貴方になってる。

どうやら成功らしい。

俺は内心安堵しながら、両手を上げて不審者ではないことをアピールする。

「そう身構えなさんな。

俺は散歩をしていたただの男子生徒だよ。散歩の途中であんたが倒れているのを見かけてな、差し出がましいが介抱させてもらった」

我ながらいけしゃあしゃあと……

「倒れて……？どういうこと？」

俺が伸しました。

とは流石に言えないので、しらばっくれることに。

「いや知らんよ。つーかあんたは何してたんだ？」

「……貴方には関係無い」

明確な拒絶。

俺をまだ警戒しているのか、それとも隠す理由でもあるのか……

まあ、どちらにせよ下手に掘り返そうとしたら面倒事になりそうなので、素直に引き下がることに

「そうかい。なら聞かないでおこつ」

そう言つて俺は尻についた土を払って立ち上がる。

「んじゃ、あんたが起きたことだし俺は戻るとするかね」

そして、長居は無用と手をひらひらと振りながら立ち去ろうとする。

「待つて」

しかし、呼び止められたので立ち止まる。

首だけ動かして銀髪の方を見てみると、銀髪は無表情のまま頭を僅かに下げる。

「お礼を言い忘れていた……介抱してくれてありがとう」

「はいはい、どういたしまして」

「私は1-Cに在籍しているフィリス・レインハーツ。

この借りはいつか返すから、困ったことがあったらいつでも訪ねにきて……」

受けた恩は恩で返す、か。流石は騎士団長の妹、お堅いねえ……ま

あ、返してくれるってんなら素直に受けておこうか。

……返されるようなことしてねえけど……

「ま、困ったことがあったらな」

そう言って手をヒラヒラと降り、今度こそその場を後にした。

そっつい俺名乗ってないな……まあ、いいか

21話（後書き）

おまけ：『そっくりさん？』

依頼終了後の煉夜と情報屋の会話

「依頼完了」。アルカナムは送つといたから、俺の口座に振り込みよろしく」

『ハイ毎度。やっぱ楽しすぎたかな？これならもつと難しいやつを頼めば良かったかな？』

「まあ、久々だしこんなもんだろつよ。ああ、ダリかつた」

『相変わらず仕事中和のギャップが凄まじいね……』

「まあねえ、素の状態の仕事しちまうと余計なことしちまうからな。その防止法なんだよ、あれは」

『アルカナムを相手に渡すのは余計なことだったと思うのですが？』
「興が乗っちゃまってね……って、毎度思うがどっから見てんだよ……」

『又フッフッフ、企業秘密ですよ』

「お、怖え怖え。怖いから俺はさっさと寝る。つーわけでじゃな」

『ああ、待つてください』

「ん？」

『聞きたいことがあるんだけど、君って君と鳳雅也君の二人兄弟だよね？』

「ああ、そうだが？」

『じゃあここ最近海外へ出たりは？』

「いや、今日が久々の海外だな。それがどうしたんだ？」

『いや、それがね？この前ある国で君そっくりの人がいたんだよ』

「俺そっくり？」

『うん。尤も、歳は二十前半から中盤あたりで、髪は君より長かったし身長も向こうの方が高かったから別人かと思ってたんだけどね……あまりに似ていたが足取りを探ろうと思ったんだけど、足取りがキレイサッパリ消えてしまうし……』

「あいつまた来てんのかよ……」

『知り合いかい？』

「知り合いつつーか……同種？同族？分身？」

『歯切れが悪いね』

「あいつとの関係性は俺自身知らんのよ」

『ふうん、まあいいや。久々の未知との遭遇の予感がするねえ……調べがいがある』

「まあ、頑張ってくれやんじゃ」ピッ

以上、オチも何もないおまけでした。

お知らせ

ここ最近の投稿は、自分の未熟さと浅慮さと愚かさが浮き彫りになってしまいました。

これ以上迷走したら、この作品を楽しみにしている読者様方を不快にさせてしまう恐れがあるため、誠に申し訳ありませんがしばらくは自分の視野を広げるため、この作品の更新を停止したいと思います。

また、更新を再会するにしても、登場人物や能力が同じままのリメイク版にしたりする可能性もありますが、寛大なお心で見えて貰えると思います。

さて、文字数がまだありますので、せっかいですから前回のおまけの伏線をネタバレしたいと思います。

身長と年齢は違うけど、主人公と顔がそっくりな人物。それは未来から時を渡ってきた白神煉夜です。

煉夜は二つ名が神域、扱える力が創造、空間、消滅なので、勘の良い方はお気付きになっていたと思いますが、後一つは時です。作中の煉夜はまだ扱えきれいてませんが、このキャラの設定としては、ある出来事により世界の理から外れ、不老で人を超えた存在の為、時間や異次元にまで移動できるようになった、登場していれば間違い無く作中最強となった人物です。

いずれは彼を使ってIFストーリーを書いてみたかったですけどね……

さて、文字数もきっちり埋まったのでお別れの挨拶です。と言っても、練習の為に違う作品を書くと思いますので、その時にまた読んでいただければ幸いです。

それでは皆様。またお会いするときを心からお待ちしています。それでは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1601m/>

私立ルミナス魔法学院

2011年3月4日02時27分発行